

高槻市

成合地獄谷遺跡

成合遺跡 2

金龍寺旧境内跡 3

—高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

成合地獄谷遺跡

成合遺跡 2

金龍寺旧境内跡 3

—高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

序 文

大阪府の北東部に位置する高槻市には、摂津峡に代表される自然豊かな北摂の山々が東西に連なり、その麓には三島平野がひろがり、琵琶湖を水源とし瀬戸内海に注ぐ淀川が流れています。京都と大阪の中間にあって、古来より交通の要衝の地として栄え、活発な交流を背景として多くの文化遺産が残されています。

現在、大阪府内では、名神高速道路など先行する高速道路と接続し、首都圏と関西圏を結ぶ広域高速道路ネットワーク機能のさらなる強化と充実を目指して、新名神高速道路の建設が進められており、高槻市域でも、高槻ジャンクションとインターチェンジ建設予定地内において、平成23年度から埋蔵文化財の発掘調査が進められています。

これまでに、新規に発見された金龍寺旧境内跡の調査では、古墳時代後期の古墳（成合1号墳）や奈良～平安時代前期の須恵器円面硯や石製腰帯具（巡方）が、弥生時代の高地性集落として知られる成合遺跡の調査では、新たに古墳時代終末期の古墳（成合西王寺山1号墳～3号墳）や平安時代初頭頃の須恵器窯跡（成合西王寺山窯跡）が発見されるなど貴重な成果が挙げられています。

今回の成合地獄谷遺跡の調査でも、古墳時代終末期の横穴式石室を埋葬施設とする成合地獄谷1・2号墳と竪穴式小石室や、全国的にも遺跡からの出土例が少ない双鳥双獣八花鏡や石製腰帯具（丸鞆）を副葬した奈良～平安時代前期の墓などが発見されました。

調査を実施するにあたり、多大なご協力とご配慮をいただいた地元関係各位をはじめ、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所に対し、深く感謝します。

平成27年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は、大阪府高槻市成合に所在する成合地獄谷遺跡（13－1・14－1）、成合遺跡（13－1）、金龍寺旧境内跡（13－1）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと公益財団法人大阪府文化財センターが発掘調査を実施し、平成27年7月31日に本書の刊行をもって一連の事業を完了した。
3. 調査および整理に関する受託名称・受託期間については以下の通りである。

【受託名称:高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(高槻市域)その5】

契約期間 : 平成25年6月3日～平成26年12月26日

現地調査（調査名称:成合地獄谷遺跡13－1・成合遺跡13－1・金龍寺旧境内跡13－1）

期間 : 平成25年6月3日～平成26年1月31日

遺物整理期間 : 平成26年4月1日～平成26年7月31日

現地調査（調査名称:成合地獄谷遺跡14－1）

期間 : 平成26年8月1日～平成26年11月30日

【受託名称:高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理(高槻市域)その2】

契約期間 : 平成26年12月1日～平成27年7月31日

遺物整理期間 : 平成26年12月1日～平成27年4月30日
4. 現地調査および整理作業は以下の体制で実施した。

【平成25年度】 事務局次長 江浦洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀
調査第一課長補佐 金光正裕、副主査 三宮昌弘（平成25年6月）
技師 河本純一（平成25年10月）、専門調査員 松本吉弘

【平成26年度】 事務局次長 江浦洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀
調査第二課長補佐 金光正裕、技師 笹栗拓（平成26年9月～）
専門員 片山彰一（写真室）、山口誠治（保存室）

【平成27年度】 事務局次長 江浦洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀
調査課長補佐 金光正裕、技師 笹栗拓
専門員 片山彰一（写真室）、山口誠治（保存室）
5. 遺物写真撮影は、当センター写真室がおこなった。金属製品のX線写真撮影については、基本的には当センター保存室がおこなったが、写真図版28の八花鏡については、独立行政法人奈良文化財研究所にて撮影したものを使用している。

6. 成合地獄谷遺跡の調査の過程で新たに発見された古墳については、高槻市教育委員会により“成合地獄谷古墳群”という遺跡名称が与えられている。
7. 成合地獄谷遺跡 69 土坑出土の八花鏡および 116 土坑出土の不明銅製品の成分分析については、独立行政法人奈良文化財研究所と当センターが連携研究（研究題目：成合地獄谷遺跡出土銅製品の材質・構造調査）を締結し、降幡順子氏に分析を依頼した。分析成果は奈良文化財研究所と当センターにて共有しており、本書では第 6 章にてその成果を掲載している。また連携研究の過程で、八花鏡の X 線写真撮影と保存処理を奈良文化財研究所にておこなった。
8. 本書の執筆分担については目次および文末に記したが、遺構の記述については、主に平成 25 年度の発掘調査を金光が、平成 26 年度の発掘調査を笹栗がそれぞれおこない、遺物の記述については笹栗がまとめた。第 6 章の分析成果は、奈良文化財研究所の降幡順子氏に玉稿を賜った。編集については金光と協議のもと笹栗がおこない、全体の調整をはかった。
9. 発掘調査および報告書作成の過程で下記の機関および方々からご指導・ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。（順不同・敬称略）
大阪府教育委員会、高槻市教育委員会、高槻市立埋蔵文化財センター、独立行政法人奈良文化財研究所、成合自治会、歴史土器研究会
岡本敏行、森田克行、鐘ヶ江一郎、高橋公一、早川圭、内田真雄、今西康弘、渡井彩乃、高妻洋成、降幡順子、諫早直人、安部みき子
10. 本調査に関わる遺物および写真・実測図等の記録類は、公益財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用した。図中の標高は全て（T.P.）からのプラス値であり、単位は全てmである。また T.P.+ については省略した。
2. 発掘調査では世界測地系（測地成果 2000）の平面直角座標系第VI系に基づき表示した。遺構図に記載した座標値の単位は全てmである。
3. 本書で用いた方位は、いずれも平面直角座標系第VI系の座標北を示す。
4. 現地調査及び整理作業は、当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠しておこなった。
5. 土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007 年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。なおその記載順は記号・土色・土質とした。
6. 遺構番号については遺跡・調査区ごとに付した。複数の遺構の集合体である竪穴建物や柱穴列についてはそれとは別に遺構番号を付した。（例：「116 土坑」、「17 溝」、「竪穴建物 1」、「柱穴列 5」）
7. 遺構図における断面位置は、図面上に「—」形によってその位置を示した。個別遺構の縮尺は 1 / 40 を基本としたが、状況に応じて縮尺率を変更しているものもある。詳細は各図のスケールを参照されたい。
8. 遺物実測図は、土器は 1 / 3 を基本とし、大型品の一部は 1 / 4 とした。金属器および石製品・ガラス小玉は 1 / 2 を基本とし、69 土坑出土鏡は 1 / 1 とした。詳細は各図のスケールを参照されたい。また土器類の実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りに、その他は白抜きとした。
9. 掲載遺物は遺跡にかかわらず通し番号を付した。本文・図版・写真図版・観察表の番号は全て一致する。
10. 本書で参照した文献は各節の末尾に註で示した。また、本事業に伴う高槻市成合地区の一連の調査成果について、本文中で触れることが多々あるが、註にて出典を逐一触れてはいない。具体的な内容については既に下記の報告書が刊行されており、参照されたい。

金光正裕 2012 『金龍寺旧境内跡』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第 224 集

廣瀬時習 2013 『成合 1 号墳』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第 234 集

笹栗拓・伊藤武・金光正裕 2014 『成合遺跡・金龍寺旧境内跡 2』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第 251 集

11. 出土土器の年代観や器種分類については、特に断りのない限り下記の文献等を参考とした。

大川清・鈴木公雄・工楽善通編 1996 『日本土器事典』雄山閣

森田克行 1990 『摂津地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社

田辺昭三 1983 『須恵器大成』角川書店

西弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』真陽社

巽淳一郎 1991 「第VI章考察 2 土器」『平城宮発掘調査報告書XⅢ』奈良文化財研究所学報第 40 冊 奈良国立文化財研究所

神野恵 2005 「第3章出土遺物 3-1-3 土器類」『平城宮発掘調査報告XⅥ 兵部省地区調査』奈良文化財研究所学報第 70 冊 独立行政法人奈良文化財研究所

小森俊寛・堀内明博・上村憲章・吉村正親・平尾政幸 1994 「第2章 土器と陶磁器」（財）古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店

橋本久和 1991 「大阪北部の古代後期・中世土器の様相」『高槻市文化財年報』昭和 63・平成元年度 高槻市教育委員会
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

目 次

卷頭図版	
序文・例言・凡例	
第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 経緯と経過	(金光) 1
第2節 調査の方法	(金光・笹栗) 5
第2章 位置と環境	11
第1節 地理的歴史的環境	(金光) 11
第2節 成合地区における既往の調査	(笹栗) 16
第3章 成合地獄谷遺跡の調査成果	21
第1節 1区	(金光・笹栗) 21
第2節 2・4区	(金光・笹栗) 21
第3節 3区	(金光・笹栗) 56
第4節 5区	(笹栗) 66
第5節 成合地獄谷古墳群	(金光・笹栗) 75
第4章 成合遺跡の調査成果	(金光・笹栗) 91
第5章 金龍寺旧境内跡の調査成果	(金光・笹栗) 99
第6章 成合地獄谷遺跡出土鏡の分析調査	(降幡順子) 105
第7章 総括	(笹栗) 109
第1節 調査成果のまとめ	109
第2節 成合地獄谷古墳群の特色と位置づけ	112
第3節 成合地獄谷遺跡における古代の墓	116

出土遺物観察表

写真図版

報告書抄録

図版目次

図 1	調査地位置図	1	図 25	69 土坑周辺遺構 出土遺物	42
図 2	新名神高速道路高槻第一・第二 JCT・IC 付近 埋蔵文化財調査地全体図	3	図 26	116・313 土坑 平面図・断面図、116 土坑 出土遺物	43
図 3	地区割りの方法	5	図 27	116 土坑・313 土坑 出土遺物	45
図 4	成合地獄谷遺跡・成合遺跡 地区割り図	6	図 28	121 土坑 平面図・断面図・出土遺物	47
図 5	周辺遺跡分布図	14	図 29	45・83・129・130 土坑 平面図・断面図	48
図 6	新名神高速道路（高槻市成合地区）埋蔵文化財 調査地全体図	17	図 30	135・142 土坑 平面図・断面図	49
図 7	成合地獄谷遺跡 調査区配置図	22	図 31	68 土坑・107・237・299 ピット 平面図・ 断面図、299 ピット 出土遺物	50
図 8	成合地獄谷遺跡 1 区・2 区・4 区 第 4 面 全体 平面図	23	図 32	347 竪穴 平面図・断面図・出土遺物	51
図 9	2 区・4 区 基本層序 断面図	25	図 33	2 区 柱穴列 平面図	52
図 10	2 区・4 区 包含層出土遺物	26	図 34	柱穴列 1～5 断面図	53
図 11	成合地獄谷遺跡 1 区・2 区・4 区 第 2 面 全体 平面図	28	図 35	2 区 柱穴列 出土遺物	54
図 12	1 土坑・15 溝 平面図・断面図、第 2 面 出土 遺物	29	図 36	成合地獄谷遺跡 3 区 全体平面図	57
図 13	2・4 落込み・3 土坑平面図・断面図・出土 遺物	29	図 37	3 区 基本層序 断面図	58
図 14	成合地獄谷遺跡 1 区・2 区・4 区 第 3 面 全体 平面図	31	図 38	3 区 包含層 出土遺物	59
図 15	18 浸食痕・29 溝・31 落込み 平面図・断面図 ……………	32	図 39	1～4 土坑 平面図・断面図・出土遺物	60
図 16	18 浸食痕・31 落込み 断面図、29 溝・31 落 込み 出土遺物	33	図 40	7 溝 平面図・出土遺物	61
図 17	成合地獄谷遺跡 2 区・4 区 第 4 面 全体平面図 ……………	34	図 41	10・15 土坑 平面図・断面図・出土遺物	62
図 18	30 土坑平面図・断面図	35	図 42	25 落込み 平面図・断面図	62
図 19	33 土坑 平面図・断面図・出土遺物	36	図 43	26・27・29・30 土坑・28 落込み 平面図・ 断面図・出土遺物	63
図 20	35・36・37 土坑 平面図・断面図・出土遺物 ……………	37	図 44	12・13・32 溝 平面図・断面図	65
図 21	65 土坑 出土遺物	38	図 45	成合地獄谷遺跡 5 区 第 1 面 全体平面図	67
図 22	69 土坑および周辺遺構 平面図・断面図	39	図 46	5 区 基本層序 断面図	68
図 23	69 土坑 上面石材検出状況・八花鏡出土状況 ……………	40	図 47	5 区 出土遺物	69
図 24	69 土坑 出土遺物	41	図 48	成合地獄谷遺跡 5 区 第 2 面 全体平面図	70
			図 49	18・19 溝・20～23 土坑 平面図・断面図	71
			図 50	14・15・16 溝 平面図・通し断面図	72
			図 51	14・15・16 溝 断面図	73
			図 52	17・26 土坑・25 溝 平面図・断面図	74
			図 53	成合地獄谷古墳群 全体平面図	76
			図 54	1 号墳 墳丘平面図	77
			図 55	1 号墳 墳丘断面図	78
			図 56	1 号墳 横穴式石室	80
			図 57	1 号墳 出土遺物	80
			図 58	2 号墳 墳丘平面図	82
			図 59	2 号墳 墳丘断面図	83・84

図 60	2号墳 横穴式石室	86
図 61	石材の積み方の変化	87
図 62	2号墳 出土遺物	87
図 63	竪穴式小石室 平面図・断面図	88
図 64	竪穴式小石室	89
図 65	成合遺跡 調査区配置図	92
図 66	成合遺跡 1区・2区 全体平面図	93
図 67	成合遺跡 基本層序 断面	93
図 68	竪穴建物 1 平面図・断面図	94
図 69	竪穴建物 2 平面図・断面図、竪穴建物 1・2 出土遺物	95
図 70	3土坑 平面図・断面図・出土遺物	97
図 71	金龍寺旧境内跡 調査区配置図	100
図 72	1区・2区 平面図・断面図	101
図 73	3区 平面図・断面図	102
図 74	3区 出土遺物	103
図 75	出土時の鏡の状況および測定箇所	106
図 76	透過 X線画像	106
図 77	クリーニング後写真（左；鏡背面、右；鏡面） および測定箇所	107
図 78	蛍光 X線スペクトル（左；成合地獄谷遺跡、 右；昭和年間鏡 5）	108
図 79	成合遺跡における竪穴建物の配置	111
図 80	嶋上郡域における 7世紀中頃前後の横穴式石室	115
図 81	檜尾川流域における後・終末期古墳の変遷	116
図 82	成合地獄谷遺跡 2区における古代墓の平面分布	119
図 83	成合地獄谷遺跡をめぐる古代の景観	123

表 目 次

表 1	調査工程	4
表 2	蛍光 X線分析結果 (wt%、tr; 微量)	108
表 3	成合地獄谷古墳群の一覧	113
表 4	嶋上郡域における 7世紀中頃前後の横穴式石室 一覧	114
表 5	成合地獄谷遺跡における古代墓一覧	118

写真目次

写真 1	発掘調査作業風景	7
写真 2	整理作業風景	8
写真 3	調査地周辺の地形（上が北）	12
写真 4	調査地周辺の遺跡	16
写真 5	新名神高速道路関連の調査	19
写真 6	造成に伴う石組	66

写真図版目次

写真図版 1	調査地遠景	
1.	事業地遠景（南西から）[平成 25 年 12 月撮影]	
2.	成合地獄谷遺跡遠景（北西から）[平成 26 年 11 月撮影]	
【成合地獄谷遺跡】		
写真図版 2	1区 全景・断面 / 2区 断面	
1.	着手前調査地全景（北東から）	
2.	1区西半全景（北東から）	
3.	1区西半全景（南西から）	
4.	1区堆積状況（南西から）	
5.	2・4区断面（A-A' 北：南西から）	
6.	2・4区断面（A-A' 中：西から）	
7.	2区北東部（試掘トレンチ）堆積状況（南西から）	
8.	2区（試掘トレンチ）堆積状況（南西から）	
写真図版 3	2区 第 2 面 遺構	

1. 2区第2面北東全景（北から）
2. 2区第2面北東全景（北東から）
3. 2区第2面南西全景（西から）
4. 2区第2面中央北半全景（南西から）
5. 1土坑断面（南東から）
6. 2落込み・3土坑・4落込み検出状況（南から）
7. 3土坑検出状況（南から）
8. 3土坑断面（西から）

写真図版4 2区第3面全景

1. 第3面東半全景（南から）
2. 第3面南半全景（南西から）

写真図版5 2区第3面全景・遺構

1. 第3面南西全景（南から）
2. 18浸食痕断面（d-d'：南から）
3. 18浸食痕断面（a-a'西：南から）
4. 18浸食痕東断面（a-a'東：南から）
5. 28ピット断面（東から）
6. 29溝底面土坑断面（e-e'：南から）
7. 31落込み断面（c-c'：南東から）
8. 31落込み遺物出土状況（南から）

写真図版6 2区第4面全景

1. 第4面全景（北東から）
2. 第4面南半全景（北西から）

写真図版7 2区33土坑

1. 蔵骨器検出状況・断面（a-a'：南西から）
2. 検出状況（北から）
3. 断面（b-b'：南西から）
4. 甕内部の状況（北から）
5. 完掘・内甕検出状況（北から）

写真図版8 2区69土坑

1. 上面石組検出状況（西から）
2. 八花鏡出土状況（北東から）

写真図版9 2区69土坑

1. 検出状況（北西から）
2. 372土坑断面（b-b'：南から）
3. 鉄釘出土状況（南から）
4. 八花鏡出土状況（北東から）
5. 完掘状況（南東から）

写真図版10 2区第4面遺構

1. 30土坑検出状況（南から）
2. 30土坑断面（北から）
3. 35土坑検出状況（西から）
4. 35土坑断面（北から）
5. 36・37土坑検出状況（西から）
6. 36・37土坑完掘（東から）
7. 36土坑断面（北から）
8. 37土坑断面（南から）

写真図版11 2区第4面遺構

1. 121土坑遺物出土状況・断面（南東から）
2. 121土坑完掘・遺物出土状況（南東から）
3. 313土坑断面（南東から）
4. 313土坑遺物出土状況（南東から）
5. 116土坑断面（北から）
6. 107ピット断面（南東から）
7. 237ピット断面（東から）
8. 299ピット断面（東から）

写真図版12 2区第4面遺構

1. 129土坑断面（南東から）
2. 130土坑断面（南東から）
3. 130土坑完掘（北東から）
4. 142土坑断面（東から）
5. 347竪穴完掘（北から）
6. 244ピット（柱列5）断面（東から）
7. 柱穴列2完掘（北西から）
8. 柱穴列4完掘（西から）

写真図版13 3区全景・断面

1. 3区北半全景（南から）
2. 3区南半全景（南から）
3. 3区横断面（B-B'：南東から）
4. 3区縦断面（A-A'：東から）
5. 3区縦断面下層（A-A'：東から）

写真図版14 3区遺構

1. 2土坑全景（東から）
2. 1・2・4土坑・24ピット全景（南から）
3. 2土坑検出状況（東から）
4. 4土坑断面（南西から）

5. 3土坑全景（南から）

写真図版 15 3区 遺構

1. 10土坑検出状況（南から）
2. 15土坑断面（北から）
3. 26土坑断面（北東から）
4. 遺構面遺物（123）出土状況（南東から）
5. 29・30土坑断面（南東から）
6. 30土坑断面（東から）
7. 7溝完掘（南から）
8. 25落込み全景（南西から）

写真図版 16 5区 北半

1. 5区北半全景（北から）
2. 5区北半断面（A-A'：東から）
3. 18溝断面（東から）
4. 22土坑検出状況（北東から）
5. 22土坑断面（南から）

写真図版 17 5区 南半

1. 5区南半全景（南から）
2. 14・15溝完掘（北西から）
3. 16溝完掘（西から）
4. 14溝断面（b-b'：北から）
5. 16溝断面（c-c'：西から）

写真図版 18 5区 南半 断面・遺構

1. 5区南半断面（B-B' 157溝部分：南西から）
2. 5区南半断面（B-B' 南東：西から）
3. 15溝断面（a-a'：南東から）
4. 17土坑断面（南から）
5. 25溝断面（南から）

【成合地獄谷古墳群】

写真図版 19 1号墳

1. 検出状況（南から）
2. 横穴式石室完掘（南から）

写真図版 20 1号墳 墳丘・周溝

1. 墳丘全景（北西から）
2. 墳丘全景（南から）
3. 墳丘主軸後背部分周溝断面（南西から）
4. 墳丘全景・周溝断面（南西から）
5. 墳丘主軸盛土・周溝断面（東から）

写真図版 21 1号墳 横穴式石室

1. 右側壁（南東から）
2. 左側壁（南西から）
3. 石室内遺物出土状況（南から）
4. 盛土除去後横穴式石室石積み状況（北東から）
5. 盛土除去後横穴式石室石積み状況（北から）

写真図版 22 2号墳

1. 墳丘・周溝全景・断面（北から）
2. 横穴式石室全景（南から）

写真図版 23 2号墳 墳丘・周溝

1. 墳丘・周溝全景（南西から）
2. 墳丘・周溝全景（北東から）
3. 周溝（東側）断面（北西から）
4. 周溝（西側）断面（北から）
5. 墳丘主軸後背部周溝断面（西から）
6. 墳丘盛土断面（北西から）
7. 墳丘盛土断面（北東から）
8. 墳丘主軸後背部盛土断面（西から）

写真図版 24 2号墳 横穴式石室

1. 奥壁（南から）
2. 右側壁（北東から）
3. 左側壁（南西から）
4. 石室内埋土堆積状況（北から）
5. 床面部分断ち割り断面（南から）

写真図版 25 竪穴式小石室

1. 竪穴式小石室（北西から）
2. 天井石検出状況（北西から）
3. 北小口（南東から）
4. 西側壁（北東から）
5. 東側壁・断ち割り断面（南西から）

【成合地獄谷遺跡・成合地獄谷古墳群 出土遺物】

写真図版 26 2区 包含層ほか 出土遺物

写真図版 27 2区 33土坑ほか 出土遺物

写真図版 28 2区 69土坑出土 八花鏡

写真図版 29 2区 69土坑・116土坑ほか 出土遺物

写真図版 30 2区 116土坑 出土遺物

写真図版 31 2区 313土坑・121土坑ほか／3区 包含層 出土遺物

写真図版 32 成合地獄谷遺跡 出土遺物／成合地獄谷古
墳群 出土遺物

【成合遺跡】

写真図版 33 1区 全景・断面 3土坑

1. 成合遺跡調査地遠景（西から）
2. 1区全景（北から）
3. 1区南北断面（南西から）
4. 3土坑検出状況（西から）
5. 3土坑断面（西から）

写真図版 34 1区 竪穴建物1／2区 全景

1. 竪穴建物1 検出状況・断面（a-a'：西から）
2. 竪穴建物1 上面検出状況（南から）
3. 竪穴建物1 完掘（南東から）
4. 竪穴建物1 壁溝部分断面（南西から）
5. 2区全景（南東から）

【成合遺跡・金龍寺旧境内跡】

写真図版 35 成合遺跡 1区 竪穴建物2／金龍寺旧境内跡

1. 成合遺跡：竪穴建物2 検出状況（南東から）
2. 成合遺跡：竪穴建物2 完掘（南から）
3. 成合遺跡：竪穴建物2・2柱穴断面（南東から）
4. 成合遺跡：竪穴建物2 遺物出土状況（南西から）
5. 金龍寺旧境内跡：1区第2面全景（南西から）
6. 金龍寺旧境内跡：2区第1面全景（南西から）
7. 金龍寺旧境内跡：3区第2面全景（南東から）
8. 金龍寺旧境内跡：3区第2面全景（南から）

写真図版 36 成合遺跡 1区 出土遺物／金龍寺旧境内跡
3区 出土遺物

第1章 調査の経緯と方法

第1節 経緯と経過

今回の調査は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設および特別高圧送電線鉄塔移設工事に伴う、成合地獄谷遺跡、成合遺跡、金龍寺旧境内跡の発掘調査である。

近畿自動車道名古屋神戸線は、三重県新四日市 JCT を起点とし兵庫県神戸 JCT に至る路線延長 145.2km の高速自動車国道である（以下、新名神高速道路）。名神高速道路、中国自動車道、山陽自動車道と接続してこれらの交通渋滞を解消し、広域高速交通ネットワーク機能の充実と強化を図り、阪神・淡路大震災のような広域災害が発生した際には、相互に代替機能を発揮し、的確な交通処理をおこなうことを目指して建設が進められている。

大阪府の区間は、京都と大阪の府境（八幡 IC）から枚方市を経て淀川を超えた高槻第一 JCT までの 9.4km と、高槻第一 JCT から箕面市までの 18.0km の 2 区間で、本体工事やアクセス道路の整備、既存河川や道路の付替えなどの関連事業が計画されている。

このうち、高槻市から箕面市までの区間は、北摂の山間部を横断するルートを通り、大半がトンネル工法となるが、IC 区間には中世山城跡（箕面市止々呂美城跡）や聖フランシスコ・ザビエル像で有名な

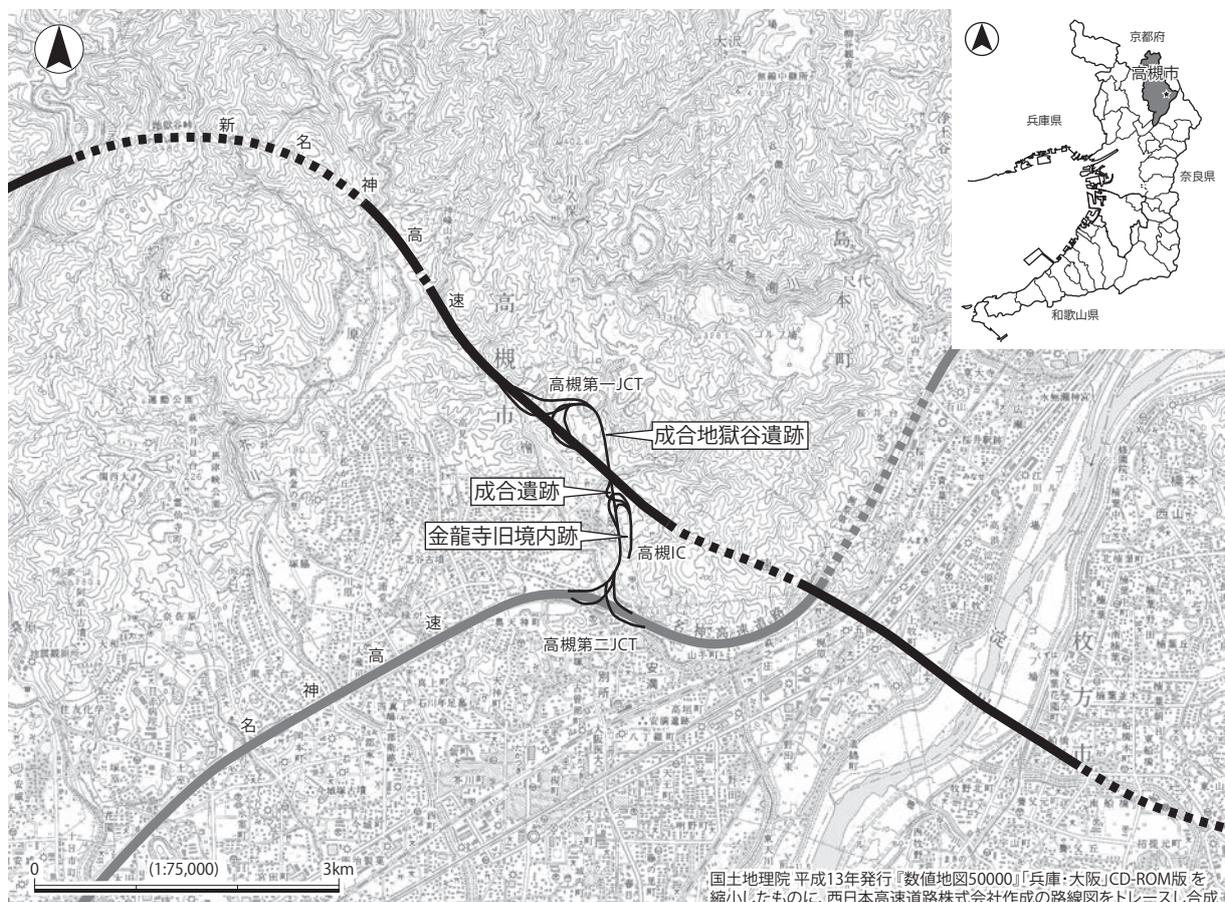


図1 調査地位置図

第1節 経緯と経過

キリシタン遺物出土地（茨木市千提寺地区）、弥生時代中期の高地性集落（高槻市成合）などの遺跡が存在することが知られており、平成4年度には、計画路線内での分布調査がおこなわれた。

事業計画は、平成7年7月に都市計画決定され、平成23年3月に、計画変更による都市計画決定がなされ、平成23年度には本体工事に着手されている。

こうした中で埋蔵文化財の取扱については、大阪府教育委員会と西日本高速道路株式会社関西支社および大阪府都市整備部茨木土木事務所との協議が重ねられ、平成21年度と平成22年度には、箕面市下止々呂美地区、茨木市千提寺地区、高槻市成合・宮ヶ谷地区において試掘調査がおこなわれた。その結果、高槻市金龍寺旧境内跡、茨木市千提寺西遺跡・千提寺南遺跡・千提寺市阪遺跡・千提寺クルス山遺跡・日奈戸遺跡などの遺跡が新たに発見された。そして平成23年度から、公益財団法人大阪府文化財センター（以下、当センター）が、大阪府教育委員会指導の下、全市域で本格的な発掘調査に着手した。

高槻市域では、平成23年6月1日付けで、大阪府茨木土木事務所並びに西日本高速道路株式会社関西支社と委託契約を締結し、金龍寺旧境内跡（調査名：金龍寺旧境内跡11-1）の調査に、平成23年7月1日付けで、西日本高速道路株式会社関西支社と委託契約を締結し、成合遺跡（調査名：成合遺跡11-1）の調査に着手した（図1・図2）。

金龍寺旧境内跡の調査では、奈良時代後半を中心とする須恵器円面硯や腰帯具、土馬など中央との交流を背景とした貴重な遺物が出土し、成合遺跡の調査では、焼失建物を含む弥生時代中期末の集落や古墳時代終末期の横穴式石室墳（成合西王寺山1号墳～3号墳）、奈良～平安時代前半の建物跡や焼土坑、須恵器窯1基（成合西王寺山窯跡）などが検出され、遺跡の範囲も大きく広がる事が明らかとなった。

平成24年2月から4月の間には、金龍寺旧境内跡から成合遺跡までの間の丘陵上7か所で試掘調査がおこなわれた。成合遺跡に隣接する丘陵上からは弥生土器や平安時代の須恵器などが出土し、金龍寺旧境内跡に近い丘陵上からは、古墳周溝の可能性のある落込みが検出され、金龍寺旧境内跡の範囲は、成合遺跡と谷を隔てて接するまでに西側に大きく広がることとなった。このうち、金龍寺旧境内跡については、平成24年5月28日付けで西日本高速道路株式会社関西支社と、平成24年6月1日付けで大阪府茨木土木事務所と委託契約を締結し、金龍寺旧境内跡（調査名：金龍寺旧境内跡12-1）の調査をおこない、丘陵上の最高所から、横穴式石室を埋葬施設とする径15m前後の円墳（成合1号墳）1基が発見された。

平成24年度には、平成24年11月27日付けで、「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その4」として、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所と委託契約を締結し、成合遺跡の北側、成合字「ノイタチ」・「ゲタノハラ」地区において試掘調査がおこなわれた。この地区は、地獄谷川と東檜尾川との合流部から、南北両側に丘陵が迫る狭隘部を抜けた地点に開けた小規模な谷底平野が広がり、成合谷の奥まった地域に位置する閉ざされた小空間となっている。調査は、河岸段丘面、開析谷内の平坦地、丘陵尾根上の平坦地と棚田が広がる南東側緩斜面に、計10箇所のトレンチを設定しておこなわれた。調査の結果、丘陵南東側緩斜面のトレンチから、7～9世紀を中心とする良好な遺物包含層と炭や焼土を伴う土坑が検出され、遺跡が存在することが明らかになった。高槻市教育委員会では、この結果を受けて、地獄谷川右岸側の南北225m、東西90mの範囲を新規発見の遺跡として、成合地獄谷遺跡と命名した。

この成合地獄谷遺跡と、特別高圧送電線鉄塔の移設が計画されている成合遺跡および金龍寺旧境内跡の発掘調査について、大阪府教育委員会は西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所および

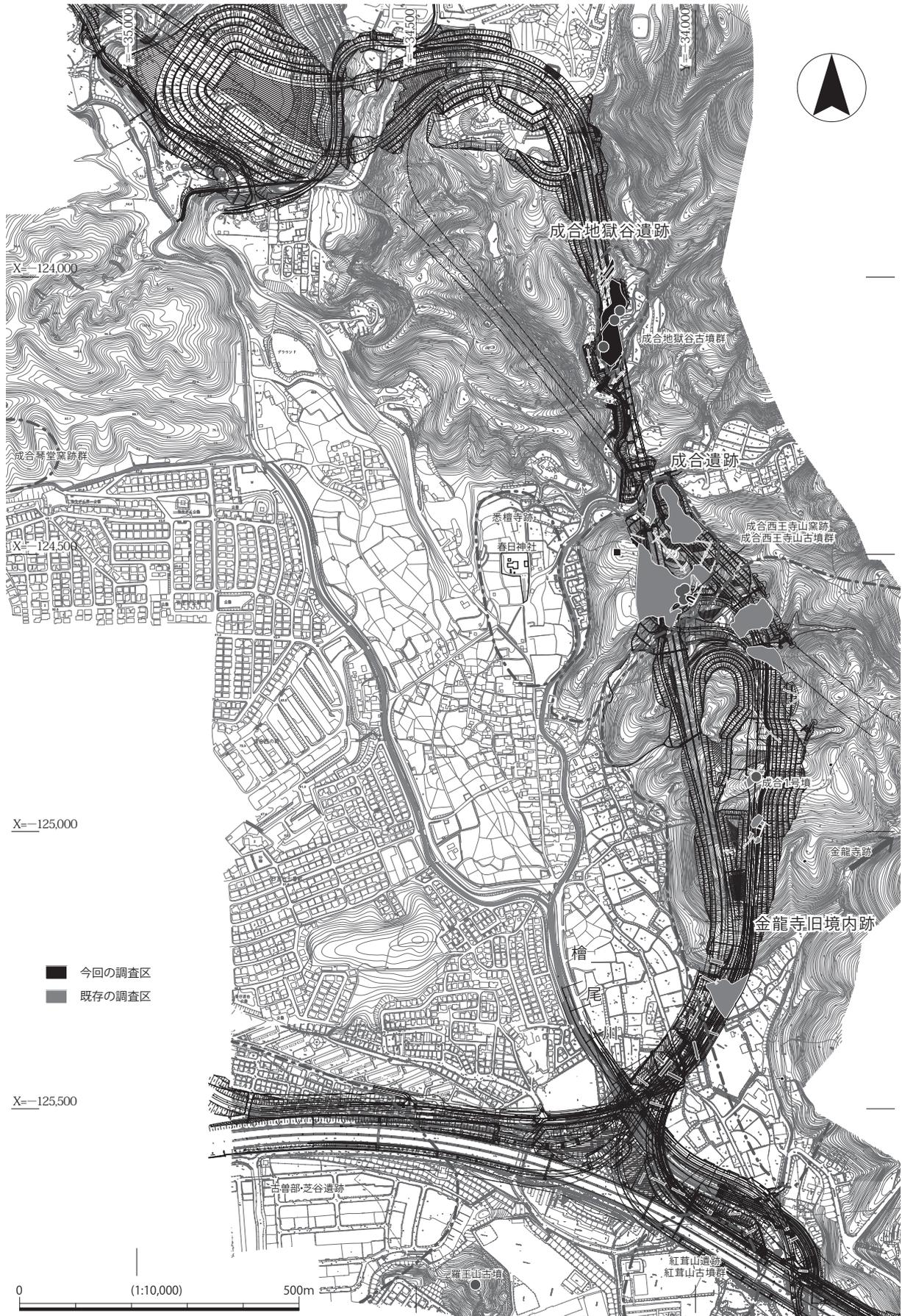


図2 新名神高速道路高槻第一・第二JCT・IC付近埋蔵文化財調査地全体図

第1節 経緯と経過

表1 調査工程

遺跡・調査区	担当	平成25年度(2013年度)												平成26年度(2014年度)												平成27年度(2015年度)		
		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	...	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	...	7月			
高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(高槻市域)その5																												
金龍寺旧境内跡	(三宮)	■																										
成合地獄谷	1区 (金光・松本)	■																										
	2区 (金光・松本)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		
	3区 (河本)							■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■		
成合遺跡	(金光・松本)																											
成合地獄谷	4区 (金光・松本)																											
(遺物整理業務)	(金光)																											
成合地獄谷	5区 (金光→笹栗)																											
高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理(高槻市域)その2																												
(遺物整理業務)	(笹栗→金光)																											
																										本書刊行		

関西電力株式会社と協議をおこなった結果、当センターが発掘調査をおこなうこととなった。大阪府教育委員会からの指示を受けた当センターは、「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(高槻市域)その5」として、平成25年5月27日付けで、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所と委託契約を締結した。調査については、事前に高速道路本体と関連工事の計画工程と調査に要する期間をもとに各調査区の調査着手時期について事業者と調整し、成合遺跡は11・12月に、金龍寺旧境内跡は6月中に、成合地獄谷遺跡は、6月3日から、河岸段丘面と隣接地のトレンチ調査から着手することを確認した。また、成合地獄谷遺跡の丘陵尾根上には、畑として開墾されたと思われる平坦地があり、この平坦地についてはまず幅2mのトレンチ調査を先行しておこない、遺構・遺物が検出された地点については範囲を広げて調査することを確認している(3区)。当センターの調査名称は、それぞれ「成合地獄谷遺跡13-1」、「成合遺跡13-1」、「金龍寺旧境内跡13-1」とし、現地での発掘調査は平成25年6月3日から着手し、平成26年1月31日をもって一連の調査を終えている。

現地調査終了後の平成26年4月1日からは上記の契約の中で遺物整理作業を進め、当初の予定では平成27年2月27日の契約終了をもってこの間の成果を1冊の報告書として刊行する計画であった。その後、成合地獄谷遺跡4区の北東側に残されていた未調査地について急遽調査が可能となったことから、平成26年7月31日をもって遺物整理事業を一旦休止し、平成26年8月1日から平成26年11月30日までの期間で発掘調査を実施している(調査名称「成合地獄谷遺跡14-1」)。その後の遺物整理事業については、「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理(高槻市域)その2」とした新たな契約を交わし、平成26年12月1日から平成27年4月30日までの期間を進め、平成27年7月31日、本書の刊行をもって一連の事業を終了した。(金光)

第2節 調査の方法

今回の調査面積は、成合地獄谷遺跡は5050㎡（うち13-1が3411㎡、14-1が1639㎡）、成合遺跡は307㎡、金龍寺旧境内跡は12㎡、計5369㎡である。調査名は、それぞれ「成合地獄谷遺跡13-1」・「成合遺跡13-1」・「金龍寺旧境内跡13-1」・「成合地獄谷遺跡14-1」である。調査は、当センターが定める「遺跡調査基本マニュアル 2010」（以下、マニュアルと記す）に則っておこなった。

1. 発掘調査

調査区の設定 対象地の地形的なまとまり、一回毎の調査単位と着手時期などを考慮して調査区を設定した。成合地獄谷遺跡は、調査をおこなった順に調査区名を振り分けており、河岸段丘面を1区、丘陵南東側緩斜面地を2区、丘陵尾根部を3区、2区と3区間の丘陵斜面地を4区とした。4区に続く北側斜面地については、他の調査区と調査年次が異なるが、通し番号を付して5区とした。また2区については、排土置き場の確保等の関係から南北に二分割して調査をおこなったが、敢えて細分はしていない。この他に、トレンチ調査を先行させた3区については、北側奥から任意に3-1区、3-2区のように枝番号を与えている。成合遺跡と金龍寺旧境内跡は、一つの範囲が一回の調査で完結することから、一トレンチを一調査区名としている。各遺跡・調査区の調査期間と担当者については、表1の通りである。

各地区の調査が終了した際には、現地にて大阪府教育委員会の確認・指示を受けた後に、事業者へ引

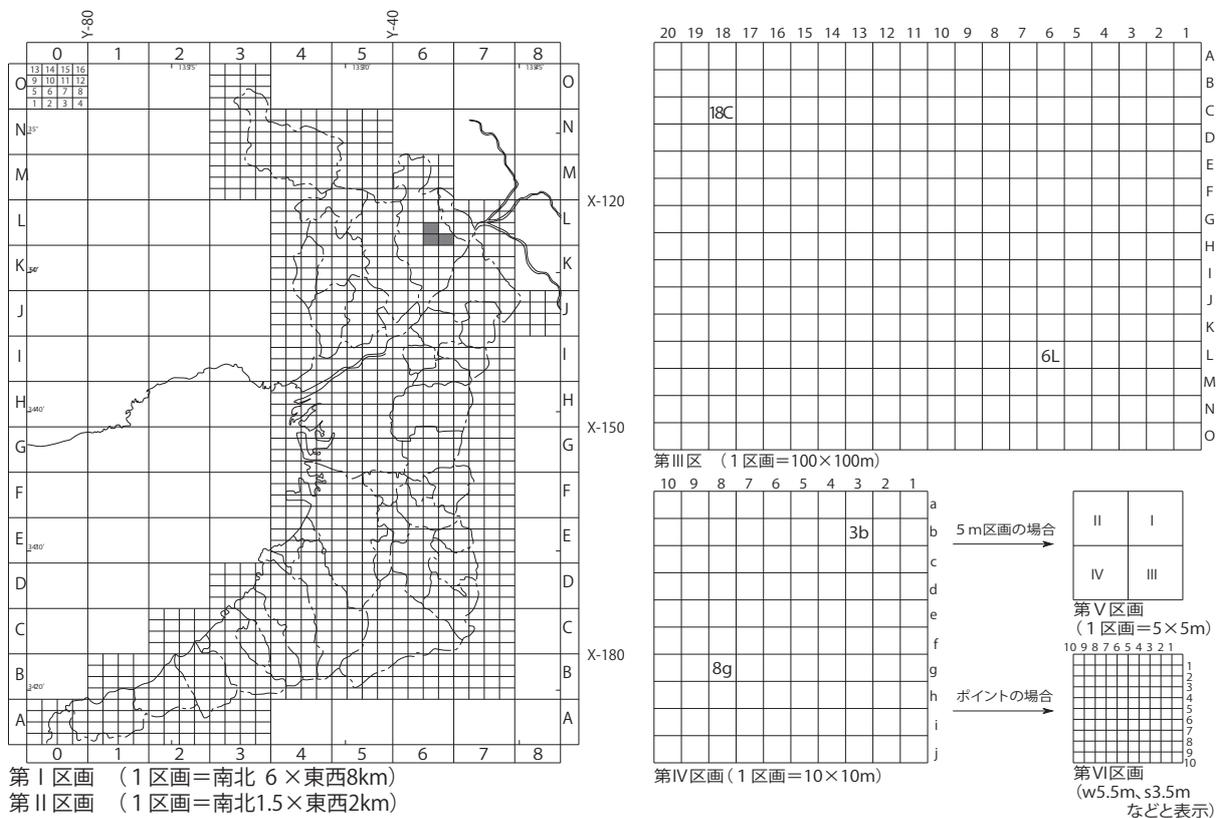


図3 地区割りの方法

第2節 調査の方法

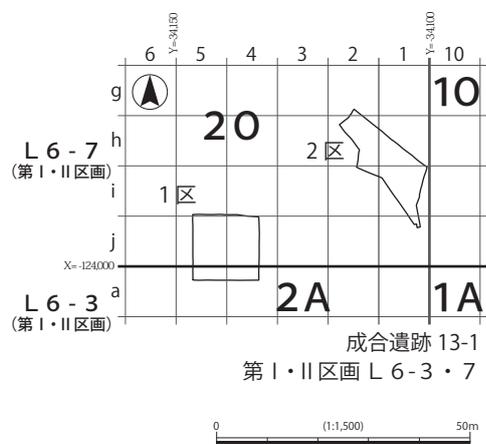
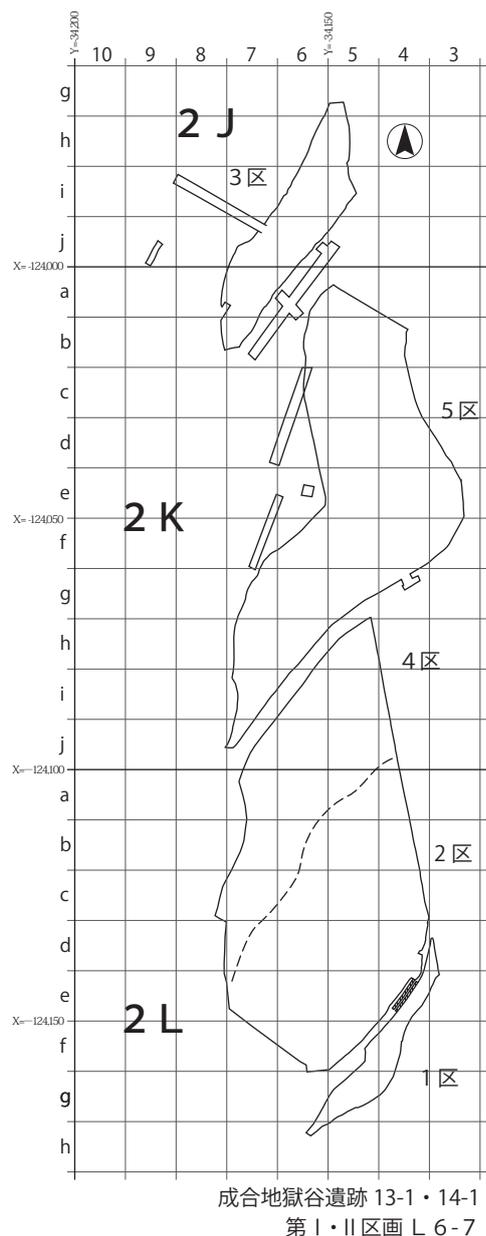


図4 成合地獄谷遺跡
・成合遺跡地区割り図

き渡した。また調査途中であっても、重要な遺構・遺物が検出された場合などにも随時現地立会を受け指示を仰いだ（写真1-7）。また、調査の終盤には高槻市教育委員会の関係者に、調査現場を視察していただき、有益な助言を多く頂いている（写真1-8）。

現地調査の具体 樹木や下草の伐採をおこない、事業者立ち会いの下、現地にて調査範囲を確認して、掘削作業に着手した。職員の指示に従って、表土層や近世以降の層は重機によって掘削した。掘削は、下層の遺構面を傷つけないよう、爪先に鉄板を装着したバックホウを用いて慎重におこなった。機械掘削終了後は、下層の堆積状況の把握と排水を兼ねた幅30cm前後のトレンチを先行して掘削し、その後ベルトコンベアを用いて包含層掘削、遺構面や遺構の検出等の諸作業をおこなった。

地区割り 成合地獄谷遺跡と成合遺跡では、国土座標第VI系（世界測地系による平面直角座標系）に従った地区割りを設定した。この地区割は、大阪府全域をカバーするように、X=-192,000 m Y=-88,000 mを起点として、南北90km・東西72kmの範囲に、第I区画（南北6km×東西8km 135区画）から、第II区画（南北1.5km×東西2.0km 16区画）、第III区画（100m×100m）、第IV区画（10m×10m）、第V区画（5m×5m）までの5段階の区画を設定したものである（図3）。

第I区画—第II区画—第III区画の標記は、成合地獄谷がL 6-7-2 J・2 K・2 L、成合遺跡がL 6-7-1 O・2 O, L 6-3-2 Aである（図4）。金龍寺旧境内跡については、1区がL 6-4-1 4 D-6 i・6 h、2区がL 6-4-19 F-1 f、3区がL 6-4-19 J-5 eとなる。遺物取上げの際の地区名の記載には、主に第III区画と第IV区画を用いているが、金龍寺旧境内跡は調査区が狭く敢えて地区割りを記載していない。

写真撮影 中判6×7cmカメラによる撮影を基本とし、補完用として小判35mmカメラを併用した（写真1-6）。使用したフィルムはモノクロとカラーリバーサルである。また、調査途中のメモ写真および台帳作成用としてデジタルカメラを使用した。全景写真の撮影には、必要に応じて高所作業車を使用している。

現場で撮影した写真類は、カード型データベースソフトの



写真1 発掘調査作業風景



写真2 整理作業風景

File Maker Pro で作成した台帳に登録した。台帳には、遺跡調査名、撮影日時、撮影対象、撮影方向、撮影者、フィルム番号などのフィールドを設定し、画像フィールドには、6×7cm もしくは 35mm カメラとほぼ同じ角度・画角で撮影した、デジタルカメラの画像を貼り付けてデータベースを作成した。

遺構図の作成 全体平面図の作成にあたっては、ヘリコプターによる航空測量を業務委託し、1/400 撮影による 1/50 と 1/100 の遺構図と平面図を作成した。また、周辺樹木の影響で航空測量ができない成合地獄谷遺跡 3 区や古墳の測量に際しては、FARO 社製レーザースキャナ FOCUS 3D を用いて三次元レーザー測量を行っている（写真 1－5）。取得した座標点群データは同社製 FARO SCENE 等を用いて計測データの合成および編集を行い、オルソ画像による平面図と等高線図を作成している。この他に電子アリダードやトータルステーション等を用いて大縮尺の図面を作成し、個別遺構の詳細図面につい

ては状況にあわせて1/20や1/10で作成している(写真1-1~4)。本書で示した図版については、全て世界測地系に準拠して作成しており、方位については座標北を、水準については東京湾平均海面(T.P.)を用いた。

遺構番号 遺構番号は遺跡・調査区ごとに通し番号を付し、「1土坑」・「8溝」といった具合に遺構番号―遺構種別名で表記している。ただし複数の遺構の集合体である竪穴建物や柱穴列については、番号を後ろに付し、「竪穴建物1」・「柱穴列5」のように記している。

2. 整理作業

調査では、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦のほか、石製品(腰帯具・基石状石製品)や銅製品(八花鏡・銅銭ほか)、鉄製品(鉄釘など)など、55×35×15cmサイズのコンテナ箱で併せて14箱分の遺物が出土している。遺物整理作業についても当センターのマニュアルに則っておこなっている。

出土遺物の洗浄・注記・登録は、基礎整理作業として現地調査中に並行して進めた(写真2-1)。特に今回の調査では、火葬墓に関連する遺構等が存在しており、このような重要な遺構については埋土をサンプリングして持ち帰り、現場詰所および中部調査事務所にて振るいや洗浄をおこなって、骨片など微細遺物の出土の把握に努めた(写真2-2)。遺物への注記は、「カタカナ表記による調査名-登録番号」を墨書した。成合地獄谷遺跡の場合、「ナリアイジゴク13-1-登録番号」となる。遺物は当センター所定のカードに、遺跡調査名、出土地点(区画名)・出土遺構名(層名)・出土年月日など必要事項を記入し、カードごとに登録番号を付けた。遺物洗浄後、遺物とカードを一緒にデジタルカメラで撮影し、File Maker Proで成した台帳に画像を貼り付けて、遺物登録台帳を作成している。その後、周辺遺構との関係等に留意しながら遺構ごとに遺物の接合作業と石膏復元を進め、同時に報告書に掲載が必要な遺物を中心にピックアップを進めた。

ピックアップした遺物の中から順次実測図を作成し、必要に応じて拓本をとった(写真2-3)。その上で作成した遺構図と遺物実測図は、スキャナーで原図や下図を取り込み、Adobe社製Illustrator CS5・CS6を用いてトレースし、挿図を作成した(写真2-5)。また69土坑出土の36八花鏡については、Next Engine社製のデスクトップ型3Dスキャナーを用いて計測をおこない、図化をおこなっている。本報告書に記載している挿図については全てデジタルデータで作成・入稿している。

現地で撮影した写真については、報告書に掲載するものを選定し、焼付作業をおこなった。出土遺物については中部調査事務所写真室にて撮影をおこなっている。

以上の作業と並行して本文の作成と報告書の編集作業をおこない(写真2-6)、報告書の編集にはAdobe社製InDesign CS6を用いた。

遺物の収納については、報告書掲載遺物と未掲載遺物をわけて収納し、現地で作成・撮影した遺構写真・遺構図も整理をおこなった上で収納しており、一連の整理作業を完了している。(金光・笹栗)

第2章 位置と環境

第1節 地理的歴史的環境

高槻市は、大阪府の北東部にあって京都と大阪の二大都市のほぼ中間地点に位置し、淀川を介した水運や「山陽道」（西国街道）やJR東海道線・阪急京都線などを介した陸運が発達し、古来より交通の要衝の地を占めている。高槻市域の地形は、大きくは、丹波高地の南東端を占め北摂山地の一部を構成するポンポン山山塊と、その南西側に広がり大阪層群によって形成された標高30～200mの高槻丘陵、芥川右岸で高槻丘陵西半部から南へ舌状に張出す標高10～30mの富田台地（低位段丘）、大阪平野の北東部にあたり淀川低地の上流部を占める標高10m以下の沖積平野に区分される。

山地の檜尾川・芥川の上・中流域には田能盆地・原盆地・成合谷・服部谷などの谷底平野が形成される。高槻丘陵の西半部は、さらに、芥川の支流で女瀬川上流の河谷によって東側の南平台丘陵と西側の奈佐原丘陵に分けられる。丘陵南部は、戦後の早い時期から日吉台団地などの住宅地やゴルフ場などの大規模開発が進み地形改変が著しい。沖積平野は、天井川化した檜尾川や芥川をはじめ、淀川支流の中小河川によって、扇状地・後背湿地・自然堤防などが形成され、平野部には埋没河川の名残と思われる池などが点在している。

成合地獄谷遺跡や成合遺跡、金龍寺旧境内跡が位置する高槻市成合の地形は、西側の高槻丘陵と東側の標高678.9mのポンポン山から南端の標高274mの安満山へ連なる山地とその間に広がる東西約0.4km、南北約2.0kmの狭隘な谷底平野からなる。成合遺跡と金龍寺旧境内跡が立地する東側山地西縁は、平野部との比高差は約25～45mで、斜面は垂直に近い急峻な地形をなす。これに対して、北側の山地南麓と高槻丘陵東側斜面は比較的緩やかに傾斜する地形をなしている。平野部を流れる檜尾川は、上流部で支流の地獄谷川・東檜尾川・西檜尾川とともにV字谷を刻みながら急傾斜で流下し、成合北町付近で流れを緩め、日吉台川、金龍寺川などを集めて南流する。成合地獄谷遺跡は、地獄谷川によって形成された小規模な谷底平野とその背後の丘陵部に立地する。地獄谷川は両側に丘陵が迫る狭隘なV字谷を抜けて、成合遺跡が立地する丘陵の西側直下で東檜尾川と合流する（写真3、図5）。

旧石器～縄文時代 旧石器時代の遺跡としては、富田台地や丘陵部に立地する郡家今城遺跡、郡家川西遺跡、津之江南遺跡などから後期の礫群やナイフ形石器、搔器、舟底形石器などが出土している。そのうち郡家今城遺跡C地点からは、瀬戸内技法によるナイフ形石器を主体とする国府文化期の良好な石器や礫群が、郡家本町遺跡からは国府文化期に後続する横長剥片を素材とする中型ナイフ形石器などが、塚原遺跡からはナイフ形石器終末期の横長ナイフや小形切出しナイフがそれぞれ出土している。

縄文時代早期から中期までは遺跡の数も少なく、大塚遺跡や柱本遺跡から北白川下層式や東海系条痕文土器や有舌尖頭器が、塚穴遺跡や天神山遺跡から船元式土器が出土しているに過ぎない。後期になると富田台地縁辺部や芥川扇状地に宮田遺跡や上田部遺跡などの遺跡が出現し、芥川遺跡からは、土坑墓・土器棺墓群や加曾利BⅠ式を含む多量の土器や石皿・磨石などの石器が出土している。後期から晩期になると周辺地域との交流も活発化し集落の定住化が進み、沖積地や丘陵縁辺部を中心として三島地域全域で遺跡数が増加する傾向が窺える。



写真3 調査地周辺の地形（上が北）

弥生時代 高槻市東部の檜尾川流域の沖積地に立地する安満遺跡では、二重の環濠によって囲まれた居住域と用水路と井堰を伴う水田とその外辺部の周溝墓などからなる墓域で構成される弥生時代前期集落の姿が明らかにされている。環濠をともなう前期集落は、ほかに茨木市東奈良遺跡のみで、三島地域の弥生社会は、この二つの集落を中心として展開する。

前期末から中期にかけては遺跡数が増加し、丘陵部には高地性集落などの遺跡が出現する。安満遺跡は、三島平野でも代表的な拠点集落として発展し、その範囲は東西 1.5km、南北 0.6kmと推定されている。安満遺跡の背後の標高 30～50 mの丘陵上には、天神山遺跡や慈願寺山遺跡が出現し、天神山遺跡からは住居跡や方形周溝墓群のほか、突線紐 2 式銅鐸や銅剣形石剣が出土している。一方、近年沖積地では、当センターの試掘調査によって萩之庄南遺跡、梶原西遺跡などの遺跡が発見され、本調査では竪穴建物跡や大溝などの集落に関連する遺構や方形周溝墓群などが検出され、安満遺跡を中心とする遺跡の動態が徐々に明らかになりつつある。安満遺跡が一時期衰退する中期末から後期初頭には、成合遺跡や標高 60～100 mの急峻な丘陵上に大規模な環濠を巡らす古曾部・芝谷遺跡が出現するが、古曾部・芝谷遺跡は後期後半には突如消滅する。変って高槻丘陵先端部や安満山南斜面に、紅茸山遺跡や数棟の竪穴建物からなる萩之庄遺跡など小規模な遺跡が出現するが、これらの遺跡も後期後半には姿を消している。後期中頃以降、東部の檜尾川流域の遺跡群が急速に衰退していく一方で、西部の芥川流域では、大蔵司遺跡、芥川遺跡、郡家川西遺跡、津之江南遺跡などで集落規模が拡大しており、集落数も増加する傾向が窺え、中心が西側に移動していたことを示唆している。

古墳時代 高槻市域の古墳の動向は、前期から後期を通じて、西の芥川・女瀬川流域の奈佐原丘陵や富田台地とその縁辺の河岸段丘面、東の檜尾川流域の高槻丘陵と安満山南麓斜面の二つの地域を中心に展開する。

檜尾川の東、安満山南麓斜面の標高 120 mの地点に築造された安満宮山古墳は、21 m×18 mの長方形墳で、青龍三年銘方格規矩鏡や三角縁神獣鏡を含む 5 面の鏡が出土し、畿内でも最古級の古墳である。その後、前期から中期には、芥川流域の奈佐原丘陵を中心として展開し、岡本山古墳、弁天山古墳、弁天山 C 1 号墳、郡家車塚古墳などの前方後円墳が築造され、これらの古墳は、墳形・規模・副葬品・埴輪などの検討から、三島地域の首長系譜を示していると考えられている。女瀬川流域西部の奈佐原丘陵西枝群と富田台地（低位段丘上）には、鬮鷄山古墳や仿製三角縁神獣鏡が出土した焼山古墳以後、石山古墳や土保山古墳、二子山古墳などが前期から中期にかけて築造されるが、その後突如として、これまでの三島地域の首長墓とは隔絶した規模で、三段築成で全長 226 mの太田茶臼山古墳が出現する。

前期末から中期後半の東部の檜尾川流域の丘陵上には、流域平野に立地する安満北遺跡・安満東遺跡・安満西遺跡などの諸集団の首長墓と考えられる古墳が築造される。安満山の標高 100 mの地点には萩之庄 1 号墳と 2 号墳の 2 基の前方後円墳が築造され、そのうち 1 号墳は全長約 20 mで、石釧や車輪石などを副葬していたことが確認された。また、天神山丘陵東端の標高 54 mの尾根上には、割竹形木棺を直葬する径 18 mの紅茸山 C 3 号墳（円墳）や一辺約 20 mの紅茸山 C 2 号墳（方墳）が築造される。

後期には、富田台地の北東辺の女瀬川扇状地に、二重の濠を含めた総全長 350 mの今城塚古墳が築造され、東部の檜尾川流域では昼神車塚古墳（全長 60 m）や中将塚古墳などの前方後円墳や横穴式石室を埋葬施設とする羅王山古墳などが築造される。後期後半になると、丘陵上や山麓斜面で群集墳の造営が始まり、安威川流域東岸丘陵に展開する 110 基以上からなる塚原古墳群を最大規模とし、芥川流域では脇塚古墳群と塚穴古墳群が、東部の檜尾川流域では安満山南山麓に安満山古墳群、磐手杜古墳群、梶

第1節 地理的歷史的環境



图5 周边遺跡分布图

原古墳群などが形成される。このうち梶原古墳群の調査では、6世紀中頃～後半のD1号墳で三累環頭柄頭や双葉剣菱形杏葉など豊富な武具や馬具などが出土した。また近年、当センターがおこなった金龍寺旧境内跡と成合遺跡の調査では、6世紀後半の成合1号墳や7世紀中頃の成合西王寺山1号墳～3号墳が平野部の奥まった丘陵上で発見されている。そして三島地域では、阿武山古墳や塚原古墳群など7世紀後半～末ごろを最後に古墳造営は終焉する。

奈良・平安時代 古代の高槻市域は、摂津国嶋上郡に属する。嶋上郡名の初見は、「続日本紀」和銅四(711)年の条である。それ以前、三島地域には、6世紀後半期には三島県が、大化改新前後には三島評が設置され、大宝律令施行を期に嶋上郡と嶋下郡の二郡に分割される。「日本書紀」や「続日本紀」などの史料には、三島県主や三島宿祢など、三島氏の有力豪族の名がみられる。

律令期には条里制が施行され、平野部には条里制土地区画がよく残っている。また、丘陵裾部に沿って古代山陽道(後の西国街道)が整備され、官道沿いには、大原駅(梶原南遺跡)、芥川駅(芥川遺跡)、嶋上郡衙(郡家川西遺跡)などの諸施設が置かれ、梶原寺、芥川廃寺(以上嶋上郡)、大田廃寺、穂積廃寺(以上嶋下郡)などの古代寺院が建立される。正倉院文書には、摂津職解から梶原寺に対して東大寺の瓦を発注したとされる記載が見られ、梶原寺跡に隣接する梶原瓦窯跡の発掘調査では百濟様式の瓦が出土し、梶原寺や芥川廃寺へも瓦を供給していたことが明らかになっている。郡家今城遺跡の調査では、役所関連の施設や役人層の居宅と考えられる奈良時代の掘立柱建物群や山陽道と推定される道路遺構が検出されたほか、「上郡」と墨書された土器が出土している。

延暦三(784)年には平城京から長岡京へ、延暦十三(794)年には長岡京から平安京に遷都されるが、三島地域も転換期を迎える。平安遷都を契機として大原の駅が廃止され、変わって山崎津が置かれ、淀川を介した水運が栄え、貴族層との交流も一層活発となる。

淀川沿いには多くの牧が置かれたほか、安満の荒地などには宮内省直営の官田や天皇家私領である勅旨田が置かれるが、その一つ安満勅旨田は、平安時代後期には藤原摂関家領安満庄となり、12世紀後半には藤原家の氏神である大和春日大社に寄進される。成合にある春日大社は、高槻市東部三島平野一帯を対象とする広大な地域に展開する安満庄の鎮守として栄えた事が文献から窺える。

このほか、平安時代には、山岳仏教の広がり背景として霊山寺、神峰山寺、悉檀寺などの山岳寺院が建立される。成合には、「三代実録」貞観十六(874)年の条から、同年に官寺に列したことが知られる悉檀寺跡が位置しており、平安時代後期の軒丸瓦が採集されている。また、周辺には、灰原から8世紀末～9世紀初頭頃の須恵器が多く出土した成合琴堂窯跡がり、それと同時期の須恵器窯(成合西王寺山窯跡)が成合遺跡でもみつかり、ここでは掘立柱建物も数棟が確認されている。

成合東方の山中に所在する金龍寺は、平安時代僧千観によって再興され、「日想観」の聖地として多くの人々の信仰を集め、現在は大小多くの堂宇の石垣が残る。麓の金龍寺旧境内跡の調査では、貴族層との交流を背景とした須恵質の円面硯や白色の石製巡方(帯飾具)や大型の土馬が出土している。(金光)

【引用・参考文献】

- 平凡社 1986『大阪府の地名1』 日本歴史地名大系第二十八巻
- 原口正三ほか 1973『高槻市史』第6巻考古編 高槻市史市役所
- 高槻市史編さん委員会編 1977『高槻市史』第1巻本編I 高槻市役所

第2節 成合地区における既往の調査

高槻市教育委員会 1966『紅苺山・岡本山東地区の調査』高槻市文化財調査報告書 第2冊

鐘ヶ江一郎編 2000『安満宮山古墳』高槻市文化財調査報告書 第21冊 高槻市教育委員会

第2節 成合地区における既往の調査

今回の調査成果をよりよく理解するために、これまでにおこなわれた成合谷周辺の調査成果について確認しておきたい。高槻市域は、主に1970年代以降に進んだ開発に伴って埋蔵文化財の調査件数が増大し、平野部の背後の丘陵上の遺跡の実態が明らかになりつつある。成合谷の西に位置する高槻丘陵についても開発による宅地化が進行しており、古曽部・芝谷遺跡¹⁾をはじめとして発掘調査成果の蓄積がみられる。それに対して成合谷や東岸の丘陵上には、これまでに開発の手が及んでこなかったため、遺跡の実態は長らく不明な点が多かった。『高槻市史』第6巻・考古編²⁾が刊行された1973年段階でこの地区で把握されていた遺跡としては、成合谷の南に位置する紅苺山遺跡と紅苺山古墳群、成合地区の東方山中に位置する金龍寺跡(写真4-1)、平野部北側に位置する悉檀寺跡、檜尾川東岸丘陵に上位置する成合遺跡、西岸域の北西谷奥に位置する成合琴堂窯跡などが挙げられる程度で、以後近年まで新しく周知された遺跡はなかった(図2・5・6)。

当センターによる一連の発掘調査より前におこなわれた調査について簡単にふれると、まず紅苺山遺跡では、過去に名神高速道路(1961年)と市立第八中学校(1970・71年)の建設に伴って調査がおこなわれている。弥生時代後期と奈良時代の集落域と、中～後期の古墳がまとまってみつかっており、今回の調査とも関連する遺構としては、横穴式石室をもつ7世紀前半のC-1号墳と同時期の土坑墓群、奈良時代の建物跡9棟と木棺墓(土壇墓15)などが挙げられる。

悉檀寺については、『日本三大実録』貞観一六(874)年の条に記載がみられる官寺相当の寺院で、春日神社に悉檀寺什物とされる大般若経が伝蔵し、社殿周辺から平安時代後期の軒瓦が出土していることから、春日神社の周辺一帯が遺跡の範囲として指定されている(写真4-2)。これまでに高槻市教育委員会による小規模な調査や立会が数次にわたっておこなわれており、7世紀から中世までの遺物がみられ、緑釉陶器の出土が目立つといった所見もあるが、現在のところ悉檀寺の存在に迫る明確な遺構は検出されていない³⁾。



1. 金龍寺跡現況



2. 春日神社現況(悉檀寺跡)

写真4 調査地周辺の遺跡

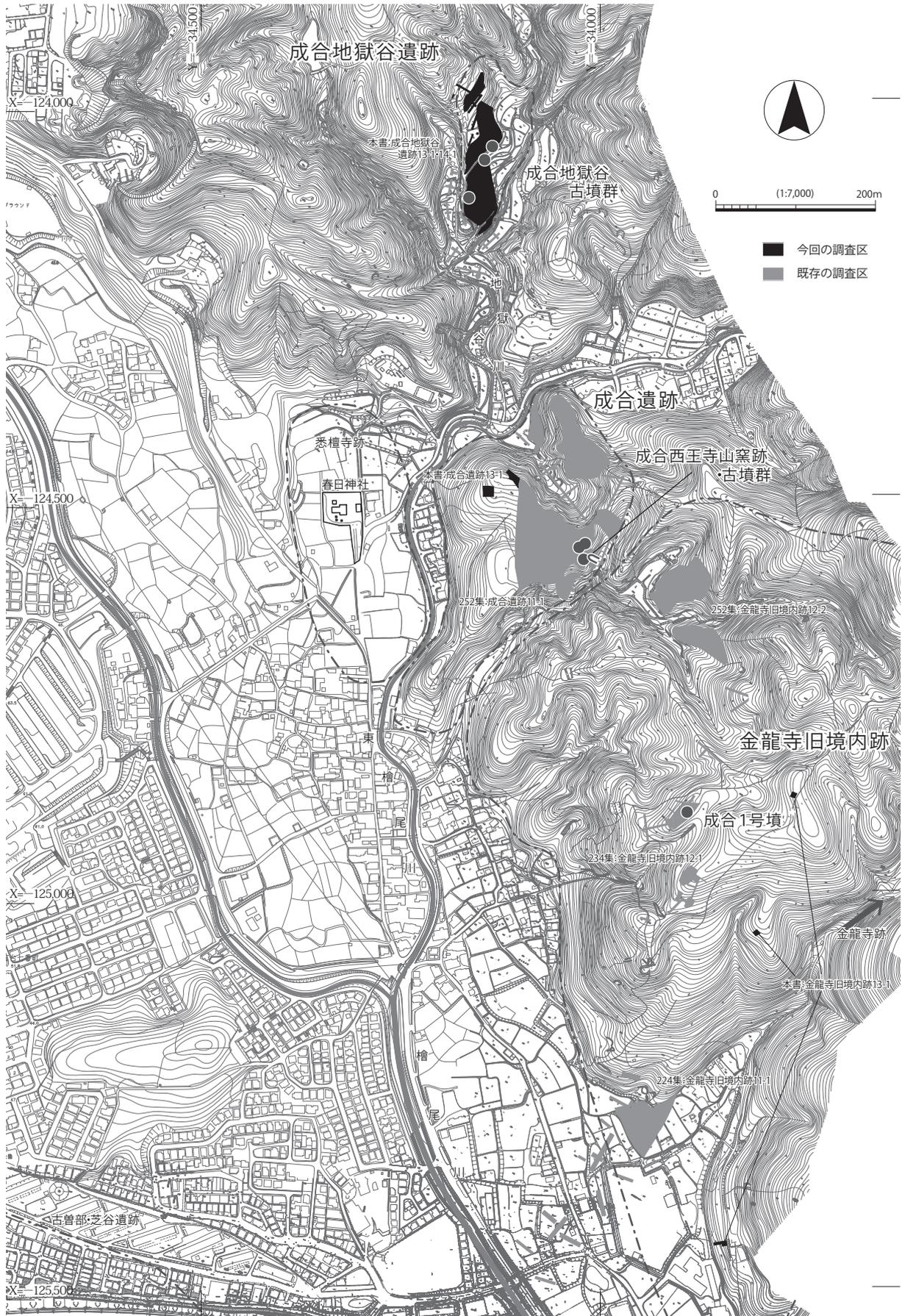


図6 新名神高速道路（高槻市成合地区）埋蔵文化財調査地全体図

第2節 成合地区における既往の調査

成合琴堂窯跡については、もともと7～8世紀代の須恵器窯としてその存在が知られていたが、1990年代におこなわれた宅地開発に伴う調査によって灰原が確認されており、8世紀末～9世紀初頭の須恵器がまとまって出土している⁴⁾。

新名神高速道路建設事業に伴う一連の調査 新名神高速道路に関連する調査に関しては、これまでの経緯や経過については既に述べたところであり、ここでは平成23年から平成25年にかけておこなわれた金龍寺旧境内跡・成合遺跡のふたつの遺跡の調査成果についてやや詳しく述べたい(図6)。

金龍寺旧境内跡は、金龍寺にむかう参道谷筋付近の試掘調査によって新規に発見された遺跡で、この谷筋に近い平地部と丘陵上で平成23～24年にかけて3次にわたって調査がおこなわれている。もともと棚田として利用されていた山裾部分の調査では、8世紀後半と中世を中心とした時期の遺構・遺物が検出されており、特に8世紀代の遺物の中には須恵器の円面硯や石製巡方、土馬、土管等が含まれる点で注目される⁵⁾(写真5-1)。金龍寺自体は10世紀後半に僧千観によって再興され、以後近世まで繁栄したことが知られるが、もともとは延暦9(790)年に参議安部是雄によって創建された「安満寺」が前身であったとされる。平地部で確認された8世紀代の遺構・遺物は、この「安満寺」の創建期と重なっており、出土遺物から高位階層の存在が推測される点が重要である。この他に、丘陵上の調査では後述する後期古墳1基(成合1号墳)⁶⁾が、成合遺跡に隣接する北側の調査ではⅢ様式末～Ⅳ様式初頭頃の弥生土器や奈良～平安時代初頭頃の焼土坑が確認されている⁷⁾。

成合遺跡については、昭和20年代に弥生時代中期の土器や石器が採取されていたことからその存在が知られていたが、これまで遺跡の実態は長らく不明であり、今回の調査によって遺跡の範囲と内容が大きく刷新された。調査ではこれまで存在が推測されていた弥生時代中期後半の集落跡とともに、7世紀中頃の横穴式石室を伴う小古墳3基、8・9世紀代の掘立柱建物や火葬との関わりが推測される多数の焼土坑、8世紀末～9世紀初頭頃の須恵器窯が新たに確認されている⁸⁾。

このうち弥生時代の集落跡については、中期末(Ⅳ様式後半)のほぼ一時期に限定され、確認された建物跡の配置は集落景観を復元できる良好な資料である(写真5-2)。成合遺跡の出現と衰退は、安満遺跡や古曾部・芝谷遺跡といった周辺の遺跡の動態とも連動していると考えられ、遠隔地からもたらされたヒスイ勾玉は周辺の中核的な集落からもたらされたものだろう。

古代の調査成果については、調査地北西の一角で緩斜面地が段造成されているのが確認されており、そこを中心に掘立柱建物や石列等の遺構が検出され、8世紀後半と9世紀中頃を中心とした2時期の遺物が主に出土している。この中でも9世紀代の遺物がやや多く、緑釉陶器の唾壺や軒丸瓦、鉄鉢形の黒色土器等が出土する点が注目され、出土遺物の時期と内容から悉檀寺との関わりを検討する必要がある。さらに遺跡東側斜面地の一角では、8世紀末～9世紀初頭頃の須恵器窯が1基確認されており、総点数約3万点、総重量1トンにおよぶ量の須恵器が出土している(写真5-3)。供膳具が生産の主体となるものの、壺類の生産量も多く、この時期に通有の器種をほぼ網羅的に生産している点が特徴で、円面硯や九輪など特殊な遺物も目立つ。生産内容からは一般的な集落よりもむしろ都城や官衙、寺院などへの供給が推測されるとともに、「刀」と刻印された須恵器の性格や供給先等が問題となる。また、遺跡内で検出された焼土坑は100基近い数にのぼっており、大きくは被熱赤変するものと、被熱せず炭・焼土が充満する2者がみられる。出土遺物は少ないが、基本的には8～9世紀代の遺構と考えることで、熱を受けた鉄釘等もみられることから、火葬に関連する遺構と推測される。さらに遺跡の北側丘陵上では鉄釘を伴う木棺墓が1基確認されており、墓坑の底部と木棺周囲に炭のひろがりが見られること

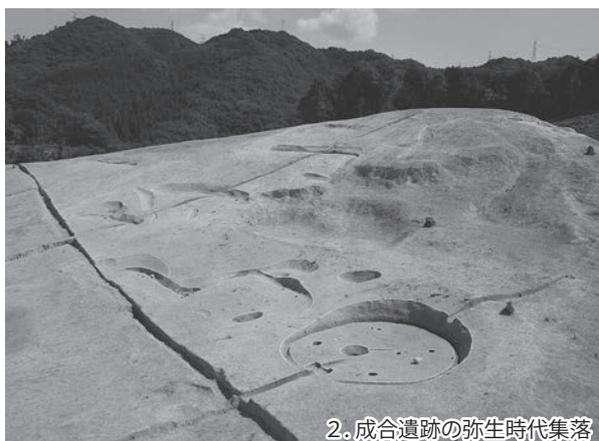
から、木炭槲構造をもつ木棺墓と判断することができ、一部に特殊な構造の墓がみられることは重要である。

新名神高速道路建設事業の調査で新たに発見された古墳は、金龍寺旧境内跡の1基（成合1号墳）と、成合遺跡の3基（成合西王寺山1～3号墳）で、本書で報告をおこなう成合地獄谷遺跡でも横穴式石室を伴う2基と小石室がみつまっている（成合地獄谷古墳群）。このうち成合1号墳は、径約15mの円墳で全長6.4mの右片袖式横穴式石室を伴う（写真5-4）。残念ながら石材の大半が抜き取られていたものの、床面には敷石が概ね残存しており、TK43型式、6世紀後半の須恵器や鉄鏃、砥石などの副葬品が出土している。成合地区の現集落を見下ろす東方丘陵上に立地した単独墳で、時期的に重なる安満山南麓の安満山古墳群とは対照的な立地・構成をなす。成合西王寺山古墳群については遺存状況が極めて悪かったが、いずれも飛鳥Ⅱ、7世紀中頃の全長3m程度の小型の横穴式石室を伴っていたと考えられる。この中で1号墳については辛うじて床面が残っており、棺台と鉄釘の出土位置から木棺1基が安置されていたことが判明している。

このように新名神高速道路建設に伴う一連の調査においては、特に後・終末期古墳や奈良～平安時代前半の遺構・遺物の存在が新たに知られるようになってきたことが大きな成果である。古代の遺構のうち、金龍寺旧境内跡の遺構・遺物と成合遺跡の造成段に伴う遺構・遺物、須恵器窯の操業時期がそれぞれ微妙にずれており、また火葬に関連する焼土坑の帰属時期がはっきりしないといった課題もあるが、主に8世紀後半から9世紀にかけてこの地域の特殊性が浮かび上がる。古墳群を含めたこれらの調査成果は、本書にて主体的に報告する成合地獄谷遺跡の調査成果とも深く関わるものとみられ、古代の成合地区の様相を総体的に捉えていく必要があるだろう。（笹栗）



1. 金龍寺旧境内跡



2. 成合遺跡の弥生時代集落



3. 成合西王寺山窯跡



4. 成合1号墳

写真5 新名神高速道路関連の調査

第2節 成合地区における既往の調査

註

- 1) 宮崎康雄編 1996『古曾部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書 第20冊 高槻市教育委員会
- 2) 原口正三ほか 1973『高槻市史』第6巻考古編 高槻市史市役所 高槻市史編さん委員会編 1977『高槻市史』第1巻本編Ⅰ 高槻市役所
- 3) 高槻市教育委員会 1988・1989・2000・2001・2007『鳴上遺跡群』12・13・24・25・31
- 4) 中村剛彰 1995「奈良時代末頃における一地方窯の様相～成合琴堂窯跡群発掘調査報告にかえて～」『高槻市文化財年報』平成5年度 高槻市教育委員会
- 5) 金光正裕 2012『金龍寺旧境内跡』（公財）大阪府文化財センター調査報告書 第224集
- 6) 廣瀬時習 2013『成合1号墳』（公財）大阪府文化財センター調査報告書 第234集
- 7) 笹栗拓・伊藤武・金光正裕 2014『成合遺跡・金龍寺旧境内跡2』（公財）大阪府文化財センター調査報告書 第251集
- 8) 前掲7) 笹栗・伊藤・金光 2014

第3章 成合地獄谷遺跡の調査成果

遺跡は、地獄谷川によって形成された南北 800 m、東西 500 m の小規模な谷底平野の南半部に位置し、南北方向に延びる丘陵先端部の南東斜面を中心に南北 230 m、東西 30 ～ 100 m の範囲に広がる(図 7)。丘陵の南東斜面は整然とした棚田水田と畑地の耕作地景観が広がり、丘陵尾根上には、かつて畑地として開墾されたと思われる平坦地がみられる。地獄谷川は丘陵を開析し蛇行しながら流下し、西側に丘陵が迫る狭隘部を抜けて、成合遺跡が立地する丘陵の西側で東檜尾川と合流する。調査は、地獄谷川右岸の段丘面(1区)、棚田水田が広がる緩斜面地(2区)、丘陵尾根部(3区)、2区と3区間の急傾斜面地(4区・5区)を対象としておこなった。丘陵尾根部の3区については、畑として開墾されたと思われる平坦地がみられることから、この平坦地に幅 2 m のトレンチを設定して先行調査をおこない、遺構や遺物が検出されたトレンチの範囲を広げて面的な調査をおこなった。

調査の結果、7世紀代の横穴式石室を埋葬施設とする2基の古墳(成合地獄谷古墳群)や、8～9世紀を中心とした時期の墓、土坑やピット、溝などの遺構が検出された。出土遺物は土師器や須恵器のほか、八花鏡をはじめとする銅製品や腰帯具、鉄釘など貴重な遺物が主に墓から出土している。

以下、調査区ごとに遺構・遺物の報告をおこなうが、古墳については確認された調査区ごとには報告はせず、成合地獄谷古墳群として第5節にてまとめて報告することとしたい。(金光)

第1節 1区 (図8、写真図版2)

南東側約 3 m 下を地獄谷川が流れる。現耕作土層直下には、1.0 ～ 3.0 cm の中礫や粗砂を主体とするにぶい黄褐色シルト質砂の耕作土層、ラミナは明瞭ではないが比較的均質な暗灰黄色砂や礫を多く含む黄灰色砂の自然堆積層、礫間に灰色砂・シルトを含む 1.0 ～ 5.0 cm の中礫を主体とする礫層が堆積し、その直下には、固く締まった段丘礫層が堆積し、北側水田下には丘陵の基盤岩が北東方向に向かって露頭している。遺構は耕作に伴う小溝のみで、出土遺物は少なく、近世染付磁器や須恵器・土師器の極細片のみであった。(金光)

第2節 2・4区 (図8～35、写真図版2～12)

1. 基本層序

2区では、棚田造成に伴う丘陵斜面のカットや比較的規模の大きい丘陵斜面の浸食によって、遺構面や堆積層が失われる箇所が見られた。また、4区は傾斜が急な斜面地であって、斜面に並行する方向では層の連続性が悪い。しかし層が不連続であっても、遺跡発見の契機となった黒褐色土層(3層)は2区のほぼ全域と4区でも認められたことから、この層を鍵層として基本層序を設定した(図9)。

表土層から地山面までは、4層に大別され、各層は、地点によってさらに複数に細分される。

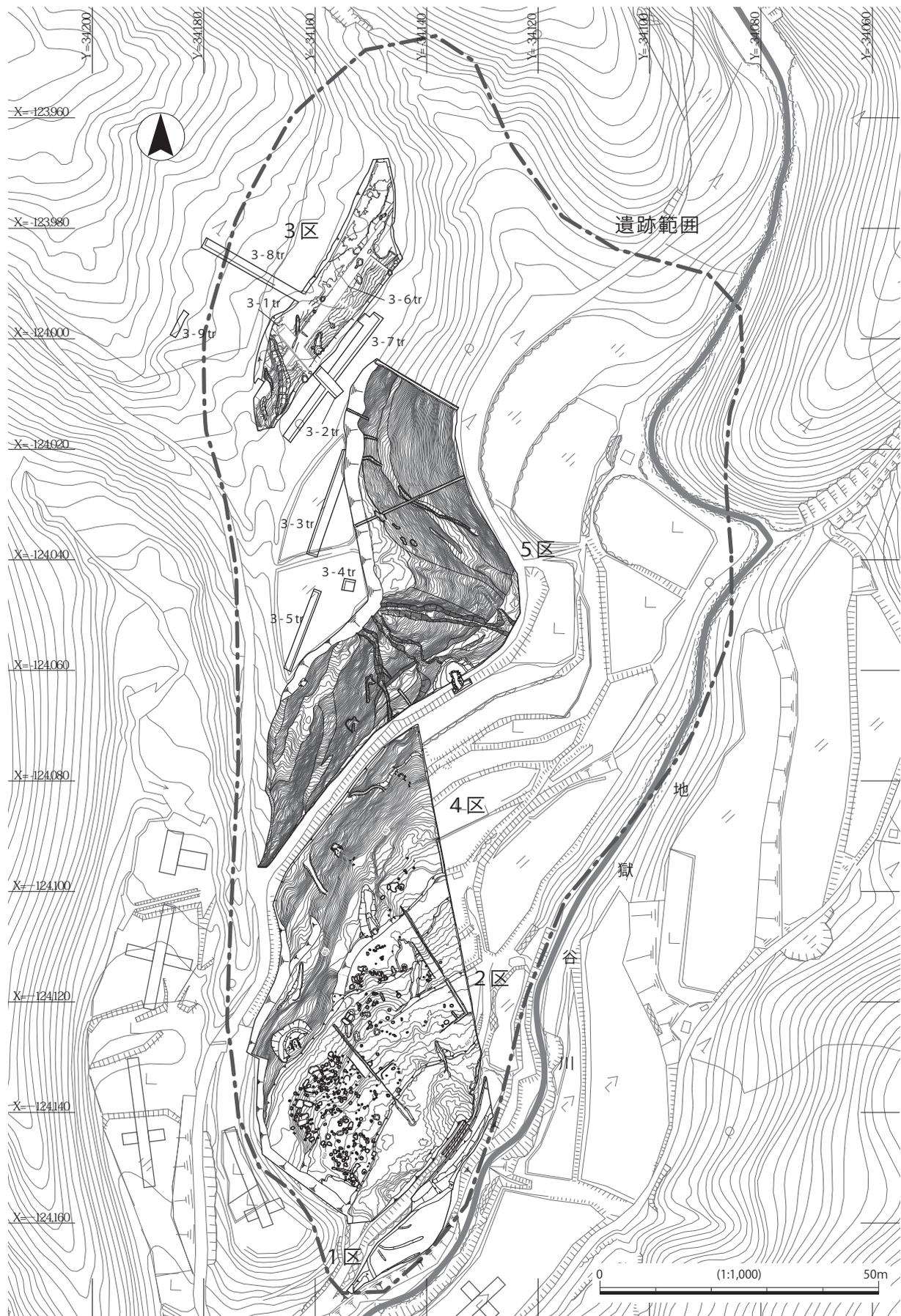


図7 成合地獄谷遺跡 調査区配置図

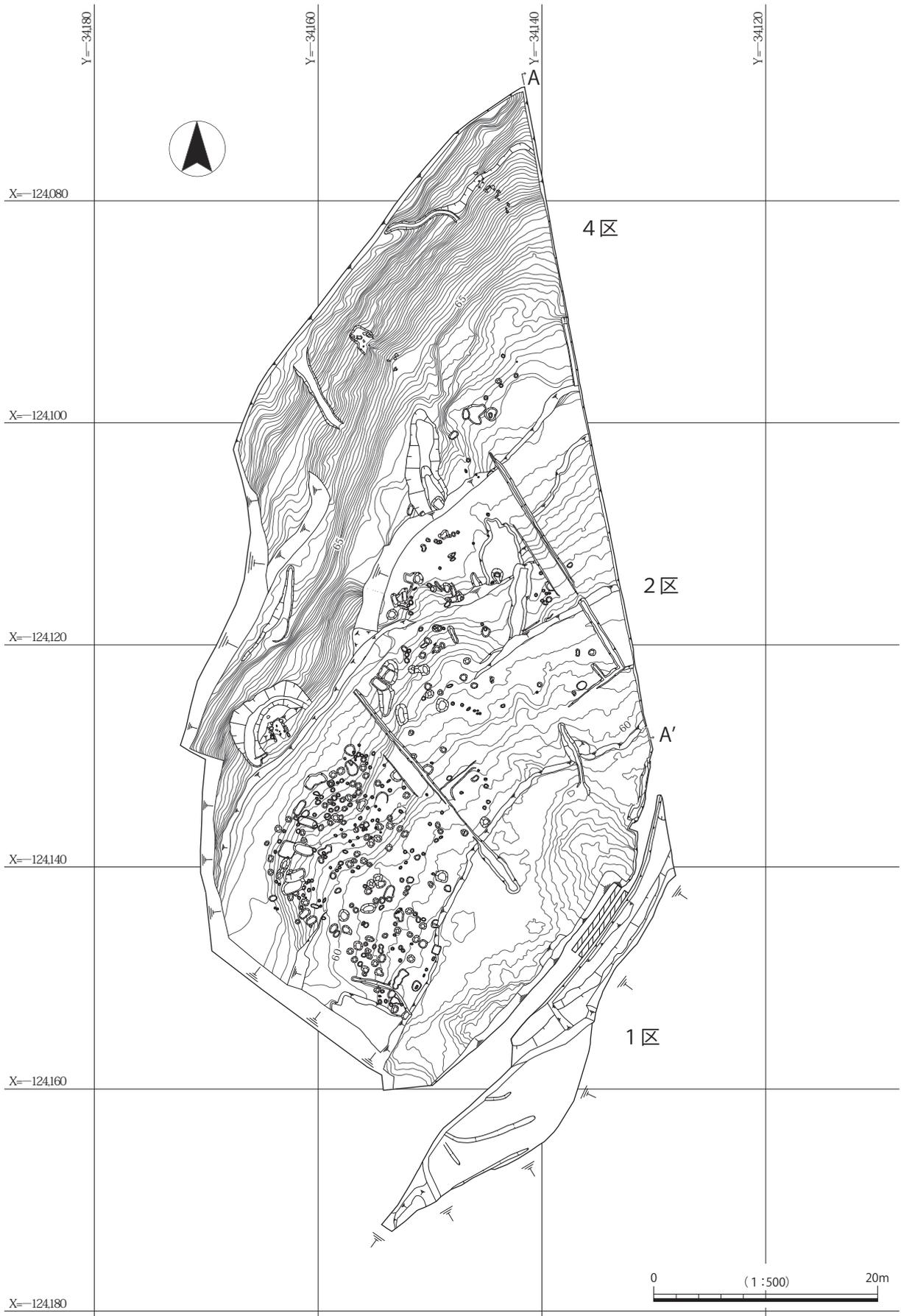


図8 成合地獄谷遺跡 1区・2区・4区 第4面 全体平面図

第1層のうち表土・床土層を除去した面を第1面、近世耕作土層および棚田裏込土などの第1層を除去した第2層上面を第2面、第3層黒褐色土層上面を第3面、第3層および第4層を除去した地山面を第4面とした。第2面および第3面は、地点によってさらに複数の遺構面が認められた。

第1層 表土層や近世の耕作土層および棚田造成に関わる層を第1層として一括した。3層に大別することができる。

1-1 表土・床土層。

1-2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質砂。1.0～3.0cmの中礫を多く含む。南半部の棚田平坦部ではさらに複数の細分層が存在する。

1-3 2.5Y4/6 オリーブ褐色～2.5Y5/6 黄褐色シルト質砂。棚田裏込め土で、0.5～1.0cm大の中礫を多く含む。3.0～5.0cm大の中礫も含まれる。

第2層 第1層と第3層の間に堆積する層を第2層として一括した。中世の耕作土層や棚田造成に関わる層、自然堆積層などが存在し、概ね2層に大別することができる。

2-1 2.5Y5/6 黄褐色砂質シルト。0.3cm大の細礫や比較的均質な2.5Y5/6 黄褐色砂質シルトを若干含む。ほかにも、0.5～1.0cmの中礫を多く含む、2.5Y4/6 オリーブ褐色～2.5Y5/6 黄褐色シルト質砂が堆積する。

2-2 10YR5/6 黄褐色シルト質砂。10YR4/6 褐色シルト質砂や礫を比較的多く含む。

第3層 黒褐色シルト質砂層で炭化物や焼土が含まれるのが特徴的であるが、地点によっては層相が異なる。また、黒褐色シルト質砂層の母材となる黄褐色砂質シルト層が堆積するが、これも第3層に含めた。第3層は、概ね3層に大別することができる。

第3層上面からは、やや粘性を帯びる明黄褐色シルトを埋土とするピットや溝などの遺構と浸食痕跡が検出された。第3層からは、古墳時代の須恵器片や古代の土師器・須恵器が出土するが中世の遺物は含まれない。

3-1 10YR3/1 黒褐色砂質シルト。0.5～1.0cm大の中礫をやや多く含む、地点によっては10cm大の大礫や炭化物・焼土の細粒を含む。

3-2 10YR5/6 黄褐色シルト。やや粘性が有り、0.3cm大の細礫を若干含む(16)。10YR5/6 黄褐色シルト質砂(18)が第3-1層の母材となる。第3-2層堆積後粗砂や礫が堆積し、土壌化された地点では第3-1層は粗砂・礫混じりの層相を示すが、粗砂・礫が及ばない地点ではやや粘性を帯びたシルト層となる。地点によって異なるため相互の連続性を把握することは困難であった。

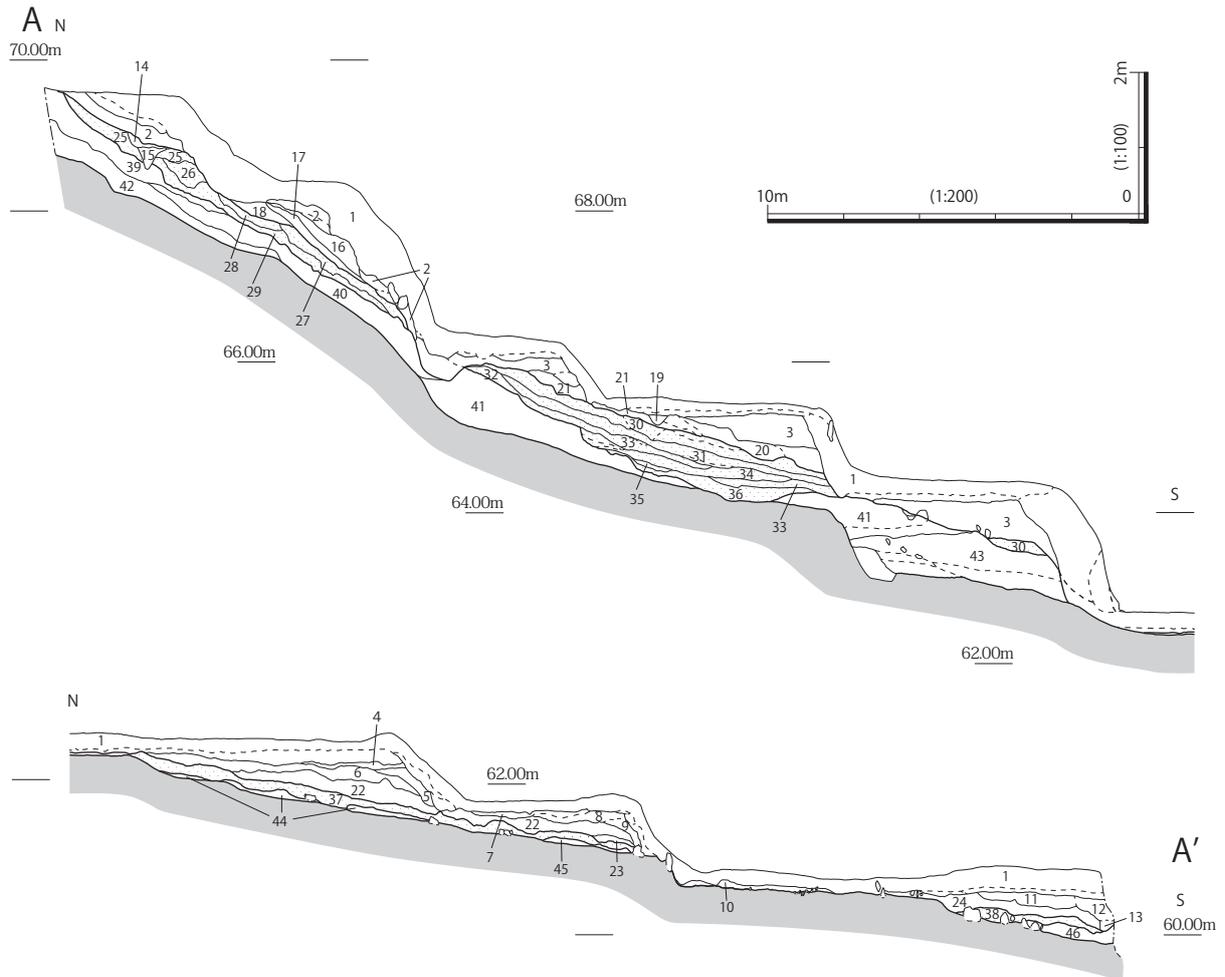
3-3 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト質砂。0.5～1cm大の中礫を含む。10YR7/4 にぶい黄橙色シルト質砂。0.5～1cm大の中礫を含む。

第4層 第3層から地山面までの間に堆積する層を一括する。

4-1 10YR4/6 褐色シルト質砂。1.0～2.0cm大の中礫を多く含むややしまり有り(24)。

10YR5/6 黄褐色砂質シルト。やや粘性有り。5.0cm大の中礫を若干含む(26)。

4-2 2.5Y5/4 黄褐～4/4 オリーブ褐色砂質土を礫間に含む1.0～5.0cmの礫層(あまりしまりがない)。下部には、やや粘性のある明黄褐色の砂質シルト層が堆積する。(金光)



【第1層】

1. (表土・床土)
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質砂、 ϕ 1.0 ~ 3.0 cm 大の中礫多く含む、しまりなし
3. (耕作土) 2.5Y4/6 オリーブ褐 ~ 2.5Y5/6 黄褐色シルト質砂、 ϕ 0.5 ~ 1.0 cm 大の中礫多く含む
4. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト、中砂・細砂を多く含む
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質シルト、粗砂・中砂や ϕ 0.3 ~ 0.5 cm 大の細礫 ~ 中礫含む
6. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト質砂、マンガン斑の沈着が顕著
7. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト、やや粘性有り
8. 10YR6/6 明黄褐色シルト質砂と 10YR6/1 褐灰色シルト質砂
9. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト質砂、粗砂・中砂が多く、 ϕ 0.3 ~ 1.0 cm 大の細 ~ 中礫含む
10. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト、やや粘性有り
11. 2.5Y7/4 浅黄色シルト質砂、 ϕ 3.0 ~ 5.0 cm 大の中礫含む
12. 2.5Y7/3 浅黄色シルト質砂、中砂・細砂や ϕ 0.3 ~ 0.5 cm 大の細 ~ 中礫を含む
13. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト、細砂や ϕ 0.5 ~ 2.0 cm 大の中礫多く含む

【第2層】

14. 10YR5/6 黄褐色シルト
15. (2-1) ϕ 1.0 cm 大の中礫を主体とする礫層、 ϕ 3.0 cm 大の礫も多く含む、礫間に 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質砂
16. (2-1) 2.5Y5/6 黄褐色砂質シルト (比較的均質)、 ϕ 0.3 cm 大の細礫若干含む
17. (2-2) 10YR5/4 にぶい黄褐 ~ 10YR5/6 黄褐色シルト質砂、礫を比較的多く含む、あまりしまりがない
18. (2-2) 2.5Y5/6 黄褐色シルト質砂、礫を多く含む (2)
21. (2-2) 10YR5/6 黄褐色シルト質砂、礫を多く含む
19. 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト、やや礫を含む
20. (2-1) 2.5Y5/6 黄褐色砂質シルト、(比較的均質)
22. (2-1) 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト質砂、 ϕ 0.3 ~ 0.5 cm 大の細 ~ 中礫含む
23. (2層系) 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質シルト、マンガン斑の沈着が見られる
24. (2-2) 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト、固く締まり、 ϕ 3.0 ~ 5.0 cm 大の中礫含む

【第3層】

25. (3-1) 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト、やや粘性有り、 ϕ 2.0 ~ 3.0 cm 大の中礫若干含む
26. (3-1) 10YR4/6 褐色シルト質砂、礫を比較的多く含む
28. (3-1) 2.5Y5/6 黄褐色シルト質砂、 ϕ 1.0 cm 大の中礫多く含む
27. (3-1) 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、 ϕ 0.5 ~ 1.0 cm 大の中礫やや多く含む (ϕ 10.0 cm 大の大礫もごくわずかに含む)
29. (3-2) 10YR5/6 黄褐色シルト、やや粘性有り、 ϕ 0.3 cm 大の細礫若干含む
30. (3-1) (2.5Y6/8 明黄褐色 ~ 2.5Y7/8 黄色) シルト、やや極細礫含むも比較的均質 (6層)、3層上面相当
31. (3-2) 10YR5/6 黄褐色シルト質砂
32. (3-2) 10YR5/8 黄褐色砂質シルト (比較的均質)、やや粘性有り、炭化物若干含む
33. (3-2) 2.5Y6/8 明黄褐色砂質シルト、下部に ϕ 0.5 cm 大の中礫が多く含まれる
34. (3-3) 2.5Y7/4 浅黄色シルト、粘性やや弱い
35. (3-3) 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト質砂、 ϕ 0.5 ~ 1.0 cm 大の中礫含む
36. (3-3) 2.5Y7/3 浅黄色砂質シルト、細砂わずかに含む
37. (3層系) 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト、粗 ~ 細砂や ϕ 0.5 ~ 1.0 cm 大の中礫含む、マンガン斑の沈着有り
38. (3層系) 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト、粗砂・細砂や ϕ 0.5 ~ 1.0 cm 大の中礫含む

【第4層】

39. (4-1) 10YR4/6 褐色シルト質砂、 ϕ 1.0 ~ 2.0 cm 大の中礫多く含む、ややしまり有り
40. (4-1) 10YR5/6 黄褐色砂質シルト、やや粘性有り、細礫 ~ 中礫をやや多く含む
42. (4-1) 10YR5/6 黄褐色砂質シルト、やや粘性有り、 ϕ 5.0 cm 大の中礫若干含む
41. (4-1) 10YR4/6 褐色シルト質砂、やや粘性有り、 ϕ 3.0 ~ 5.0 cm 大の中礫比較的多く含む
43. (4-2) ϕ 1.0 ~ 5.0 cm の礫層 (あまりしまりなし)、2.5Y5/4 黄褐 ~ 4/4 オリーブ褐色砂質土を礫間に含む、下部には、やや粘性のあるシルト (明黄褐色) 層
44. (4-2) 10YR5/6 黄褐色砂質シルト、極細砂少量含む、比較的固く締まっている
45. (4-2) 2.5Y7/4 浅黄色砂質シルト、細砂を少量含む
46. (4-2) 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト、細砂を比較的多く含む

図9 2区・4区 基本層序断面図

2. 包含層出土遺物

包含層中からは、陶磁器類や土師器、須恵器、鉄器、ガラス小玉等が出土している（図10）。第3層中からは基本的には古代の遺物のみが出土し、上層の1・2層中や棚田の盛土中からは古代の遺物とともに近世以降の陶磁器類の出土もみられる。なお、第4層は調査区の東側にのみ堆積し、遺物の出土はない。

1～5・15・16は棚田盛土および第2層から出土した遺物で、1鉢底部や2すり鉢、3青磁のように新しい時期の遺物と、4・5のように古代の遺物が混じる。4は2条の突帯が肩部に取付き自然釉がかかる壺で、双耳壺（壺N）と考えられる。焼成や色調は周辺遺跡で通常みつかるとは異なっていて

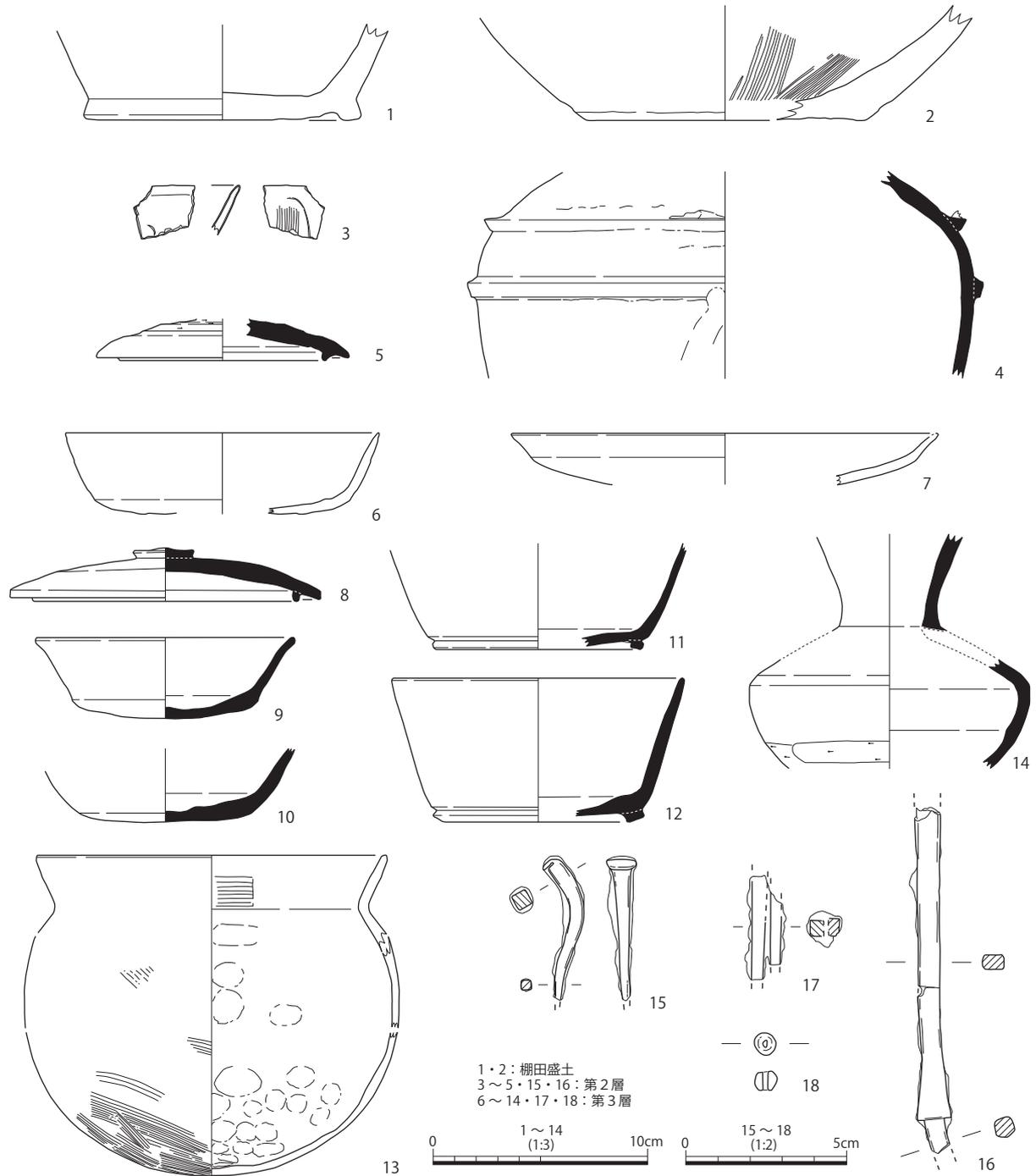


図10 2区・4区 包含層出土遺物

おり、播磨産とみられる。9世紀代の所産と考えられる。5は須恵器の杯G蓋で、口径は9.4cmをはかる。飛鳥Ⅱ、7世紀中頃に位置づけられ、古墳群に伴う可能性が想定される。

6～14・17～18は第3層からの出土遺物で、7～9世紀代の遺物が伴う。6は土師器杯A、7は土師器皿である。内外面が著しく磨滅しているため調整は不明だが、器形から6が8世紀代に、7が平安京Ⅱ期古～中、9世紀中頃から後半に位置づけられる。この他に土師器は、地山直上から出土した小型の甕13などがある。8～12・14はいずれも須恵器で、10杯Aと14長頸壺が7世紀代の所産である。8は扁平なつまみに形骸化したかえりがつく杯B蓋で、7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。9杯Aは口縁部の外反が強く、11・12杯Bは深手で高台が底部外端付近にとりつく形態で、いずれも9世紀初頭～前半頃に位置づけられる。

鉄器も少なからず出土しており、鉄釘や鉄鏃等がみられる。16は長頸鏃で、頸部から茎にかけて残存しており台形関である。18ガラス小玉とともに古墳群の副葬品の可能性が高い遺物である。15は頭巻式の鉄釘で、先端付近まで残存する。頭部の形状から中世以降に下る可能性もあるが、北摂では栗栖山墳墓群に古代の出土事例があり¹⁾、層位的にも古代のものとみて差し支えないだろう。この他には棒状の17は鉄釘の可能性が高く、15・17とともに墓に関連する遺物と想定される。(笹栗)

3. 第2面

2区については遺構面の残りが良く、調査前と同様に棚田水田が広がる(図11)。南西部では、丘陵裾部をカットし、裾部に沿ってL字形に巡る幅1.5～2.5mの浅い溝と幅2.0m前後の平坦地が造られている。水田区画の方向は、現在の棚田とほぼ同じ方向をとるものと、約10°東に振ったものがある。また、両水田で重複関係がみられるのは、中央部の2L-5C・6C区と2L-5d区の2か所で、東端の棚田耕土除去面では、10°振った水田方向と一致する段が検出された。東に振る水田区画の方が古い。各田面からは、耕作に伴う耕作溝が検出される。ベースとなる第2層出土遺物に瓦器片が含まれることや、第2面で検出した15溝からほぼ完形の土師器皿が出土していることなどから、当地域が水田として開墾された時期が、中世まで遡ることが明らかになった。

1土坑(図12、写真図版3-5) 2L-5b区に位置し、棚田肩部に位置する。長軸1.8m、短軸0.6m、深さ0.3mの土坑である。底面は浅い椀状に窪み、東側壁はやや直に立ち上がる。埋土は、0.3～0.5cmの細礫～中礫を含むシルト質砂の4層に分けられ、下層には黄灰色シルトのブロックやや粘性を帯びるシルトが堆積する。遺物は出土しなかった。

2落込み(図13、写真3-6) 2L-5C・6C区に位置し、棚田の田面で検出された。西辺5.0m、北辺8.5m、深さ約0.2mの方形の落込みである。北側の辺は、棚田方向に対して約10°東に振っている。底面は平坦で壁は直に立ち上がる。埋土は、1.0～1.5cmの中礫を含む砂質土で、人頭大の礫を多く含む。古い時期の水田区画の可能性が高い。埋土中からは19播鉢が出土している。

3土坑(図13、写真3-7・8) 2L-5C・6C区に位置し、2落込みの底面で検出された。2落込みより新しい。幅0.8～0.9m、長さ2.05mの長方形の土坑である。短辺側には径0.3～0.4m、深さ0.15mのピット2個が重複する。底面は平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。壁際には厚さ5cmの灰白色砂質シルトの薄層が巡る。埋土は、2層で層中には炭化物の細粒がごく少量含まれる。

4落込み(図13、写真3-6) 2L-5C区、3土坑の南東約0.9mの地点に位置する。南東部は棚田造成によって大きくカットされている。南北約8.0m 東西幅約0.8～1.0m、深さ0.4mである。埋

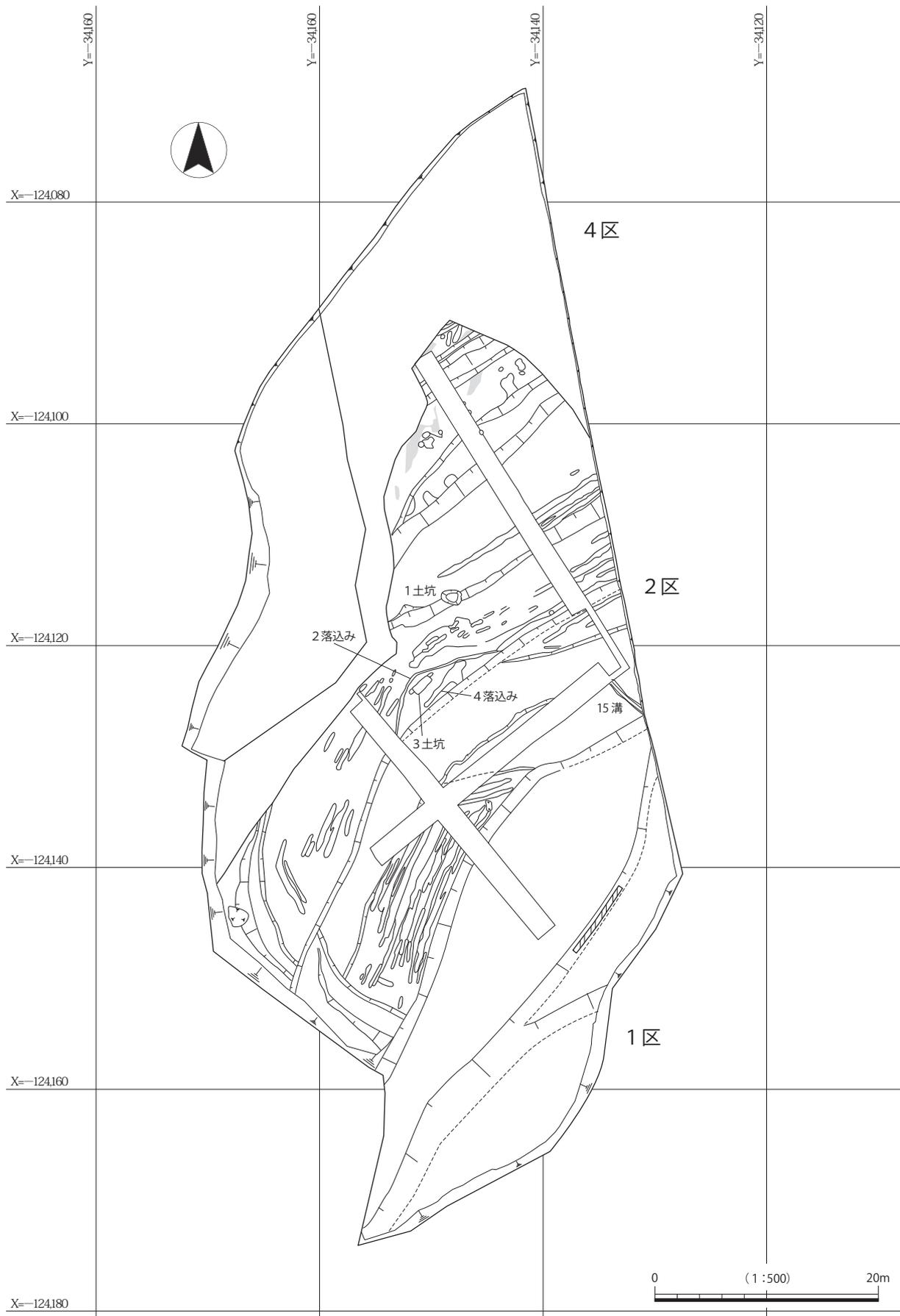


图11 成合地獄谷遺跡 1区・2区・4区 第2面 全体平面図

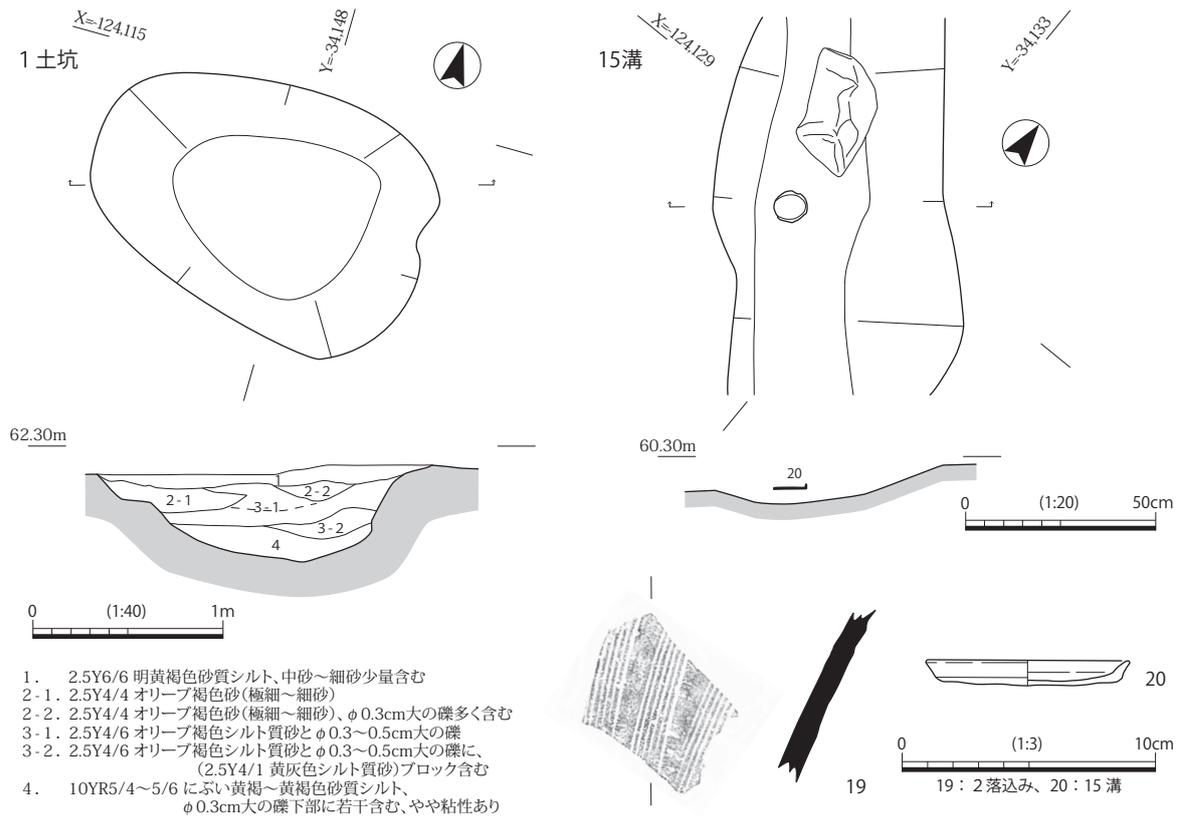


図12 1土坑・15溝 平面図・断面図、第2面出土遺物

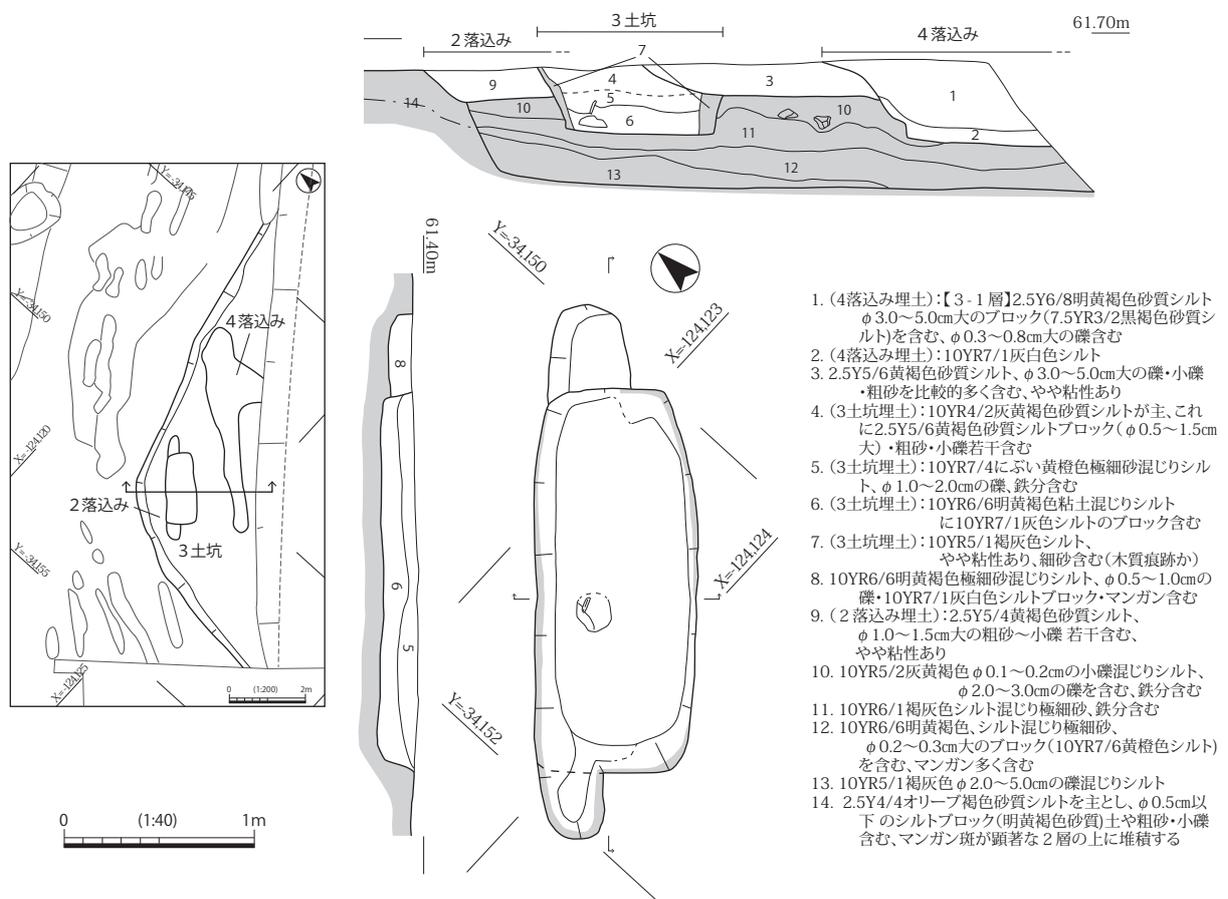


図13 2・4落込み・3土坑 平面図・断面図・出土遺物

第2節 2・4区

土は2層に別れ、下層には厚さ0.1 m前後の灰白色シルトが堆積する。また、1層中には、3.0～5.0cm大の第3層黒褐色シルトブロックや中礫が多く含まれる。

15 溝 (図12) 2L-4C区に位置する。南東から北西方向に直線的に延びる。検出長約4.0 m、幅0.6 m、深さ約0.07 mの浅い溝である。明黄褐色シルト質砂を埋土とする。(金光)

埋土からは20土師器皿が出土している。口縁部が一段ナデで、橋本久和の編年のII b-3前後、13世紀代に位置づけられ、第2面の帰属時期を知る手掛かりになる。(笹栗)

4. 第3面

第3-1層上面を第3面とした。第3-1層は地点によって層相や層厚が異なる。炭化物の細粒を多く含む層や焼土の細粒を含む層、また、中砂～小礫を多く含む砂質シルト層や粘性を帯びるシルト層などが見られた。2区南西部には、丘陵裾部をカットしてできた幅4.5～5.0 mのL字形の平坦部の端から、北東方向と南東方向にすり鉢状に傾斜し、東側平坦部に続く地形が見られ、傾斜面には一抱えもあるような巨石が多く点在し、第3-1層が比較的厚く堆積していた。また、2区の東半部は、丘陵斜面を北から南方向へ流れ下る浸食によって、第3層および遺構面の大半が流失し、遺構の残りは悪かった。第3面からは、ピットや小溝などが検出されており、これらの遺構埋土は明るい黄灰色系のシルトが主体であった(写真図版5-2)。ただしこれらの遺構は、いずれもまとまりに欠けており、掘立柱建物や柵列となるものは見られなかった。

18 浸食痕 (図15・16、写真5-2～4) 4区南東部斜面から2区東半部を南西方向に流れ、南東端は複数の筋にわかれて面を削りその痕跡を留める。南端は、段差の大きい河岸段丘面に近い柵田の端の2L-4C・4d・5d区まで続く。総延長約40 mを検出した。2区北東端では、31落込みが埋没し浅く谷状に窪んだ地形をトレースするように浸食している。埋土は、地点によって1～6層に分層されるが、いずれも1.0～3.0cmの中礫や粗砂を多く含む礫層が主体で、礫間には、2.5Y7/6明黄褐色砂質シルトや2.5Y4/6オリーブ褐色シルト質砂を含む。炭化物の細粒を含む層も見られた。層中からは、土師器や須恵器の細片が数点出土したのみである。

29 溝 (図15・16、写真5-6) 2L-6a区に位置する。南端は柵田造成によって、北東側は、18浸食痕や31落込みによって削られている。総延長17 mを検出した。残存幅2.2 m、深さ0.2～0.4 m、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上り底面との境は不明瞭である。埋土は、細砂～中・粗砂を多く含むシルト質砂で、埋土中には炭化物の細粒を若干含む。南端の溝底面からは、炭や細礫・粗砂を含むシルト、シルト混じり砂を埋土とする、長軸2.0 m、短軸1.0 m、深さ0.2 mの土坑が検出された。(金光)

埋土からは外面に格子タタキをもつ21須恵器甕や、頭巻式の22鉄釘などが出土しており、いずれも古代のものと考えられる。(笹栗)

31 落込み (図15・16、写真5-8) 2K-5j・2L-5a区に位置する。4区南東端から2区北東端の斜面から平坦部にかけては、0.3～1.0cmの細礫～中礫を比較的多く含みや粘性を帯びたシルト層や細礫～中礫や炭化物の細粒を含むシルト質砂が順次堆積し、斜面よりに浅い溝状の窪みが形成される。この堆積は、この部分が、5区の中央部北西から4区北東端を通過して2区南西方向へ抜ける谷地形の西側縁辺部に当たっていることによるもので、31落込みは、谷が埋没する途中の形状と言える。また、18浸食痕は、谷地形の中を通過している。29溝と重複する南半部での埋土は、粗砂～細礫を主とするシルト質砂層で、埋土中には、炭化物の細粒や3.0cmの中礫が含まれる。2区北東端の地山面直上か

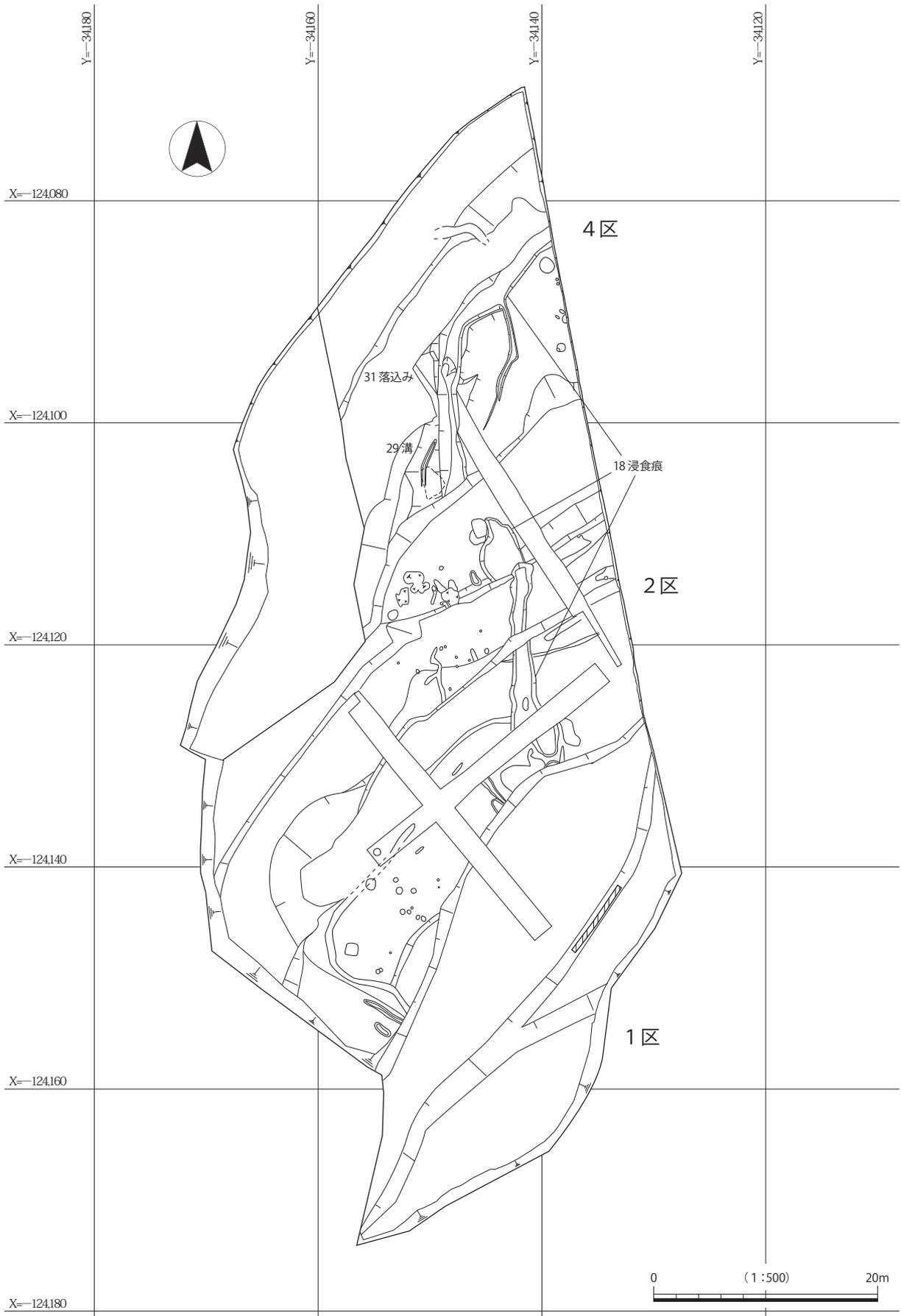


図14 成合地獄谷遺跡 1区・2区・4区 第3面 全体平面図

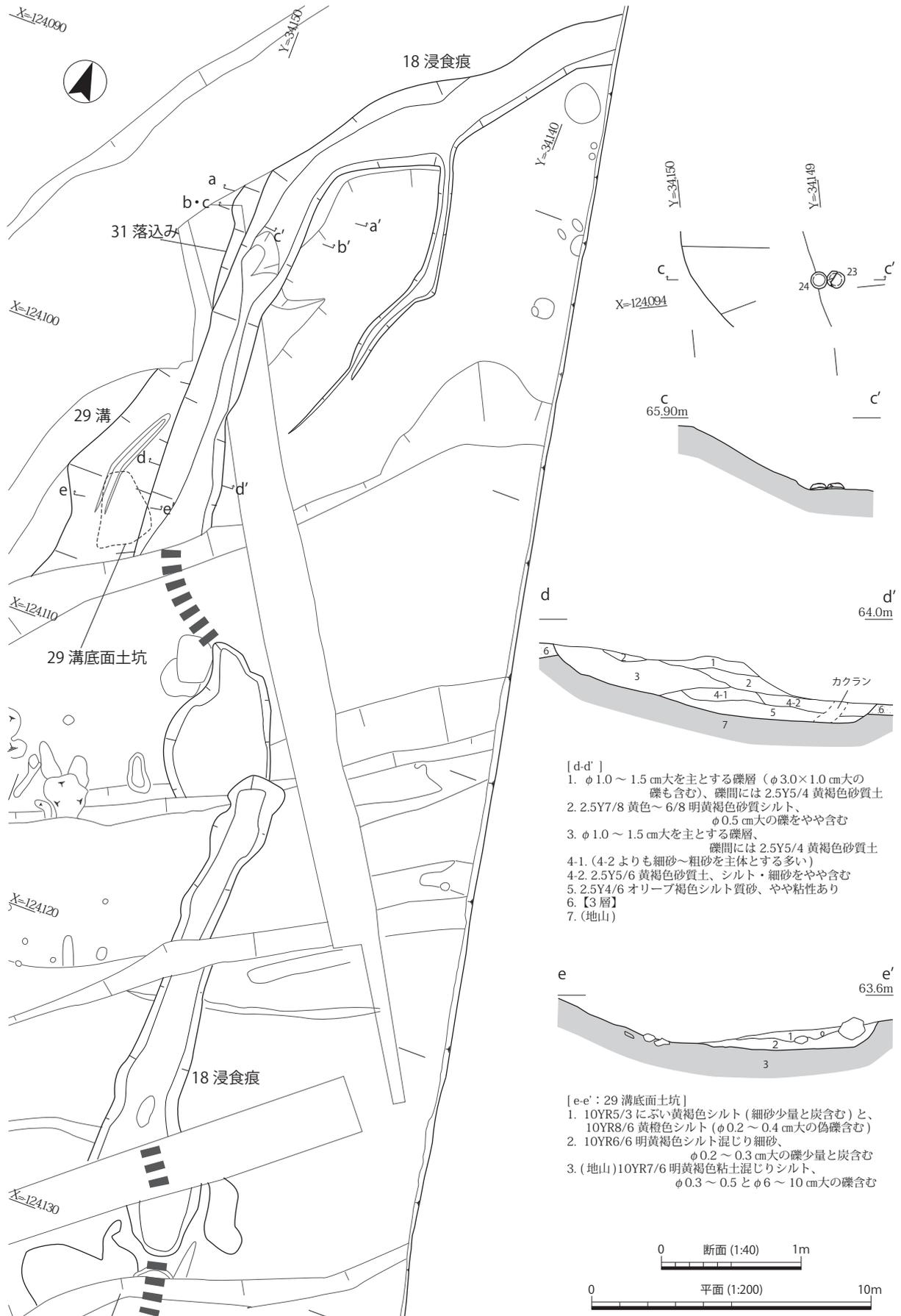


図15 18 浸食痕・29 溝・31 落込み 平面図・断面図

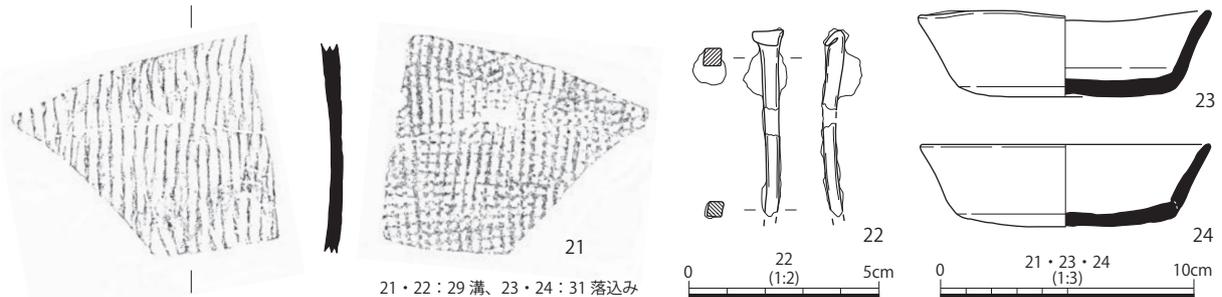
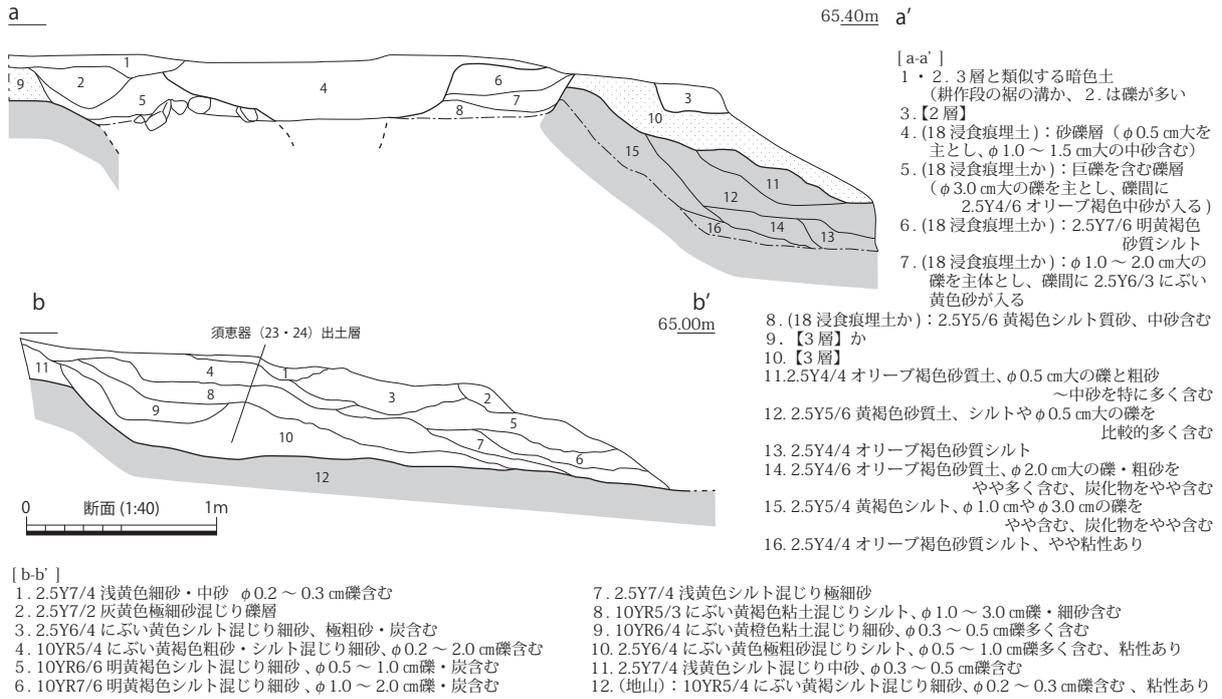


図16 18 浸食痕・31 落込み・断面図、29 溝・31 落込み 出土遺物

らは完形の須恵器杯身2点が伏せた状態で並んで出土した。(金光)

底面付近から並んで出土した23・24はいずれも須恵器杯Aである。このうち23については焼け歪みが著しく、24は底部に溶着した剥離痕がみられる。8世紀後半～9世紀初頭に位置づけられ、成合西王寺山窯とは時期的にも近く、胎土や焼成も類似するが、西王寺山窯跡の製品とはわずかながら調整等の雰囲気異なると思われ、周辺に未知の窯跡が存在する可能性を示唆する。(笹栗)

5. 第4面

2区北東の丘陵側は、部分的に棚田造成の際の段差が残る。全体に南東方向に緩やかに傾斜する地形で、2区東端と5区中央部には斜面を浸食する谷地形が見られ、中央部分はこの谷地形の中を流れる浸食痕跡によって遺構面が失われている。2区西半は、第3面と同様に南東側へ傾斜するすり鉢状の地形をなす。また4区は、棚田造成の際の幅の狭い平坦面が残る個所もあるが、全体に、調査着手前よりもさらに急な斜面地形となる。

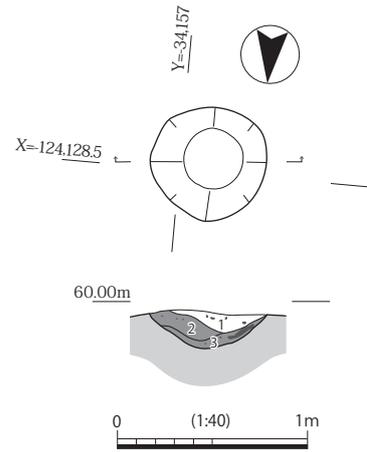
遺構は、2区を中心としてほぼ全域で検出されたが、特に、2区南西部に集中する傾向が窺えた。古墳時代中期の121土坑のほか、横穴式石室を埋葬施設とする古墳や堅穴式小石室(第5節)、墓と考えられる平面隅丸長方形や平面方形の土坑やピット、柱列などの遺構が多数検出され、墓からは八花鏡や



图17 成合地獄谷遺跡 2区・4区 第4面 全体平面図

銅銭、石製腰帯具などといった貴重な遺物が出土している。

30 土坑 (図 18、写真 10-1・2) 2L-6e 区に位置する。第3面検出の際には、炭化物や焼土の細粒が広範囲に広がっていた。径 0.6 m、深さ 0.2 m、断面形状が楕形となる土坑である。埋土は、2層に分けられ、2層中には炭を多く含む。火を受けて赤変・硬化した箇所は見られなかった。



1. 2.5Y6/4にふい黄細色砂混じりシルト、
φ 1.0~2.0cmの炭・ブロック混じる
2. N2/0黒色炭・シルト含む、2.5Y8/4淡黄色シルト、φ 0.3~0.4cmのブロック混じる
3. 2.5Y7/3浅黄色細砂~中砂混じりシルト、
やや粘性あり、φ 0.3~0.4cmの礫含む、
N2/0黒色炭・ブロック混じる

図 18 30 土坑 平面図・断面図

33 土坑 (図 19、写真 7) 2L-6b 区に位置する。長軸 1.0 m、短軸 0.8 m、深さ 0.26 m の土坑で、土師器甕 2 個体を蔵骨器に転用した火葬墓である。壁はほぼ直に立ち上がるが、底面との境は不明瞭である。埋土は、0.3~1.0cm の細礫~中礫や炭化物の細粒を含むシルト質砂で、3層に大別される。火を受けて赤変・硬化した箇所は見られなかった。底面中央部分を 0.05 m ほど一段深く掘り下げた所に炭化物粒を多く含む砂質土を敷いて、その上に、土師器丸底甕 (26) と土師器中胴甕 (27) の口縁部を下にして被せた蔵骨器を据えている。26 甕の内部は、極細片となった焼骨片を含む多量の炭と砂質シルトで埋まっており、土師器皿 (25) や拳大の礫が入れられていた。また、サンプリングした炭化物を洗浄したところ、銅銭 (28・29) の細片が 2 点確認された。

(金光)

蔵骨器として用いられた甕のうち、内側の 26 甕は球胴形で口縁部がやや開き、外側の 27 甕は中胴形で口縁部が強く外反する。いずれも口縁端部がわずかに内側に巻き込み、調整は外面ハケ、内面ユビナデ・ユビオサエである。内側の 26 甕の中から出土した 25 土師器は杯もしくは皿で、内外面ナデ調整である。28 銅銭については径 2.5cm に復元され、「開」と「功」の一部が確認できることから神功開宝とみなすことができる。29 は 2 枚の銅銭が貼り付いたもので、そのうちの 1 枚は外縁部が残り、径は 28 と近いと思われる。いずれも遺存状態が悪く、28 に関してはやや反り曲がっており、被熱したものとみられる。

神功開宝については 765 年が初鑄であり、26・27 土師器甕については時期を限定することが難しいが、8 世紀後半~9 世紀の幅の中で捉えることができるだろう。ただし 25 土師器皿は、調整や器形から平安京 II 期中、9 世紀中頃から後半に位置づけられるもので、銅銭とは時期的にやや齟齬がみられる。

(笹栗)

35 土坑 (図 20、写真 10-3・4) 2L-7d 区に位置する。幅 0.15~0.2 m、長さ 2.24 m の溝と重複し、溝より新しい。一辺 0.8 m、深さ 0.6 m の方形の土坑で、墓の可能性もある。底面は平坦で、壁は直に立上る。埋土は 4 層に分けられ、0.3cm の細礫や粗砂および炭化物の細粒を含む。火を受けて赤変・硬化した痕跡は見られなかった。

(金光)

埋土からは 30 須恵器杯 B が出土している。高台が底部外端に取りつき、9 世紀前半を中心とした時期に位置づけられる。また、焼け歪みが著しく成合地区内の窯跡で生産された可能性がある。

(笹栗)

36・37 土坑 (図 20、写真 10-5~8) 2L-7e 区に位置する。長辺側で重複する。36 土坑の方が新しい。いずれの土坑も火を受けて赤変・硬化した痕跡は見られなかった。また、長軸は斜面に沿う方向に置く。

36 土坑は、長さ 1.8 m、幅 0.8 m、深さ 0.2~0.3 m、平面隅丸長方形の土坑で、墓と考えられる。

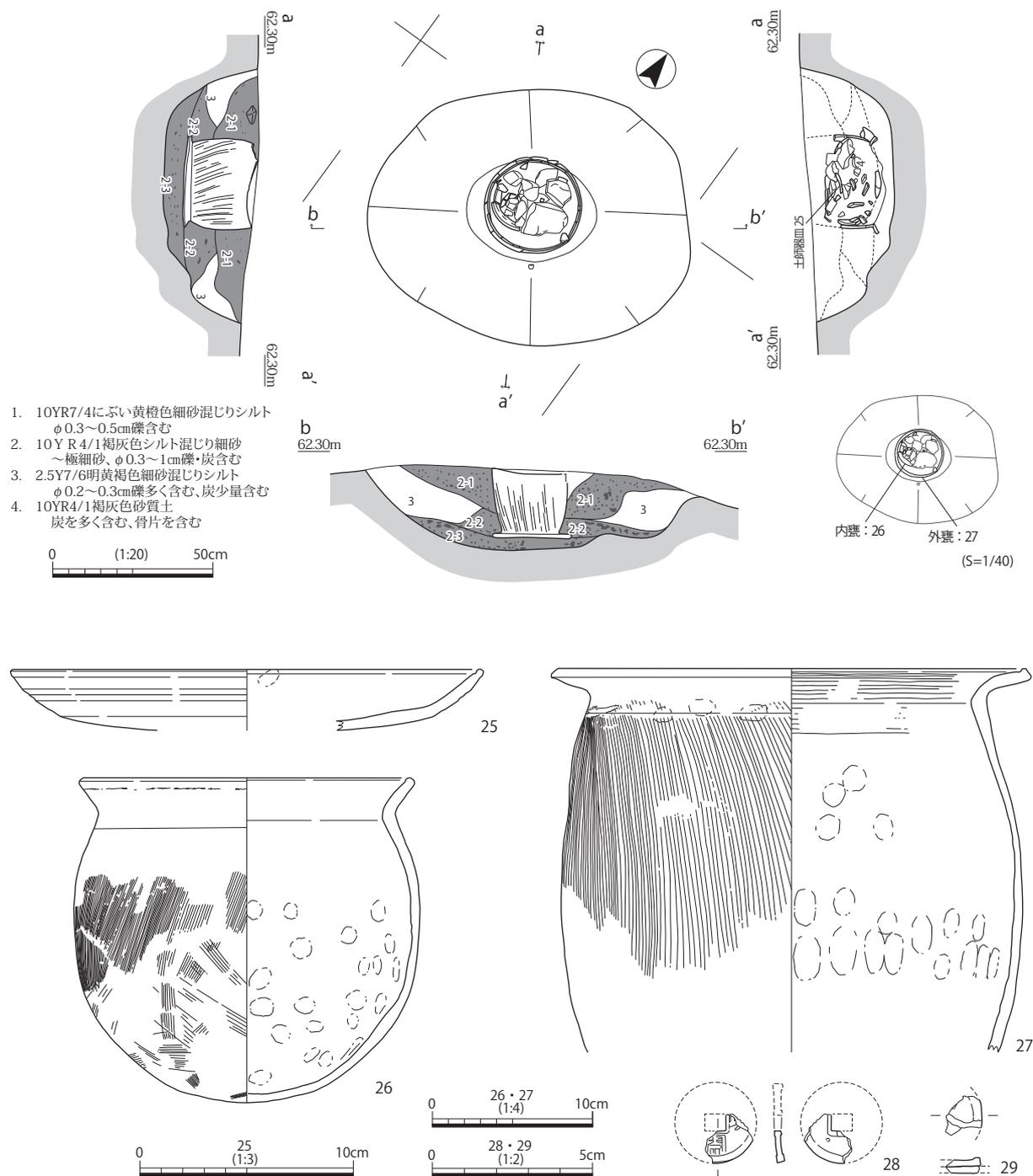
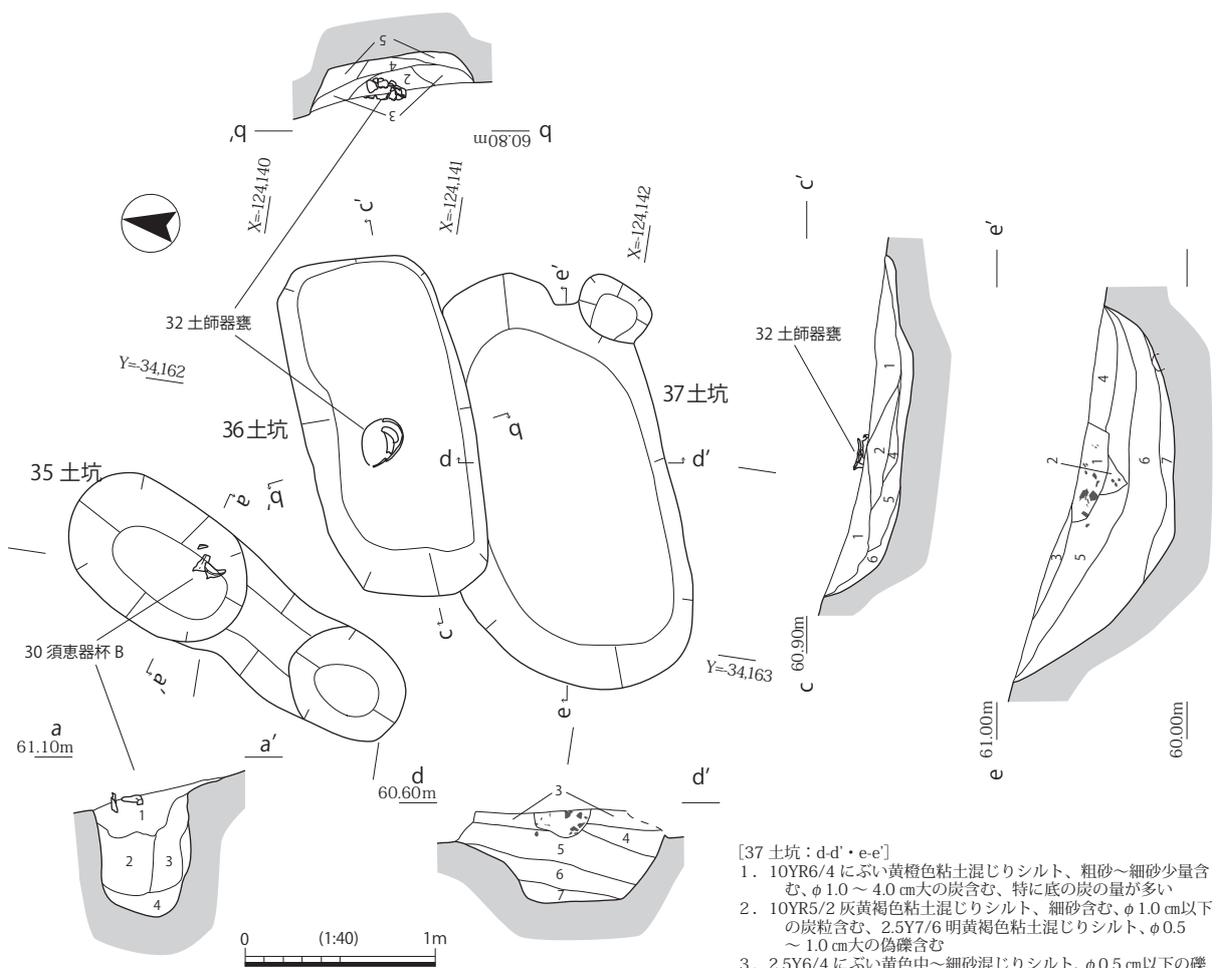


図19 33土坑平面図・断面図・出土遺物

底面は平坦で、壁はほぼ直に立上る。埋土は2層に大別され、0.1～1.0cm大の礫や炭化物が含まれる。土坑のほぼ中央部埋土上層から、完形に復元できる土師器甕が出土した。37土坑は、長さ2.3m、幅0.8～1.0m、深さ0.35～0.5m、平面隅丸長方形の土坑で、これについても墓と考えられる。埋土は、36土坑と似ており、中～細砂や0.5cm以下の礫や炭化物の細粒を含むシルト層で3層に大別される。3層下部には炭化物が多く含まれる。壁は、底面との境が不明瞭で緩やかに立ち上がる。 (金光)

36土坑埋土上面から出土した完形に復元できる32甕は、胴部がやや下膨れする短胴の形状で、口径18.4cm、器高21.4cmをはかる。外面ハケ、内面ケズリ調整頸部から口縁部にかかえて緩く外反し、口縁部は端面をもつ。この他に混入と考えられる31弥生土器底部が出土している。37土坑埋土中からは



[35土坑：a-a']

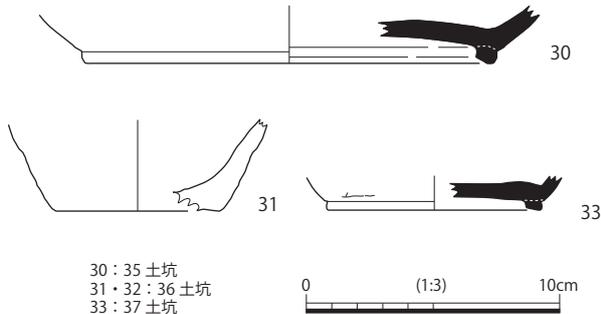
1. 10YR5/2 灰黄褐色粗砂・中砂混じりシルト、 ϕ 0.2~0.3cmの礫含む
2. 10YR7/4にぶい黄褐色粘土混じりシルト、細砂含む、10YR5/2 灰黄褐色中砂混じりシルト、 ϕ 1.0~2.0cmの偽礫多く含む、炭含む
3. 10YR7/4にぶい黄褐色粘土混じりシルト、細砂含む、10YR5/2 灰黄褐色中砂混じりシルト、 ϕ 1.0~2.0cmの偽礫少量含む、炭含む
4. 10YR6/6 明黄褐色粘土混じりシルト、 ϕ 0.2~0.3cmの礫含む

[36土坑：b-b'・c-c']

1. 2.5Y7/6 明黄褐色シルト混じり細砂、 ϕ 0.5~1.0cmの礫含む
2. 10YR7/6 明黄褐色細砂混じりシルト
3. 2.5Y7/4 浅黄色細中砂混じりシルト、 ϕ 0.1~0.2cmの礫含む、ややかたくしめる
4. 10YR7/4 にぶい黄褐色粘土混じりシルト、粗砂含む
5. 10YR7/3 にぶい黄褐色粘土混じりシルト、粗砂、 ϕ 0.3~0.5cmの礫含む、ややかたくしめる
6. 10YR7/4 にぶい黄褐色粘土混じりシルト、 ϕ 0.1~0.2cmの礫含む、かたくしめる

[37土坑：d-d'・e-e']

1. 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土混じりシルト、粗砂~細砂少量含む、 ϕ 1.0~4.0cm大の炭含む、特に底の炭の量が多い
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘土混じりシルト、細砂含む、 ϕ 1.0cm以下の炭粒含む、2.5Y7/6 明黄褐色粘土混じりシルト、 ϕ 0.5~1.0cm大の偽礫含む
3. 2.5Y6/4 にぶい黄色中~細砂混じりシルト、 ϕ 0.5cm以下の礫含む
4. 2.5Y7/4 浅黄色粘土混じりシルト、細砂含む、 ϕ 0.5cm以下の礫含む、炭の粒ごくわずかに含む
5. 2.5Y7/6 明黄褐色粘土混じりシルト、 ϕ 0.5~1.0cm大の礫多く含む
6. 2.5Y7/4 浅黄色粘土混じりシルト、極粗砂~細砂含む、粘性やや強い
7. 2.5Y6/6 明黄褐色粘土混じりシルト、粗砂~細砂含む、粘性やや強い



30：35土坑
31・32：36土坑
33：37土坑

図20 35・36・37土坑平面図・断面図・出土遺物

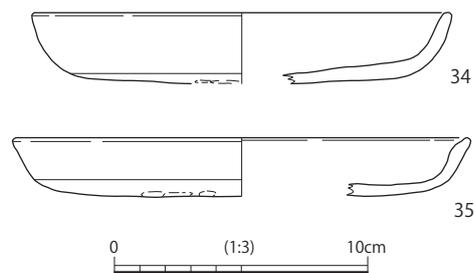


図 21 65 土坑 出土遺物

33 須恵器杯 B が出土している。高台は底部外端付近に取りつき、8 世紀末～9 世紀初頭頃に位置づけられる。(笹栗)

65 土坑 2 L - 6 d 区に位置する。1.3 m × 0.5 m の範囲に、炭化物や焼土の細粒と 3.0 ~ 5.0cm の細礫～中礫を含む灰黄褐色シルト質砂の堆積が認められた。底面と壁面との境が不明瞭で、深さ 0.20 m 前後の浅い皿状の窪地に堆積した層の可能性が高く、ここでは土坑としているが明確な遺構とは考えがたい。(金光)

ここから出土した土師器は杯 A (34) と皿 (35) がある。(図 21)。いずれも磨滅がみられるが、調整は外面ヨコナデ、底部ユビナデ・ユビオサエで、平城Ⅳ～Ⅴ、8 世紀後半頃に位置づけられる。(笹栗)

69 土坑(図 22・23 写真 8・9) 2 L - 6 C 区、4 区斜面直下の平坦部に位置する。1.24 m × 1.12 m、深さ 0.45 m の方形の土坑である。底面は平坦で、壁は直に立上る。底面や壁には火を受けて赤変・硬化した痕跡はみられなかった。埋土は、3 層に大別され、1 層は極細片となった焼骨を含む炭化物層で、八花鏡や鉄釘などが出土しており、埋土の状況や出土遺物の様相から火葬墓と考えることができる。

丘陵斜面および棚田直下にあたるこの付近は、第 1 層を除去すると、礫を含み固く締まった黄褐色の地山面となり、部分的に細礫～中礫や炭化物の細粒を含む黒褐色シルト質砂の第 3 層が堆積する。また、第 3 層に混じって、0.4 ~ 0.6 m 大の巨石や拳大の礫が不規則に集積する箇所が見られた。この時点では、巨石や礫に伴う遺構のプランは検出されなかったため、巨石や礫を選別しながら第 3 層を除去し、地山面を検出した。特に巨石が集中する箇所で、炭化物にともなって鉄釘が出土したことから改めて精査をおこなったところ、巨石や炭化物は、1.0 m × 0.75 m の隅丸長方形の範囲に集中することが確認された。その後、釘や炭化物を取り上げた結果、底面から 10cm ほど浮いた南西側の壁際から、鏡背面を壁側に向けてやや斜めに立て掛けられたような状態ではぼ完形の八花鏡が出土し、北東側の壁際からは、幅 0.4 × 0.5 m、厚さ 0.14 m の扁平な石が斜めの状態で出土した。また、鏡を取り上げた後土坑内を精査した結果、当初壁として認識した層は、南西と南東部分は 2.0 ~ 3.0cm の中礫を含み比較的固くしまった砂質土層であることが確認できた。

69 土坑関連周辺遺構 69 土坑周辺からは、69 土坑と重複する 371 土坑と 372 土坑、73 土坑 (361・373 土坑) が検出され、相互に関連する遺構と推測される。切り合い関係から、69 土坑は 371 土坑や 372 土坑よりは新しく、73 土坑との新旧関係は不明である

このうち 371 土坑は、69 土坑の北側に位置し、69 土坑・372 土坑と重複する。69 土坑より古く、372 土坑との新旧関係は確認できなかった。0.55 m × 0.90 m 深さ 0.4 m の方形の土坑である。69 土坑と同様、底面は平坦で、壁はほぼ直に立上る。埋土は 2 層に大別される。炭化物細粒はほとんど含まれない。372 土坑は 69 土坑の 4 東側で重複する。1.45 m × 1.0 m 深さ 0.1 ~ 0.2 m の土坑である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立上る。埋土は 1 層で、0.3 ~ 0.5cm の中礫や砂質シルトのブロックを含む。

69 土坑の南側に位置し、上面検出段階で大きく 73 土坑とした土坑については、最終的な完掘段階では北側の 373 土坑と南側の 361 土坑にわけられる。ふたつの遺構は検出面では、73 土坑と一括したように重複関係が不明瞭で、結果的に新旧関係ははっきりしなかった。361 土坑が長さ 2.6 m、幅 1.1 m、深さ 0.4 m の平面長方形の土坑である。壁は緩やかに立ち上がり東西方向断面は U 字形をなす。埋土は、

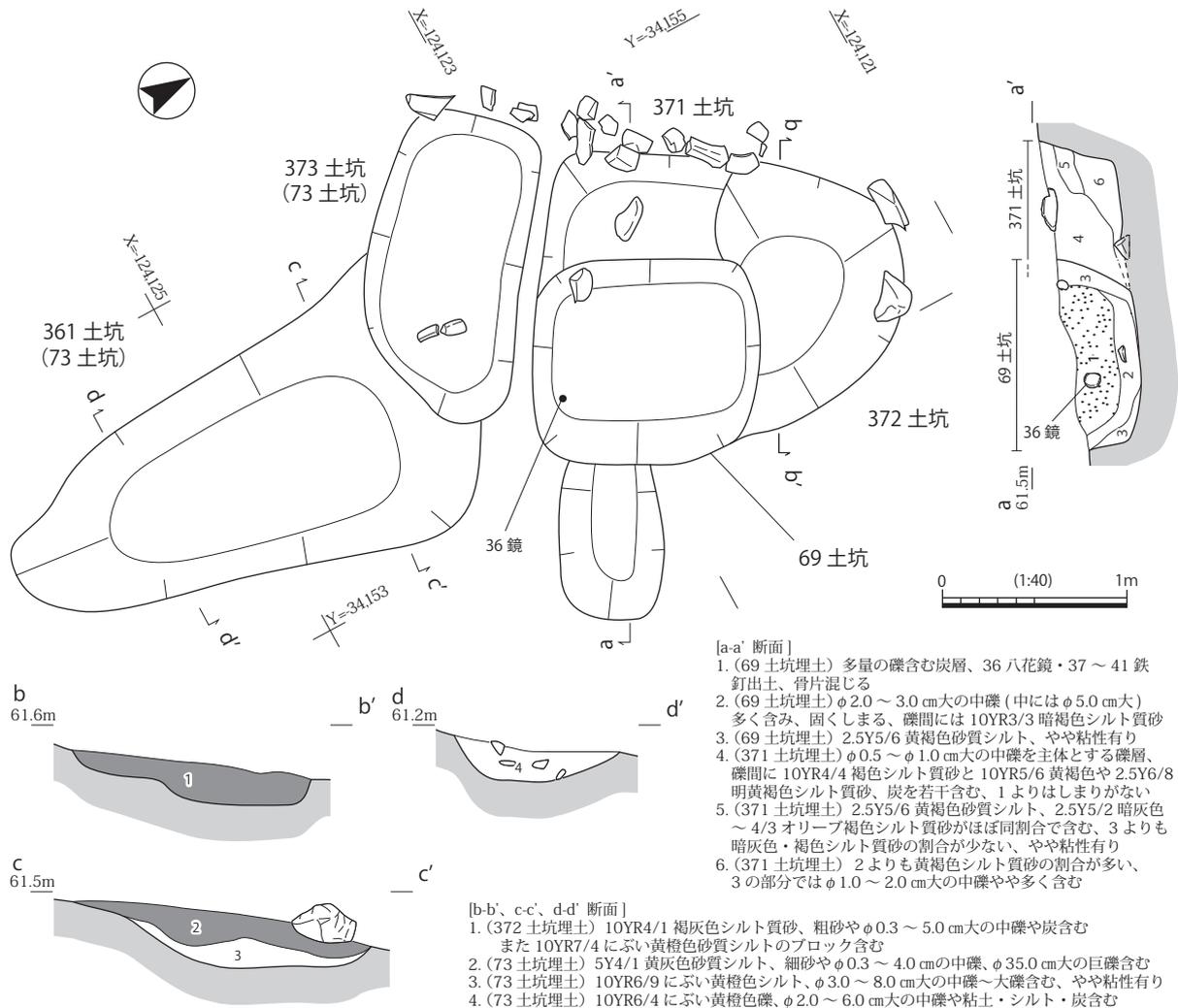


図 22 69 土坑および周辺遺構 平面図・断面図

0.3～6.0cmの細礫～中礫を多く含むシルト質砂で、2層に分けられ、下層には炭化物の細粒が含まれる。373 土坑は、長辺 1.55 m、幅 0.85 mの平面長方形の土坑で、埋土は 361 土坑の埋土と酷似しており、0.3～4.0cmの中礫を多く含む黄灰色砂質シルト層である。両土坑の埋土中からは、須恵器の 42 杯蓋や 43・44 杯身が土坑の底部付近より出土し、他に 45 長頸壺の肩部の破片が出土している。(金光)

69 土坑出土遺物 69 土坑埋土内の石組中の埋土からは鉄釘が 5 点出土し、石組の下から八花鏡が 1 点出土している。また関連する周辺の土坑からは須恵器が数点出土している (図 24・25)。

出土した 36 鏡はいわゆる唐式鏡の一群とされる双鳥文系の八花鏡で、面径は 9.5cm をはかる。外郭の花弁の切込みが浅く外縁内側は円形で、外縁の断面は台形である。鏡の厚みは 0.2cm 前後、外縁の厚みは 0.4cm 程度である。文様については、内区の主文様については不鮮明で、界圏・外区はない。尾尻が長い鳳凰と考えられる 2 対の鳥が鈕を挟んで向かい合い、鈕の上下の文様ははっきりしないが、それぞれに獣が配置されていると考えられる。鏡式名は中川あやの分類の対鳥 b 双獣鏡²⁾、杉山洋の分類の狻猊双鸞鏡にあたり³⁾、宮崎県神門神社所蔵鏡や三重県八代神社所蔵鏡、岡山県大飛鳥遺跡出土鏡、栃木県日光男体山山頂遺跡出土鏡など、これまでに 10 例ほどが知られている。鈕については、この鏡式では鈕孔は上下方向に開くものが多いが、本鏡は鈕の左右に孔が開くのが特徴である。

この鏡式については、中川あやの唐鏡編年のⅢ期、7 世紀第 3 四半期を中心とした時期に唐では製作・

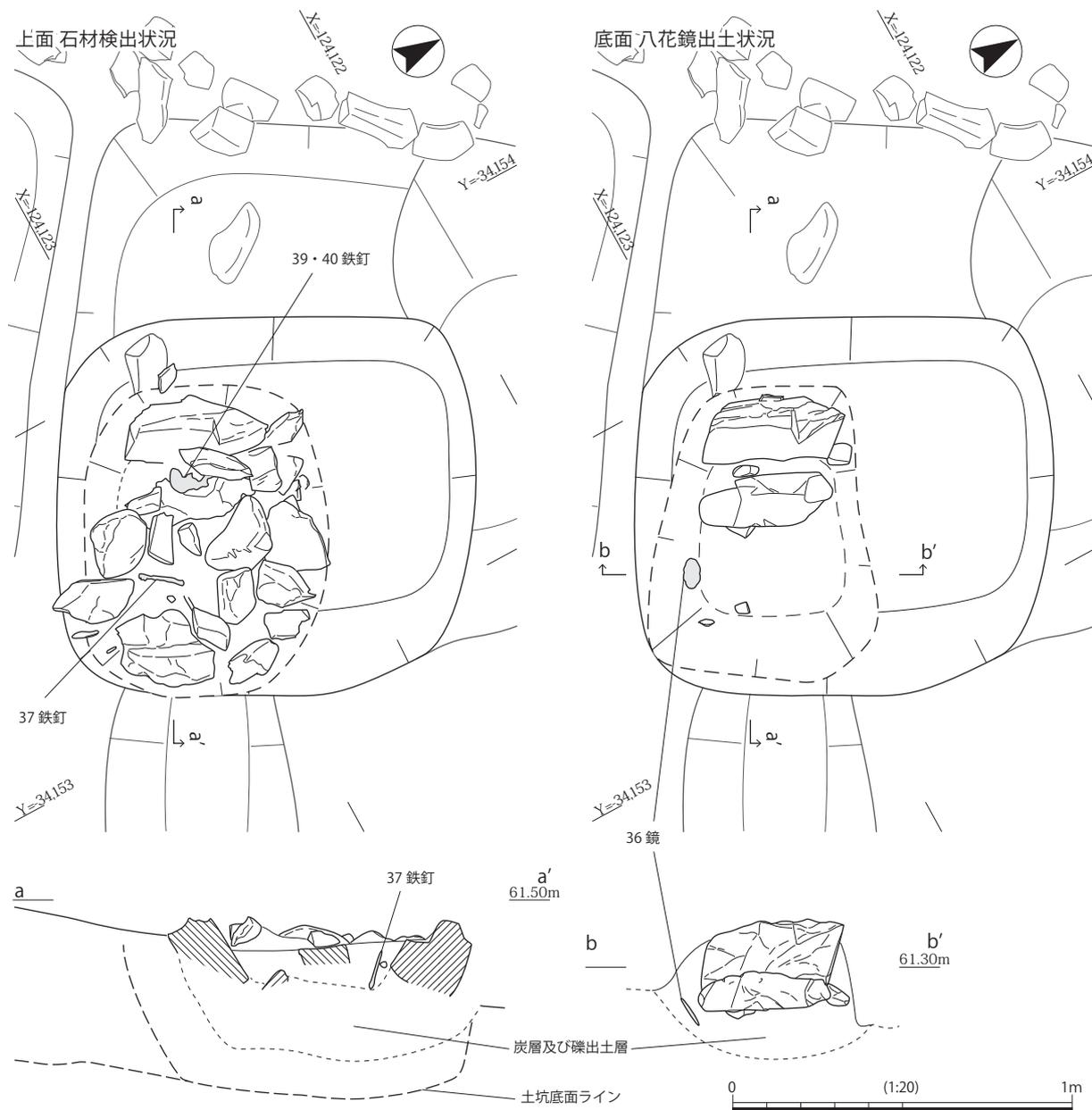


図 23 69 土坑 上面石材検出状況・八花鏡出土状況

使用がなされたと考えられている。蛍光X線による成分分析の成果から、本鏡は銅・鉛の合金でヒ素が混じるといった特徴があり（第6章参照）、断定はできないが、これまでの研究動向をふまえると唐鏡と考えられる化学組成とは異なっており、⁴⁾国産品の可能性が高いと思われる。国内でのこの鏡式の生産と使用がいつごろなされたのかははっきりしないが、日本独自の鏡式の八稜鏡が盛行する時期以前のものと推測され、この鏡の製作・埋納の時期も8世紀後半～9世紀前半の間に収まるものと思われる。

なお、出土時に鏡背面には鈕から左斜め下方にむかっのびる有機質の繊維状の痕跡がみられたため、紐の痕跡である可能性が想定されたが、この有機質を実体顕微鏡で観察したところ、これは炭化物のまとまりであり、結果的には紐の痕跡ではなかったことが判明している。⁵⁾この他に鏡の表面には細かな砂粒や礫が付着していることが確認できる。

石組の内側から出土した鉄釘は、併せて5点である。全形を復元できるものはないが、頭部が残る個体が3点（37～39）と、先端部が残る個体が2点（40・41）あり、3点以上がこの69土坑に伴って

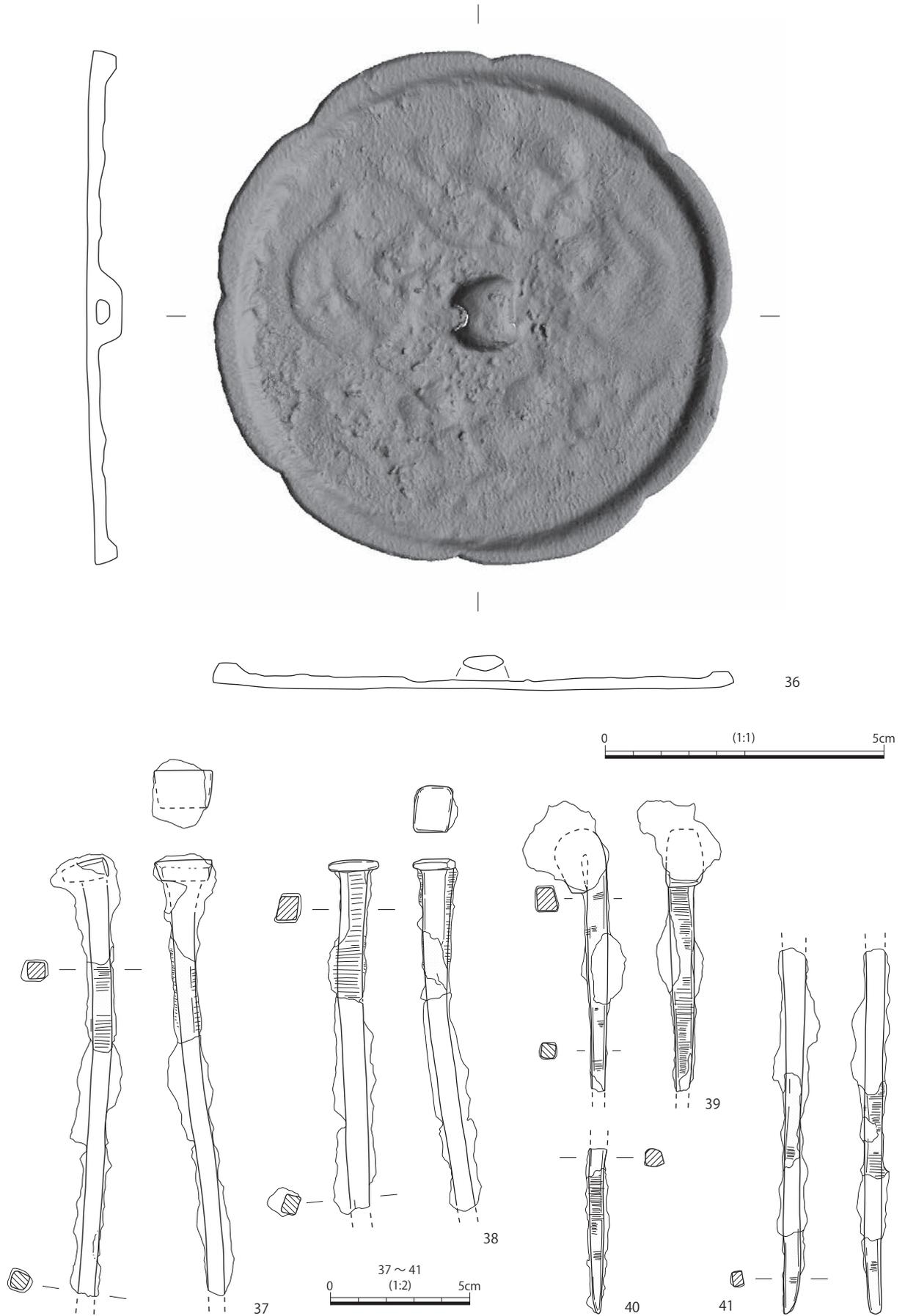


図24 69土坑出土遺物

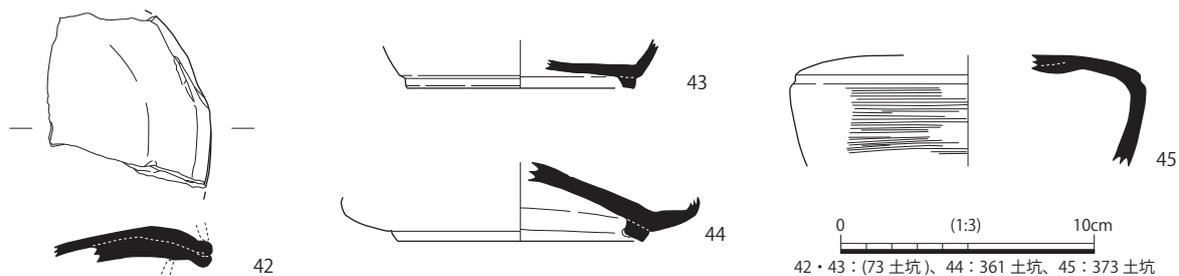


図25 69土坑周辺遺構出土遺物

いたことになる。いずれも長さ10cmを超える大型品で、断面は台形または長方形で厚みは0.5～0.8cmをはかる。頭部の形状は方頭で鍛接された2点(37・38)と、180°折り曲げられたものが1点(39)ある。正面・背面・側面には部分的に木質痕跡が残り、いずれも横方向の木目が観察される。木質が残ることから、火にかけられた可能性は低く、鉄釘の出土範囲が狭いことから木櫃が伴っていた可能性が推測される。

この他に69土坑内からは須恵器や土師器の破片がわずかに出土しているが、図化できるものはない。周辺の土坑からも同様に須恵器や土師器片が出土しており、73土坑および361土坑からはそれぞれ須恵器の杯B(43・44)が出土している(図25)。これらは8世紀後半以降に位置づけられ、遺構の時期を推測する手掛かりになる。また73土坑からは熔着した須恵器の42杯蓋や須恵器の窯体片が出土し、44杯蓋は著しく窯変している。成合西王子山窯跡の製品であるかは断定できないが、窯業との関わりが窺われる。なお、373土坑から出土した須恵器45長頸壺は7世紀代のもので、時期的には周辺の古墳群に帰属するものだろう。(笹栗)

116土坑(図26 写真11-5) 2L-6C区、313土坑の南約0.9mの地点に位置する。318土坑と重複し、318土坑より新しい。一辺0.65～0.7m、深さ0.15mの土坑である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立上る。底面や壁には熱を受けて赤変・硬化した痕跡は見られなかった。埋土は、0.3cm前後の明黄褐色砂質シルトのブロックや1.0～3.0cmの中礫と炭化物細粒を多く含み、2層に分けられる。1層中からは、土師器や須恵器、溶解した不明銅製品や鉄釘、白色や黒色の小石などが出土している。このうち小石の多くはサンプリング土を洗浄して確認したものが多く、この他に炭化したノギの残る麦身や極めて細かい骨片などを確認している。

なお318土坑は、116土坑と重複する遺構で、さらに東端で319土坑と重複し、319土坑より古い。長さ0.5m、幅0.65m、深さ0.05mの浅い土坑である。埋土中には、礫や炭化物細粒を含む。319土坑は0.8m×0.96m、深さ0.5mの土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中には、炭化物の細粒を含み、0.5～1.0cmの細礫を多く含む。(金光)

116土坑出土遺物 埋土中から出土した遺物は、土師器や須恵器の破片のほか、石製品や多数の鉄釘をはじめとした鉄製品や溶解した不明銅製品などがある(図26・27)。

土器類のうち土師器は46杯と47皿があり、46が口径16.0cm、器高3.4cm、47が口径20.2cm、器高20.2cmをはかる。いずれも磨滅が著しいが、内外面ナデ調整で、47の底部はケズリである。底部から体部にむかって丸みをもって立ち上がり、端部は外反して内側に丸くおさまる。平城Ⅳ、8世紀後半を中心とした時期に位置づけられる。この他に48須恵器壺Aは、直立する口縁部、肩部、高台の小破片が確認できる。また100須恵器杯蓋については、313土坑の出土遺物であるが、破片の一部がこの116土坑からも出土している。

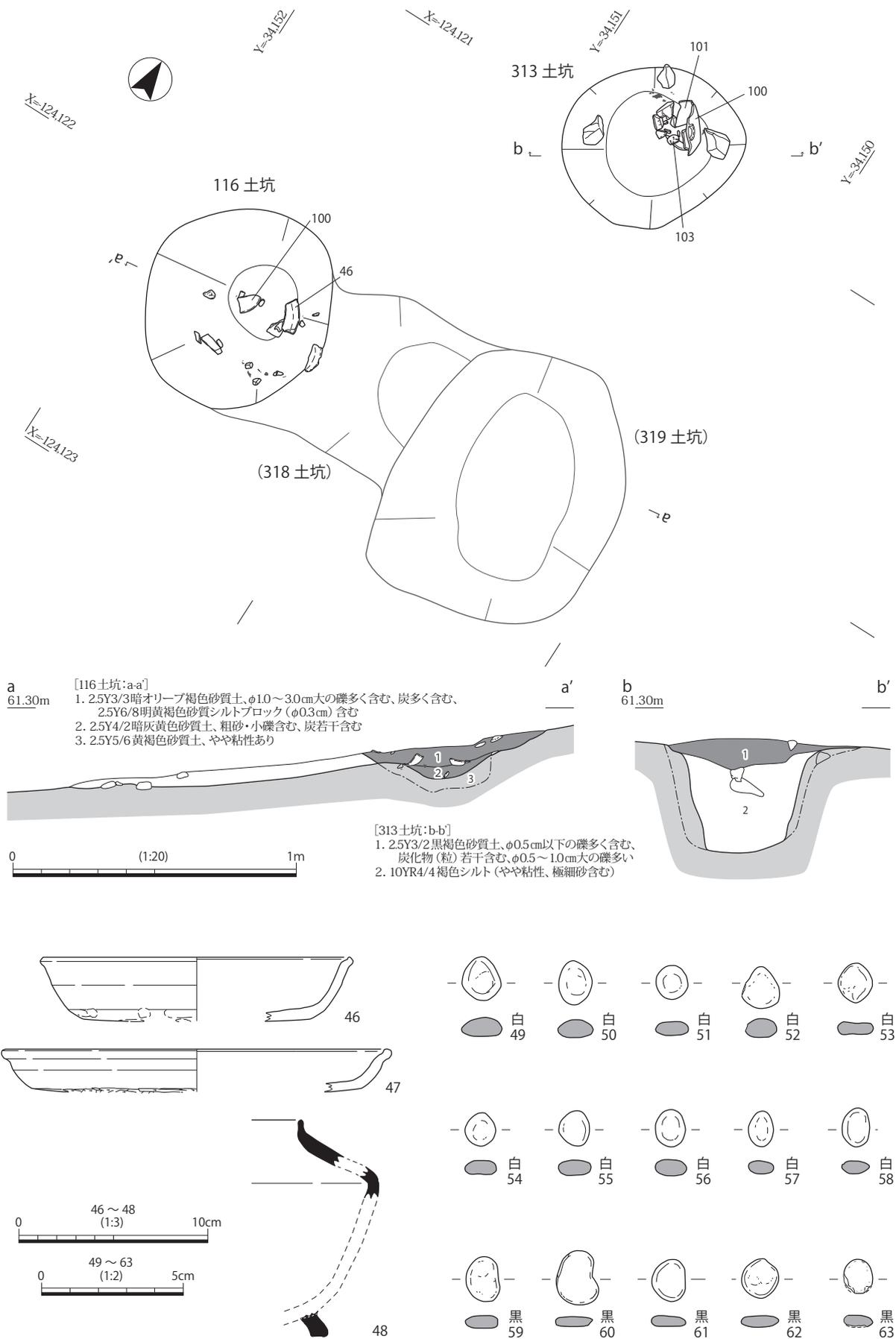


図26 116・313土坑平面図・断面図、116土坑出土遺物

49～63については、色調と形状からいわゆる基石状石製品と考えられる。白石（49～58）10点、黒石が5点（59～63）の計15点が出土しており、白石は全て石英・水晶製で、透明感があるものは少ないが光沢があるものがみられる。黒石のうち59～61は滑石類、62・63は泥岩質と考えられ、前者が黒色であるのに対し後者は茶～褐色の色調である。いずれも長さ1.5cm、幅1.0cm、厚さ0.5cm、重さ1.0g前後の法量で、全面がしっかり研磨されているものが多いが、59～61黒石に関してはいびつなぞら豆形を呈するものがあり、やや扁平である。また泥岩質の62・63については剥離がみられ、赤味がかっていることから被熱した可能性が高い。

金属製品については、銅および鉄製品が溶着した（64）のほかに、棒状の鉄製品（65～67）3点と鉄釘（68～99）32点が出土している。このうち64については、複数の銅製品と鉄製品が被熱して銅成分が溶解しており、原形をはっきりと留めるものがないが、a面で図化した銅製でカーブをもつ棒状パーツと、b面で図化した長い棒状パーツに、板状のパーツ4枚程度が溶解したもので、さらにc面で図化した円盤状の鉄製品2枚が溶着していると考えられる。このうちふたつの棒状の銅製品のうちカーブするパーツは銚具の外枠の金具、長い棒状のパーツは留金具の可能も考えられるが、棒状のパーツは留金具としてはやや長く、検討を要する。板状のパーツについては0.1cm以下の薄い銅板が複数重なり合って変形・溶着しているようで、本来の形状と正確な枚数ははっきりしない。これに径2～2.5cmの薄い板状の鉄製品が溶着しており、形状から銭の模造品の可能性も想定できるが、孔は確認されていない。なお、これについては69土坑出土36鏡と同様に蛍光X線分析による成分分析をおこなっており、銅を主成分とする銅・鉛の合金に若干のヒ素が混じることが判明している。

65～67鉄製品については、いずれも用途不明の製品である。65は棒状のパーツの片側に不正形の板が鍛接され、反対側は方形の板状のパーツは貫通して挟み込まれている。この幅は5.0cm程度であり、用途としては有機質の板か何かを挟んだ留金具の可能性が考えられる。66についても棒状のパーツに2枚の小さな板状のパーツがとりつく。67は頭部が円環状を呈し、鉄釘の可能性もある。

68～98は鉄釘と考えられ、99についてもその可能性が高い。ほぼ完存するものは5点（68～72）しかないが、頭部が残存する個体が15点（68～82）あり、少なくとも15点以上は存在したことがわかる。また先端部が残存する個体は12点（68～71・83～90）ある。完形品は長さ3.5～4.5cm、重さ2.0g前後の非常に小型の鉄釘である。打ち付けられたためか頭部がやや厚手で、そこから先端部に向かって徐々に細くなる。頭部よりやや下方で幅0.3cm前後、先端部付近の幅0.2cm前後となる。木棺の結合に用いた釘の可能性が高いと推測される。

この116土坑は、棺釘と考えられる小型の鉄釘が多く出土し、この他に出土した遺物の内容も墓に伴う副葬品として考えて差支えないと思われる。遺構自身は径0.7cm内外の円形の土坑であり、ここに直接木棺が収められたとは考え難いが、埋土には炭が充満し、骨片などもみられることから、蔵骨器を伴わない火葬墓か、火葬灰埋納遺構と考えることができる。骨片については、いずれも細片のため部位までわかるものはないが、遺存状態からかなりの高温で焼かれた可能性が高いことが判明している⁶⁾。付け加えると、64不明銅製品が溶解・溶着している点は、遺体が高温で焼成されたことを裏付けるものとなるだろう。

遺構の年代については、出土した土師器の年代観から大きくは8世紀後半ごろに位置づけられる。ただし、後述するように、近在する313土坑と出土遺物が接合することが判明しており、ふたつの遺構に関係性がみられるが、313土坑については出土遺物の様相から8世紀末まで年代が下る可能性がある。

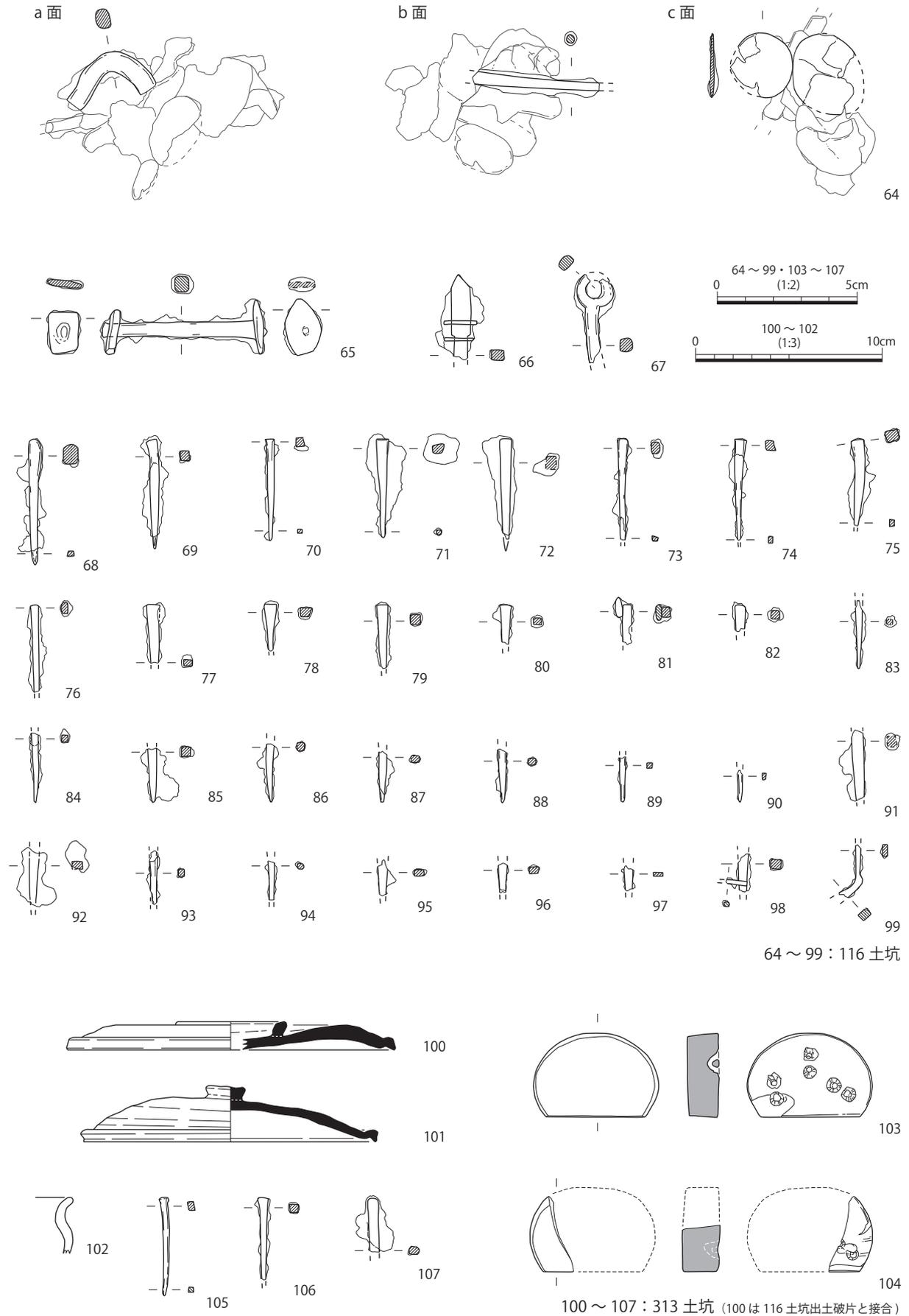


図27 116・313土坑出土遺物

そのため、8世紀後半から8世紀末の幅の中で、位置づけておくことが穏当である。(笹栗)

313 土坑(図 26、写真図版 11-3・4) 2L-6c区、69土坑の北東約2.5m、116土坑の北東約0.8mの地点に位置する、一辺0.5m、深さ0.4mの土坑である。底面は平坦で壁はほぼ直に立ち上がる。底面や壁面に火を受けて赤変・硬化した痕跡は見られなかった。埋土は、0.5～1.0cmの中礫や少量の炭化物の細粒を含み、2層に分けられる。土師器細片、焼き歪んだ須恵器杯蓋、石製丸軀、鉄製釘などが出土した。うち須恵器蓋の一つは116土坑出土のものと同接合した。埋土や出土遺物の組成から墓と考えられる。(金光)

313 土坑出土遺物 埋土中からは須恵器の杯蓋や土師器壺の細片、石製丸軀2点、鉄釘等が出土している(図 27)。土器類のうち100・101は須恵器杯B蓋、102は土師器の壺Bの細片である。杯蓋のうち100は環状つまみをもつ個体で、101は通有の杯蓋で内面がよく摩耗している。また101は色調が灰白色であるのに対し、101は暗い色調で、いずれも焼き歪みがみられるのが特徴である。また、前述したように100杯蓋については破片の大部分は313土坑からの出土であるが、一部の破片は116土坑から出土している。

石製の丸軀については、完形1点(103)と破片1点(104)が出土している。いずれも安山岩系の石材で、色調は灰～灰白色である。103については裏面の一部に剥離がみられるが、ほぼ完形品であり、長さ3.0cm、幅4.5cm、厚さ1.1cm、重さ30.1gをはかる。垂孔はなく裏面に潜り孔が3か所6孔みられ、外面にはわずかに光沢のある付着物がみられる。104については厚さが1.4cmで、103よりやや分厚いがほぼ同大のものと推測され、裏面には潜り孔も確認できる。剖面や裏面の剥離の痕跡から火を受けたと考えられ、103についても裏面に剥離があり赤味がかったことから、ともに火を受けた可能性が高い。またこの他に、116土坑と同様の小型の鉄釘(105～107)が、計3点出土している。このうち完形の105は長さ3.5cmをはかる。

出土遺物からみる遺構の帰属時期は、100杯蓋が116土坑の破片と同接合することから、116土坑と同時期の8世紀後半ごろと考えられ、出土した杯蓋に関しては時期的に大きな矛盾はない。石製の腰帯具については、8世紀後半～末ごろを境に銅から材質転換し、長岡京では石製のものが主流を占めることが明らかとなっている⁷⁾。石製丸軀の存在をふまえると、遺構の年代については8世紀末ごろを中心とした時期に位置づけておくことが穏当と思われる。(笹栗)

121 土坑(図 28、写真図版 11-1・2) 2L-6d区に位置し、一辺0.5m、深さ0.1mの浅い土坑である。埋土は、0.3～2.0cmの細礫～中礫を含む2.5Y7/6明黄褐色シルトの1層である。北側壁に接して土師器高杯と甕が出土した。今回の調査で最も古い遺構である。ほかにも同時期の遺構が存在すると思われるが遺物を伴うものがなく特定できない。(金光)

出土した土師器のうち108甕は、口縁部から頸部までの破片で、布留式甕の系統をひく。頸部がくの字に屈曲して口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。磨滅が著しく、内外面の調整は不明である。109高杯はほぼ全形を復元でき、器高11.6cmをはかる。杯部から口縁部に向かって大きく開き、口縁端部は丸くおさめる。脚部はなだらかに屈曲しながら開き端部には面をもつ。杯部・脚部の内外面ともにハケ・ナデ調整で仕上げる。いずれも古墳時代中期中頃～後半に帰属すると考えられ、この2点を除いてこの時期の遺物は確実なものはない。横穴式石室を伴う成合地獄谷古墳群の時期とも大きな隔たりがあり、遺構の性格等は不明である。(笹栗)

45 土坑(図 29) 2L-6d・7d区 36土坑の北約2.2m離れた地点に位置し、柱列1のピットと重

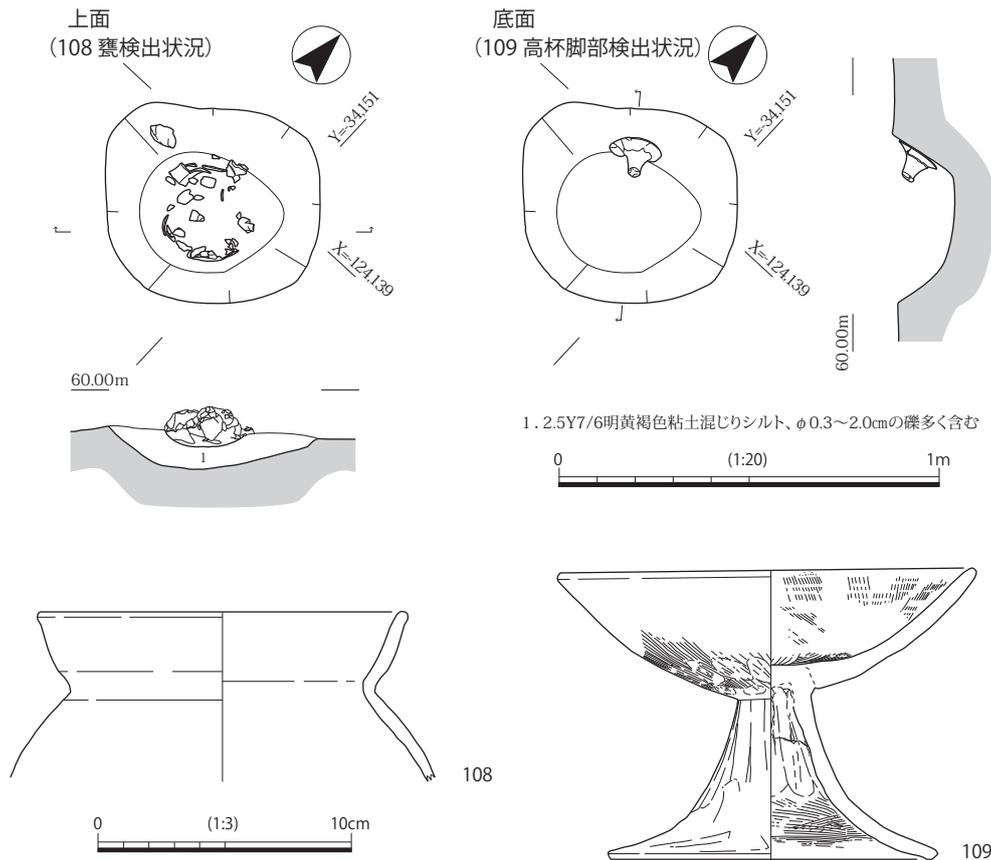


図 28 121 土坑 平面図・断面図・出土遺物

複する。長軸 1.9 m、幅 0.9 m、深さ 0.2 m、平面隅丸長方形の土坑である。底面や壁面には火を受けて赤変・硬化した痕跡は見られなかった。36 土坑・37 土坑・135 土坑と同様に、長軸は斜面に沿った方向に置く。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、2層に分かれ、明黄褐色シルトのブロックを含む。遺構の形状や配置から墓の可能性はある。

83 土坑 (図 29) 2L-6d 区に位置する。84 ピットと重複する。長軸 1.4 m、短軸 0.8 ~ 1.0 m、深さ 0.03 m の土坑である。底面はほぼ平坦で、壁は直に立ち上がる。埋土は 1 層で、0.5 ~ 2.0cm 大の礫を含む。

なお 84 ピットは 83 土坑と重複する遺構で、一辺 0.34 m × 0.5 m、深さ 0.34 m、平面不整形のピットである。埋土は 2 層に分かれ、0.5cm 大の明黄褐色のシルトのブロックや 0.2 m 大の巨礫を含む。

129 土坑 (図 29、写真図版 12-1) 2L-7e 区に位置する。長さ 1.1 m、幅 0.65 m、深さ 0.25 m の土坑である。36 土坑や 37 土坑と同様に、長軸を斜面と直交する方向に置いており、墓の可能性はある。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。埋土は、2 層に大別される。炭化物細粒や焼土粒は認められない。

130 土坑 (図 29、写真図版 12-2・3) 2L-6e 区 129 土坑のすぐ南に位置し、129 土坑と並行する。長さ 1.09 m、幅 0.7 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m の土坑である。底面はほぼ平坦で、壁は直に立ち上がる。埋土は、2 層に大別され、0.3 ~ 0.5cm の細礫や炭化物の細粒を含む。129 土坑と同様に、墓の可能性はある。

135 土坑 (図 30) 2L-6d・7d 区、45 土坑の北東約 2.3 m の地点に位置する。長さ 1.8 m、幅 0.78 m、深さ 0.18 m の土坑である。長軸方向は斜面に直交する方向に置く。底面はほぼ平坦で、壁は

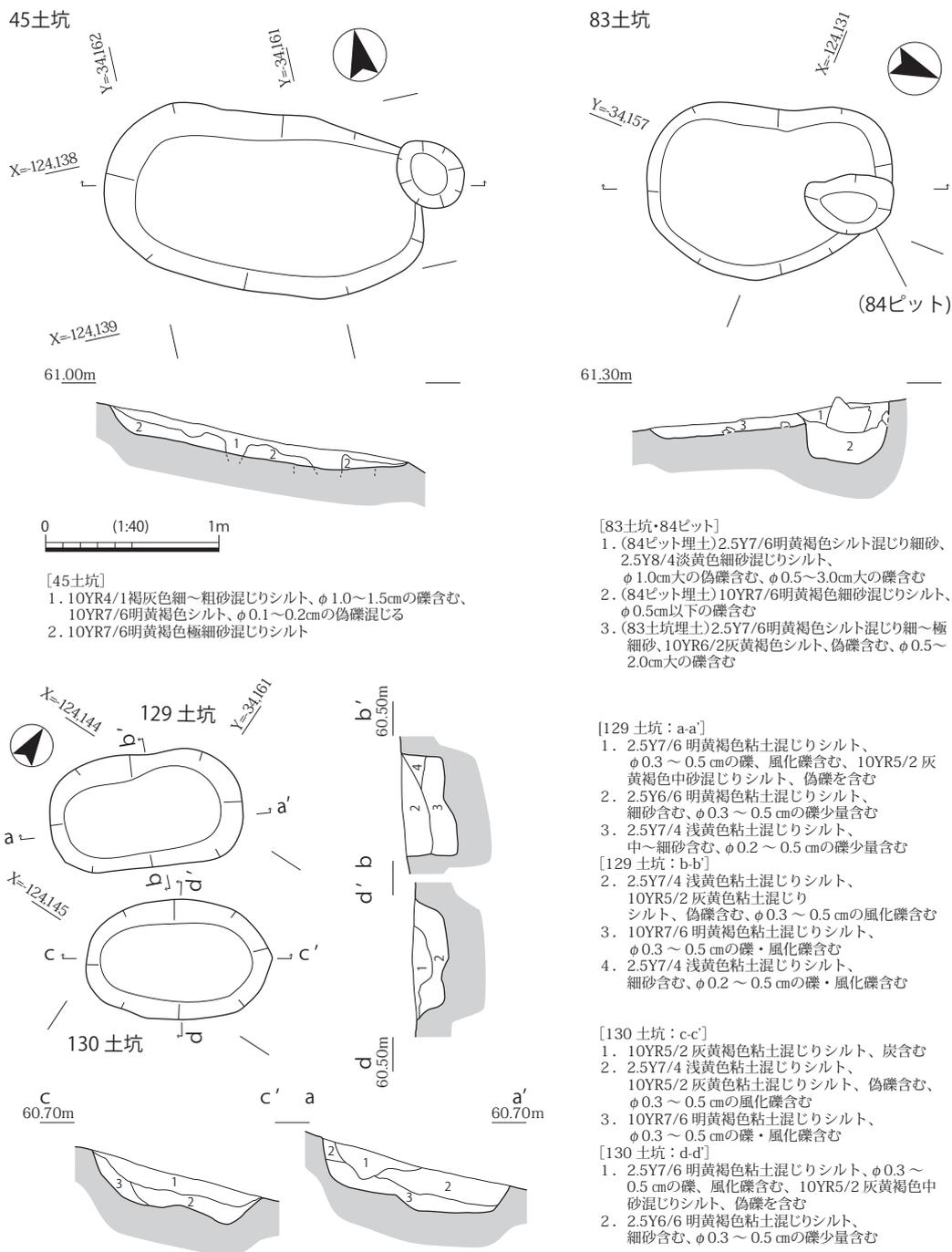


図 29 45・83・129・130 土坑 平面図・断面図

直に立ち上がる。埋土は2層に分けられ、炭化物の細粒を少量含む。周辺のピットと重複する。平面形と遺構の配置状況、埋土から、墓の可能性がある。

142 土坑 (図 30、写真図版 12-4) 2L-6e 区、73 土坑と 69 土坑の東側で一段低い地点に位置する。長さ 1.9 m、幅 0.8～1.0 m、深さ 0.4 m の土坑である。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋土は、1.0～30.0cmの中～巨礫を多く含む砂で、3層に分けられる。2層中には炭化物の細粒を多く含む。平面形はその他の長方形土坑と似るが、より深く、埋土は炭を含む点で異なる。埋土中からは土師器細片などが出土した。

68 土坑 (図 31) 2L-6d 区に位置するし、1.0 m×0.8 m以上、深さ 0.18 m の方形の土坑である。

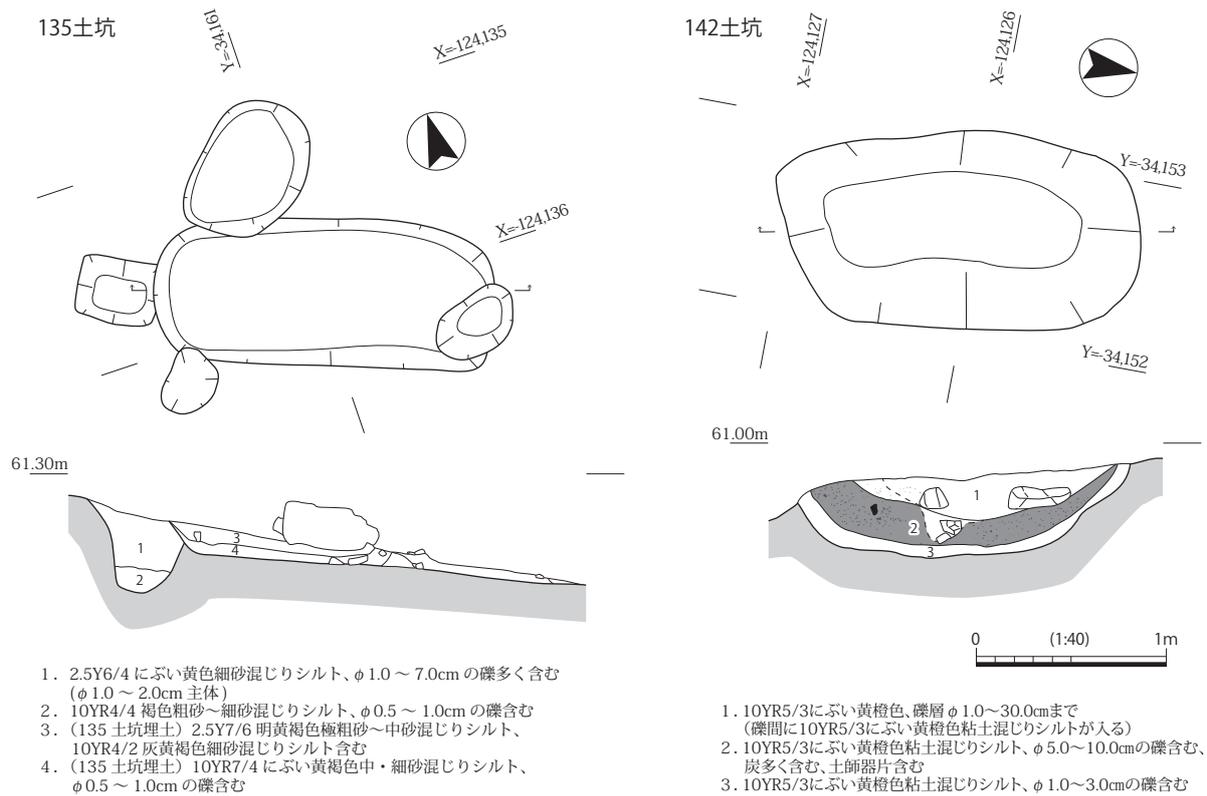


図 30 135・142 土坑 平面図・断面図

底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上る。埋土は 2 層に大別され、炭化物の細粒や焼土の粒を少量含むが、火を受けて赤変・硬化した痕跡は見られなかった。

299 ピット (図 31、写真図版 11 - 8) 2 L - 6 b 区、313 土坑の北西約 2.8 m の地点に位置する。一辺 0.5 m 前後 深さ 0.2 m の土坑である。平面は方形を呈するが、底面は不整形で狭く、壁との境は不明瞭である。埋土は、細砂や中礫を含むシルトで、5.0cm 大の礫も極少量含まれる。 (金光)

埋土からは須恵器の灯明皿・皿 E (110) が出土しており、口径 8.4cm、器高 2.5cm をはかる。底部・体部は厚手のつくりで、口縁端部は強く屈曲するのが特徴である。 (笹栗)

347 竪穴 (図 32、写真図版 12 - 5) 2 L - 5 d 区、ピットや土坑が集中する北西部とはやや離れた 2 区中央南東部の平坦部に位置する。周辺には、焼土を含む炭層が広がる。全体に残りは悪く、南半部の大半が失われている。東西 3.6 m、南北 2.95 m の方形プランである。底面は平坦で、壁はほぼ直立するが深さ 0.1 m と浅い。埋土は、0.3 ~ 5.0cm の中礫や炭化物細粒を含み、2 層に大別される。底面からは、径 0.25 ~ 0.35 m、深さ 0.08 ~ 0.1 m のピットや長辺 0.7 m、短辺 0.45 m、深さ 0.05 m の浅い土坑が検出されているが、347 竪穴との関係は不明である。 (金光)

埋土からは棒状の鉄製品 (111) が 1 点出土している。厚みは 0.4cm 程度で、性格は断定できないが古代の鉄釘の可能性が高い。 (笹栗)

ピット群 (図 33・34) 調査区中央部から西側の丘陵尾根裾部から幅約 4.5 m の平坦地を隔てて、南東方向に開ける緩傾斜面とこれに続く平坦地からピット、土坑、土坑墓など多くの遺構が検出された。このうちピットは、径 0.2 ~ 0.3 m 前後の円形のもの、一辺 0.2 ~ 0.3 m の方形のもの、0.5 m 以上の方形のものなどがある。掘立柱建物や柵列などの遺構が存在していたと思われるが、遺構相互の重複関係が煩雑で、これらの遺構を抽出することはできなかった。平面形状や埋土の検討から一定間隔で並ぶピツ

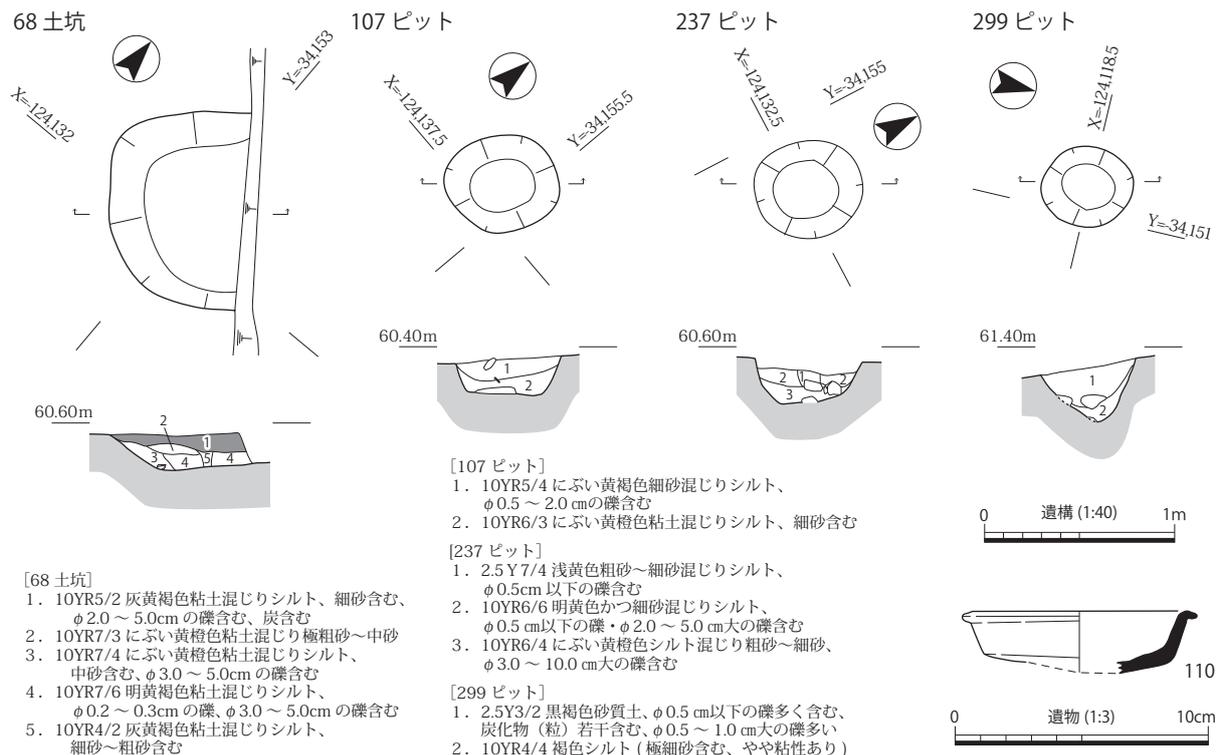


図 31 68 土坑・107・237・299 ピット 平面図・断面図、299 ピット 出土遺物

トを柱列とした。円形のピットは、粗砂～細礫を含む暗褐色砂質シルトを埋土とするものが多く、方形のピットには、0.3～0.5 mの中礫～巨礫が入ったものが多くみられた。遺物は細片が多く、詳細な時期を特定できたものは少ない、平面形状の違いだけでは新旧時期を特定できなかった。

柱穴列 1 2L－6d・7d区、斜面の北西から南東方向の向きで、径0.3～0.4 m 深さ0.2 m前後の円形のピット(278・137・75・48)が、1.22 m・1.16 m・1.6 mの間隔で並ぶ。278ピットを北東隅柱とする建物を構成する可能性のあるピットも検出されているが、柱間や通りが揃わないものが多く、建物を復元できなかった。また45土坑や135土坑と重複する位置関係にあり、45土坑よりは新しい。(金光)

278ピット埋土からは須恵器杯G蓋(112)が1点出土している(図35)。つまみの形状から飛鳥Ⅱ、7世紀中ごろに位置づけられるもので、遺構の帰属時期を示すものであるか定かではない。(笹栗)

柱穴列 2 (写真図版12-7) 2L－6d区、柱列1の北約5mの地点に位置する。一辺0.6 m前後、深さ0.2 mの隅丸方形のピット(219・91・207)が1.25 m・1.3 mの間隔で斜面にほぼ並行する南西から北東方向に並ぶ。遺物は出土しなかった。なお、平面的に237・102・107・221などを柱列とみるなら、建物になる可能性もある。

柱穴列 3 2L－7d区、柱列2の西側、柱列2とほぼ並行する地点に位置する。一辺0.5 m前後、深さ0.3 m前後の方形のピット(94・217・79)が1.7 m・1.6 mの間隔で南西から北東方向に並ぶ。いずれのピットからも時期を特定できる遺物は出土しなかった。

柱穴列 4 (写真図版12-8) 2L－7d区、丘陵裾平坦部北西端に位置する。径0.3 m、深さ0.2 mのピット(126・127・128)が、1.0 mの間隔で北東から南西方向に並ぶ。さらに北東側にも円形のピットが検出されているが径がやや大きめで軸の通りもややそれる。柵のような遺構の可能性が考えられる。いずれのピットからも時期を特定できる遺物は出土しなかった。

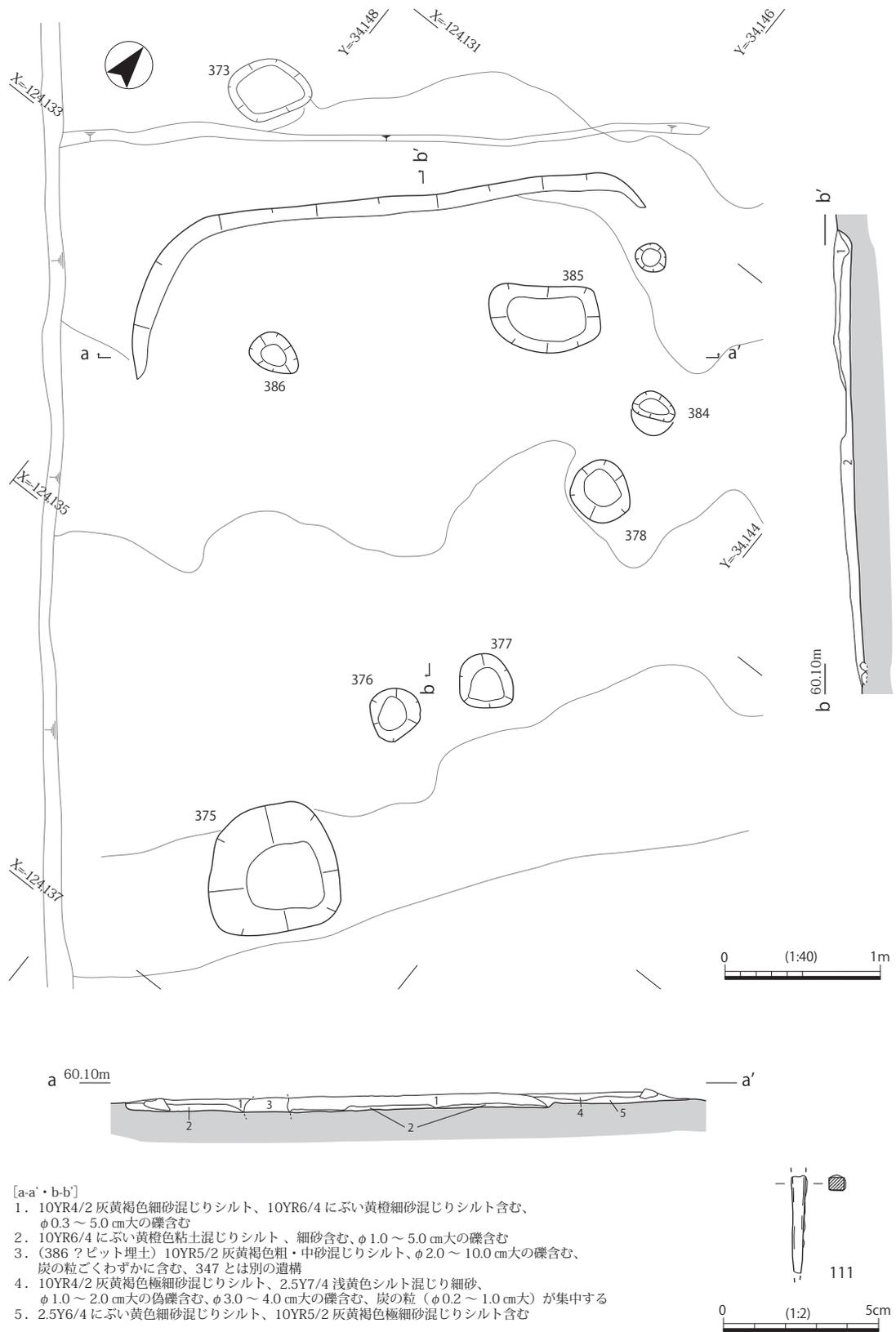
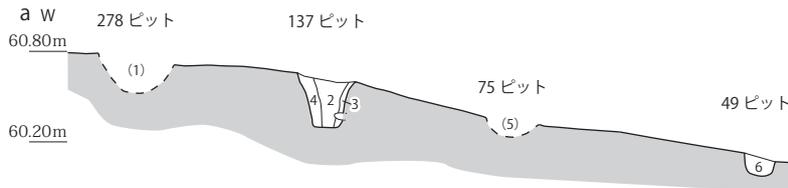


図 32 347 竪穴 平面図・断面図・出土遺物



图 33 2区柱穴列平面图

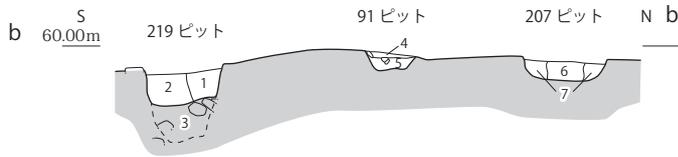
柱穴列 1



[柱列 1 : a-a']

1. (278 P) 2.5Y6/3 にぶい黄色、
φ 1.0 ~ 5.0 cm 大の礫含む、
礫間を細砂混じりシルトが埋める
2. (137 P) 2.5Y7/6 明黄褐色粘土混じりシルト、
中砂・細砂多く含む、
10YR5/2 灰黄褐色シルトわずかに含む
3. (137 P) 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂
~ 極細砂混じりシルト、
φ 2.0 ~ 5.0 cm 大の礫含む
4. (137 P) 10YR7/4 にぶい黄褐色粘土混じり
シルト、粗砂~細砂含む、粘性強い
5. (75 P) 10YR4/2 灰黄褐色粘土混じりシルト
φ 1.0 ~ 5.0 cm 大の礫多く含む、
炭粒わずかに含む
6. (49 P) 2.5Y7/6 明黄褐色シルト混じり中細砂に
10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり、偽礫混じる

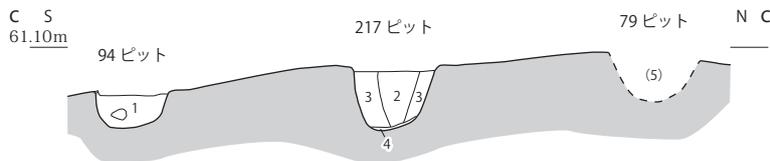
柱穴列 2



[柱列 2 : b-b']

1. (219 P) 10YR7/4 にぶい黄褐色細砂混じりシルト、
10YR5/2 灰黄褐色シルト、偽礫含む、
ややかたくしまる
2. (219 P) 2.5Y7/4 浅黄色極細砂~中砂混じりシルト、
φ 1.0 ~ 5.0 cm 大の礫含む、粘性強い
3. (91 P) 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土混じりシルト
細砂含む、φ 10.0 cm 大の礫含む
4. (91 P) 10YR7/6 明黄褐色細砂・
中砂混じりシルト
5. (91 P) 10YR8/6 黄褐色粗砂~細砂混じりシルト、
φ 0.2 ~ 0.3 cm 程の礫多く含む
6. (207 P) 10YR7/6 明黄褐色粘土混じりシルト、
粗砂~細砂含む、φ 0.5 ~ 3.0 cm 大の礫含む、
10YR6/2 灰黄褐色シルト、
φ 0.5 ~ 1.0 cm 大の偽礫含む
7. (207 P) 2.5Y7/4 浅黄色中・細砂混じりシルト、
φ 0.5 ~ 1.0 cm 大の礫含む

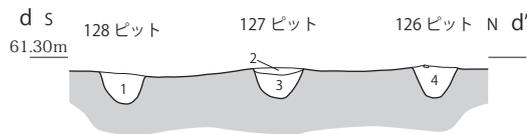
柱穴列 3



[柱列 3 : c-c']

1. (94 P) 2.5Y7/6 明黄褐色極細砂
~ 細砂混じりシルト、
φ 0.3 ~ 1.0 cm の礫多く含む
2. (217 P) 10YR7/6 明黄褐色細砂混じりシルト、
10YR5/2 灰黄褐色シルト、
φ 1.0 ~ 2.0 cm 大の偽礫含む
3. (217 P) 10YR6/6 明黄褐色粘土混じりシルト、
φ 0.5 cm 以下の礫含む
4. (217 P) 10YR6/8 明黄褐色粘土混じりシルト、
中砂~細砂含む
5. (79 P) 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト、
細砂混じり、礫含む

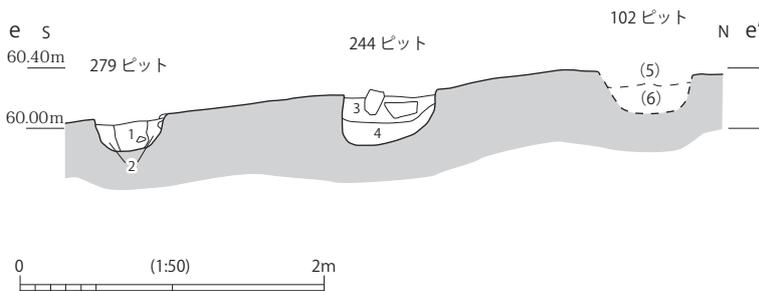
柱穴列 4



[柱列 4 : d-d']

1. (128 P) 10YR7/6 明黄褐色粘土混じりシルト、
極細砂含む、φ 0.5 cm 以下の礫含む、
10YR5/1 褐灰色粗砂~中砂混じりシルト、
φ 1.0 ~ 3.0 cm 大の偽礫含む
2. (127 P) 2.5Y7/4 浅黄色粘土混じりシルト、
極細砂~細砂含む、
10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂含む、
φ 0.5 cm 以下の礫含む、かたくしまる
3. (127 P) 2.5Y8/4 淡黄色粘土混じりシルト、
極細砂~中砂含む
4. (126 P) 10YR6/6 明黄褐色粘土混じりシルト、
極細砂~細砂含む、
10YR5/1 褐灰色シルト少量含む

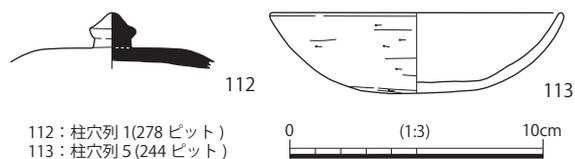
柱穴列 5



[柱列 5 : e-e']

1. (279 P) 2.5Y7/6 明黄褐色粘土混じりシルト
粗砂~細砂含む、
φ 3.0 ~ 5.0 cm 大の礫含む、
ややしまり弱い
2. (279 P) 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土混じりシルト
粗砂~細砂含む、
φ 3.0 ~ 5.0 cm 大の礫含む
3. (244 P) 2.5Y7/6 明黄褐色粘土混じりシルト、
粘性やや強い、細砂含む、
φ 5.0 ~ 12.0 cm 大の礫含む
4. (244 P) 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土混じりシルト、
粘性強い、中・細砂多く含む
5. (102 P) 10YR5/1 褐灰色シルト混じり細砂、
粘性あり、φ 2.0 ~ 3.0 cm の礫含む
6. (102 P) 10YR7/6 明黄褐色細砂混じりシルト

図 34 柱穴列 1 ~ 5 断面図



112：柱穴列1(278ピット)
113：柱穴列5(244ピット)

図35 2区 柱穴列 出土遺物

柱穴列5 2L-6d区、柱列2の東約3.6m 柱列1の北東約1.5mの地点に位置する。一辺0.4～0.6m前後 深さ0.4m前後のやや大きめの方形ピット(279・244・102)が、1.7mの間隔で南西から北東方向に並ぶ。244ピットは、細砂を含みやや粘性

が有る2.5Y7/6明黄褐色シルトを埋土とし、ほぼ完形の土師器碗が出土した。(金光)

埋土から出土した土師器碗(113)は、外面ヘラケズリ(c手法)で仕上げられおり、平安京I期中～新、8世紀末～9世紀前半ごろに位置づけられる。(笹栗)

107・237ピット(図31、写真図版) 2L-6d区、柱穴列5の西側、柱穴列2・3の東側にそれぞれ位置する。上記の柱穴列のピットとともに掘立柱建物がたつことも想定されたが、柱列を復元するまでには至らなかった。このうち107ピットは、244ピットの西、102ピットの南約1.5mに位置する一辺0.5～0.6m 深さ0.2mの方形のピットである。底面は平坦で壁は直に立ち上がる。埋土中には2.0cm大の礫を比較的多く含む。西約1.5mの所には一辺0.4mの221ピットが、さらに約1.6m離れてほぼ同規模・同形状のピットが並ぶ。また、107ピットの西約1.6mの地点には、さらに西1.6mの地点にも一辺0.4～0.6m 深さ0.3m前後のピットが位置する。さらに、107ピットの北西約5.0mの地点には、一辺0.4～0.5m 深さ0.3mの237ピットが位置する。いずれも埋土は、107ピットと同じで、0.5～2.0cmの礫を含む。(金光)

6. 小結

2区・4区の調査では、土坑や溝、ピット、横穴式石室を伴う古墳(成合地獄谷1号墳)などが検出された。特に第4面で検出された土坑群のうち、土師器甕を蔵骨器に利用したものや、副葬品として八花鏡をもつもの、埋土に炭層が存在するものなどがある。平面長方形の土坑も含めて、これらの多くは墓あるいは火葬など葬送行為に関連した遺構群と推定され、後述する古墳群も含めるとこの地が墓域として長く利用されていたことがわかる。

土坑群の時期は、出土遺物から主に8世紀後半にあり、一部に9世紀代に続くものも含まれ、当地域の墓制を解明する上で良好な調査事例となった。古墳と土坑群との関連性も問題となるが、その連続性については時期的な空白時期があり認めがたい。その一方で、古墳と土坑群の位置的な状況をみると、その関係は無関係とは考えにくい。成合地獄谷遺跡だけでなく、隣接する成合遺跡や金龍寺跡、文献に残る悉檀寺跡など含めた広い視野で遺跡の動向を考える必要があるだろう。(金光)

註

- 1) 森屋美佐子・瀬戸哲也編 2000『栗栖山南墳墓群』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第57集
- 2) 中川あや 2004「唐鏡の変遷 - 盛唐期以降を中心に -」『考古学雑誌』第88巻第1号 日本考古学会、中川あや 2006「金属器の受容 - 唐代金属器の入手と模倣生産」『列島の古代史5 専門技能と技術』岩波書店
- 3) 杉山洋 1999『古代の鏡』日本の美術 第393号 至文堂
- 4) 成瀬正和 1999「正倉院鏡を中心とした唐式鏡の化学的調査」『古代の鏡』日本の美術 第393号 至文堂
- 5) 鏡の有機質の観察については、独立行政法人奈良文化財研究所の高妻洋成氏に実態顕微鏡にて鑑定をおこなっていただいた。記して感謝いたします。
- 6) 骨片については、大阪市立大学の安部みき子氏に実見していただいた。記して感謝いたします。
- 7) 木村泰彦 2002「銅鈔から石鈔へ」『鈔帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所

第3節 3区 (図36、写真図版13～15)

丘陵の尾根上に位置する。まず、尾根上の平坦地で幅2mのトレンチ調査を行い(3-1区から3-9区)、その結果、遺構や遺物が検出され周辺に遺構面が広がると判断された3-6区は、平坦部全域に調査範囲を広げて調査をおこなった。3-2～3-5区および3-7区のトレンチでは、暗色化した層の堆積は認められたものの、土師器細片が数点出土したのみで遺構も検出されなかった。3-6区では、2区・4区で鍵層とした第3-1層黒褐色土層に相当する黒色土層の堆積が認められ、ほぼ完形の須恵器や埋土中に炭や焼土を含む土坑や溝が検出されたことから、平坦部全域に範囲を広げ、また、西側斜面に幅2mのトレンチを設定して調査をおこなった。トレンチ部からは遺構・遺物は検出されなかった。

1. 基本層序

2・4区と同様に黒色土層を鍵層として基本層序を設定した(図37)。大別6層に分層され、3区における第5層が2・4区の黒色土層(第3層)に相当する。

第1層 表土・床土層。2.5Y4/1 黄灰色中礫混じりシルト～極細砂。根による攪乱が顕著。

第2層 整地土層で3層に細分が可能である。

2-1 10YR7/6 明黄褐色中礫混じりシルト～極細砂。

2-2 2.5Y6/4 にぶい黄色極粗砂混じりシルト～極細砂。0.1～0.4cm大の極粗砂～細礫を多量に含む。

2-3 10YR7/4 にぶい黄橙色極粗砂混じりシルト～極細砂。0.1～0.2cm大の極粗砂を含む。

第3層 整地以前の表土層である。10YR7/3 にぶい黄橙色シルト～細砂。上下の層に比べ淘汰が極めて良いが、明確なラミナはない。山頂部から流れて堆積しつつ弱く攪乱を受けている(暗色化するには至っていない)。

第4層 2.5Y3/1 黒褐色シルト～極細砂。0.2～0.5cm大の炭粒を含む。極粗砂～細礫を含む。

第5層 複数に細分が可能である。炭化物細粒を含むシルト質砂層やや粘性を帯びるシルト層などさらに細分される。

5-1 2.5Y4/1 黄灰色シルト～極細砂。中礫を含む。暗色化。

5-2 2.5Y7/3 浅黄色シルト～極細砂。0.1～0.2cm大の極粗砂～細礫を少量含む。2.5Y6/2 灰黄色シルト～極細砂。

第6層 地山面までの層で3層に細分される。

6-1 10YR6/6 明黄褐色シルト。0.1～0.4cm大の極粗砂～細礫を含む。

6-2 2.5Y6/2 灰黄色シルト～極細砂。

6-3 2.5Y4/1 黄灰色シルト～極細砂。0.1～0.4cm大の極粗砂～細礫を含む。暗色化。(金光)

2. 包含層出土遺物

包含層中からは耕作に伴う陶磁器類とともに、須恵器や土師器、弥生土器等が出土している(図38)。特に須恵器はまとまった量が出土し、完形に近い個体も多くみられる点は注目される。上層(第2・4層)から出土した遺物のうち図化したものは主に須恵器で、8世紀後半～9世紀前半ごろの115杯Bの

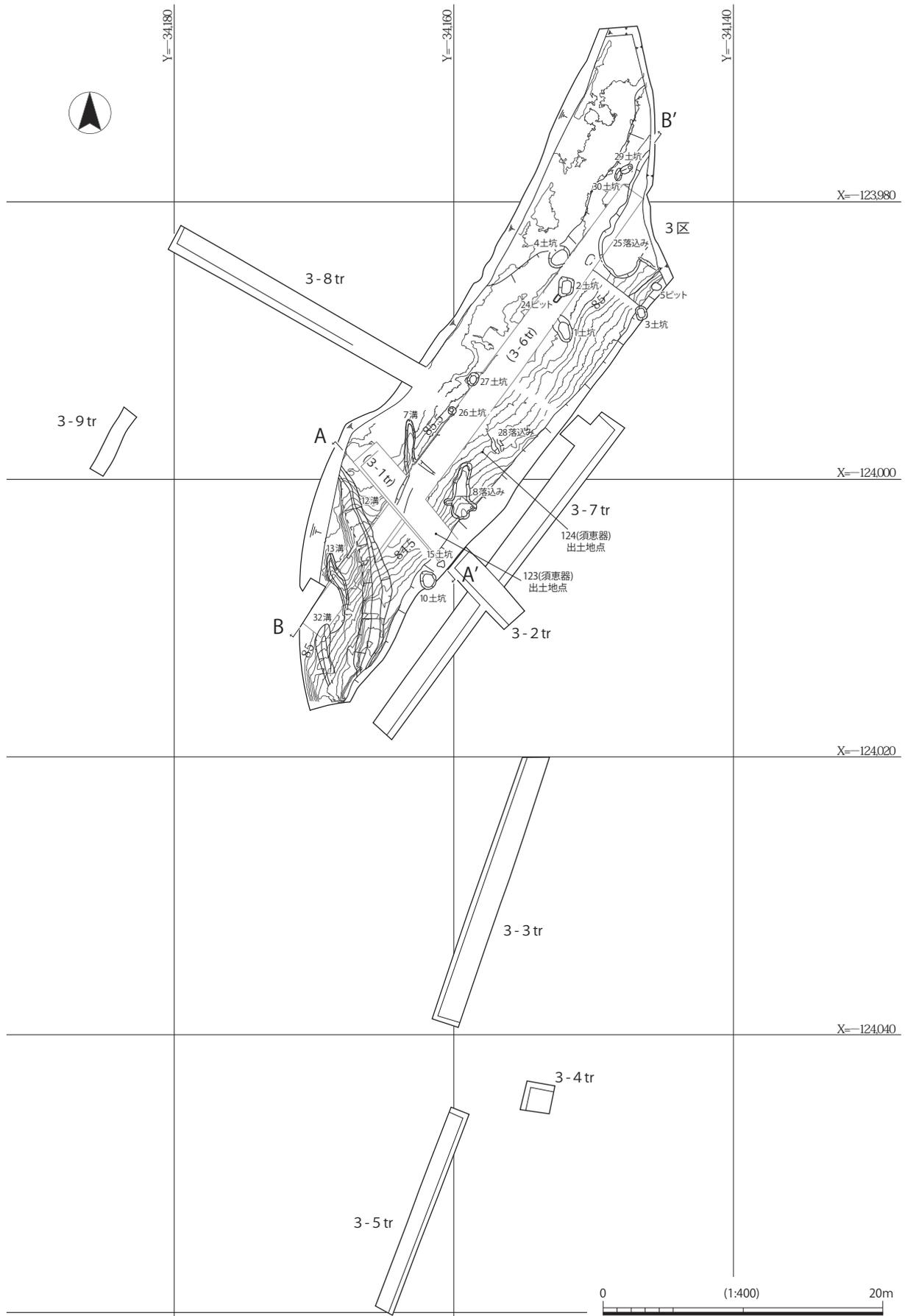


図36 成合地獄谷遺跡 3区 全体平面図

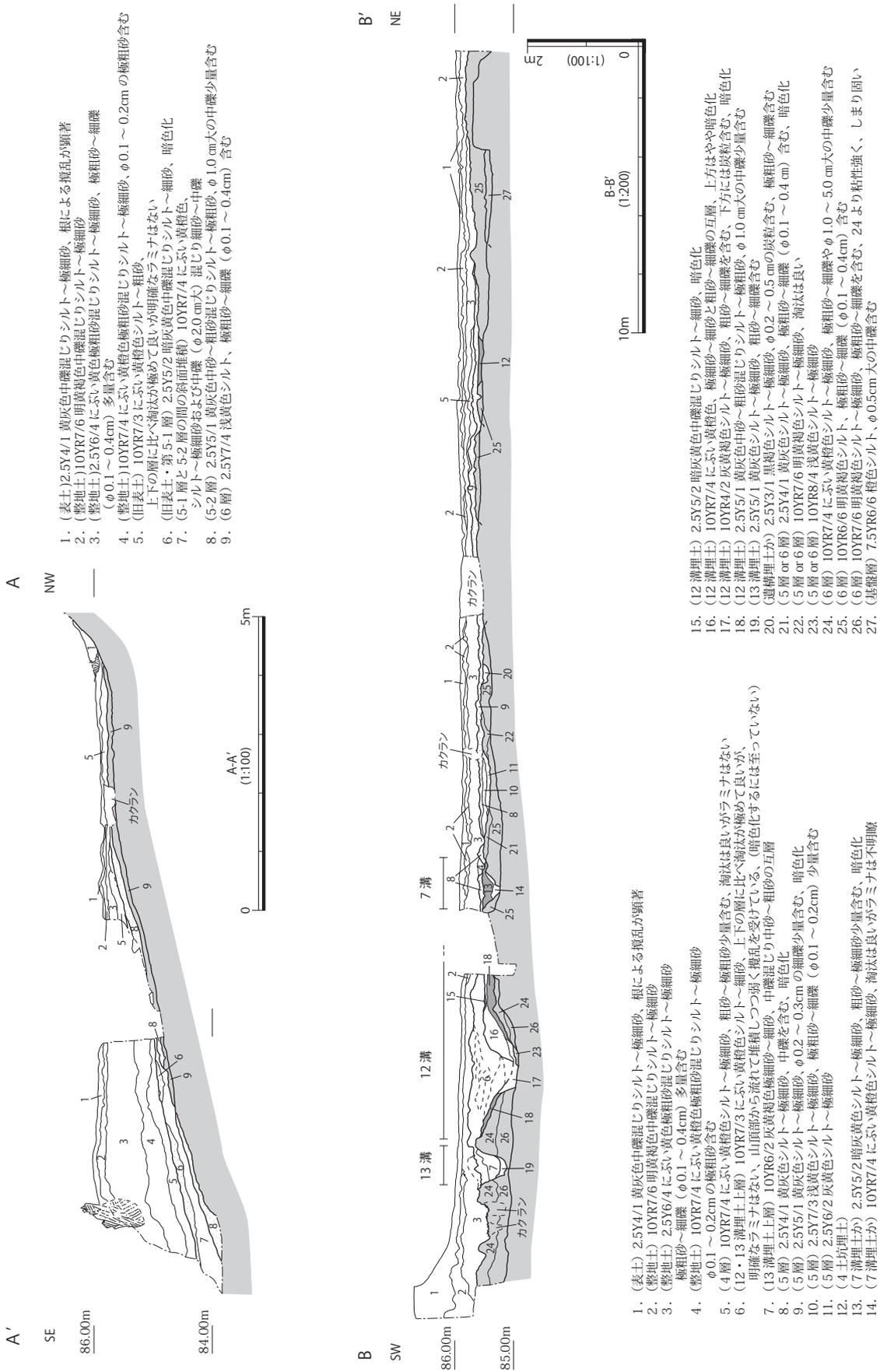


図 37 3区 基本層序断面

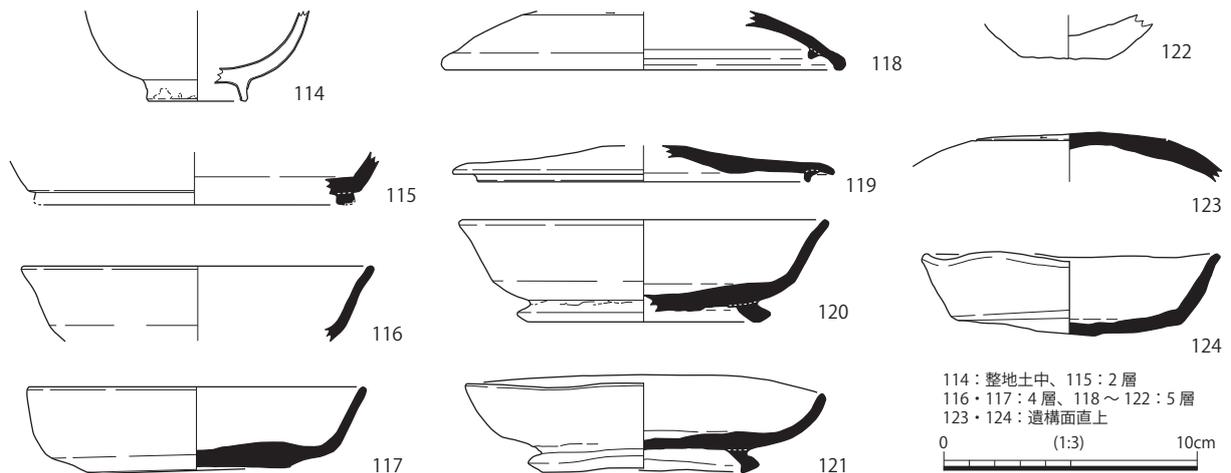


図38 3区包含層出土遺物

底部のほか、116杯の口縁などがある。117はほぼ完形で、一見すると6世紀後半頃の杯H蓋に見間違うが、飛鳥Ⅱ～Ⅲ、7世紀中～後半頃の杯Aと考えられる。

118～124は第5層からの出土遺物で、須恵器の出土が目立つ。118・119はわずかにかえりが残る杯B蓋で、120・121は杯Bである。いずれも飛鳥Ⅳ～Ⅴ、7世紀後半～末頃を中心とした時期に位置づけられる。また、この中でも特に118・120・121は出土地点から7溝との関わりも推測される。122は弥生土器底部で、弥生時代にもこの付近まで人為的な活動の痕跡があったことが窺える。123・124については遺構面直上から出土した須恵器で、123が杯Hの天井部、124が杯Aである。123については回転ヘラケズリが残り、径がある程度大きくなることから、TK43型式、6世紀後半頃に位置づけられる。3区で出土したその他の土器や古墳群の時期に比べるとやや古い。124については、その他の土器と同じく7世紀後半頃に位置づけられる。

このように3区包含層出土の遺物は、7世紀後半を中心とした遺物がまとまって出土している点で注目される。ここから出土した須恵器は、厚手でやや暗い灰色の色調を呈し、121や124のように窯変が著しいものが含まれる。時期には大きな隔たりがあるが、胎土や焼成の雰囲気は成合西王子山窯跡の製品と通ずるものがあり、周辺にこの時期の窯跡が存在する可能性を考慮する必要がある。（笹栗）

3. 遺構

遺構については、基本的には第5層（黒色土層）除去面にて検出されている。一部に第6層削除面で検出されたものもあるが、基本的には上層面で確認できるものと考えられ、7～9世紀までの遺構と考えられる。

1土坑（図39、写真図版14-2） 2J-6j区に位置する。長軸2.0m、短軸0.9m、深さ0.2mの浅い土坑である。埋土は3層に分かれ、2層中には0.2～0.5cmの炭化物の細粒を多く含む。遺物は出土しなかった。

2土坑（図39、写真図版14-1～3） 2J-6j区、1土坑の北東約1.5m地点に位置する。24土坑と重複する。長辺1.5m、短辺1.1m、深さ0.4mの土坑である。底面は平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。西壁の一部は火を受けて赤変するがさほど硬化していない。埋土は3層に分けられ、3層中には0.3～0.5cmの炭化物や焼土の細粒を多く含む。2土坑と重複する24ピットは、長さ0.7m 幅0.4m、深さ0.1mである。埋土は暗灰黄色シルトの1層で、遺物は出土しなかった。

第3節 3区

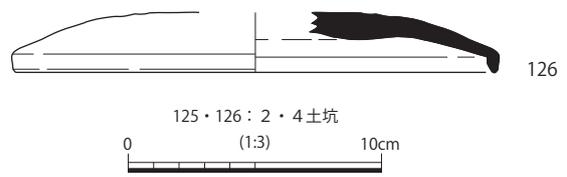
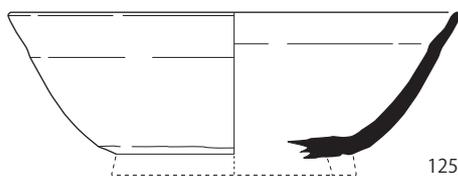
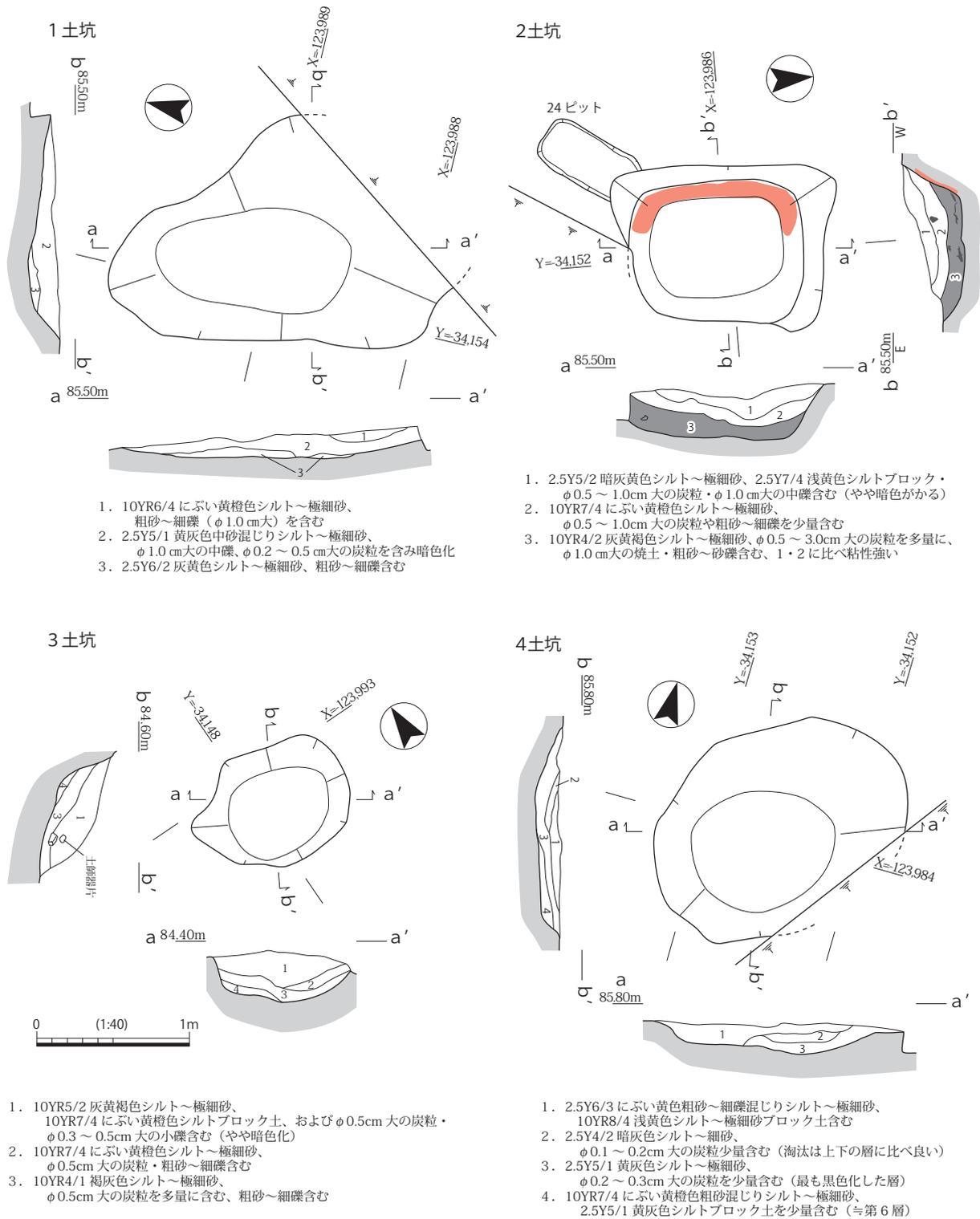


図 39 1～4 土坑 平面図・断面図・出土遺物

4土坑 (図39、写真図版14-4) 2J-6i区に位置する。平面形は不整形な円形で、長軸1.76m、短軸1.20m、深さ0.2mを測る。底面はほぼ平坦で、断面は皿状を呈する。火を受けて赤変・硬化した個所は認められない。埋土は4層に分層され、2・3層中には炭化粒を含む。(金光)

2・4土坑出土遺物 125・126の須恵器については、2・4土坑から出土した破片がそれぞれ接合する。125は銅椀模倣とされる椀E、126は壺A蓋で、ともに8世紀後半を中心とした時期に位置づけられる。両土坑の出土遺物が接合することから、両者は一体的な火葬関連遺構として評価することが可能で、被熱土坑である2土坑が火化遺構で、隣接する4土坑が火葬灰を掻き出したことによって形成された遺構と考えることもできる。(笹栗)

3土坑 (図39、写真図版14-5) 2J-5i区、棚田法面に位置する。南半は棚田造成の際に削平されている。長軸2.15m、短軸1.55m、深さ0.7mの土坑である。底面は平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。火を受けて赤変・硬化した痕跡は認められない。埋土中には細粒化した炭化物を含み、4層に分かれる。3層中には0.5cmの炭化物の細粒を多く含む。(金光)

図化はしていないが、3土坑中からは柱状の水晶(127)が1点出土している(写真図版32)。長さ2.9cm、幅1.2~1.3cm、重さ6.1gをはかり、自然面を残す箇所もあって十分に整っているわけではないが、人為的に六角柱状に整形されているようである。このような水晶柱は平安時代後期以降の経塚から出土例が知られており、遺構・遺物の性格を考える上で注目される¹⁾。(笹栗)

7溝 (図40、写真図版15-7) 2J-7j区、12溝の北東約3.5mの地点に位置する。12溝とはほぼ同じ方向の溝で、南端は試掘トレンチの段落ちにつながる。総延長6.0m 幅0.65m、深さ0.2mをはかる。埋土は、シルトで2層に分けられ、上層は粗砂~極細砂に炭化物の細粒を含む。(金光)

7溝については、特に先行しておこなわれた3-6トレンチ部分で遺物がまとまって出土している。いずれも須恵器で、128はわずかにかえりが残る杯B蓋、129は鉢Aで、ともに埋土の上層からの出土である。130は長頸壺の口縁部、131が底部で、ともに埋土中から出土している。これらは7世紀後半を中心とした時期に位置づけられる。なお包含層第5層中から出土した118・120・121(図38)は、この7溝周辺からの出土であり、破片の接合関係や時期的にも7溝との関係性が推測される。(笹栗)

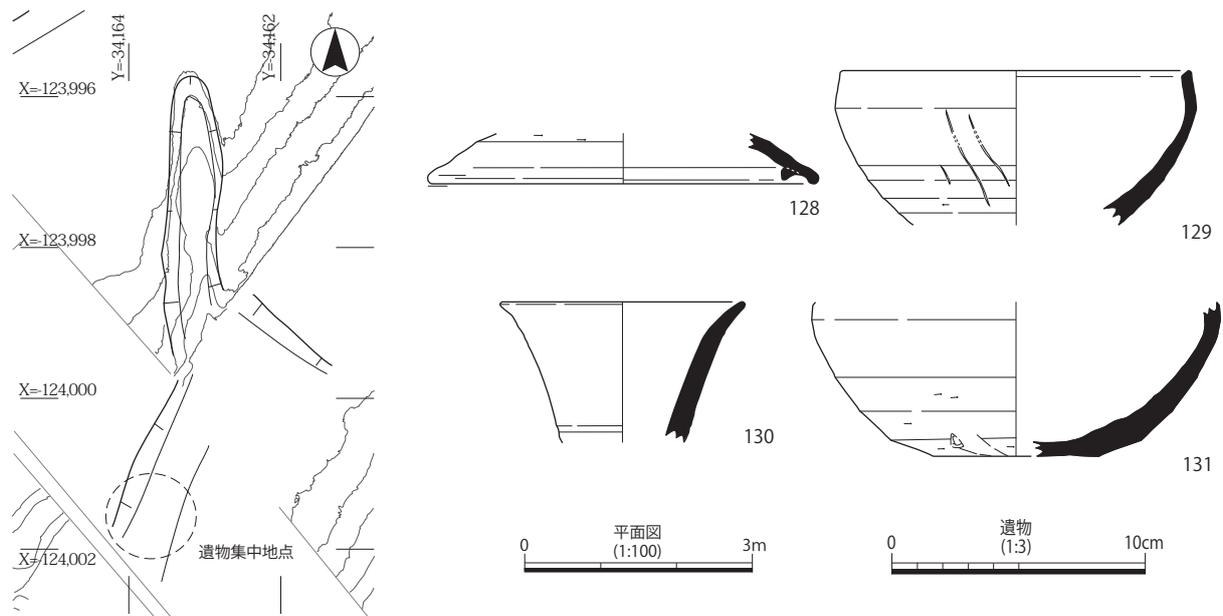


図40 7溝 平面図・出土遺物

10土坑 (図41、写真図版15-1) 2K-7a区、棚田法面直下に位置する。南半は棚田造成の際に削平される。一辺1.1m前後、深さ0.25mの土坑である。壁面と底面の境界は不明瞭で、断面皿状を呈する。埋土は2層に分けられ、1層中には赤土の細粒と0.3~0.5cmの炭化物の細粒を多量に含む。サンプリングした埋土中から白色の玉石1点が出土した。(金光)

埋土を洗浄したところ碁石状石製品を1点確認した。水晶製の白石で、2区116土坑出土のものと同じ大きな差はない。断定はできないが遺構の年代は8世紀後半以降に位置づけられるだろう。(笹栗)

15土坑 (図41、写真図版15-2) 2K-7a区、10土坑の北側、棚田斜面に位置する。短軸0.3~0.6m、長軸0.8m、深さ0.08~0.1mの土坑である。平面は不整形で、断面は西半部が皿状に浅く窪

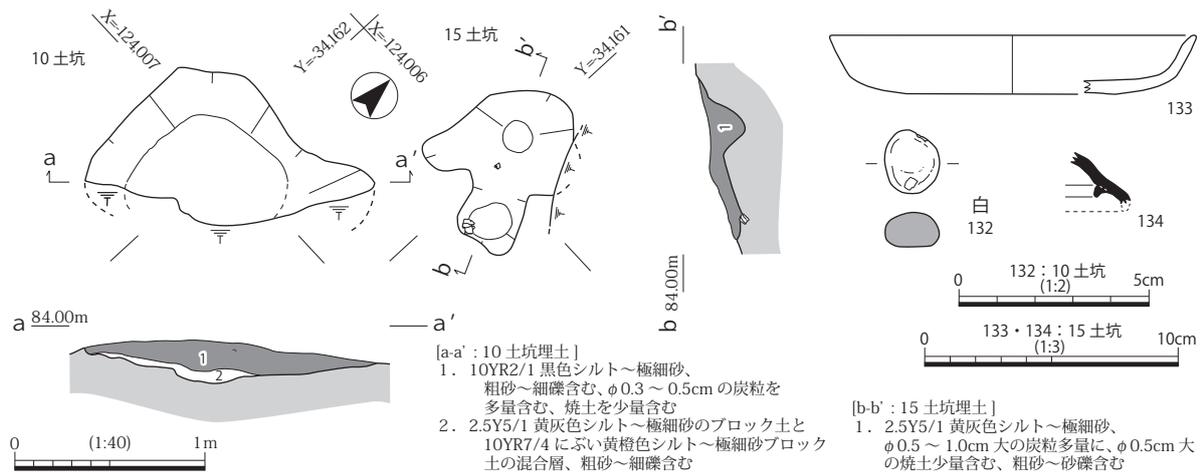


図41 10・15土坑平面図・断面図・出土遺物

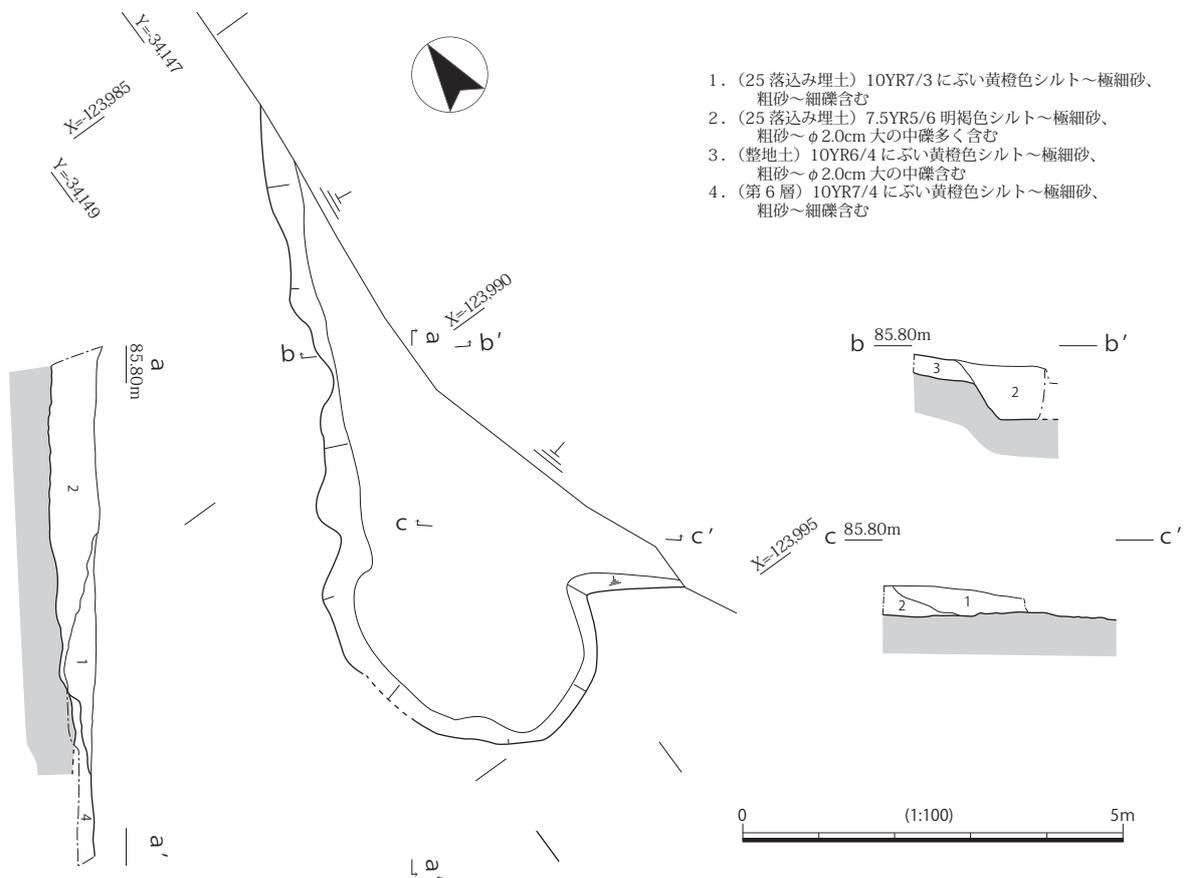


図42 25落込み平面図・断面図

み、東半は深くなる。埋土は、粗砂～砂礫を含む黄灰色のシルト層で0.5～1.0cmの炭化物の細粒を多量に含む。北西隅からほぼ完形の土師器杯が1点出土した。(金光)

埋土中からは、土師器・須恵器が出土している。133は土師器杯Aで、内外面が磨滅して調整は不明である。134はかえりがわずかに残る須恵器杯蓋の細片である。詳細な時期は断定できないが、7世紀後半を中心とした時期に位置づけられる。(笹栗)

25 落込み(図42、写真図版15-8) 2J-5h・5i区、調査区北東端に位置する。総延長8.5mを検出した。東半部は調査区外へのびる。幅3.5m、深さ0.5mの溝状の落ちである。底面はほぼ平坦で壁はほぼ直に立ち上る。埋土は、2.0cmの中礫を多く含む7.5YR8/4明褐色シルト～極細砂層と、粗砂～細礫を含む10YR7/3にぶい黄橙色シルト～極細砂層の2層に分けられる。遺物は出土しなかった。

26 土坑(図43、写真図版15-3) 2J-5j区、27土坑の南西約1.6mの地点に位置する。一辺0.5～0.6m、深さ0.2mの土坑である。底面はほぼ平坦で壁はやや外傾して立ち上がる。埋土は2層に分けられ、2層中には0.2～1.0cmの炭化物の細粒が多量に含まれる。底面や壁面には火を受けて赤変・硬化した痕跡は認められない。土器細片と鉄製品が出土した。(金光)

埋土中から出土した鉄釘のうち、135鉄釘については頭部が折り曲げのタイプで、一般的な形態では

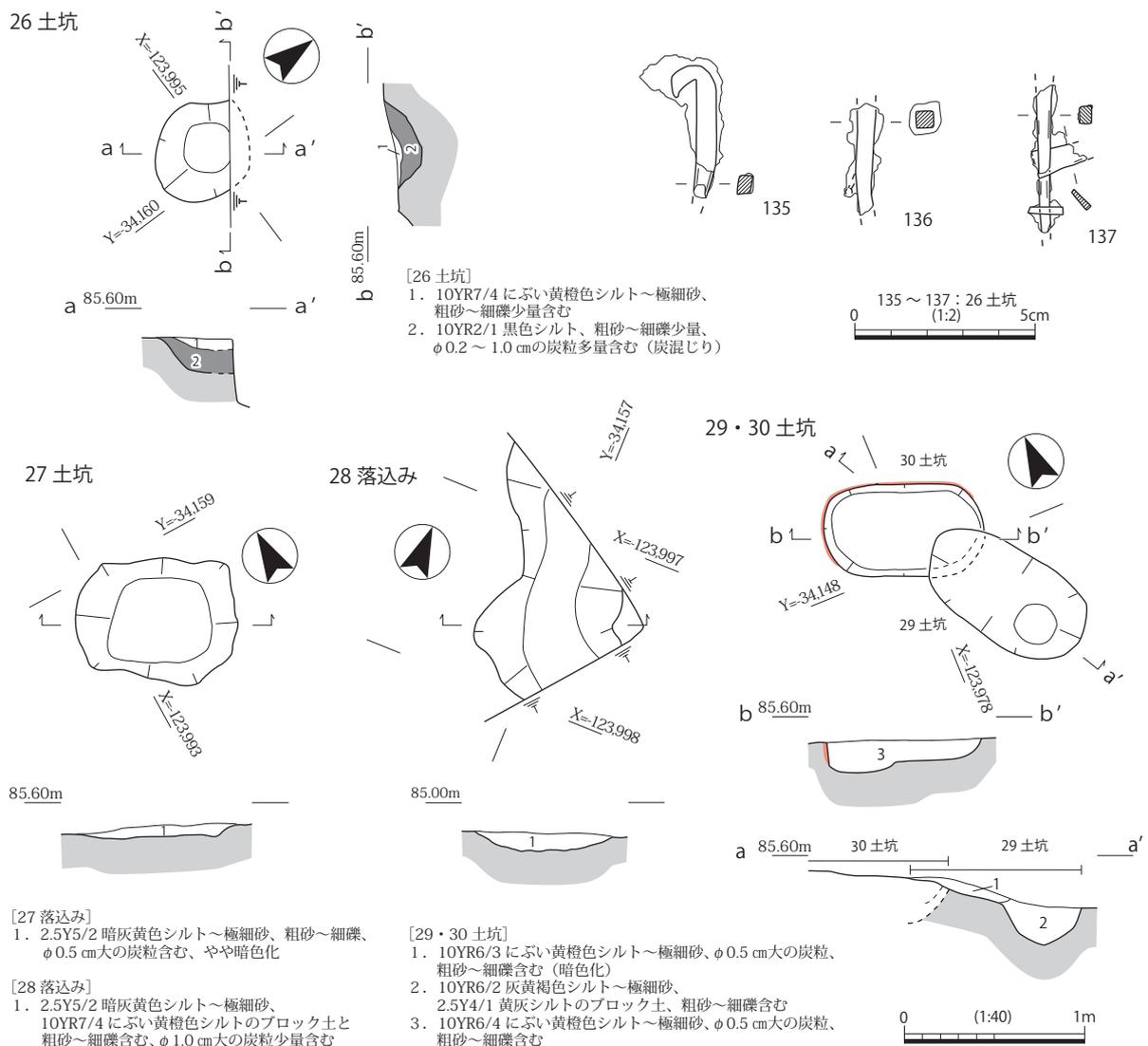


図43 26・27・29・30土坑・28落込み 平面図・断面図・出土遺物

第3節 3区

あるが今回の調査では出土数が少ない。136・137は棒状の鉄製品で、性格は不明だが鉄釘の可能性がある。また、137については小さな板状のパーツがとりついている。(笹栗)

27 土坑(図43) 2J-6j区、26土坑の北東約2.0mの地点に位置する。長辺0.9m、短辺0.7m、深さ0.06mの浅い皿状の土坑である。埋土は1層で、0.5cmの炭化物粒が含まれる。遺物は出土しなかった。

28 落込み(図43) 2J-6j区、26土坑の南東約2.6mの地点に位置する。幅0.8m、深さ0.1mの浅い皿状の落込みみである。北側と南東側は側溝によって失われている。埋土は1層で、埋土中には黄橙シルトのブロックや細粒化した炭化物が含まれる。遺物は出土しなかった。

29・30 土坑(図43、写真図版15-5・6) 2J-h区、25落込みの西側で検出された。2基は重複し、29土坑が新しい。このうち29土坑は、長軸0.85m、短軸0.5mの平面長方形の土坑で、北東側はピット状に窪む。埋土は2層に分けられ、1層中には0.5cmの炭化物の細粒が含まれる。遺物は出土しなかった。30土坑は長辺0.9m、短辺0.5m、深さ0.2mの土坑である。埋土は1層で、底面は北東側が一段低くなり、壁は南西側が緩やかに、北東側は直に立ち上る。北東側の壁面際は火を受けて赤変している。遺物は出土しなかった。

12 溝(図44、写真図版13-2) 2K-7a・7b区、調査区南西部に位置する。北東方向から丘陵斜面にそって南西方向に向かう、幅0.9～1.2m、深さ0.18～0.28mの溝である。総延長13.5mを検出した。北東部は断面U字形でやや深く、南西端は幅が広がって浅くなり不明瞭となる。地山直上に堆積する第6層上面で出現し、溝が埋没した後、北半部には、溝の西肩側に黄橙色シルトのブロックを含む粗砂～細礫や炭化物の細粒を含むシルト質砂が堆積する。埋土は、2～3層に分けられる。

13 溝(図44、写真図版13-2) 2K-7a区、12溝の西側で12溝とほぼ並行する位置にある。幅0.6～1.0m、深さ0.1mで、北端は断面U字形で壁の立ち上がりもしっかりしているが、南半部は幅が広がって浅くなり不明瞭となる。総延長4.0mを検出したが、さらに南に延びる可能性もある。12溝と同様第6層堆積後に掘削された溝である。

32 溝(図44) 2K-7b区、13溝の西側に位置する。総延長4.5mを検出したが、13溝と同様、南端が不明瞭となる。幅0.8～1.0m、深さ0.28mである。埋土は、粗砂～細礫や炭化物の細粒を含む黄橙色シルト層で、2層に大別できる。12溝・13溝と同様に、第6層堆積後に掘削された溝である。

(金光)

3. 小結

調査の結果、土坑、溝、ピット等が検出されており、丘陵尾根上にまで遺構がひろがることが確認できた。これらの遺構は、遺構面直上に形成された包含層や各遺構から出土した遺物からみて、7～9世紀までの幅があるが、この中でも7世紀代の出土遺物が目立ち、完形に近い遺物も含まれる点は注目される。また、2土坑や30土坑のような被熱した焼土坑は、成合地獄谷遺跡でははじめて検出されたものであり、さらにこの2土坑と近接する4土坑の遺物に接合関係がみられることは、焼土坑の性格を考える上で参考になるだろう。(金光・笹栗)

註

- 1) 秋山浩三 1995「経塚と珠玉」(財)大阪府埋蔵文化財協会『研究紀要』3(秋山浩三 2007『日本古代社会と物質文化』青木書店に所収)

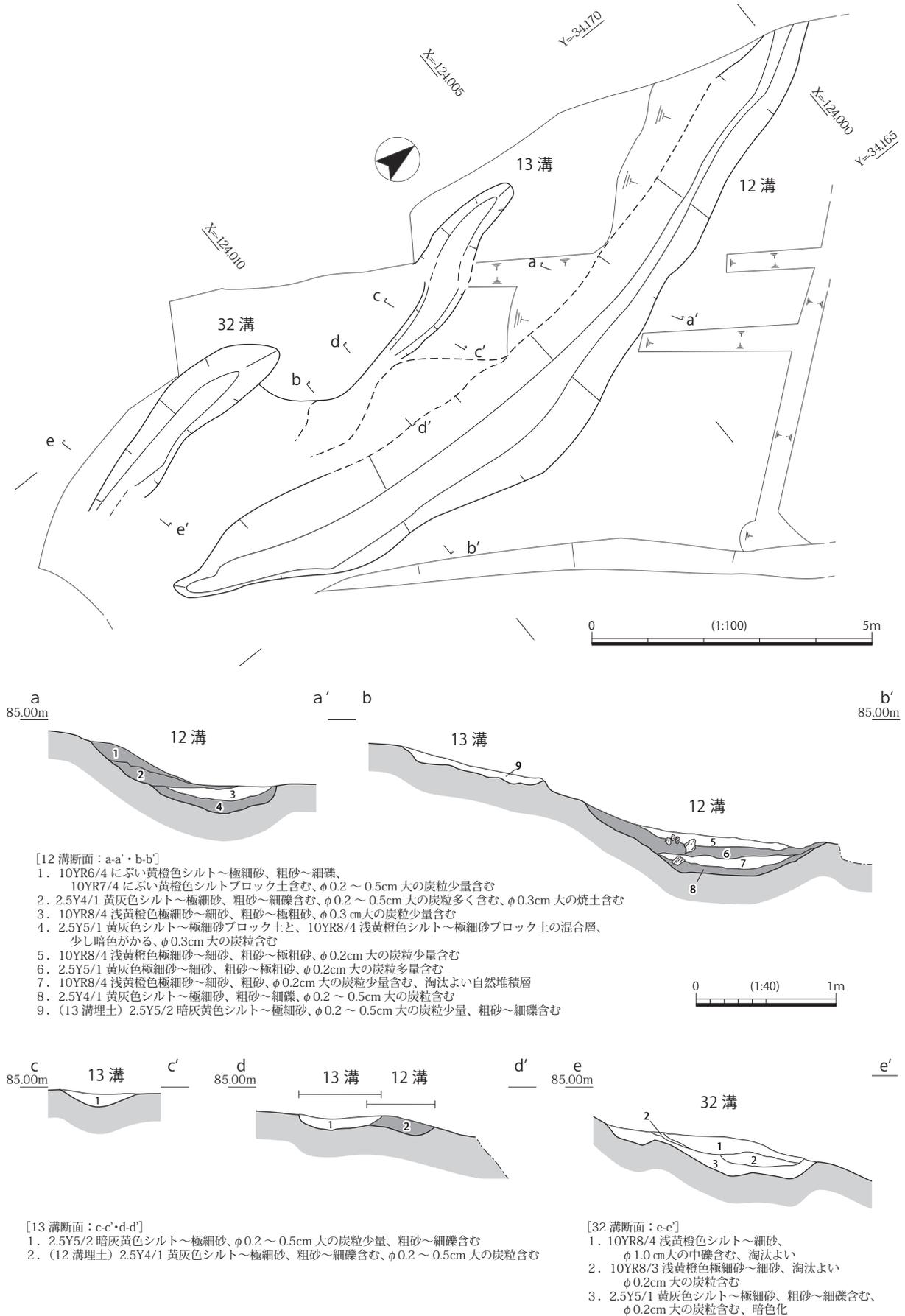


図 44 12・13・32 溝 平面図・断面図

第4節 5区 (図45～52、写真図版16～18)

棚田部分にあたる1区・2区・4区と、丘陵上の平坦部分にあたる3区に挟まれた斜面地部分の調査区である(図45)。調査区の中央、 $X = -124,050$ 付近には西から東にむかって尾根筋が、調査区西端には北から南にむかって尾根筋がそれぞれ走っている。中央の東西尾根を境に、北側は東向きやや急な斜面地となっており、南側は4区と隣接する南東向きの斜面となる。調査区は主に傾斜角 25° 程度の傾急な傾斜地となっているが、以前に耕作地として利用されていたと思われる平坦面が所々にみられることや、平坦面の周辺には性格が不明ながら石組等も確認されることから、調査前には古墳が存在する可能性が想定された。

1. 基本層序

耕作地となっていた平坦面を中心に造成土(第1層)が、斜面地には斜面堆積(第2層)が堆積しており、いずれも黄褐色シルトを主体とする。これらの耕作に伴う平坦面は斜面地を切り盛りして造成されているため、造成土と斜面堆積層の峻別が容易でない箇所も多い(図46)。この第1・2層中からは近世以降の陶磁器類や中世の瓦器、古代と考えられる土師器や須恵器の小片が僅かに出土しており、耕作に伴う平坦面の造成は近世以降におこなわれたことが判明している。なお、調査前に斜面に露出していた石組は、いずれも調査区の最も上段の平坦面の上方の調査区法面で確認されており、断面等を検討した結果、5区北西側の一段高い平坦面に伴う造成土の土留用の石組であることが判明している(写真6)。

1・2層の除去面のうち、中央の東西尾根の北側 $X = -124,030$ 付近に入り込む浅い谷部と、南側の斜面下方の概ね $X = -124,060 \sim -124,070$ 、 $Y = -34,140 \sim -34,150$ の範囲には、暗褐色の土壤層(第3層)が確認されている。これらの層からは遺物の出土はみられないものの、南側で検出された土壤層(第3層)は隣接する2・4区の土壤層(第3層)と連続性が認められる。2・4区の第3層は古代(主に7～9世紀代)の遺物のみを含む包含層であることから、同時期に形成されたと判断することができる。斜面上方は2層除去面ですでに基盤層が検出され、斜面下方の下層については斜面堆積層ではあるがしまりがあって遺物も出土しないことから、古い時期の堆積と考えることができ、上面が地山面と考えることができる。このように調査では土壤層(第3層)を基軸に、上面を第1面、除去面を第2面(最終遺構面)として調査を進めた。



写真6 造成に伴う石垣

2. 包含層の遺物

包含層中からは土師器・須恵器・瓦器や近世以降の陶磁器等の細片が僅かに出土しているに過ぎない(図47)。この中で図化できたものは138壺Lのみで、体部が丸みをもつ形状から8世紀後半頃に位置づけられる。出土遺物の大半は、斜面上方の3区から転落してきたものと考えられ、各遺構面の時期を特定することは困難である。

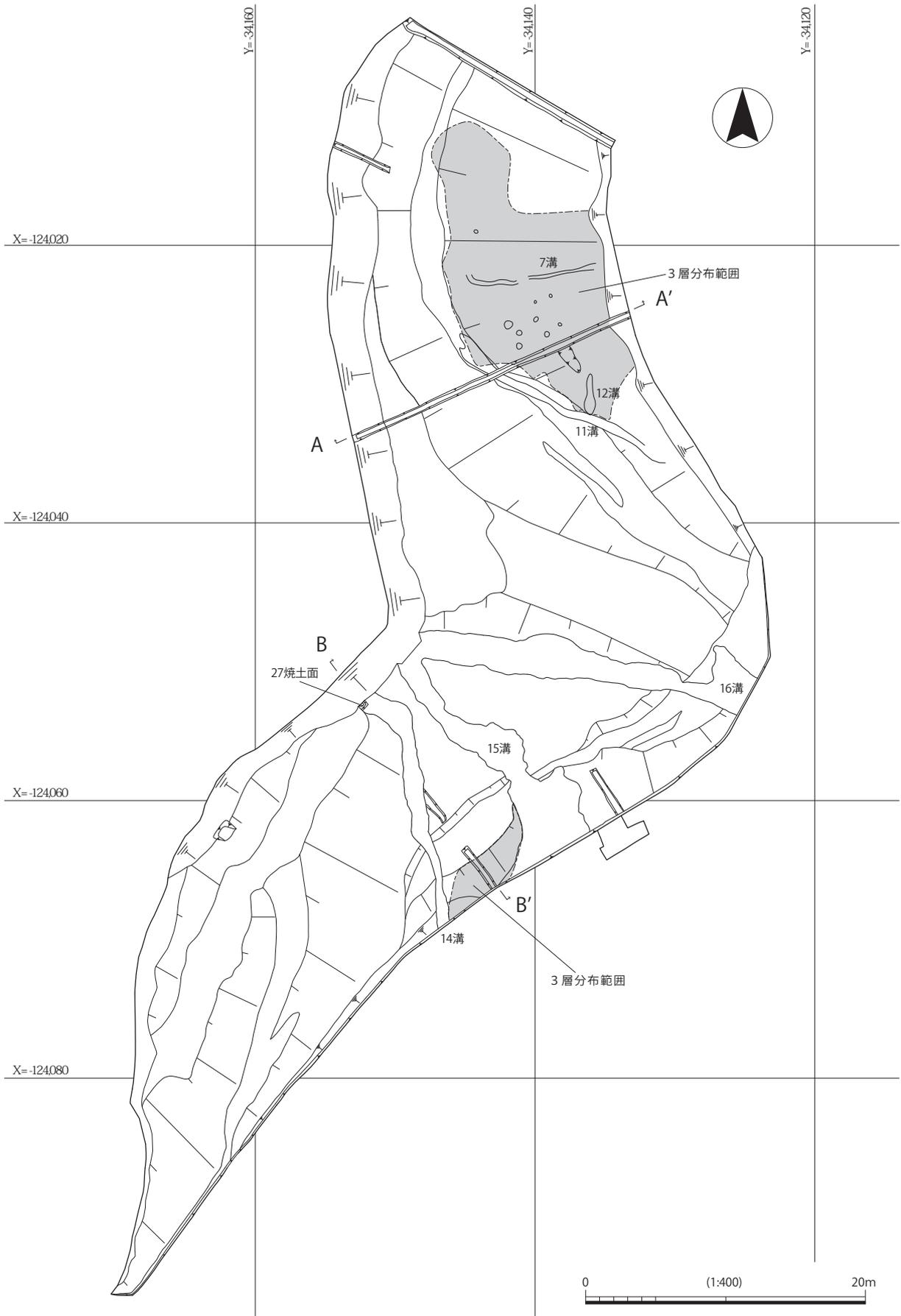


図45 成合地獄谷遺跡 5区 第1面 全体平面図

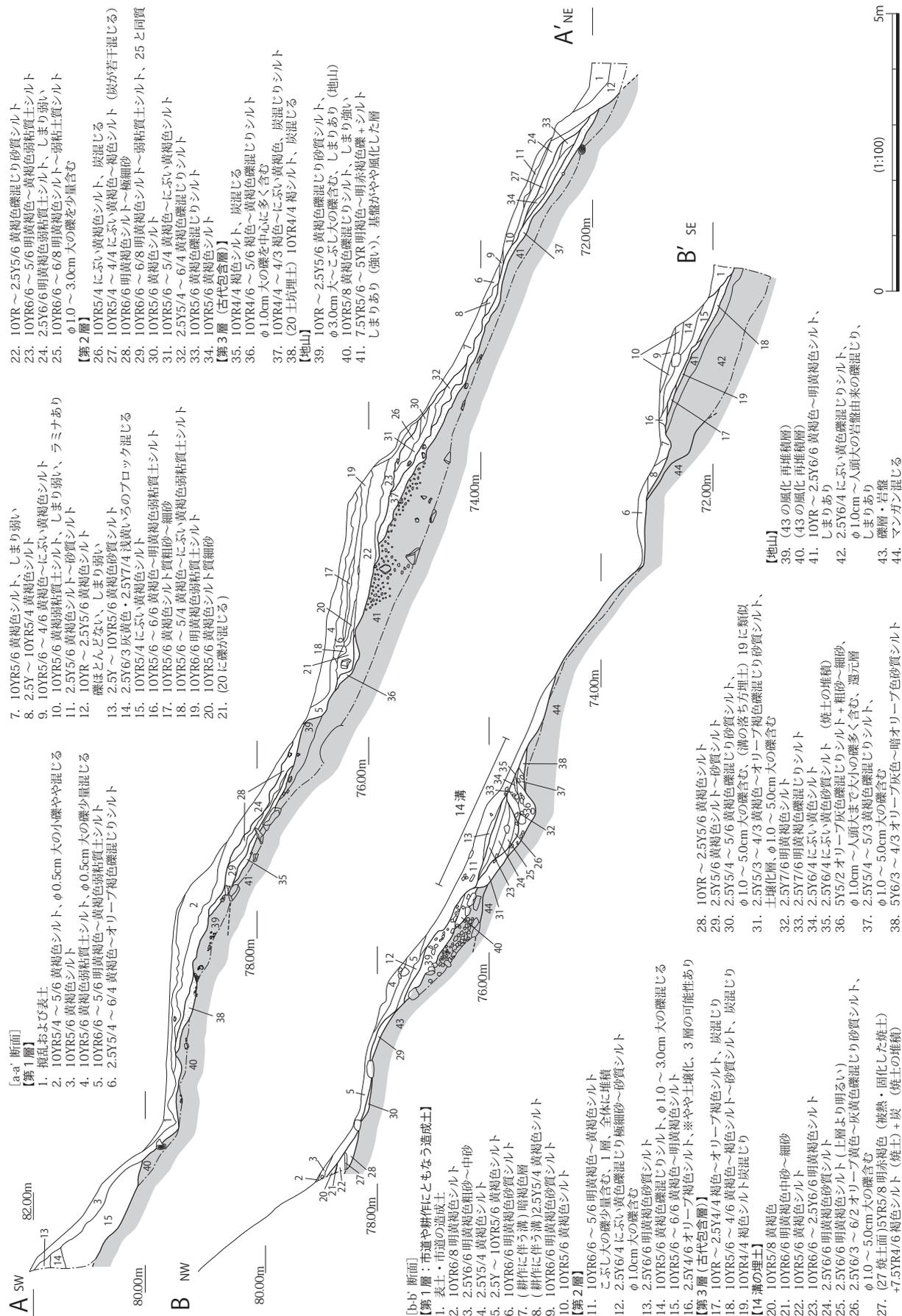


図46 5区基本層序断面

3. 第1面

尾根の北側では3層上面で溝やピット等が確認されており、この面を第1面とした(図45)。ただし、いずれの遺構も深さが0.1～0.15m程度と浅く、埋土中からは遺物は出土していないため、遺構の時期や性格ははっきりしない。

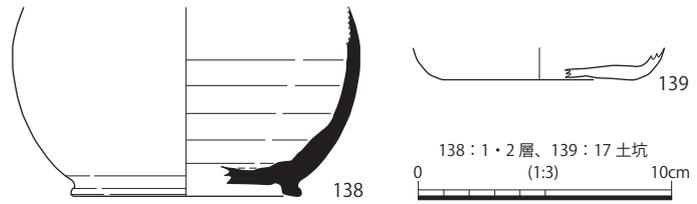


図47 5区 出土遺物

尾根の南側では、北西から南東方向にのびる14・15・16溝が地山面で検出されている。いずれも最終遺構面で検出される遺構ではあるものの、埋土の堆積状況からこの面でも機能していたと判断することができる。この他には14溝の斜面上方側の埋土中で、27焼土面とした薄い焼土の広がりが確認されている。厚さ0.05m程度の焼土の堆積がみられるが、性格については不明である。周辺調査区でも多く確認されている焼土坑との関連を想定すれば古代に帰属する可能性もあるが、14溝がある程度埋まった段階のものであることから、耕作等に伴う新しい時期のものである可能性が高い。

4. 第2面

古代の包含層と考えられる第3層の除去面を第2面とした(図48)。直上の第3層は確認された範囲に限られるものの、遺構の埋土の状況から第1面の遺構と第2面の遺構は区別が可能である。調査区中央の東西尾根より北側で溝2条(18・19溝)と土坑4基(20～23土坑)が、南側で深さ1m以上の溝3条(14・15・16溝)とやや浅い土坑や溝、古墳1基がそれぞれ検出されている。北側で検出された遺構については、上面に3層が堆積していない箇所で見出されており、また上層の第3層中や遺構埋土から出土遺物が極めて少ないため遺構の帰属時期がはっきりしないが、少なくとも中世以前のもので推測される。

18溝(図49、写真図版16-3) 東西尾根の北側、調査区の西端から東にむかってのびる幅1.3m、深さ0.4m程度の溝で、4.0m分が検出された。埋土の上層には黄褐色シルトが、下層には炭混じりのオリーブ褐色シルトが堆積する。周辺に古代の包含層(第3層)が堆積していないため、第1面に帰属する可能性も残されるが、下層埋土と第3層の土質が近いため、第2面の遺構と考えられる。周辺からは瓦器片や8世紀代の138須恵器壺Lが出土しており、少なくとも中世以前に遡る可能性が極めて高い。

19溝(図49) 18溝にほぼ併行しており、幅0.8m、深さ0.3mを測る。18溝と同様に、埋土の上層には黄褐色シルトが、下層には炭混じりのオリーブ褐色シルトが堆積する。埋土の堆積状況などから18溝と同時期に機能していたと考えられ、中世以前に遡ると判断することができる。

20土坑(図49) 調査区北側の斜面上方で検出された縦に長い形状の土坑で、長さ2.5m、幅1.2～0.6m、深さ0.2mを測る。遺物が出土しておらず、地山面で検出されたが周辺には第3層が堆積していないため、第1面に帰属する可能性も残されるが、埋土は炭が混じる褐色シルトで、第1面の遺構埋土とは容易に区別されることから、第2面の遺構と推測することができる。

21土坑(図49) 20土坑の南東4mに位置し、長さ1.6m、幅0.3～0.4mをはかる細長い形状の土坑で、深さは0.05mと浅い。20土坑と同様に、埋土は炭が混じる褐色シルトである。

22土坑(図49、写真図版16-4・5) 21土坑の南4mに位置し、長さ1.7m、幅0.5～0.8mをはかる土坑で、深さは0.05mと浅い。20・21土坑と同様に、埋土は炭が混じる褐色シルトである。

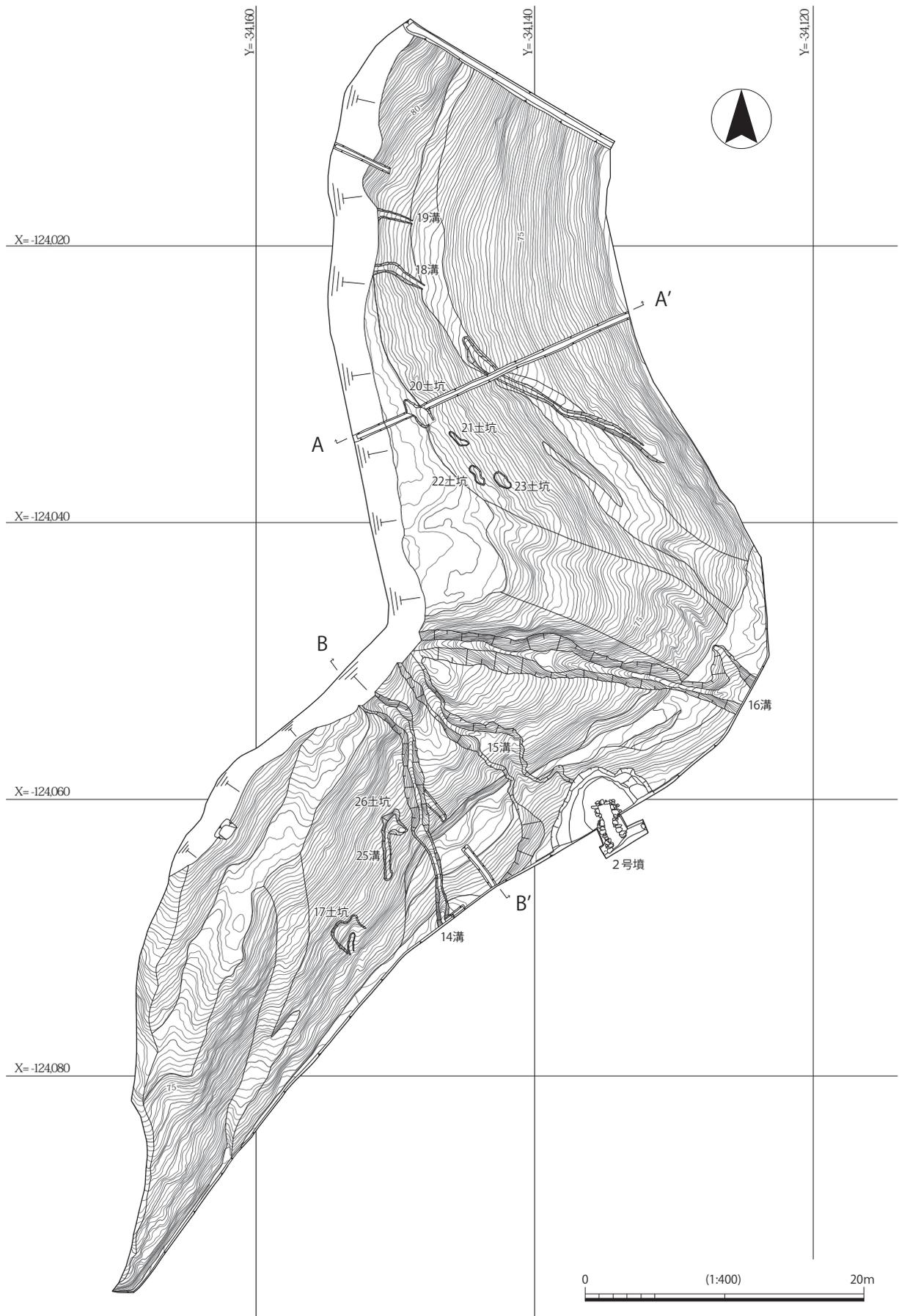


图 48 成合地獄谷遺跡 5区 第2面 全体平面図

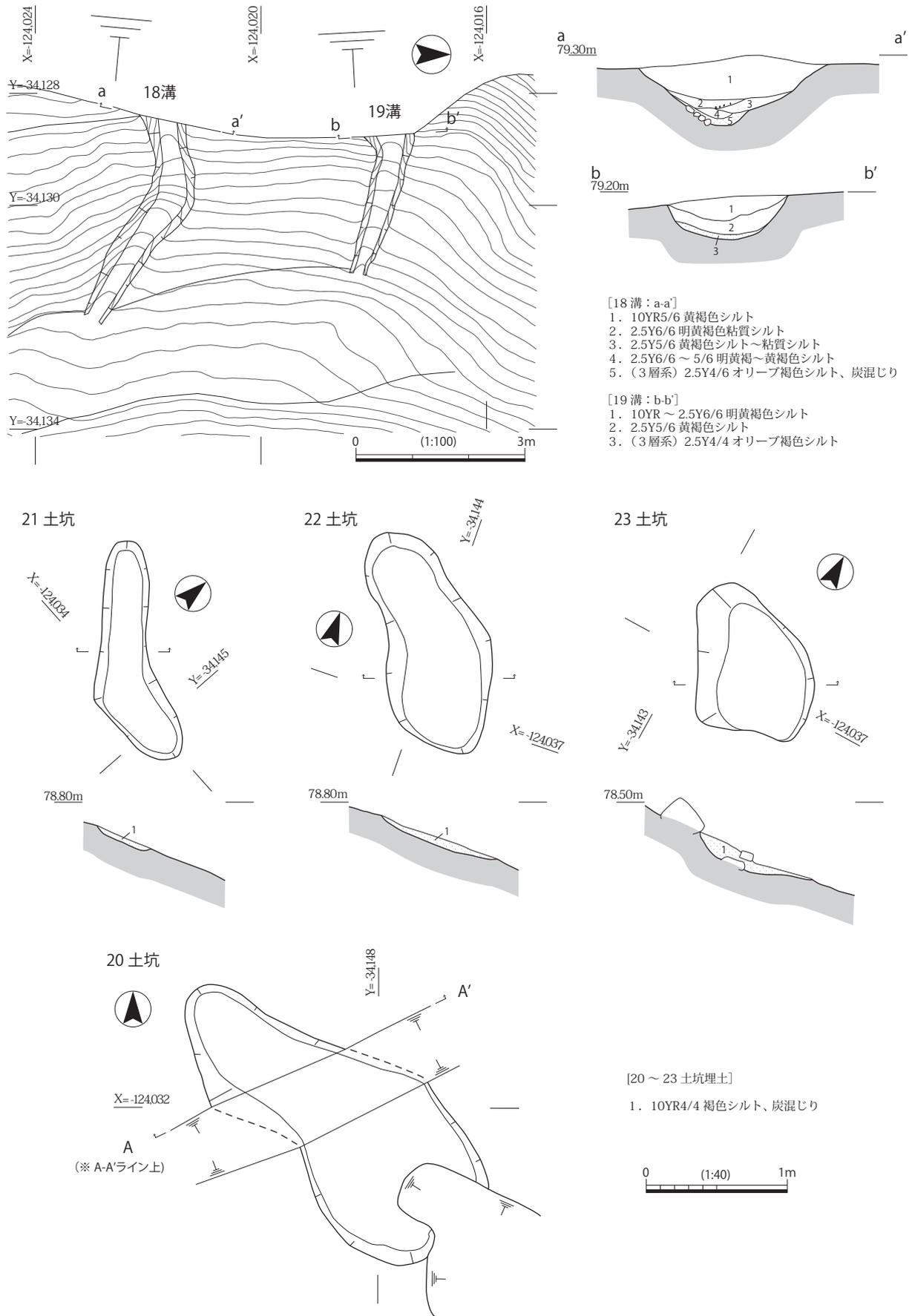


図49 18・19溝・20～23土坑平面図・断面図

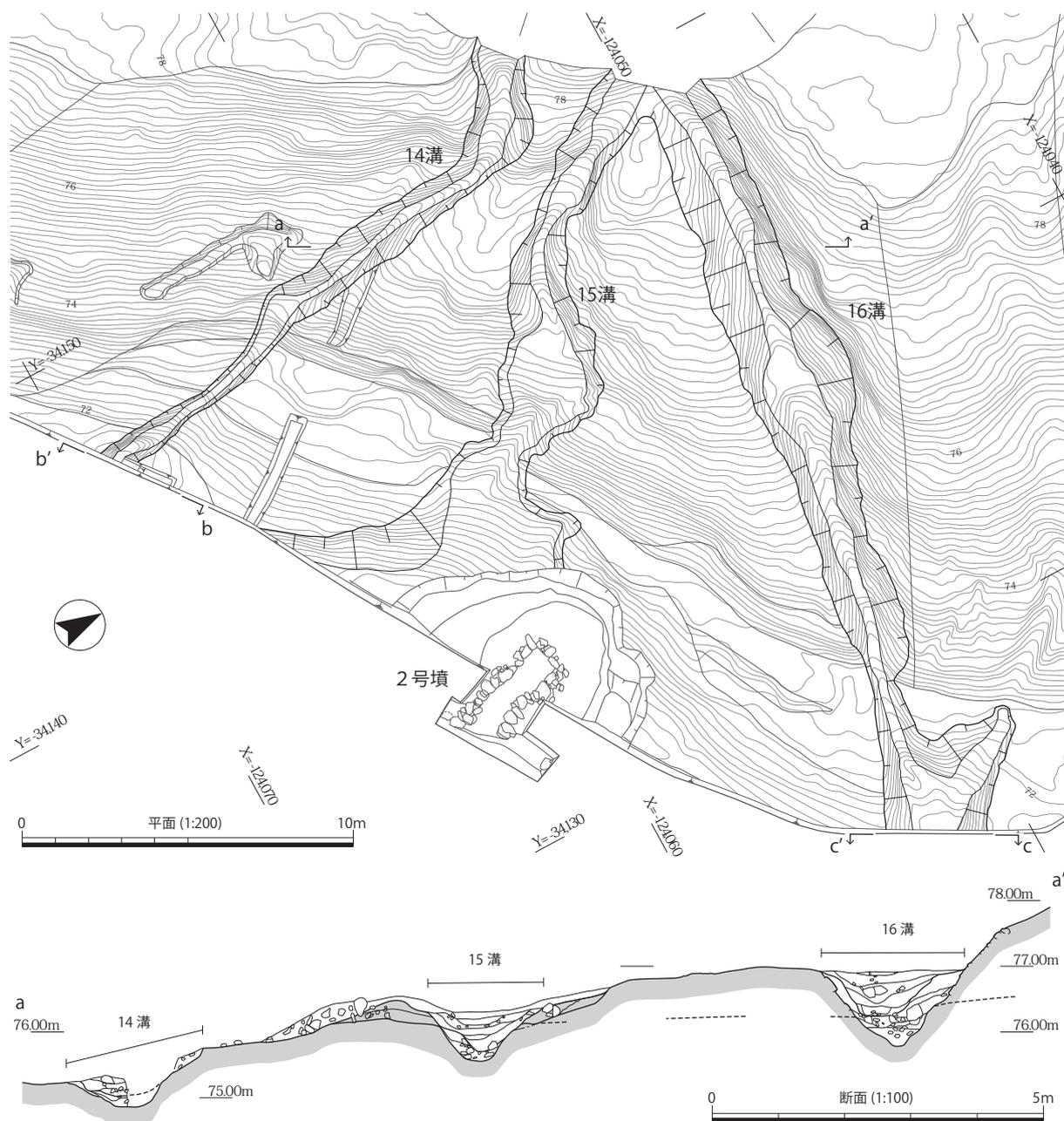


図50 14・15・16溝平面図・通し断面図

23土坑(図49) 22土坑の東2mに位置し、1.2m×0.9m、深さ0.15mをはかる不正円形の土坑で、埋土は20～22土坑と同様の炭が混じる褐色シルトである。

14・15・16溝(図50・51、写真図版17-2～5、18-1・3) 東西尾根の南側では3条の溝が検出された。南側の14・15溝は北西から南東方向に、最も北の14溝はすぐ北側の尾根に沿うように西から東にむかってそれぞれのびる。いずれも幅が2m前後、深さが1.5～2.0m程度と深く、また上面では3層が検出されていないため全て地山(基盤層)上面で検出されている。

埋土については、上層には2層に似た自然堆積が認められ、第2面の時期には機能していたことがわかる。その下層には土壌化した暗色帯(14溝:11、15溝:8、16溝8)が確認でき、この土壌層は古代の包含層第3層と対応する可能性が高い。また15・16溝の下層には周辺の基盤層に由来する砂礫の堆積がみられる。埋土中からは遺物が一切出土していないため、形成された時期や性格ははっきりし

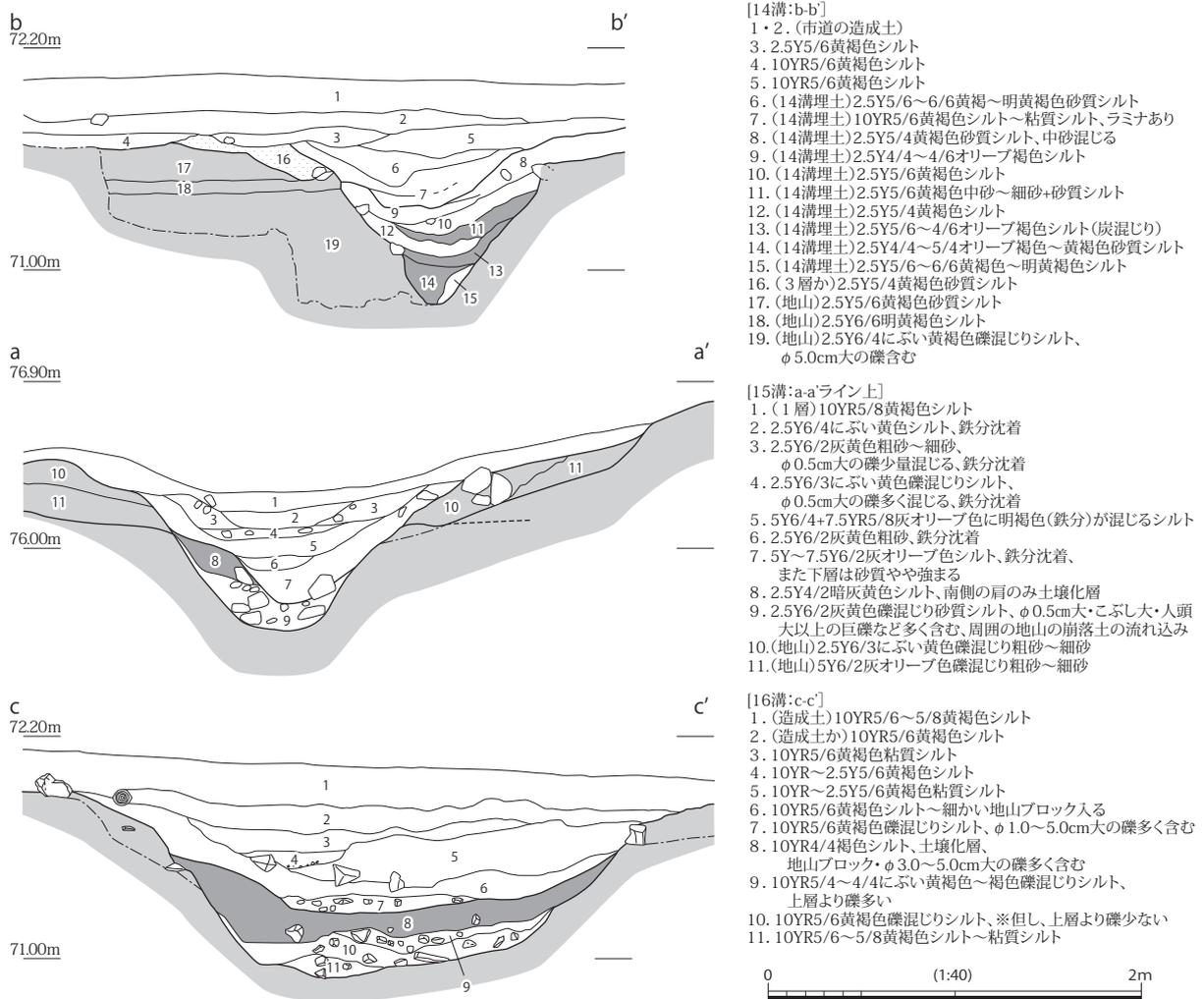


図51 14・15・16溝断面図

ないが、一部で湧水もみられることから古くに形成された自然の流路・谷の可能性が高いだろう。

なお、この3条の溝のうち15溝と16溝は斜面上方の調査区外では同一であったものが、この5区の中で枝分かれしたものであることがわかる。また14溝・16溝はいずれも深さを保ったまま斜面の下方へのびていくが、15溝については調査区の南端で西向きに方向を変えつつ広がって浅くなる。この15溝の屈曲部分の東で成合地獄谷2号墳が検出されており、東側の肩は周溝をめぐらすために掘削されていることから、14・15・16溝は2号墳の築造以前に既に機能していたことがわかる。この15溝は、方向的には2・4区で検出された18侵食痕と接続する可能性が高く、埋土の上層(2~7)部分がそれに対応する可能性がある。

17土坑(図52、写真図版18-4) 南側斜面中で検出された径2m程度の不正円形の土坑であるが、南東斜面下方側は崩落ないしは市道の造成に伴う改変を受けており正確な形状は不明である。深さは0.2m程度と浅いが、上層に土壌化した暗色帯が堆積しており、埋土中からは古代と考えられる土師器片が出土している。

25溝・26土坑(図52、写真図版18-5) 15溝の南西側で並行して25溝が検出されており、その北側にやや深い落込み26土坑がみられる。25溝は、長さ4.7m、幅0.4~0.6m、深さ0.1mをはかる細長い形状を呈し、26土坑は約2m程度の不正形で深さが0.3m程度である。いずれの埋土も暗灰黄

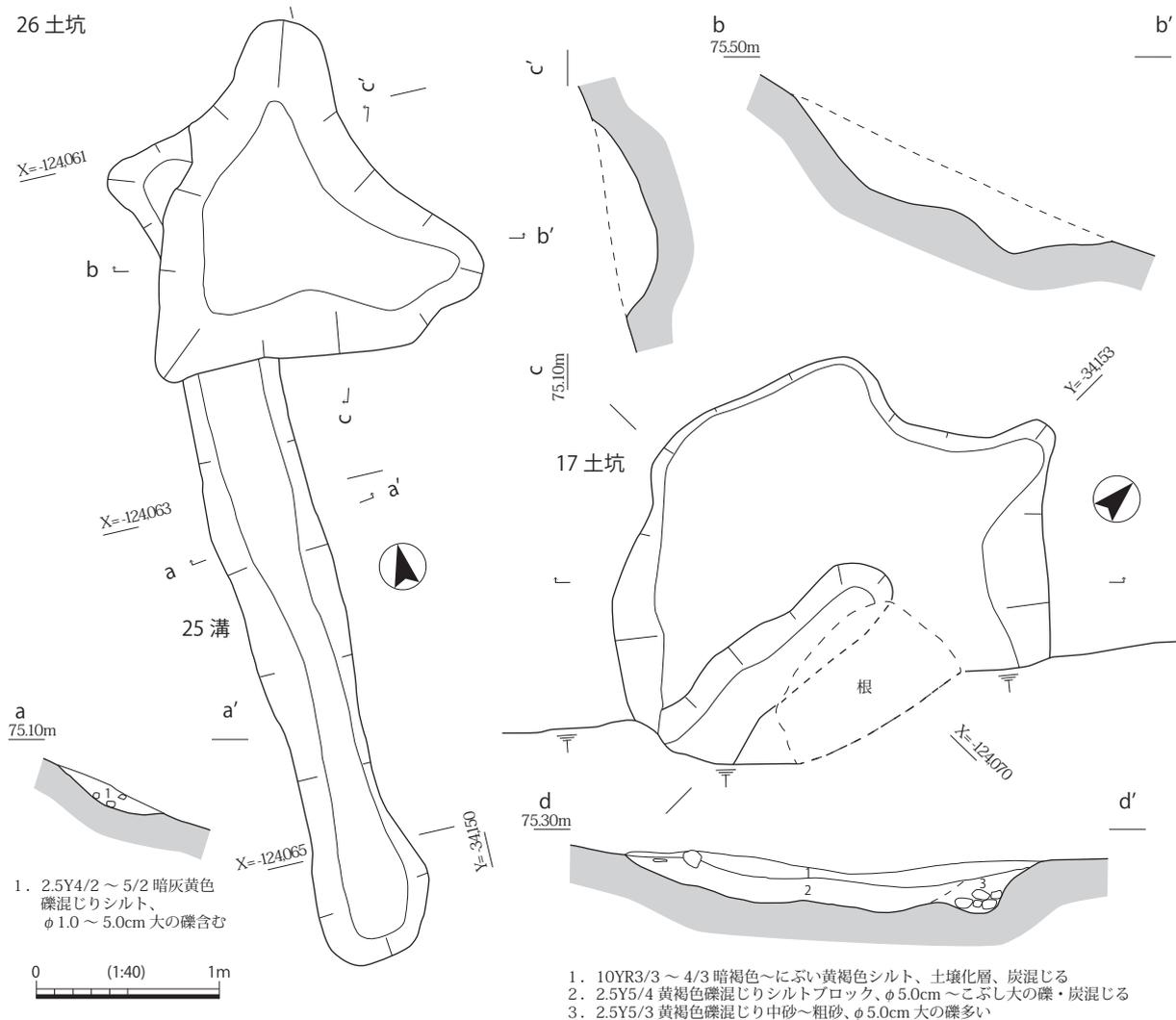


図 52 17・26 土坑・25 溝 平面図・断面図

色シルトに周辺の基盤由来の円礫が多く混じる。遺物の出土がないため、時期・性格は不明である。

5. 小結

5区は斜面部分にあたる調査区であったため、明確な遺構も極めて少ない。また出土遺物についても上方からの流れ込みや近世以降の耕作による造成段に伴うと考えられる出土遺物がわずかに出土したのみである。調査区を横断する 14・15・16 溝については、古くから機能していたと考えられる自然の谷筋と推測されるが、古墳築造以降から古代の段階はもとより、耕作地となる以前まで機能していたと考えることができる。後述する成合地獄谷 2 号墳が斜面下方の調査区東端で検出されており、古代の遺構や古墳群の広がりを判断するデータを得ることができた。

(笹栗)

第5節 成合地獄谷古墳群

成合地獄谷遺跡の調査では、4区で横穴式石室を伴う古墳と明確な墳丘をもたない竪穴式小石室が1基ずつ、5区で横穴式石室を伴う古墳1基が検出され、これらの古墳は高槻市教育委員会によって新たに成合地獄谷古墳群として命名されている（図53）。

1. 立地と群構成

今回の調査で検出された古墳は、墳丘を伴う2基の古墳（1・2号墳）と竪穴式小石室が1基確認されたにすぎないが、地形的には2・4区の東側、5区中央に東西方向にはしる尾根より南側の未調査地には古墳の存在が推測される。現状では墳丘の高まりは一切みられないが、今回検出された古墳も全て自然堆積と耕作段の造成によって埋没していたことなどを勘案すると、未調査地にも耕作段の法面付近に古墳が存在する可能性は高い。

なお、1号墳と2号墳は南東方向の斜面地の傾斜変換点付近に古墳が築造されており、傾斜が急になる西側には基本的には古墳はひろがらない。ただし5区の北西、一段あがった3区で7世紀代の完形の須恵器が複数出土している。これらの須恵器は、時期的には古墳群に比べやや新しい時期のものが多く、古墳が存在した可能性は否定できない。また、1号墳の東と南には平坦～緩斜面地がみられるが、そこには先に報告した墓をはじめとする8・9世紀代の遺構がひろがっている。これらの遺構群と古墳では時期的には断絶がみられることから、古代の遺構によって古墳が削平された可能性を考慮する必要がある。現状では1号墳と2号墳の距離は70m離れていることから、散在的な分布傾向を示しており、未調査地と削平された古墳を含めると、古墳の総数はせいぜい5基前後の可能性が推定される。

（笹栗）

2. 成合地獄谷1号墳（図54～56、写真図版19～21）

検出状況 2L-7c・7d区、丘陵南端の南東斜面、標高62.0～62.5mの地点に位置する。4区第1層掘削中に、斜面直下から、棚田の石垣や裏込石とは異なる、0.1m×0.3m×0.5m前後の巨石2個が、1.0mの距離を置いて出土した。巨石を残したまま掘削範囲を広げていったところ、更に巨石が並んで出土し石列やその間に崩落した状態の巨石が現れたことから、横穴式石室の一部と判断された。その後、第2面の調査を終え、丘陵斜面の棚田造成層を除去したところ、平坦部に、帯状に堆積する0.5～10.0cmの中礫や炭化物を含む第3層を検出し、これを手掛かりとして、古墳周溝プランを検出した。墳丘の頂部と南半部の大半が削り取られ、石室内には天井石や0.3～10cmの細礫～中礫を含む灰黄褐色や明黄褐色のシルト質砂層が堆積していた。

古墳は、地獄谷川と東檜尾川との合流地点から、南北両側に丘陵が迫る狭隘部を抜けて谷底平野に入ってすぐの丘陵先端部、南東方向に向いて築造されていた。

墳丘 古墳は、丘陵側の周溝肩のラインがほぼまっすぐにのびている点と、残存する墳丘形状から方墳と推定され、周溝を含む規模は一辺7.68mとなる。周溝底面は丘陵寄りの北側で標高62.87m、南側で62.3m、石室構築面は62.42m。墳丘の最高所は63.62mで、墳丘高は周溝底面から約0.75m、石室構築面からは約1.2mをはかる。

第5節 成合地獄谷古墳群

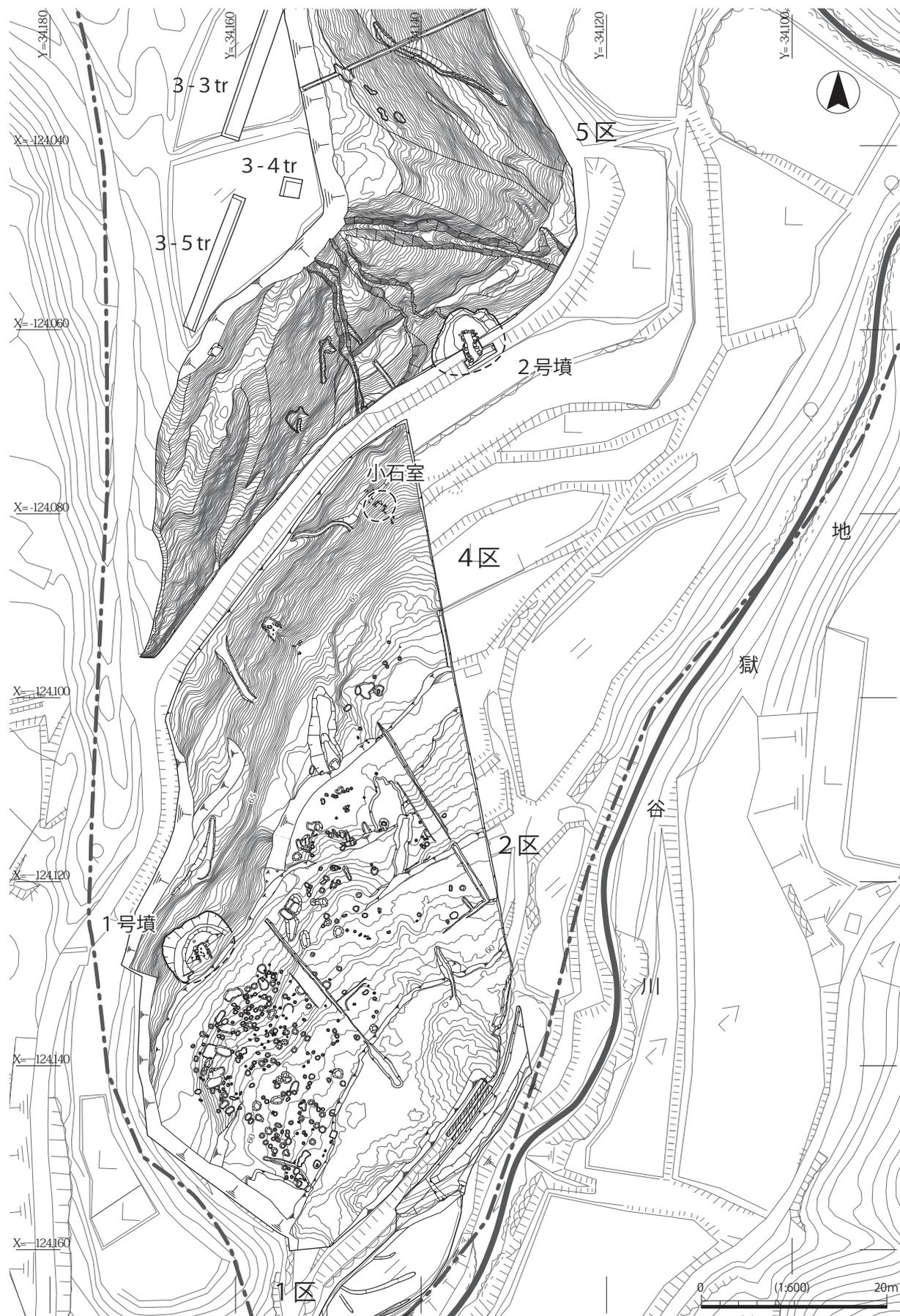


图 53 成合地獄谷古墳群全体平面图

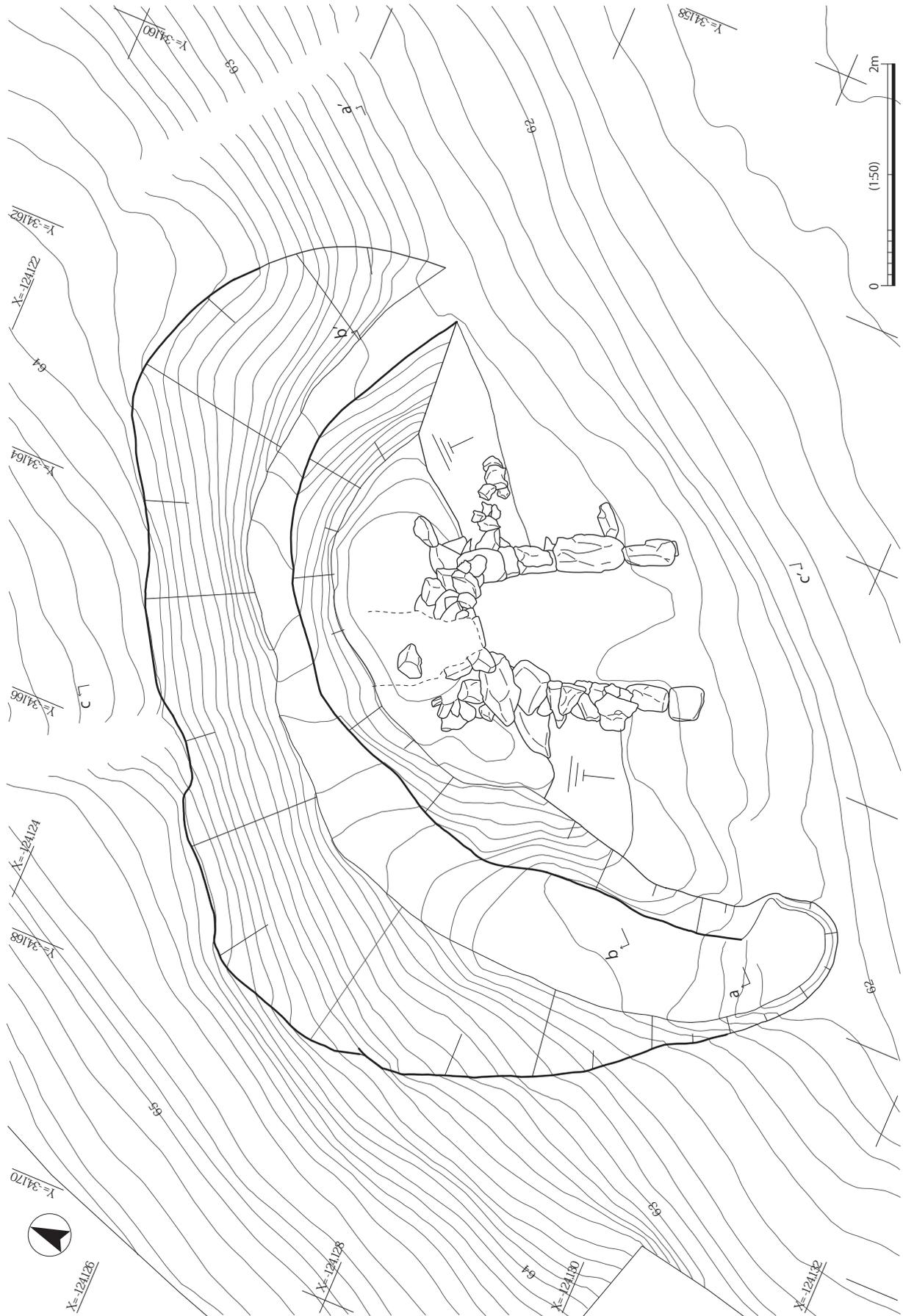


図 54 1号墳 墳丘平面図

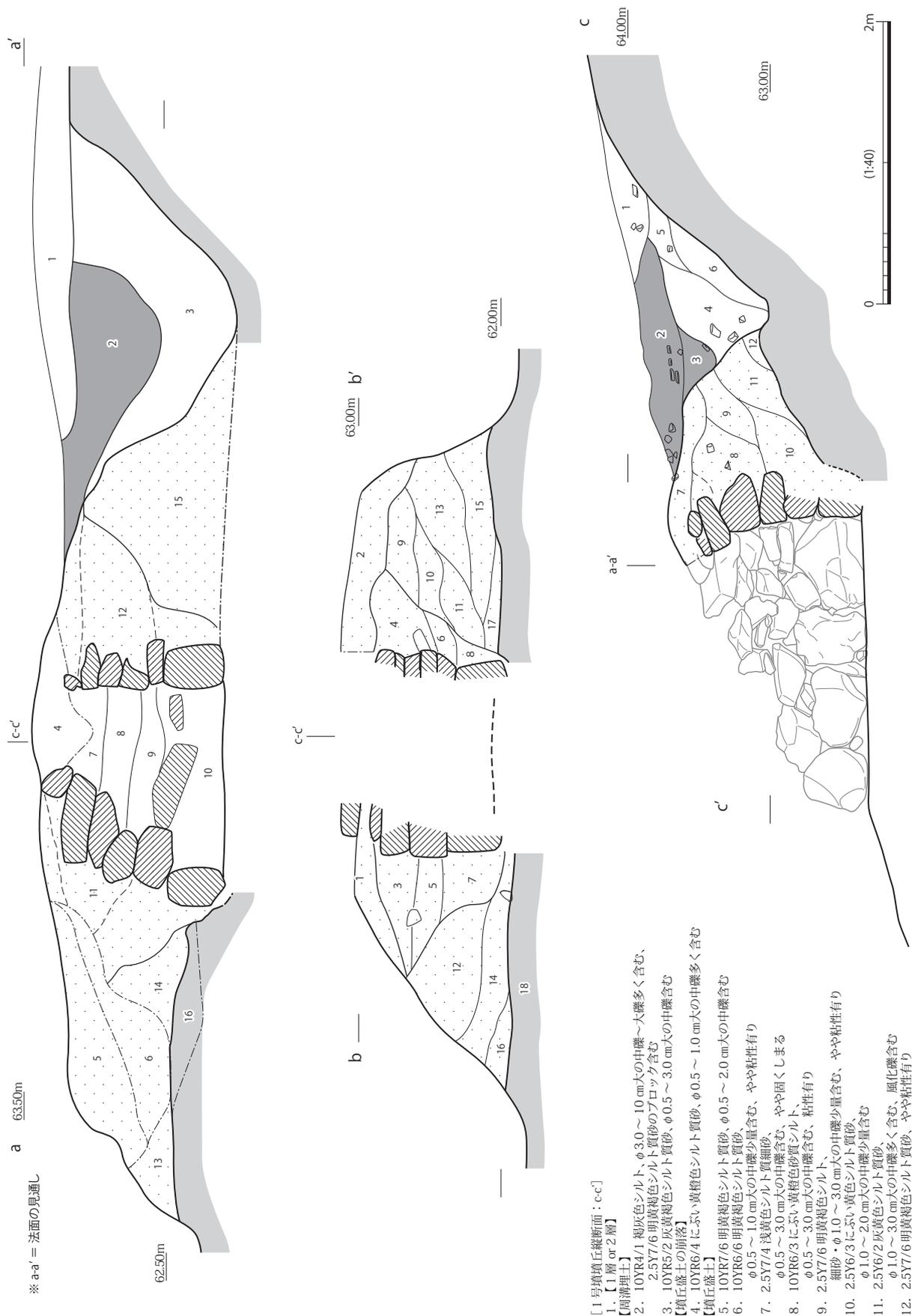


図 55 1号墳墳丘断面図

【1号墳横断面法面見通し：a-a'】

1. (1 or 2層) 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト質砂(細砂)、
φ 1.0 ~ 10.0 cm大の中礫~大礫多く含む
- 【周溝埋土】
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト、φ 0.5 ~ 1.0 cm大の中礫多く含む
(※ c-c' : 2・3 に対応)
 3. 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト、
やや粘性あり、φ 5.0 ~ 10.0 cm大の大礫含む (※ c-c' : 4~6 に対応)
- 【流土・盛土の崩落土】
4. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトと 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト、
φ 1.0 cm大の礫混じるシルト、ブロックあり、しまりあり(盛土崩落土)
 5. 10YR5/2 灰黄褐色シルト、φ 0.5 ~ 1.0 cm大の中礫多く含む
 6. 10YR6/4 にぶい黄褐色、φ 0.5 ~ 5.0 cm大の中礫含む、
礫間にはシルト質砂
- 【石室内流入土】
7. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト~シルト、やや粘性あり、
しまりあり、ブロックあり、φ 1.0 cm大の中礫含む
 8. 10YR5/6 黄褐色シルト~細砂、ラミナがみられる
 9. 2.5Y4/4 褐色細砂
 10. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト、やや粘性あり
- 【墳丘盛土】
11. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト質砂(細砂)、
φ 1.0 ~ 5.0 cm大の中礫多く含む
 12. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト、φ 0.5 ~ 1.0 cm大の礫含む
 13. 10YR6/6 明黄褐色シルト質砂(細砂)
 14. 10YR7/6 明黄褐色シルト、φ 0.3 ~ 1.0 cm大の中礫含む
 15. 10YR6/6 明黄褐色シルト、
φ 0.5 ~ 5.0 cm大の中礫を含み、固くしまる
- 【地山】
16. 10YR7/6 明黄褐色シルト、φ 0.3 ~ 0.5 cm大の細礫~中礫含む、
やや粘性を有し、固くしまる

【1号墳横断面：b-b'】

- 【墳丘盛土】
1. 10YR6/8 明黄褐色砂質シルト、φ 1.0 cm以下の中礫多く含み固くしまる、
主体は φ 0.5 cm大の中礫で、φ 6.0 ~ 8.0 cm大の大礫も含む
 2. 2.5Y7/4 浅黄色シルト質細砂、φ 0.5 ~ 1.0 cm大の中礫多く含む
 3. 10YR5/6 黄褐色シルト質砂、φ 1.0 cm以下の中礫を主体とする礫多く含む、
2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂のブロックや φ 6.0 ~ 8.0 cm前後の大礫含む、
固くしまる
 4. 2.5Y8/4 淡黄色砂質シルト、φ 0.5 ~ 1.0 cm大の中礫含み、固くしまる
 5. 10YR5/6 黄褐色シルト質砂、礫の混入は少ない
 6. 2.5Y7/4 浅黄色シルト質砂、わずかに粘性あり、φ 0.5 ~ 1.0 cm大の中礫含む
 7. 2.5Y5/6 黄褐色砂質シルト、やや粘性あり、
上層には φ 0.5 cm大の礫やや含む
 8. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト質砂、やや粘性あり、φ 0.5 cm大の礫含む
 9. 10YR8/6 黄褐色砂質シルト、やや粘性あり、φ 0.5 ~ 5.0 cm大の中礫含む
 10. 2.5Y8/6 黄色シルト質砂、φ 0.5 ~ 3.0 cm大の中礫少量含む
 11. 10YR7/6 明黄褐色細質シルト、
φ 0.5 ~ 2.0 cm大の中礫や 10YR6/2 灰黄褐色シルトのブロック含む
 12. φ 1.0 ~ 3.0 cm大の中礫を主体とする礫層、
礫間は 10YR6/8 明黄褐色シルト質砂や 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
 13. 2.5Y7/4 浅黄色砂質シルト、やや粘性あり、φ 0.5 ~ 1.0 cm大の中礫少量含む
 14. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質砂、φ 0.3 ~ 0.5 cm大の中礫やや多く含み、
φ 1.0 cm大の礫も含む、ややしまりあり
 15. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト、
粘性あり、φ 0.5 ~ 3.0 cm大の中礫含み、やや固くしまる
 16. φ 1.0 ~ 2.0 cm大の中礫を主体とする礫層、
礫の間に 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質砂、あまりしまりなし
 17. 2.5Y7/3 浅黄色砂質シルト、
粘性あり、φ 0.5 cm大の中礫少量む、やや固くしまる
- 【地山】
18. 2.5Y7/6 明黄褐色シルト質砂および礫、しまりあり

古墳は、背後の丘陵斜面をカットした後、北側の周溝中心から約 1.0 mの地点からさらに 0.2 ~ 0.3 m掘り下げて石室構築前の基盤面を造って、石室と墳丘構築の基礎が作られている。また、墳丘は、丘陵斜面の掘削土を内側に土手状に盛って基底部とし、石室を構築した後もさらに土を持って墳丘としている。墳丘盛土は一様ではない。0.3 ~ 1.0cmの中礫を多く含み、あまりしまりのないシルト質砂や 0.5 ~ 5.0cmの中礫を含み、やや固くしまったシルトなどが盛られている。南西側の墳丘盛土に砂礫の混入が多い。墳丘中心軸は、真北に対して 35° 12'、磁北に対して 28° 13' 西に振っている。

周溝 周溝は、丘陵側のラインは比較的明確であったが、墳丘側は周溝埋土と墳丘盛土が酷似していることもあって、曖昧なラインとなっている。この傾向は特に墳丘南西側で顕著であった。基底部幅 0.4 ~ 0.8 m、上端幅 1.68 ~ 2.6 mで、周溝底は、北側が高く、南側は北側より 0.6 m低く、深さ 0.75 ~ 1.4 m前後である。周溝底面はほぼ平坦で、丘陵側の壁は直線的に立ち上がる。墳丘規模と丘陵斜面の元々のラインを復元した場合、南東側に周溝は巡っていなかったと考えられる。周溝の埋土は、地点によって異なるが、概ね 0.3 ~ 0.5cmの細礫~中礫を多く含むシルト質砂を主とし、周溝埋没後の窪地には、第3層が堆積する。周溝から遺物は出土しなかった。

埋葬施設 横穴式石室の中心軸は、墳丘南北の中心軸に対して約 5°程西に振っている。石室奥壁を斜面地側に寄せ、南東側を開口しており、開口方向は東に 23.2°振れる。石室前面部分が削平されているため、袖の有無については不明で、現存する石室規模は幅 0.9 ~ 1.0 m、長さ約 2.0 m、奥壁部で高さ約 1.0 mである。石室は、墳丘構築の際に確保された平坦部をさらに 0.2 m程掘り下げ、さらに 0.1 m程整地した後に、石室を構築している。石室床面は、周溝底より低く、開口部に向かって僅かに傾斜する。奥壁の石積みは 5段で、2段目からは持ち送り気味に積まれ、断面アーチ形を描く。両側壁はほとんどが失われ、石積みの状態は定かでない。奥壁際で天井部に向かってやや内傾していることから、奥壁同様持ち送り気味に積まれていたと推定される。石室1段目は、長さ 0.3 m前後、高さ 0.2 m前後、幅 0.2 ~ 0.3 m前後の石材を横積みし、目地を通して。2段目から4段目までに使用する石材の選択や石積みには1段目ほどの規格性がないが、各段とも高さの方向の目地は概ね通っており、石材間の隙間には拳大の石が詰められている。

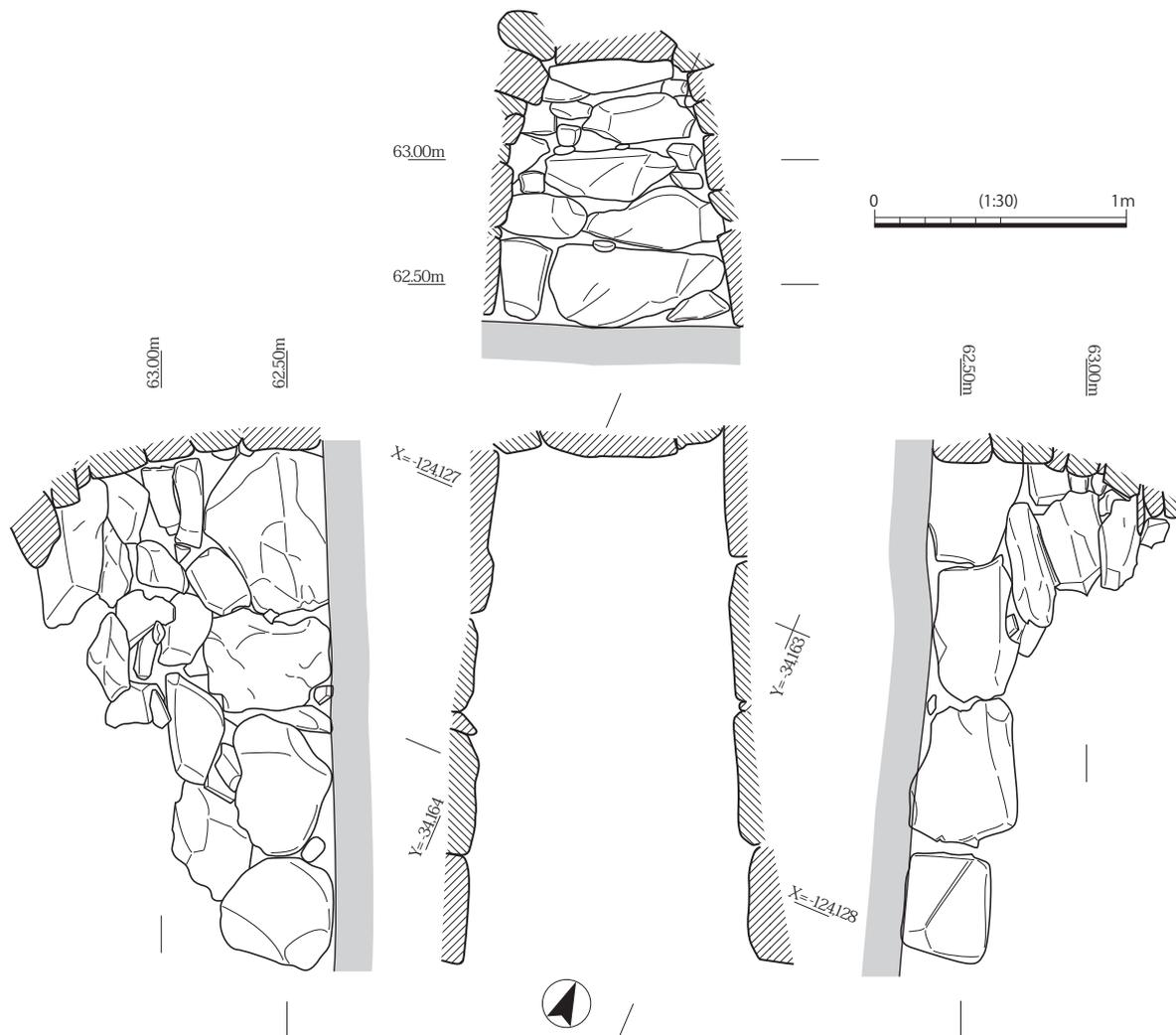


図56 1号墳 横穴式石室

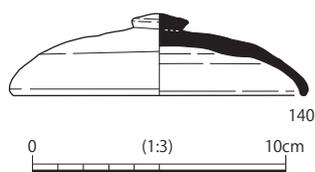


図57 1号墳 出土遺物

側壁側には、側壁構築後、墳丘盛土とよく似た礫を含む砂質土が裏込めされ、奥壁側は石室構築材と同様の石を積んだ後に砂質土で裏込めされている。

石室内の状況 石室床面は開口部側に向かってやや傾斜する平坦な面で、敷石や排水施設などは施されていない。石室床面に遺物は残っていなかった。

また、床面および床面直上の堆積土をサンプリングして洗浄し、遺物の有無の把握につとめたが、微細遺物を含め何も採集されなかった。石室内の二次堆積層から、ほぼ完形の須恵器杯蓋（140）が1点出土した。

（金光）

出土遺物 石室内の埋土から出土した140杯蓋は、口径11.6cm、器高3.8cmをはかる（図57）。口縁部にはかえりはなく、端部が丸くおさめられ、やや扁平なつまみがつく。形状等から飛鳥Ⅲ～Ⅳ、7世紀後半に位置づけられる。石室の床面からやや遊離して出土しているものの、本古墳に伴うものと判断して差支えがないだろう。ただし時期的にはやや新しい7世紀後半代のものであることから、古墳築造時の時期を直接的に示すかどうか判断がやや難しい。

（笹栗）

3. 成合地獄谷2号墳（図58～61、写真図版22～24）

5区・第2面で検出された。斜面下方の調査区東端、 $X = -124,060$ 、 $Y = -34,135$ 付近、2号墳からは約70m北東に位置する。耕作地として利用された平坦面の最下段にあたるため、調査前には墳丘の高まり等は一切みられなかった。事業地内からは墳丘の半分程度と横穴式石室の奥壁側の一部が検出され、墳丘および石室が事業地外の南東方向にのびることが判明した。調査区の東を沿うように南北に市道が通っており、この部分は事業地外になるものの、高速道路の建設に伴う工事の影響を受けることから、市道部分は付け替え工事をおこない高槻市に移管する予定となっていた。そのため大阪府教育委員会の指示により、石室部分については調査区を拡張して調査を進めた。

（1）墳丘と周溝

墳形と規模・外部構造 墳丘と石室の半分程度が事業地外にのび、かつ墳丘前面部分は耕作に伴う段造成によって削平を受けているため、墳丘の規模や形状については検討の余地が残るが、石室右側壁（西側壁）の最前面は開口部にあると判断できる。この右側壁の最前面から西にむかって石材の並びが確認でき、さらに左側壁については前面部分が耕作による段造成によって削平を受けているものの、法面に石材の露出がみられたことからこの部分を精査したところ、反対側と対応する石材が確認できた。このため前面部分には外護列石がめぐらされていたことがわかる。

事業地内で検出された墳丘裾のラインと確認された列石の位置から墳丘の形状を復元すると、本古墳は墳丘の東西長5.75m、南北長5.5mの円墳で、墳丘前面側は横に広がる面をもちつつ円弧を描き、墳丘の後背部にむかってすぼまるようなややいびつな形状となる（図58）。墳丘と石室の位置関係については、石室の奥壁から手前0.3m付近に墳丘の中心がくる。なお、墳丘裾から残存する墳丘面までの高さは東側で1.25m、西側で0.75mである。

旧地形と墳丘の立地条件 東西の横断面（a-a'）と南北の縦断面（b-b'）から、墳丘の構造や周溝の堆積状況、旧地形と古墳の立地の関係を把握することができる。

墳丘は北から南に下がる斜面地に立地しており、墳丘の斜面北側は急傾斜であるが後背部付近からは傾斜が緩くなっているようで、墳丘は傾斜の変換点付近に位置する。この旧地形を利用して墳丘後背部は大きくカットして地山を水平に整形しており、この面に石室の基底石を据えて、墳丘はほぼ盛土によって構築していたことが判明している。

また、墳丘の北東には東西方向の尾根筋が走っており、墳丘の西側は自然の谷と考えられる15溝と接していることから、大きくは浅い谷部に古墳が築造されていることがわかる。ただし横断面を詳細に観察すると、基盤層は東側周溝から墳端付近にむかっていったん落ち込んだあと、石室部分にむかってわずかな高まりがみられ、西側についても15溝が存在することから、石室中心部よりも本来的には周溝付近がやや低かったことが想定できる。平面的にも石室の左奥側のコーナー付近を通る南北方向の通る基盤の高まりが確認できており、このわずかな高まり部分を利用して古墳が築造され、ここに石室がおかれた可能性が高い。

盛土と構築方法 先に述べたように墳丘は基底面を平坦化したのちに、大部分が盛土によって構築されていることが判明している（図59）。横断面のライン上では石室最下段の基底石は地山をわずかに掘り窪められて据えているが、墳丘の基底面は70.8m～70.9m程度の高さに一定に揃えられており、ほぼ盛土によって古墳を構築していることは明らかである。ただし墳丘・石室が北から南に下る斜面地に立地していることから、南側（開口部側）は若干の盛土を施して床面を整形していることが確認できる。

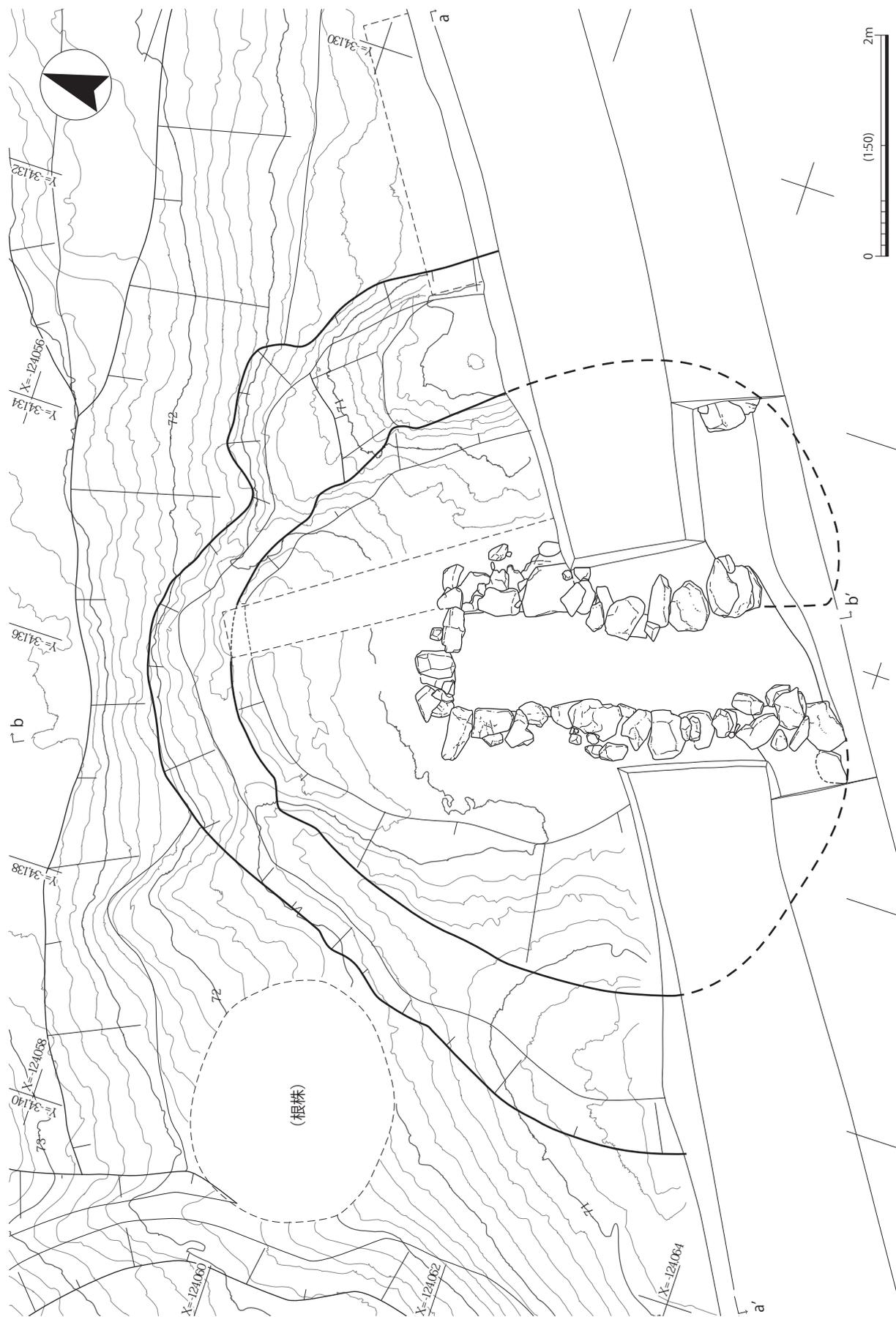


图 58 2号墳 墳丘平面図

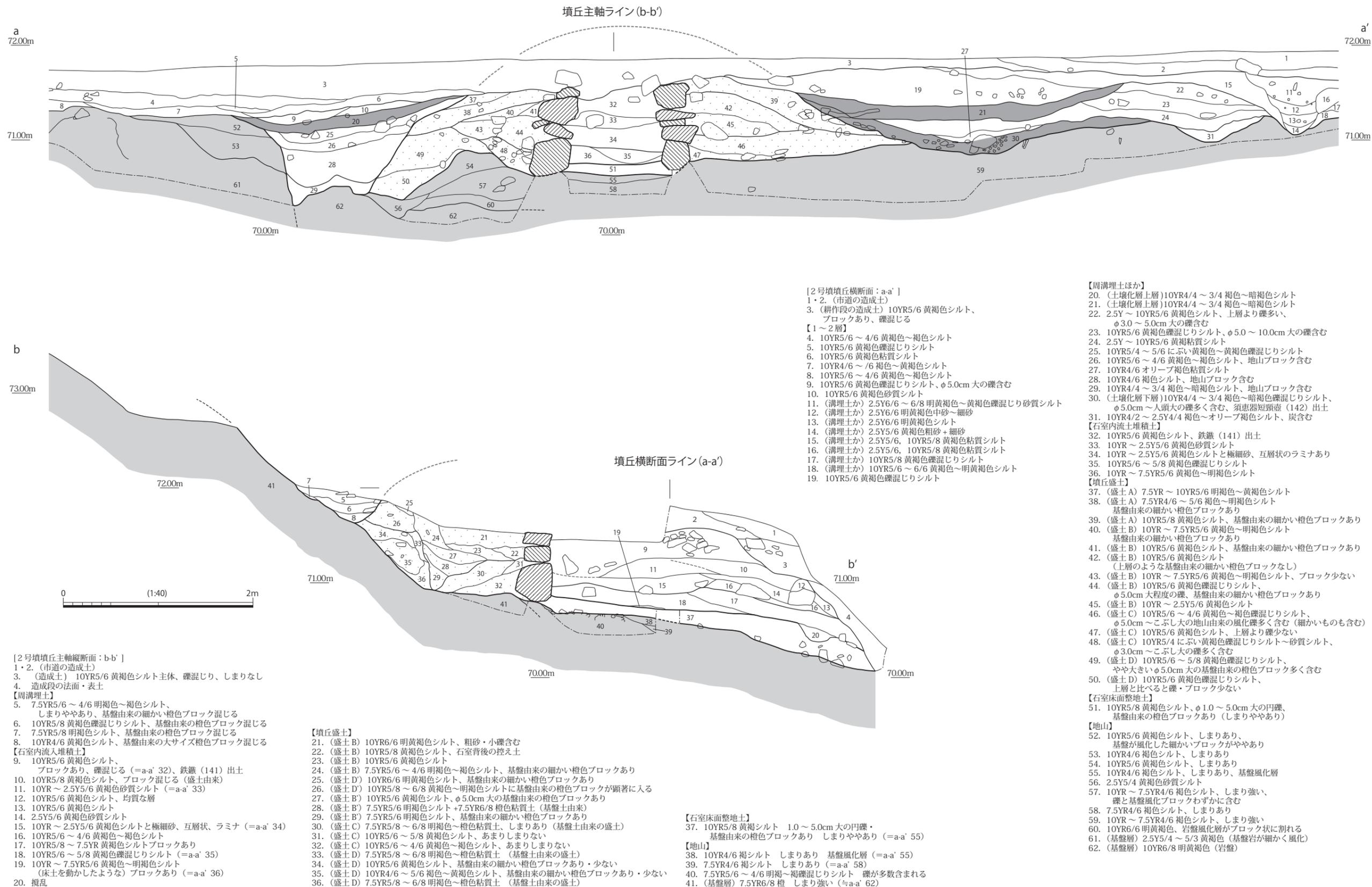


図 59 2号墳 墳丘断面図

また、地山の高まりがみられた石室の左奥側のコーナー付近から東側にかけては、石室の基底1石分程度の深さの地山の掘り込みが確認できる。石室の積み上げと墳丘の構築の関係については、断面の観察からは石室の基底石を据えて内側に床土を施したのち、墳丘の盛土と並行して石室を積み上げていることがわかる。

盛土の施工のあり方については、墳丘の東側と西側でやや異なる様相を呈する。まず墳丘の後背部から東側では、墳丘裾付近に土手状の盛土が施されていることが確認でき（盛土D）、石室の概ね3段目の高さまでは石室の構築とともに土手状の盛土と石室背後の間を埋めるように盛土を施していることが判明している（盛土C）。それに対して西側では、単純な水平方向の盛土の堆積が観察でき、土手状の高まりはみられない。このような墳丘構築方法の違いは旧地形の影響によるものと推測できる。

また、東西の盛り土の土質も大きく異なるっているが、これは墳丘のほぼ中心付近を境に東西で基盤の構成層が大きく変化していることに起因している。墳丘の背後から東にかけて橙色の基盤層が潜り込み、西側から石室基底面にかけては斜面堆積に由来する褐色シルト層がそれぞれ墳丘の構築面となっており、特に墳丘の背後から東側にかけては盛土中に基盤由来の橙色ブロックが顕著にみられ、西側の盛土とは大きく土質が異なっている。ただし墳丘全体を覆うような単位の上層の盛土（盛土A）には、西側にも橙色ブロックが混じっていることが確認できる。

周溝 周溝については、墳丘前面は耕作による削平を受けて判断がつかないものの、少なくとも背後から側部にかけてめぐっていることが確認できる。また、墳丘の背後および東西で形状が大きく異なっており、墳丘の西側で幅1.6m、深さ0.2m、後背部で幅0.9m、深さ0.3m、東側で幅1.6m、深さ0.7mをそれぞれはかる。西側で幅広で浅いのに対し東側では深いのが特徴で、これについてもやはり旧地形や基盤面の地山に影響を受けていると考えることができる。基盤層を削り込んだ後背部は幅が狭いが、これは削平を受けているためであり、1号墳のように本来的には深い掘り込みがあったことが想定される。ただし墳丘の東西では、周溝の底面が石室基底面付近の高さまで掘り込まれているのに対し、後背部の周溝の底面の高さは残存する石室の最上段、石室の3段目の上端の高さとほぼ同一であることが判明している。このため、墳丘の後背部から側部にむかって周溝は徐々に深くなることがわかる。

周溝の堆積状況については、大きく削平を受けている後背部を除けば、東西の周溝底に土壌化層（a-a'：29・30）が堆積し、間層（a-a'：24～28）を挟んで上層にも土壌化層（a-a'：20・21）が堆積している。周溝底の埋土については、東側（a-a'：29）では暗色化しておらずブロック等も含むのに対し、西側（a-a'：30）では土壌化が進行しており、墳丘裾付近からは須恵器の壺（142）が1点出土している。その後、斜面の流れ込みによって周溝がある程度埋まったのち、もともと周溝があった窪地が土壌化していることがわかる（a-a'：20・21）。これらの層からは遺物の出土がないため、周溝の埋没の時期は不明であるが、さらにその上面に斜面の堆積層（2層・a-a'：19など）が確認できることから、耕作によって墳丘の削平を受ける前には既に墳丘のほとんどは埋没していた可能性が高い。

（2）. 埋葬施設

石室内の堆積状況 石室内には主にしまりの弱い黄褐色シルトが堆積しており、石室前面側から奥に向かってラミナがみられることから、開口部側から埋土が流入したことがわかる。このため天井部分がオープンな状態で石室が埋まったのではなく、本来は天井が架かっていたものと推測されるが、おそらくは盗掘等によって前面部分が開口し、その後自然の営力で石室が埋没したと考えることができる。なお、石室床面からは遺物は全く出土していないことから、盗掘を受けたことは确实であり、埋土の堆積状況

第5節 成合地獄谷古墳群

からもそれを裏付けることができる。なお、埋土上層 (a-a': 32、bb': 9) から鉄鏃1点 (141) と、須恵器の細片1点が出土している。

横穴式石室 南南東方向に開口する無袖の横穴式石室 (図60) で、規模は全長3.4m、奥壁幅0.95m、最大幅1.0mをはかる。開口方向は東に18.3°振れ、側壁は奥壁から開口部にむかってほぼまっすぐにのびる。

右側壁に関しては、最前面の石材が大振りであり、西側に外護列石と想定される石の並びが確認できることから先端まで残存していると判断することができる。その一方で左側壁は、奥壁から2.75m分までしか残存しておらず、前面の1・2石分は造成段によって削平を受けている。奥壁・側壁は最下段から3～4段分が残存しており、石室床面から最も高いところで残存高0.95mをはかる。また、奥壁から開口部にむかって1～1.5m付近には側壁を根が横断しているため、この部分を中心に崩落が進行している箇所もみられるが、残存している高さまではほぼまっすぐに奥壁・側壁が積み上げられていたこ

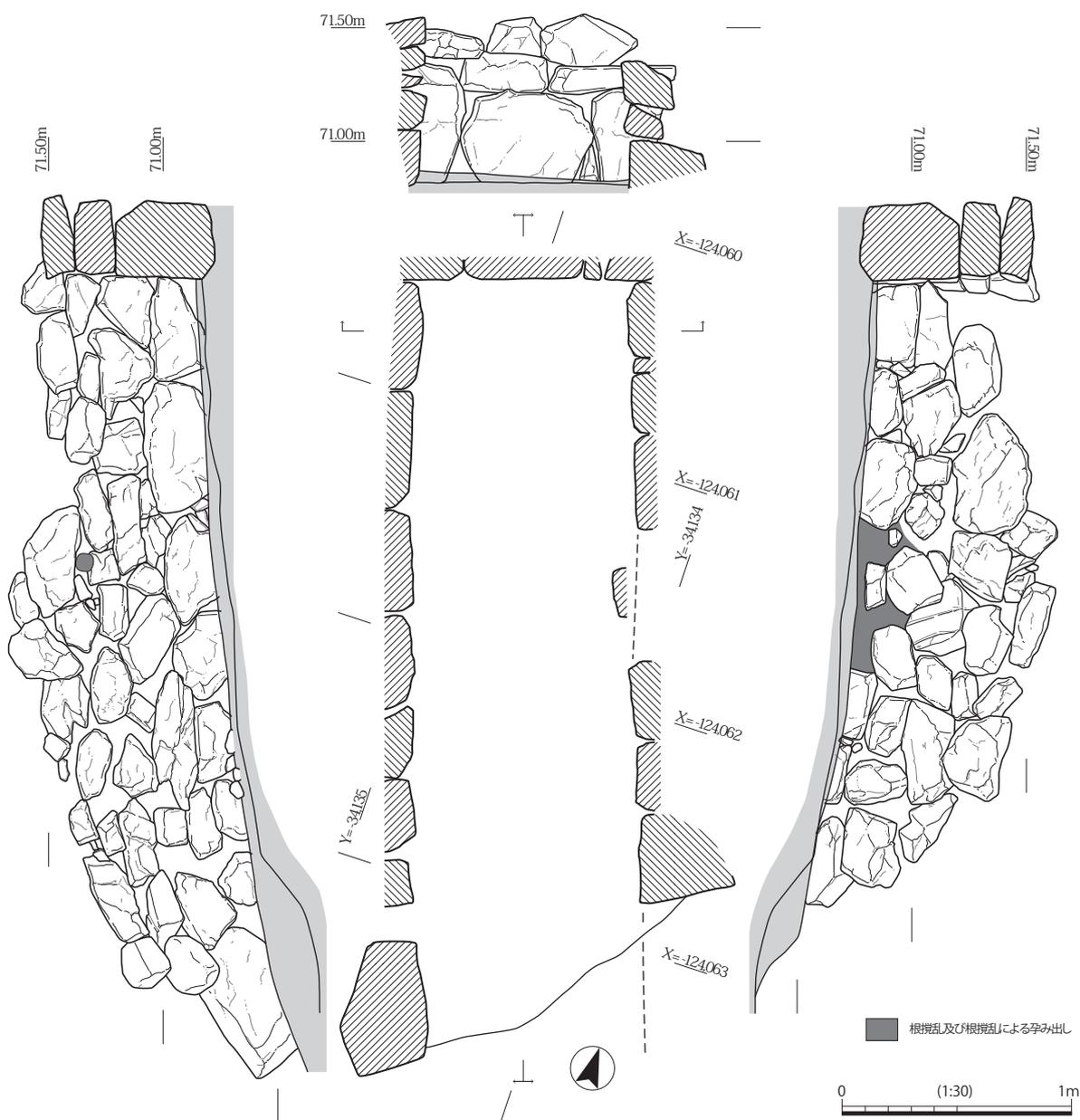


図60 2号墳 横穴式石室

とがわかる。

石室の構造や石材の積み方に関する所見を述べると、石材は周辺で見られるヒン岩やチャート類の自然石を主体的に用いており、剖面や自然面の平滑部分を内側に向ける傾向があるが、明確な石材の加工等は見受けられない。奥壁最下段にはやや大ぶりの基底石を3石据え、両側壁最下段は奥から3石分に長手積で大ぶりの石材を用いている。また、石室奥側の方は開口部側に比べて石積みが丁寧で割れ面を内側に向ける傾向があるが、開口部側は積み方が粗く自然面を内側に向ける傾向がやや強い。左側壁が根攪乱による孕み出しがみられるためはっきりしないが、右側壁では奥壁から1.8m付近を境に奥壁側と開口部側で石積みのあり方が異なることがわかる(図61)。無袖の横穴式石室ではあるが、玄室と羨道に対する空間の認識に関わる可能性を考慮する必要があるだろう。上段部の石材の積み方については、多く石材が小口面を内側に向け石室背後への引きが長いものが多い。これは盛土と並行して石室を安定的に構造するためのものと考えられる。

なお、石室の床面には敷石や棺台はみられない。床面からは遺物が一切出土していないため、盗掘によって副葬品はすべて持ち去られたことがわかる、また本来の床面の状況や、棺の構造・痕跡等は一切不明である。

(3). 出土遺物

本古墳に伴う出土遺物は、石室内の流入土から出土した鉄鍬1点(141)と須恵器の細片1点、周溝西側から出土した須恵器の壺1点(142)のみであり、このうち鉄鍬と須恵器短頸壺の2点が図化可能であった(図62)。鉄鍬は平根系の長三角形式鉄鍬¹⁾で、鍬身部分は完存しており、鍬身長2.9cm、鍬身幅2.4cm、厚さ0.3cmをはかる。鍬身の側縁は直線的で、鍬身関部は角関、断面は平造である。頸部は一部が残存するにすぎないが、頸部断面は扁平で薄い。

142 須恵器の壺は、奈文研分類の壺Bにあたる短頸の壺で、口縁端部にやや強いナデを施し肩部に弱い沈線が施されている。

(4). 年代観

出土遺物から時期を絞り込むのはやや困難であるが、石室の規模から単次葬化する以前のものと推測

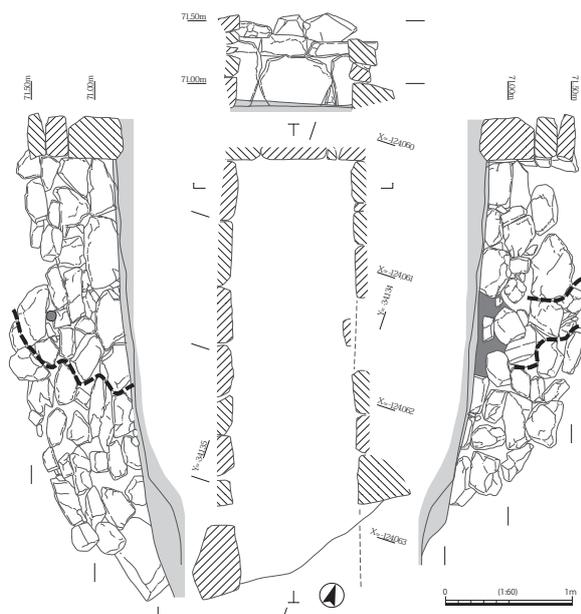


図61 石材の積み方の変化

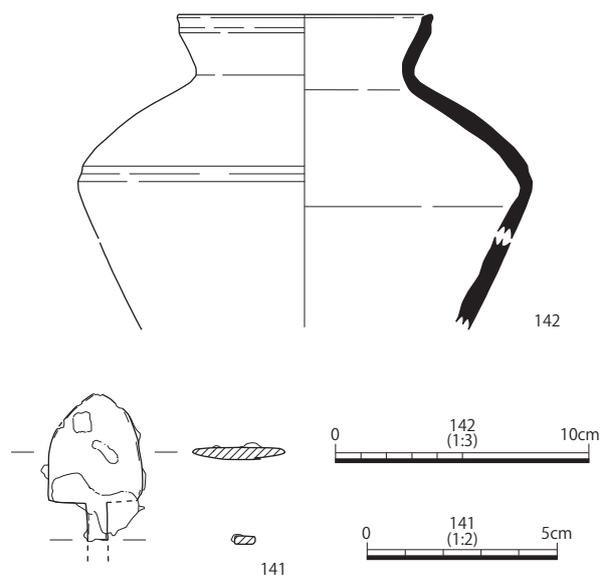
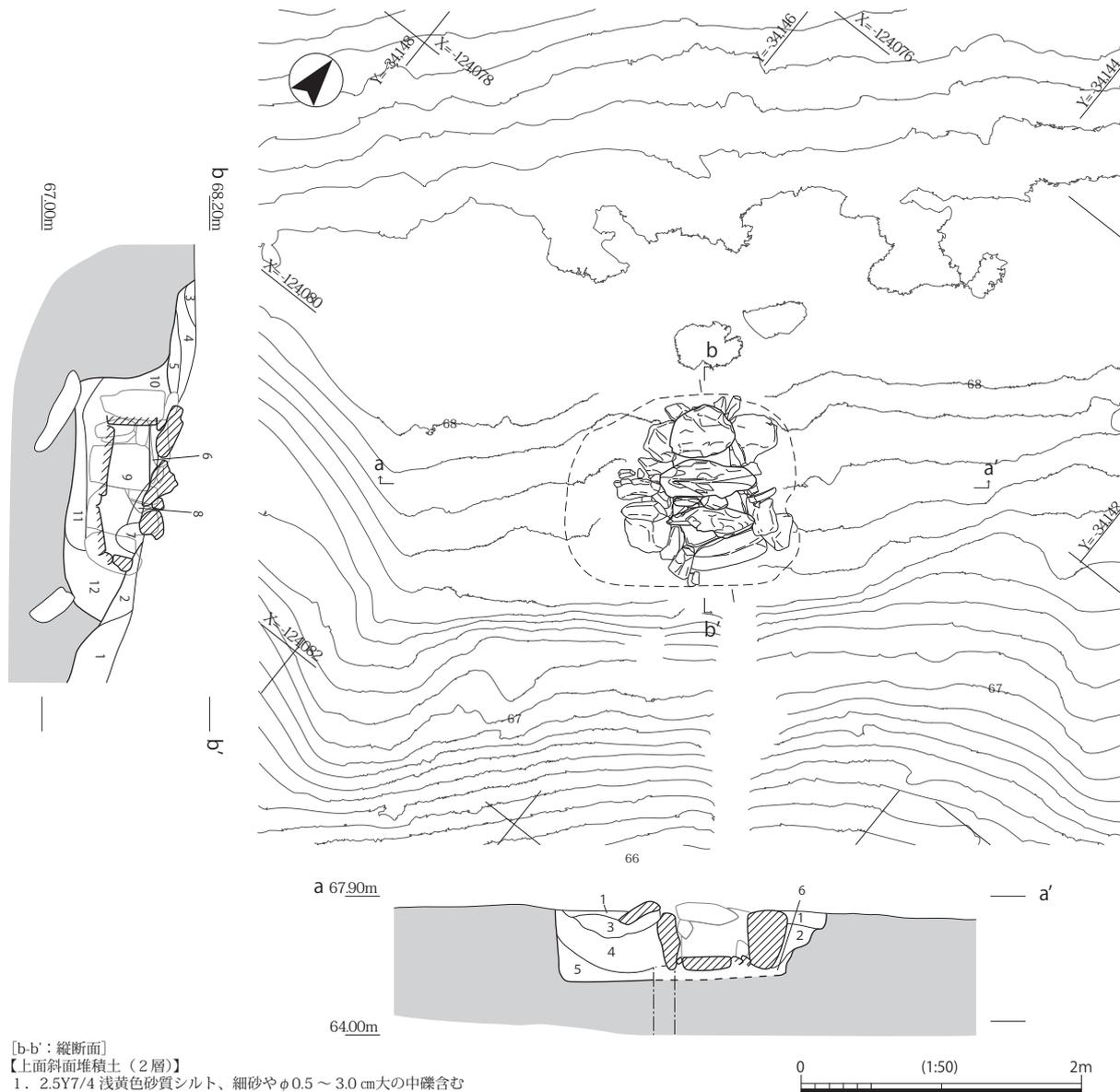


図62 2号墳出土遺物

でき、石室の構造や墳丘の形状や構造等からも齟齬はなく7世紀前半代におさまるものと推測される。また出土した須恵器や鉄鏃の年代観についても、大きな矛盾はない。(笹栗)

4. 竪穴式小石室 (図 63・64 写真図版 25)

2K-5i区、4区北東斜面の標高67.0~67.5mの地点に位置する。第1層掘削中に、棚田法面直下から棚田の石垣や裏込石とは異なる0.4m前後の扁平な石3個がその周辺から巨礫とともに並んで出土したが、この時点では巨石に伴う掘り方のプランは検出されなかった。第2面の調査を終え、周辺の



[b-b': 縦断面]

【上面斜面堆積土 (2層)】

1. 2.5Y7/4 浅黄色砂質シルト、細砂やφ0.5~3.0cm大の中礫含む
2. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト、φ0.5cm大の中礫含む

【蓋石被覆土か】

3. 2.5Y8/4 浅黄色シルト質砂
4. 2.5Y7/4 浅黄色シルト質砂 (粗砂~細砂)、φ0.5~3.0cm大の中礫含む
5. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質砂、φ0.5cm大の中礫含む

【小石室内流入土】

6. 2.5Y7/1 灰白粘土混じりシルト、粘性強い
7. 10YR4/2 灰黄褐細砂混じりシルト、φ0.3~0.5cm大の礫含む
8. 10YR5/3 にぶい黄褐粘土混じりシルト、細砂含む、粘性やや強い
9. 2.5YR6/3 にぶい黄粘土混じりシルト、粗砂~細砂含む

【小石室墓壇埋土】

10. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質シルト、φ0.3~1.0cm大の細礫~中礫やや多く含む
11. 10YR7/4 にぶい黄褐色砂質シルト、やや粘性有り
12. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質シルト、φ0.3~1.0cm大の細礫~中礫やや多く含む

[a-a': 横断面]

【小石室墓壇埋土】

1. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト質砂、中砂~細砂やφ0.3~0.5cm大の細礫~中礫多く含む
2. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト、φ1.0~5.0cm大の中礫含む、しまりやや弱い
3. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト質砂、粗砂やφ1.0~5.0cm大の中礫含む
4. 10YR6/6 明黄褐色シルト質砂、φ1.0~5.0cm大の中礫含む、ややしまり弱い
5. (床面整地土) 10YR7/6 明黄褐色シルト、φ0.3~0.5cm大の中礫含む
6. (床面整地土) 10YR7/6 明黄褐色シルト質砂、中砂~細砂が多い

図 63 竪穴式小石室 平面図・断面図

0.3～5.0cm大の中礫を含むシルト質砂層（断面 b-b'：3～5）を除去したところ、長軸 1.65 m、短軸 1.45 mの平面方形の掘り方プランが検出された。巨石を除去したところ、内寸長さ 0.95 m、幅 0.5 m、深さ 0.5 mの竪穴式小石室が検出された。

石室は、傾斜が急な丘陵斜面をカットした後、盛土造成して平坦面を確保した後に石室掘り方を掘削し、掘り方の東側に寄せて構築している。掘り方の底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。埋土は、1.0～5.0cmの中礫を含むシルト質砂層で3層に大別される。蓋の巨石3個は斜面に直交する方向に並べられ、石室中心軸は、真北に対して45° 92'、磁北に対して37° 71'西に振っている。

石室内は、底に明黄褐色シルト質砂が堆積する以外は空洞であった。床面には、0.4×0.5 mの扁平な石1枚と0.4 m四方の扁平な石2枚が敷かれていた。3枚とも青灰色で、角がとれて表面が滑らかな石で、他の石材とは明らかに異なり、意図的に選択されたと思われる。側壁は、横0.3 m前後、縦0.4～0.5 mの石7枚を順に並べて組み、最後北東コーナーには10×30cm大の礫3個を積んでいる。両小口側は、1枚の石を据えている。石室内に堆積する明黄褐色シルト質砂をサンプリングし、洗浄したが、微細遺物を含め何も採集されなかった。 (金光)

5. 小結

今回の成合地獄谷遺跡の調査では、4区で横穴式石室を伴う古墳と明確な墳丘をもたない竪穴式小石室が1基ずつと、5区で横穴式石室を伴う古墳1基が新たに検出され、成合地獄谷古墳群の一端が明らかとなった。横穴式石室を伴う1号墳と2号墳はいずれも墳丘長が5～6 m程度の規模で、斜面を整形し墳丘のほぼ全体を盛土によって構築する点が共通している。横穴式石室については、残りのよい2号墳が全長3.4 mの無袖式で、ふたつの古墳は奥壁幅がほぼ同じであることから、石室規模もほぼ等しい

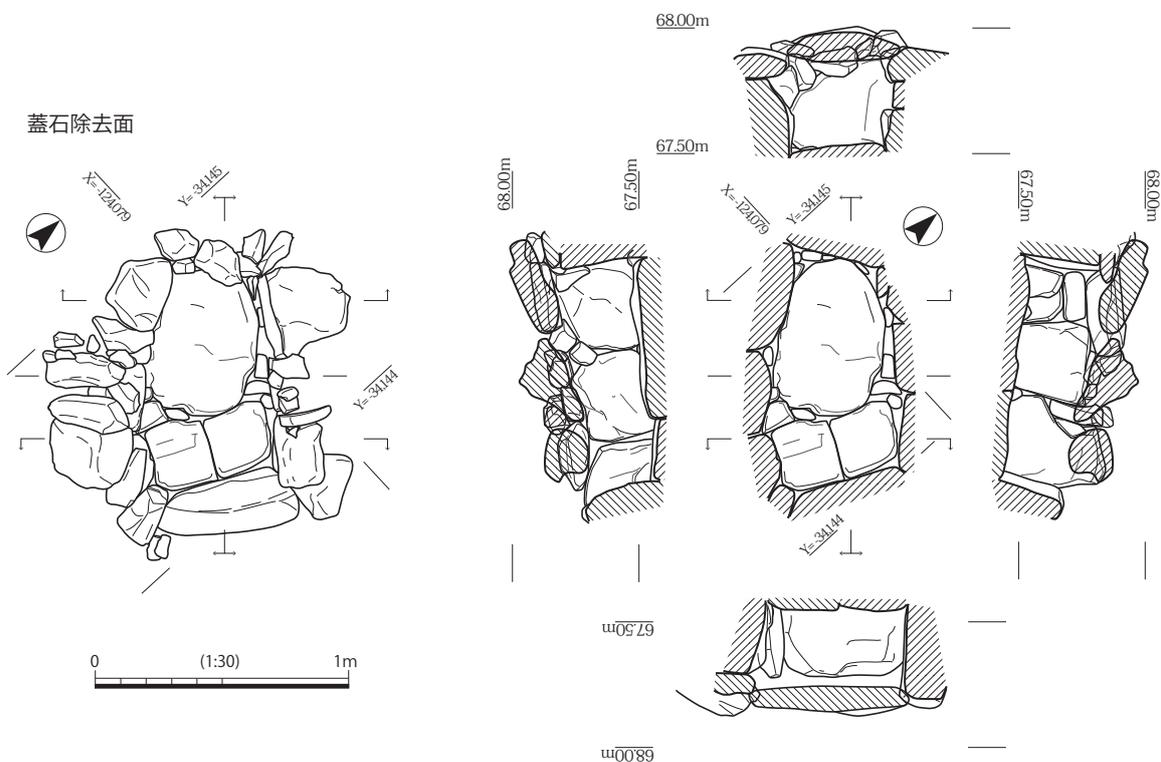


図 64 竪穴式小石室

第5節 成合地獄谷古墳群

と考えられる。盗掘にあったためか出土遺物は少なく、正確な時期比定をおこなうことは難しいが、墳丘や石室から7世紀前半ごろの築造と考えられる。2基の古墳の築造順序については、出土須恵器の年代観や石室構造等から2号墳が先行するとみられるが、時期的な隔たりはほとんどないと思われる。また竪穴式小石室については、古代の包含層除去面相当で検出されており、2基の古墳と近い時期の遺構と考えられる。明確な墳丘はなく、終末期の古墳群で比較的良好にみられる退化した小石室とみてよいだろう²⁾。

新名神高速道路建設に関わる成合地区の一連の調査によって、後・終末期古墳の発見が相次いでいるが、本古墳群は其中でも最も北に位置し、高槻市域の中でも山間部に位置するものである。またこれまでに発見された成合1号墳や成合西王寺山古墳群は丘陵上に立地するのに対し、本古墳群は地獄谷川沿いの南面する斜面地に古墳が位置するなど、立地条件が大きく異なる。檜尾川流域や高槻市域の後・終末期の古墳の動向を考える上で新たな知見をもたらすものであり、重要な成果となろう。(笹栗)

註

1) 鉄鏃の分類と各部の名称は、下記の文献にならった。

水野敏典 2003 「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『第8回東北・関東前方後円墳研究会 後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会 pp29-41

2) 河上邦彦 1995 『後・終末期古墳の研究』雄山閣など

第4章 成合遺跡の調査成果

平成23年度から始まった、最初の本格的な発掘調査によって、弥生時代中期末の竪穴建物や段状遺構、奈良時代～平安時代前期の掘立柱建物や火葬と関連する焼土坑、須恵器窯跡（成合西王寺山窯跡）、古墳時代終末期の横穴式石室（成合西王寺山1～3号墳）などが発見され、成合谷北東部の丘陵上に位置する東西0.25km 南北0.45km 約112500㎡の広範囲に及ぶ遺跡であることが明らかになった。中でも、弥生時代については、中期末の極めて短い期間に営まれた集落であり、竪穴建物が一定の間隔で配置されており、一時期の集落景観を復元することのできる資料となった。また、確認された建物のうち数棟は焼失建物が含まれることなども明らかとなっている。

今回の調査地は、工事用仮設栈橋部分（2区）の北東側斜面地と、鉄塔移設予定地（1区）の北西方向に張り出す丘陵上の2か所が調査対象となった（図65、写真図版33-1）。

1. 1区（図66～70、写真図版33～35）

弥生時代の集落跡が検出された遺跡内の南側の丘陵には、丘陵のほぼ中央に西から東に谷が入り込んでおり、1区はその谷の北側に位置し、この谷にむかって緩やかに傾斜する平坦面上にあたる。前回調査地の3-2区の西40mに位置し、竪穴建物等の遺構のひろがり期待された（図66）。

調査の結果、弥生時代の竪穴建物2棟と古代の土坑1基が検出された。

基本層序 現地表面は丘陵尾根上より1段下がった南西方向に緩やかに傾斜する杉林である。遺構は全て地山面で検出された。地山面は、調査区北東コーナー部を最高所として南西方向に傾斜し、杉植林に伴う里道や掘削坑、木の根跡、巨礫を伴う浸食によって面の残りは悪い。

現地表下地山面まで、大別3層に分層された（図67）。

第1層 5.0～20.0cmの巨礫を含む腐葉土や2.5Y6/4にぶい黄色シルト質砂からなる表土層で、層厚0.1～0.4mで、北東コーナー部は表土層を除去すると地山が現れる。

第2層 中礫から0.5mの巨礫を含む浸食層など複数層に細分される。1.0～3.0cmの中礫～巨礫を含む2.5Y7/6明黄褐色砂質シルト層や炭化物の細粒を含みやや粘性を帯びる7.5YR5/4にぶい褐色砂質シルト層などの堆積が認められ、地点によっては、さらに細分が可能であった。

第3層 0.5～5.0cmの細礫～中礫を多く含む2.5Y7/4浅黄色シルト質中砂層、1.0～5.0cmの中礫を含みやや粘性を帯びる10YR8/4浅黄橙色砂質シルト層、1.0～5.0cmの中礫を含む10YR8/3浅黄橙色シルト質砂層、1.0～3.0cmの中礫を含むやや強い粘性を帯びる10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト層などの層に細分される。北東部や南西部には、土石流に伴うと思われる50cm～60cmの巨石が点在する。

竪穴建物1（図68・69、写真図版34） 調査区南東隅に位置する。やや南側に傾斜する面に立地し、南側と東側へは調査区外にひろがる。浸食痕跡や木の根跡などと複雑に重複し、特に建物跡西側の残りは

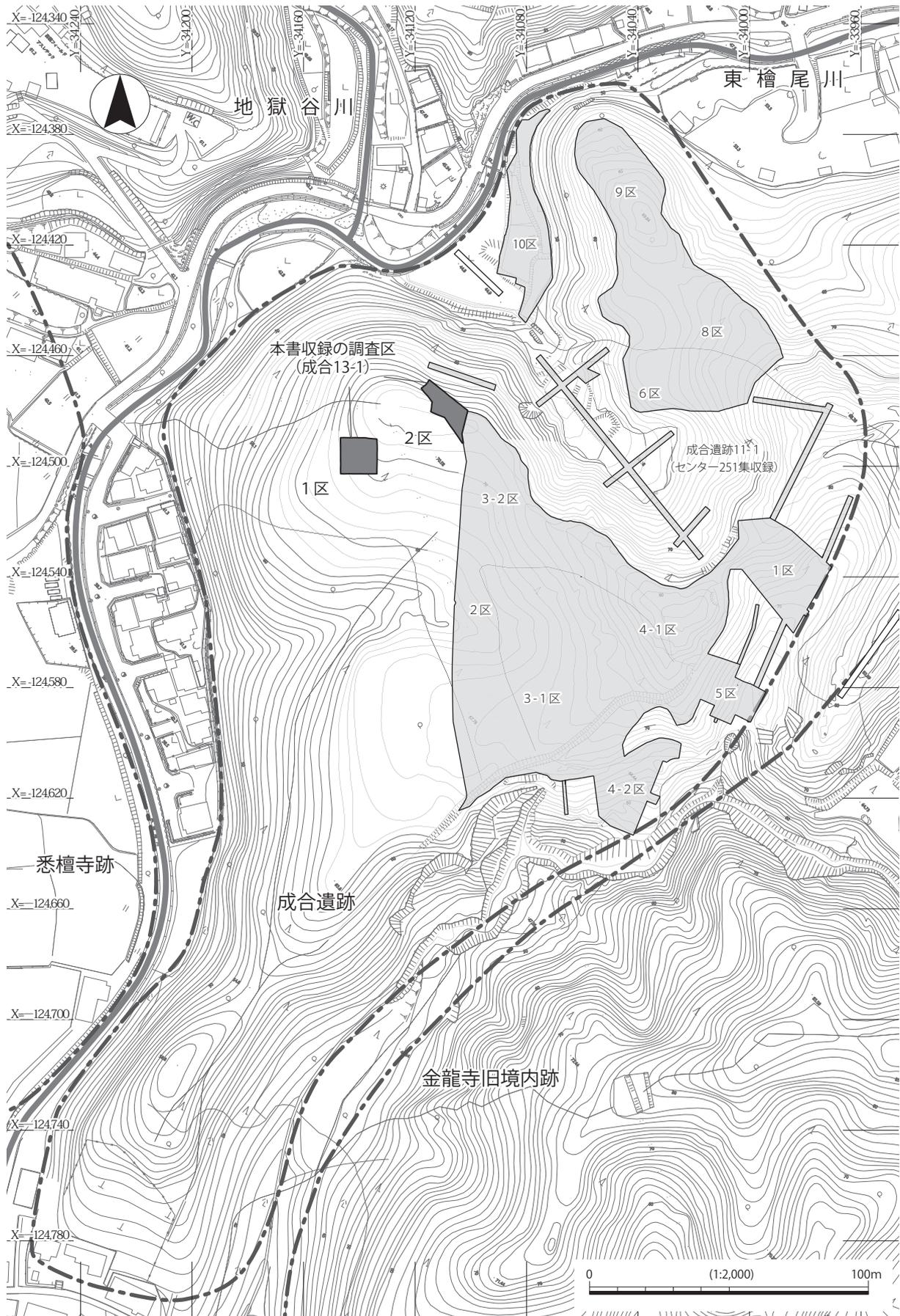


図 65 成合遺跡 調査区配置図



図66 成合遺跡 1区・2区 全体平面図

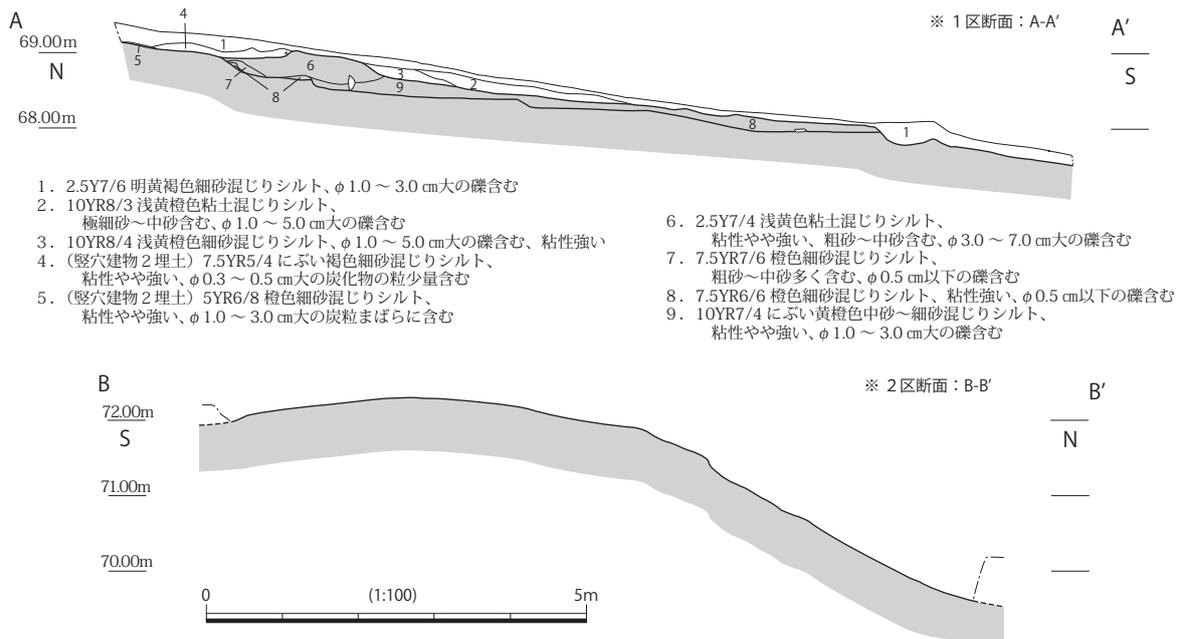


図67 成合遺跡 基本層序 断面図

竖穴建物 1
検出状況

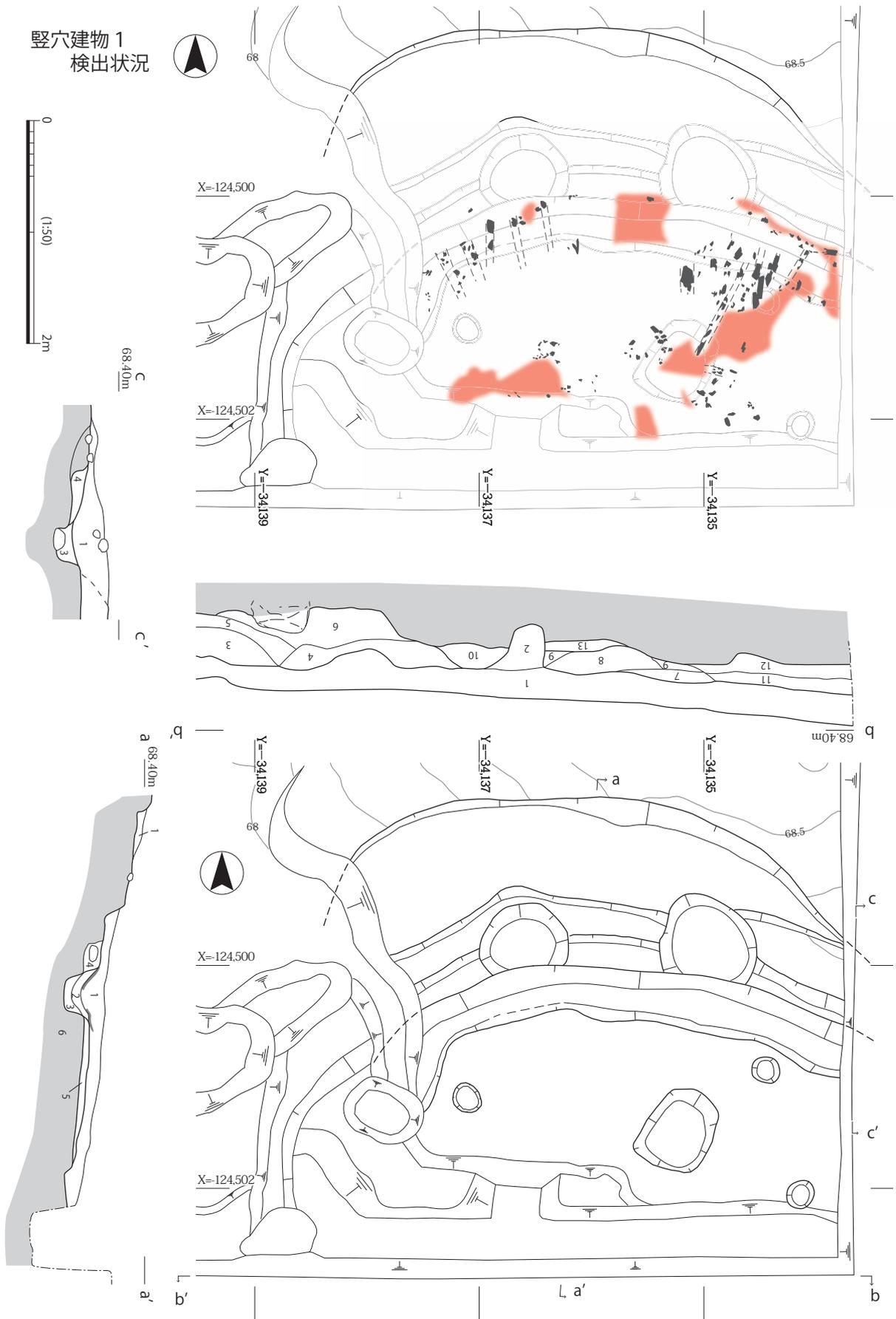
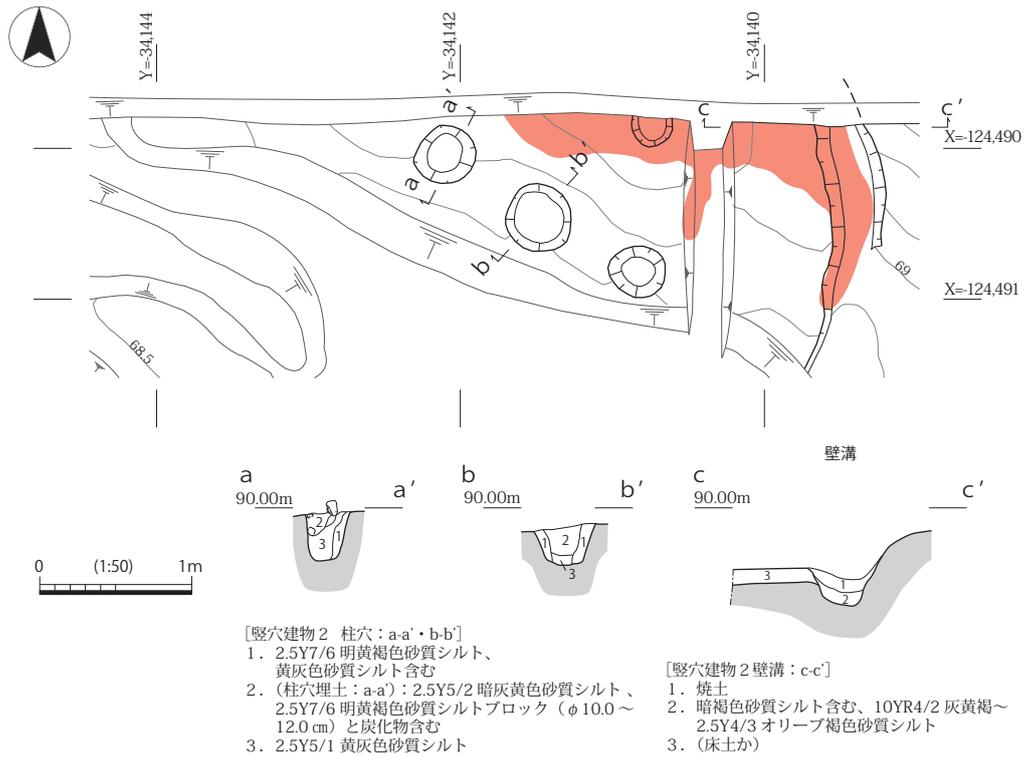


図 68 竖穴建物 1 平面図・断面図



【図 68. 竪穴建物 1 縦断面：a-a'・c-c'】

- 2.5Y7/4 浅黄色砂質シルト、φ0.5～5.0cm大の中礫～大礫含む
- 7.5YR7/4 にぶい橙色砂質シルト、2.5Y7/3 浅黄色細砂、φ0.5～2.0cm大の中礫含む
- 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土混じりシルト、中・細砂含む、φ0.5cm以下の礫含む、7.5YR6/4 にぶい橙色細砂混じりシルト、φ0.5～1.0cm大の偽礫含む、φ20.0cm大の礫1点あり、φ3.0～5.0cm大の礫含む
- 10YR8/3 黄褐～3/4 暗褐色砂質シルト
- (床土) 2.5Y7/6 明黄褐色粘質シルト、ややしまっている
- (地山) 7.5YR6/4 にぶい橙色シルト、粘性やや有り、2.5Y7/3 浅黄色砂質シルトブロック (φ1.0～2.0cm大) やφ1.0～3.0cm大の中礫含む

【図 68. 竪穴建物 1 縦断面：b-b'】

- (斜面堆積土) 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質砂、細砂やφ0.5～1.0cm大の中礫含む、またφ5.0～20.0cm大の中礫～大礫若干含む、しまり弱い
 - (根攪乱)
 - (攪乱) 2.5YR7/6 明黄褐砂質シルト、粗砂～細砂含む
 - (攪乱) 2.5Y7/3 浅黄色砂質シルト、粗砂～細砂含む、粘性強い
 - (攪乱) 2.5Y7/3 浅黄色砂質シルト、中砂～細砂含む、φ1.0cm以下の礫含む
 - (攪乱) 7.5YR7/6 橙色砂質シルト、細砂含む、粘性強い、10YR7/4 にぶい黄橙色砂質シルト、中・細砂含む
- 【竪穴建物 1 埋土】
- 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト、粗・細砂と炭化物の粒少量含む
 - 2.5Y7/4 浅黄色砂質シルト、粘性強い、粗砂～細砂と炭化物の粒少量含む
 - 10YR7/3 にぶい黄橙色砂質シルト、粘性強い、φ0.3～0.5cm大の中礫含む、しまり弱い
 - 2.5Y7/4 浅黄色砂質シルト、細砂含む
 - 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト、細砂含む、粘性やや強い、5YR6/6 橙色細砂質シルトや炭を少量含む (焼土)
 - 10YR7/4 にぶい黄橙色砂質シルト、中・細砂を含む、粘性強い、φ2.0～5.0cm大の中礫含む
 - (床土か) 7.5YR7/4 にぶい橙色砂質シルト、粘性強い、10YR7/4 にぶい黄橙色シルトや細砂含む

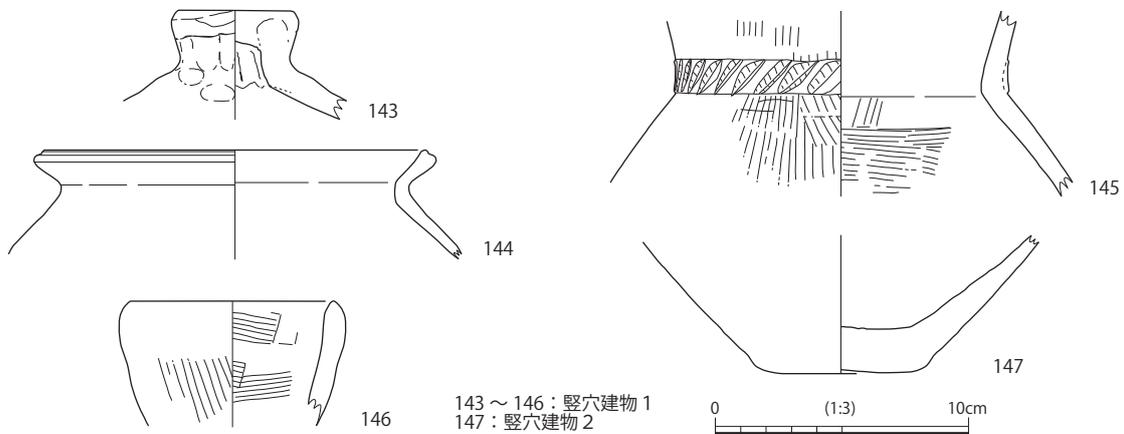


図 69 竪穴建物 2 平面図・断面図、竪穴建物 1・2 出土遺物

著しく悪い。北側端から一番南側まで4段の段差が見られ、一番内側には幅0.4m 深さ0.25mの壁溝が孤状に周り、床面直上からは炭化した建築部材や焼土が検出された。調査区南壁からの南北方向の残存長と各段差は、一番外側から、4.3mと0.08m、3.4mと0.1m、3.0mと0.15m、2.8mと0.1mである。外から2番目の段に堆積する浅黄色砂質シルト層を除去すると、炭化した建築部材や焼土が検出された。壁溝から出土した炭化材のなかには、壁溝の壁に沿うように立った状態で出土するものがあり、これらは建物壁の腰板の可能性が考えられた。建て替えの回数については遺構の残りが悪く確定できなかったが、床面で焼土や放射状の炭化材がみられることから、最終的に建物が焼失したことがわかる。また、調査区の端で検出されたため、全体の形状と規模ははっきりしないが、径2.8m以上の円形の竪穴建物と考えられる。床面からは、径0.25m 深さ0.3mのピットが3個と、南壁断面に1個のピットが検出されており、計4個のピットが住居に伴うと思われるが、柱構造を復元するまでには至らなかった。また、0.8m×0.55m、深さ0.3～0.4mの方形の土坑が検出された。(金光)

埋土からは弥生土器が出土している。143は蓋、144は甕の口縁部から頸部の破片で、口縁部に凹線を施す。145は、これまでの調査でも多数出土している大型の有段口縁壺の頸部である。外面ハケ、内面ハケ・ナデ調整で、頸部の突帯は低く、刻目文を施す。146は小型の鉢で、口縁部ヨコナデ、外面ハケ、内面ハケ・ナデ調整である。これまでの成合遺跡の調査で確認された遺構・遺物の年代観と大きな矛盾はなく、IV様式後半を中心とした時期に位置づけられる。(笹栗)

竪穴建物2 (図69、写真35-1～4) 調査区北壁際の中央部に位置する。南側は植林に伴う里道、東側は浸食痕跡によって失われ、北側は調査区外にさらにひろがる。東西4.8m、南北1.7mを検出した。第1層を除去したところ、調査区壁際の1.5m×2.5mの範囲に広がる炭化物を含む焼土やその南側から径0.35～0.40mの柱穴3個を検出した。焼土を除去した床面の東側で、南北方向にのびる幅40cm、深さ約0.25mの壁溝を検出した。焼土除去面は火を受けていなかった。周溝の底部幅26cmで、溝底部から壺底部片1点が出土した。柱穴には埋土中に炭化物の細粒を含むものがある。検出範囲がかなり限定されており、平面形など不明な点があるが、壁溝ののび方から方形の竪穴建物の可能性が高い。

(金光)

壁溝埋土中から、弥生土器の147壺と考えられる底部が出土している。詳細な時期比定は難しいが、他の竪穴建物と同様にIV様式の範疇におさまるものと考えられる。(笹栗)

3土坑 (図70、写真図版33-4) 竪穴建物1の北約1.5mの緩傾斜面に位置する。長軸1.08m、短軸0.78m、深さ0.34mの平面隅丸長方形の土坑である。長軸は、斜面にほぼ直交する南北方向に置き、土師器甕2個体を合わせていたようである。埋土は3層に分層され、土師器の周辺には炭を多く伴うことから、蔵骨器を伴う火葬墓の可能性はある。なお、底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立上る。底面や壁面には火を受けて赤変・硬化した痕跡は認められなかった。(金光)

埋土上層から出土した土師器甕は、破片がまとまった状態で出土している。図化可能であった甕(148)は口縁部ヨコナデ、外面ハケ、内面ハケ・ナデ調整で、口縁端部に面をもつ。前回調査時の2区・3-1区の造成段から多く出土している内面巻き込みの都城系の甕とは、やや異なった特徴をもっており在地系の甕と考えられる。詳細な時期比定は難しいが、8世紀後半から9世紀前半ごろに位置づけられるだろう。(笹栗)

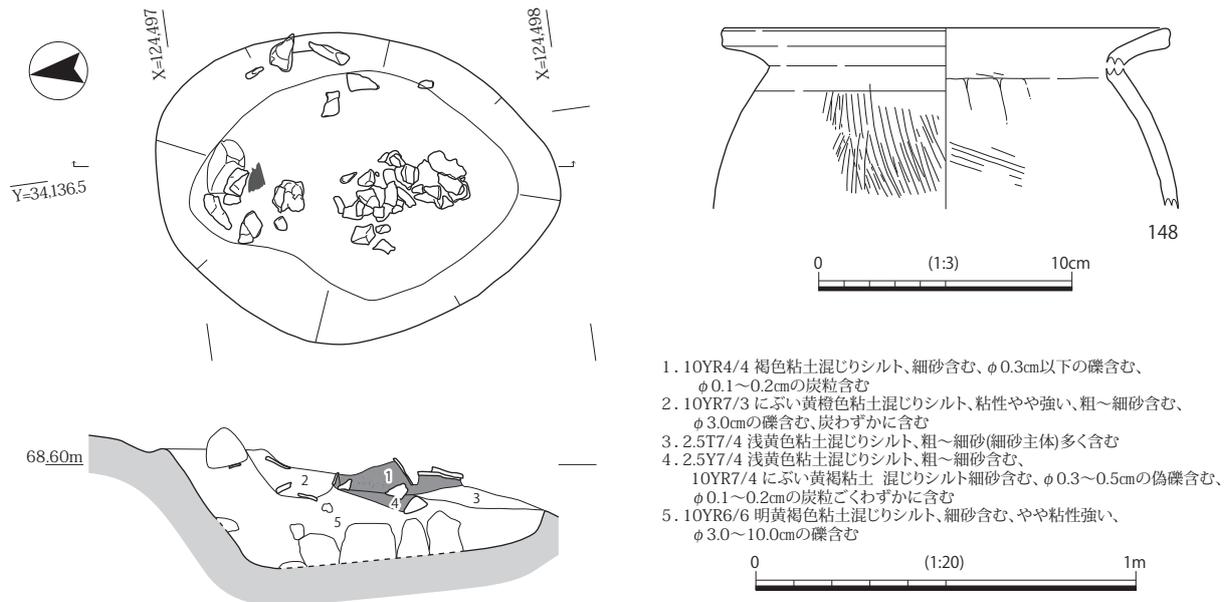


図70 3土坑 平面図・断面図・出土遺物

2. 2区 (図66・67、写真図版34)

調査区は、丘陵側の急な斜面地に位置する。斜面地部分では表土層直下は、基盤層となり遺構・遺物は検出されなかった。平坦部では、表土層下には礫を多く含む約0.3mのシルト質砂層が堆積し、その下は礫や粗砂を含む地山面であるが、地山面および堆積層中からは遺構・遺物は検出されなかった。

(金光)

3. 小結

調査の結果、弥生時代中期後半の竪穴建物2棟と、墓と考えられる古代の土坑が1基検出された。弥生時代の竪穴建物はいずれも焼失建物で、前回調査時に検出された焼失建物も遺物が少ない点が共通する。北側尾根で新たに竪穴建物のひろがりを確認できたが、一定の間隔をもって竪穴建物が配置されていることを追認する成果が得られたことから、弥生時代の集落構造を考えるうえでも貴重な成果といえる。

墓と考えられる土坑については、1基の検出にとどまったが、当該期の墓域がさらにひろがることが明らかとなったことは大きな成果である。成合地獄谷遺跡とは、墓の空間的なひろがりや構成が異なっている点で注目されよう。

(金光・笹栗)

第5章 金龍寺旧境内跡の調査成果

遺跡名の由来となった金龍寺は、標高 210 m、字「内供谷」の山中にあって、平安時代の僧千観によって再興されてからは、貴族層を初め多くの人々が「日想観」信仰の聖地として訪れ、また、江戸時代には桜の名所としても大いに賑わい、堂宇の石垣や宝篋印塔、参詣道沿いの丁石に往時の繁栄ぶりを偲ぶことができる。また、参道は、豊臣秀吉が山崎合戦に向かう際に通ったとされる「太閤道」と呼ばれ、今では東海自然道ハイキングコースとして多くの府民が訪れている。

平成 23 年度におこなわれた麓の調査区からは、円面硯・石製巡方・大型の土馬など、奈良～平安時代の中央との交流を反した貴重な遺物が出土し、同 24 年度の調査では、丘陵尾根上から横穴式石室を埋葬施設とする 6 世紀後半の成合 1 号墳が発見されている。

今回の調査区は、成合 1 号墳とは谷を隔てた標高 90 m から 120 m の丘陵上 2 か所と最初の丁石から 100 m ほど登った参詣道沿いに 1 か所の計 3 か所の小規模なトレンチ調査で、古墳や「太閤道」関連の遺構・遺物の検出が想定された（図 71）。

1. 1 区（図 72、写真図版 35 - 5）

丘陵尾根を浸食する浅い谷筋斜面に位置する。厚さ 10cm 前後の表土層直下には、粗砂や小礫を含む地山が風化し再堆積したと思われる層（第 1 層）が厚く堆積し、その下層に斜面堆積と思われる礫を多く含む粗砂層（第 2 層）が堆積する。第 2 層は第 1 層よりもさらに深く、狭い調査区内では危険を伴うため地山面までは掘削できなかった。なお、遺構・遺物は検出されていない。

2. 2 区（図 72、写真図版 35 - 6）

尾根筋上に位置し、表土層の直下には基盤岩上部が風化した地山となり、遺構・遺物は検出されなかった。

3. 3 区（図 73、写真図版 35 - 7・8）

金龍寺への参詣道沿いに位置する。表土層直下の幅 1.0 m の平坦面（第 1 面）と西の谷側で幅 1.0 ～ 1.3 m の平坦面（第 2 面）の計 2 枚の平坦面が検出された。第 1 面と第 2 面とは約 15cm の段差がある。第 2 面平坦面から西は、急な崖面に向かう傾斜面となる。表土層直下から、瓦や陶磁器類が多数出土した。特に 1 個所に集中する状況ではなく、また、遺構にも伴わない。瓦はいぶし瓦や軒瓦があり、磁器は染付の碗・鉢・皿が多く、陶器は堺摺鉢・鉄釉鍋などがみられる。時期は 17 世紀末から 19 世紀までの幅がある。その他にも「かわらけ」土師器皿も出土している。

基本層序 表土面から地山面までは 3 層に分層され、第 3 層は地山層である。

第 1 層 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質砂層で、細砂～シルトを主体とし、小礫～粗砂を含む。谷側に向かって層厚を増し、斜面に形成された盛土層と思われる。少量の染付など陶磁器が含まれる。

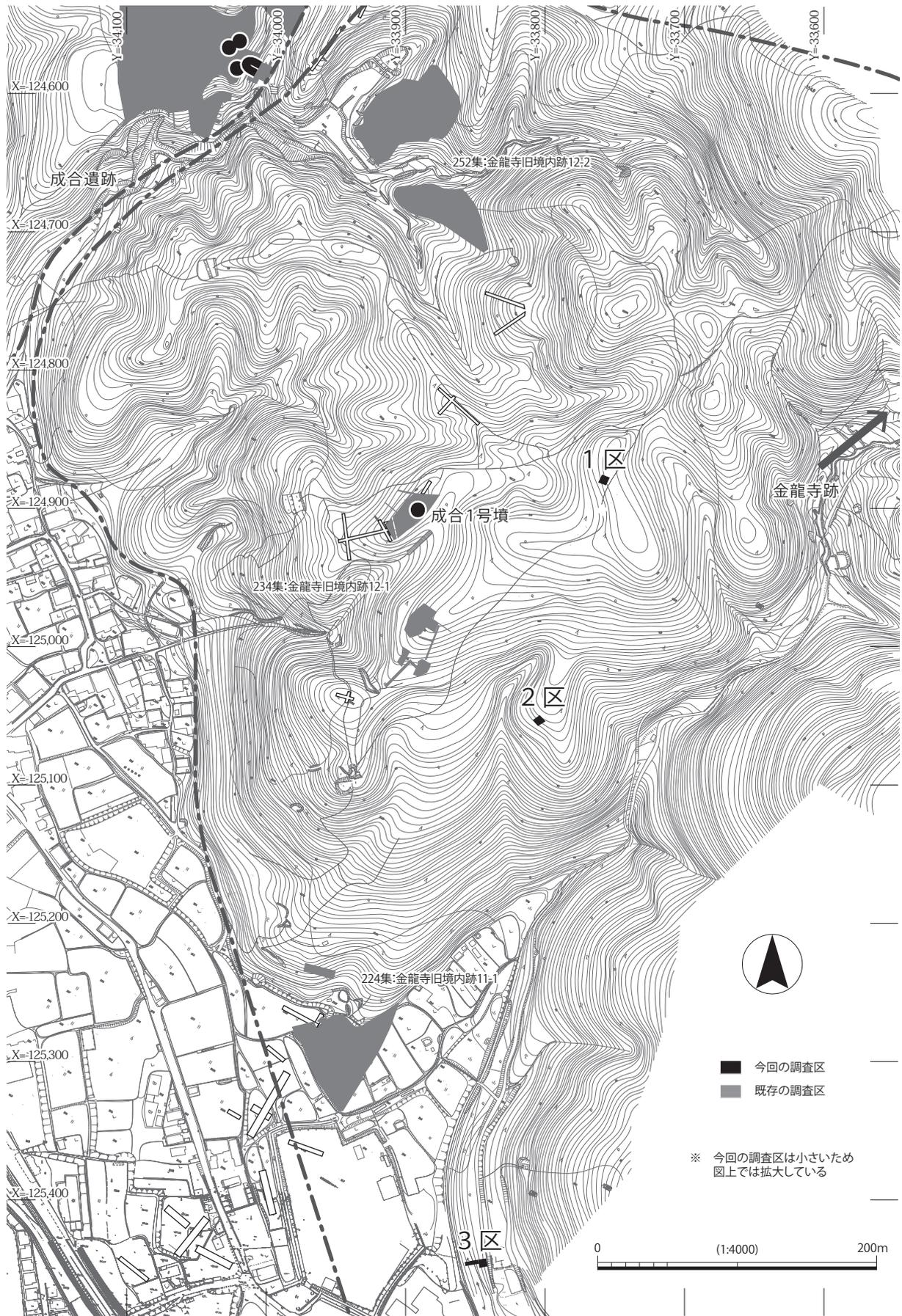
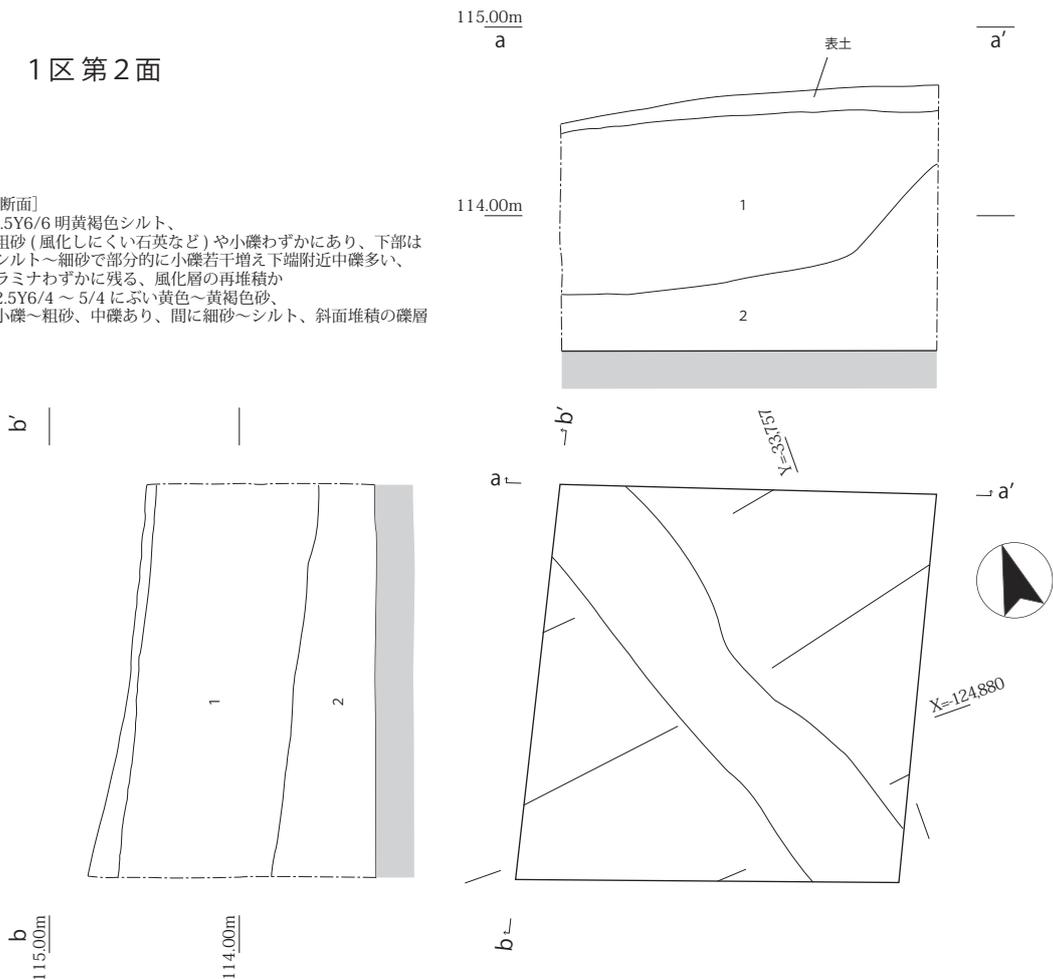


図 71 金龍寺旧境内跡 調査区配置図

1区第2面

[1区断面]

1. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト、粗砂（風化しにくい石英など）や小礫わずかにあり、下部はシルト～細砂で部分的に小礫若干増え下端附近中礫多い、ラミナわずかに残る、風化層の再堆積か
2. 2.5Y6/4～5/4 にぶい黄色～黄褐色砂、小礫～粗砂、中礫あり、間に細砂～シルト、斜面堆積の礫層



2区第1面

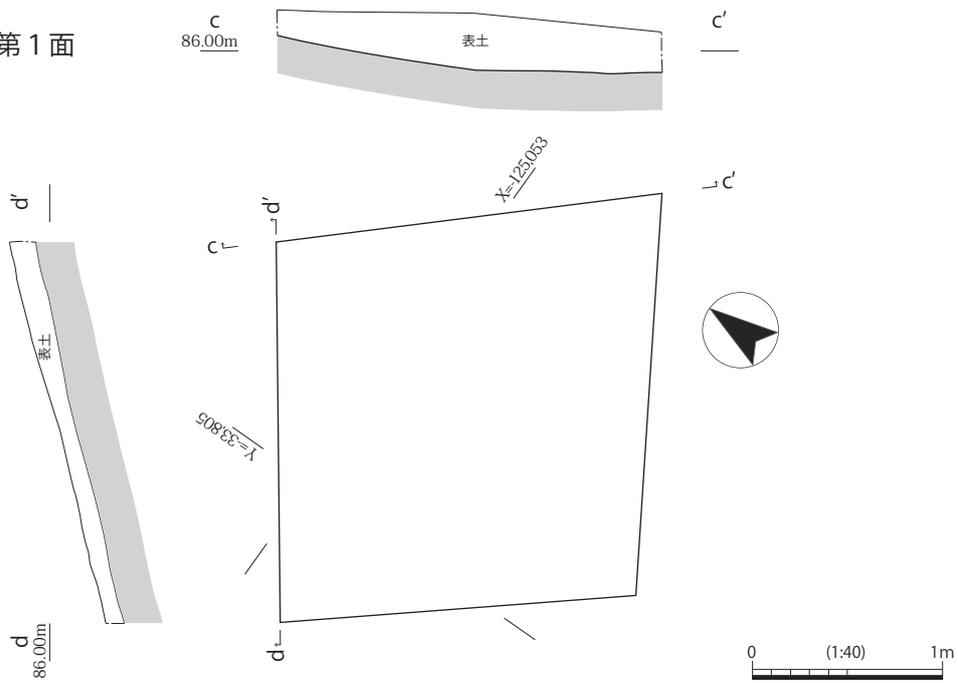


図 72 1・2区平面図・断面図

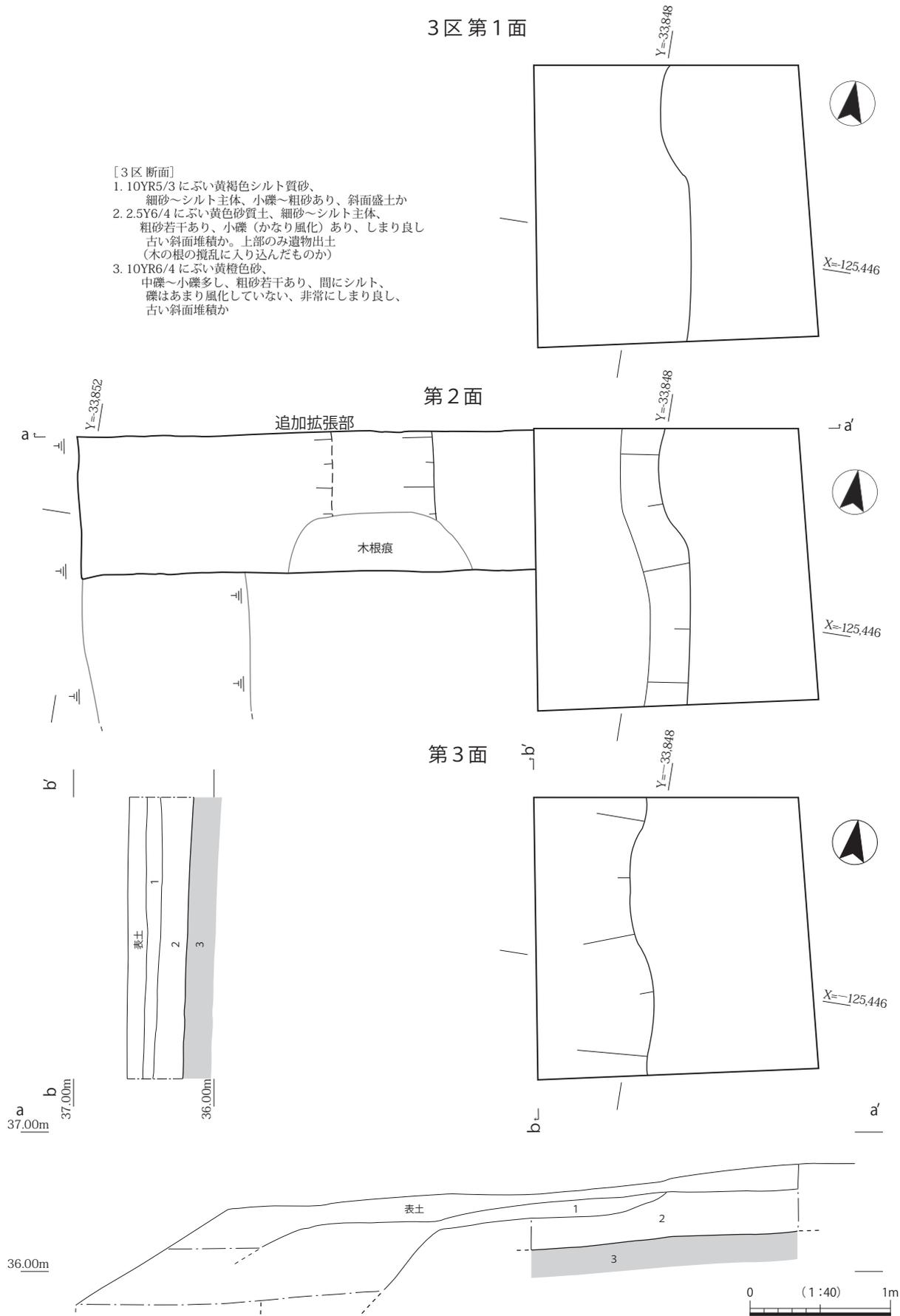


図 73 3区平面図・断面図

第2層 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質砂層。細砂～シルトを主体とし、少量の粗砂やかなり風化した小礫が含まれる。固くしまっている。古い時期の斜面堆積層と思われる。上部からは、17世紀～18世紀を中心とする陶磁器類や瓦などが出土した。

第3層 10YR6/4 にぶい黄橙色砂層。中礫～小礫が多く、粗砂を若干含む。礫間にはシルトが含まれる。礫はあまり風化が進んでおらず、非常に締まりが良い。かなり古い斜面堆積層（地山）と判断した。（金光）

出土遺物 3区から出土した遺物のうち、染付碗を中心に図化した（図74）。149は肥前呉器手碗、150は関西風の肥前で、いずれも17世紀末から18世紀ごろの所産である。151～153は京・信楽系、



図74 3区出土遺物

154～163は肥前、164は銅緑釉で、やや新しい18世紀末～19世紀代に位置づけられるだろう。(笹栗)

4. 小結

1・2区付近は、調査結果と周辺地形から判断して、周辺には、遺構・包含層が存在する可能性は極めて低いと考えられる。

3区から出土した遺物は、豊臣秀吉が山崎合戦の際通ったとされる「太閤道」の時期とは異なるが、「くらわんか茶碗」や波佐見産を含む陶磁器類など多様な遺物は、花見や松茸狩りの名所として多くの人々が訪れ賑わったことを彷彿とさせるものである。また平坦部は、古い時期の参道の可能性も考えられ、金龍寺に向かう参道沿いの両側にはいくつかの平坦地があり、そのなかには、かつての茶屋や堂宇などの施設があった可能性も考えられる。(金光)

第6章 成合地獄谷遺跡出土鏡の分析調査

奈良文化財研究所

降幡 順子

1. はじめに

平成25年度におこなわれた成合地獄谷遺跡第69土坑の発掘調査により出土した鏡について非破壊的な手法による材質・構造調査をおこなったので報告する。この鏡の所属時期は8世紀後半～9世紀前半までが想定されている。この時期の鏡が、完形で出土した事例資料であるため、この資料の特徴を明らかにすることは重要である。

2. 分析資料

調査資料は、成合地獄谷遺跡第69土坑から出土した鏡1点である。図75に出土時の写真を示す。透過X線画像から、本資料は狻猊双鸞八花鏡であると判断された。遺構の所属時期は奈良時代後半～平安時代初頭に相当すると考えられているが、鏡の形式からみると奈良時代に多くみられるものである。本資料の重さは71g、径95mmである。

3. 調査方法

表面からでは観察できない鏡内部の亀裂や紐孔の状態、気泡や残留粒子の状態については、X線デジタルラジオグラフィーのひとつであるCR法(Computed Radiography)を用いて実施した。検出系には従来のフィルムではなくI.P.(Imaging Plate)を利用し、X線発生装置としてはSoftex製M150W、データの取り込みはGE製FLA7000システムを用いた。X線照射条件は、管電圧90kV、管電流1.0mA、照射時間30秒、撮影距離約70cm、使用I.P.はBAS-SR2040である。透過X線画像を図76に示す。

鏡の定性分析は、クリーニング前の段階で土塊が剥落し、表面が露出していた暗緑色部でおこない(図75○部)、銅と鉛、ヒ素が検出されることを確認した。その後、表面の付着埋土を除去したのち、再度鏡面および鏡背面の暗緑色部を複数箇所測定した(図77○部)。さらに透過X線画像で密度の高低が観察される箇所の測定をおこなった。測定は蛍光X線分析装置EAGLE III(EDAX製)を使用し、測定条件は、管電圧40kV、管電流40 μ A、コリメータ径50 μ m、測定時間200秒である。また、非破壊分析のため参考値ではあるが、鏡の定量分析は、化学組成が既知の標準試料11点を使用し、検出元素の合計が100wt%になるよう規格化しF P(ファンダメンタル・パラメーター)法により定量値(参考値)を求めた。

4. 結果

透過X線画像から、鏡の一部に極端に薄い箇所があることがわかった。さらに波状の高密度部や、腐食によると考えられる孔食状の低密度部が観察できた。

本資料の蛍光X線分析の結果、銅50～60wt%、鉛30～40wt%、ヒ素2～4wt%、鉄1～4wt%で、アンチモン、ビスマスを約1wt%、錫、銀を僅かに含むことがわかった。



図 75 出土時の鏡の出土状況および測定箇所

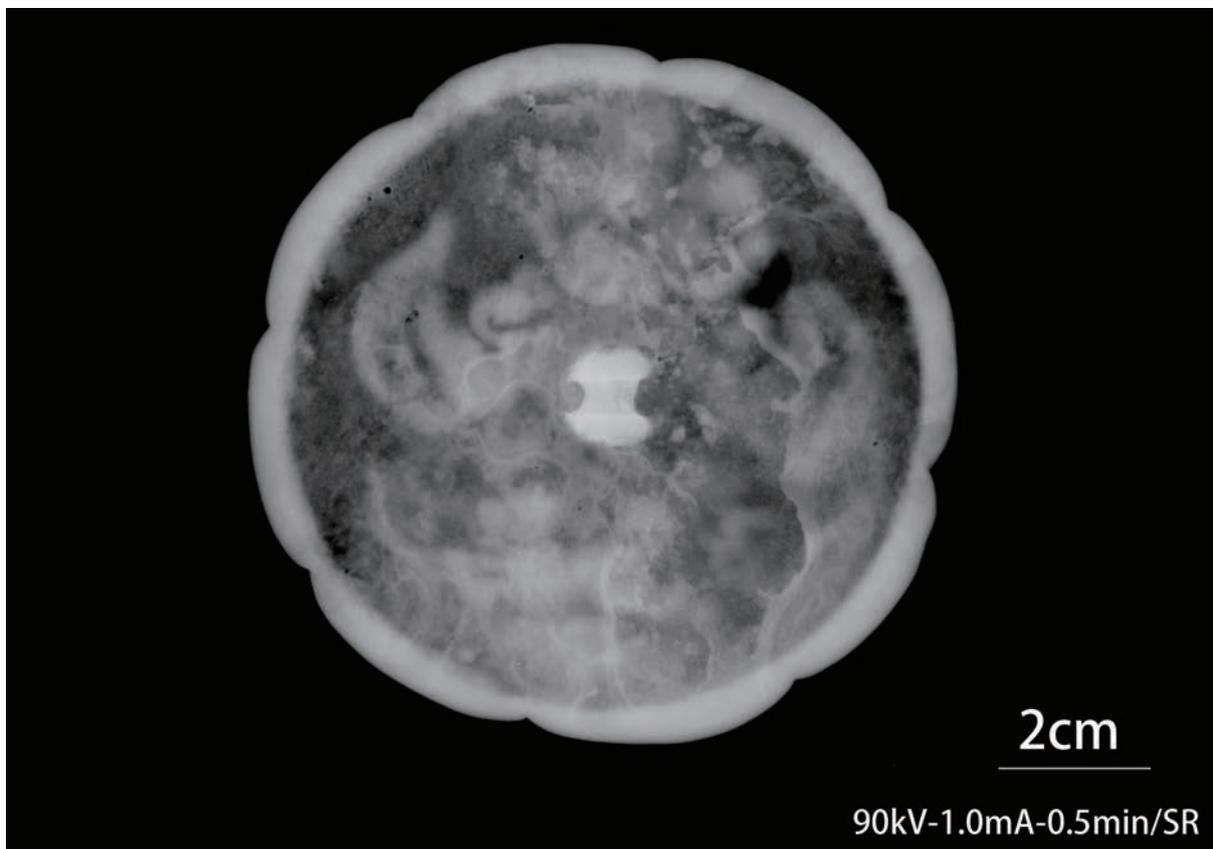


図 76 透過 X 線画像

透過X線画像の波状部がどのようにして生じたのかは不明であるが、この部分の密度が高いことから、湯が凝固する際の欠陥や、鑄造後に何らかの熱を受けたことによって生じた可能性、腐食の過程で鉛が偏析を起こした可能性などもあり、これらは本資料のように鉛含有量が多いことも一因であると考えられる。

奈良時代の鏡が出土している日光男体山頂遺跡出土鏡¹⁾のうち、昭和年間鏡5は狻猊双鸞八花鏡であるため、本資料との比較を試みた。

まず昭和年間鏡5の化学組成は、銅85wt%、ヒ素10wt%、鉛3wt%であった。化学組成は非破壊分析による測定のため腐食の影響を受けていることから、あくまで参考値として比較している。図78に、各鏡のスペクトルを示す。鉛、ヒ素に着目すると、同型の鏡ではあるが、スペクトルは異なり、本資料のほうが鉛は多く、ヒ素が少ないといえる。日光男体山頂遺跡出土鏡の分類でA群とした、錫が非常に少ない資料群に両資料ともに含まれるが、昭和年間鏡5はその中でも鉛の少ない資料群と一致し、本資料は鉛が非常に多い資料群と化学組成の傾向が一致するといえる。時期を同じくする奈良時代の鏡として、正倉院宝物の鏡がある。これらの分析結果²⁾によると、唐鏡、我が国の官営工房で製作した鏡、官営工房以外で製作した鏡は、錫を含有しているため、本資料とは一致しない。これまでの調査から、奈良時代から平安時代初期の鏡には、銅・錫が主成分のもの、銅・ヒ素・鉛が主成分で、錫が非常に少ない鏡があり、本資料と昭和年間5鏡は後者であり、この点では化学組成の特徴が共通する。

本資料の透過X線画像から、密度の異なる波状部が観察できたことから、クリーニング後に、高密度および低密度部について、波状部を横断するようにライン測定を鏡面と鏡背面の両面でおこなった。高密度部のほうが、低密度部よりも平均値では鉛含有量が4wt%ほど多い傾向を示したが、顕著な差異は検出できなかった。低密度部でも複数箇所で表面部の鉛含有量が30wt%程度あることから、もともと鉛含有量が多い鏡であることが再確認できた。

本資料の非破壊調査から、遺跡から出土した狻猊双鸞八花鏡の内部構造、化学組成の特徴を明らかにした。今後、同型鏡の調査事例が増加することにより、奈良時代鏡の製作に関する議論が進むことが期待できるであろう。

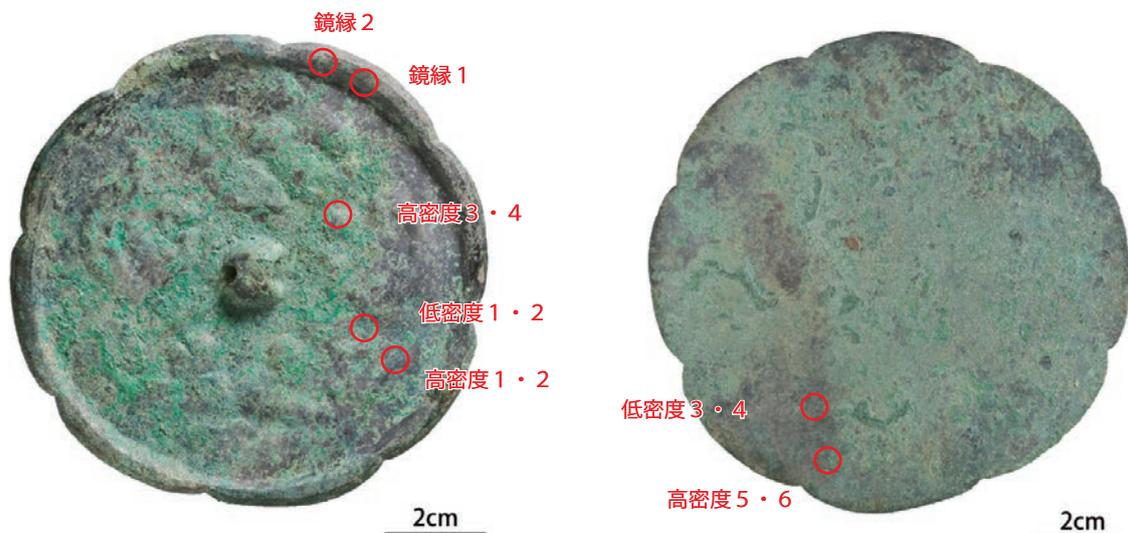


図77 クリーニング後写真（左；鏡背面、右；鏡面）および測定箇所

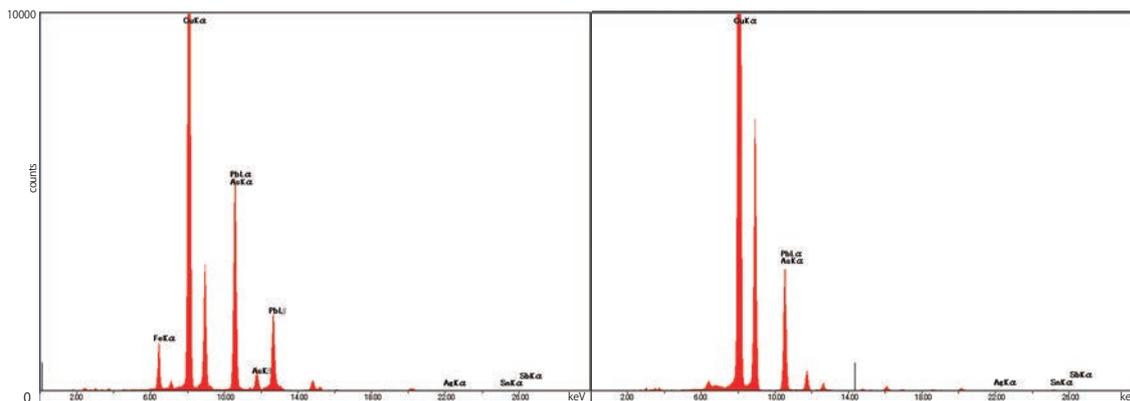


図 78 蛍光 X 線スペクトル (左 ; 成合地獄谷遺跡、右 ; 昭和年間鏡 5)

表 2 蛍光 X 線分析結果 (wt%、tr; 微量)

測定箇所			Fe	Cu	As	Pb	Bi	Ag	Sb
クリーニング前	鏡縁部	1	5.0	38.2	5.3	49.0	1.3	tr	1.3
		2	1.8	52.9	2.1	41.3	0.88	tr	1.0
		3	4.1	55.8	3.4	34.4	1.1	tr	1.2
クリーニング後	鏡背面	低密度付近1	3.8	61.8	4.0	27.8	1.2	0.32	1.0
		低密度付近2	2.7	58.7	3.9	31.1	1.2	0.31	1.2
		高密度付近1	2.4	45.7	3.3	45.1	2.4	tr	1.2
		高密度付近2	1.5	67.2	1.7	27.6	1.2	tr	0.85
		高密度付近3	2.3	68.0	1.8	25.7	1.2	tr	0.94
		高密度付近4	7.9	56.8	2.9	30.4	1.1	tr	1.0
		鏡縁1	1.3	45.1	2.7	47.6	1.7	0.45	1.3
		鏡縁2	1.0	53.0	1.5	41.6	1.4	0.47	1.1
	鏡面	低密度付近3	1.5	61.6	3.6	31.0	1.2	0.26	0.85
		低密度付近4	3.0	59.3	4.2	31.0	1.4	0.24	0.90
		高密度付近5	2.9	60.2	2.4	31.9	1.2	0.30	1.1
		高密度付近6	2.5	46.0	3.3	45.2	1.6	0.25	1.3

クリーニング前	鏡縁	平均値	3.6	49.0	3.6	41.6	1.1	tr	1.1
クリーニング後	鏡縁	平均値	1.1	49.0	2.1	44.6	1.5	0.5	1.2
クリーニング後	低密度	平均値	2.7	60.3	3.9	30.2	1.2	0.3	1.0
クリーニング後	高密度	平均値	3.2	57.3	2.6	34.3	1.4	0.3	1.1

註

- 1) 中川あや・降幡順子 2014『日光二荒山神社中宮祠宝物館所蔵男体山頂遺跡出土鏡の研究』飛鳥資料館研究図録第 17 冊 東アジア金属工芸史の研究 17 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・日光二荒山神社
- 2) 成瀬正和 1999「正倉院鏡を中心とした唐式鏡の化学的調査」『古代の鏡』日本の美術第 393 号 至文堂

第7章 総括

第1節 調査成果のまとめ

1. 成合地獄谷遺跡

開発に伴う事前調査によって新たに発見された遺跡であり、遺跡地は檜尾川支流の地獄谷川によって形成された狭隘な小空間で、調査前には開墾によって形成された耕作地が棚田状ひろがっていた。耕作地の最下段にあたる1区と急斜面地にあたる5区では、遺構・遺物が希薄であったが、2区・4区とした南東向き緩斜面地および平坦地では、火葬墓を含む古代の遺構・遺物や、横穴式石室を伴う7世紀代の古墳（成合地獄谷古墳群）が検出された。また、遺跡の北側の尾根上の3区については、開墾による平坦面がみられるが、ここからも古代の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査で最も遺構密度が高かった2区・4区では、第2面～第4面までの3面の遺構面が存在しており、近世の耕作土（第1層）を除去した第2面では中世頃の棚田水田面が、近世耕作土の下層の斜面堆積土（第2層）を除去した第3面では小溝やピット等が確認でき、ここからは古代の遺物が出土している。第3面の下に堆積する土壌化した黒褐色土層（第3層）は、7～9世紀代の遺物を含む古代の包含層で、この層を除去した第4面が古代の遺構面となる。ここでは土坑や溝、ピットなどの遺構が数多く検出されているが、土坑の中には墓と考えられる遺構も含まれており、その中には唐式鏡など豊富な副葬品をもつものもみられる点が特筆される。調査区の東寄りには、第3面で検出した18侵食痕と重なるように谷筋が走るが、この谷筋は斜面上方の5区で検出された14溝や15溝と接続するとみられ、古くから形成された自然の谷と考えられる。古代の墓の評価については基本的には第3節に委ねるが、古代の遺構はこの谷筋の西側に主に分布しており、その中でも成合地獄谷1号墳の南側の一角にピットや土坑が濃密に分布し、副葬品を伴うような33・69・116・313土坑は1号墳の東よりにまとまっている。

尾根上の3区は、2区との比高差が20m以上あり、調査前にみられた棚田状の地形は近世以降の耕作にともなって人為的に形成されたことが判明している。ただし、ここでも2区・4区の古代の包含層と対応すると考えられる土壌層（第5層）が確認されていることから、本来的にも斜面途中で平坦な地形が存在しており、この第5層除去面では古代の遺構も検出されている。遺構密度は2区に比べると希薄であり、土坑や溝が30程度検出されているにすぎないが、焼土坑なども含まれる。

古墳群については、4区・5区で横穴式石室を埋葬施設とする2基と、墳丘をもたない竪穴式小石室の1基が新たに確認され、成合地獄谷古墳群と命名されている。古墳群の位置づけについては第2節にて詳しく述べるが、いずれも南面する斜面の途中もしくは裾で検出されており、平坦地にみられる古代の遺構群とは遺構の立地がやや異なっている。

古代の遺構・遺物の帰属時期について簡単にまとめると、古代の包含層および各調査区の最終面検出の遺構からの出土遺物には、一部を除いて7～9世紀代のものがみられ、特に遺物の時期は7世紀中頃～後半と8世紀後半～9世紀前半の2時期に大別できる。このうち2区で検出された墓をはじめとした古代の遺構の時期は、8世紀後半から9世紀代を中心とし、7世紀代の遺物は本来的には古墳群に伴っ

第1節 調査成果のまとめ

ていた可能性も高い。ただし、遺物の出土が少なく、各遺構の時期をはっきりと区別することは難しい。また、121土坑からは5世紀代の遺物が出土しており、その時期まで遡る遺構の存在に留意する必要がある。なお3区については、焼土坑などから出土している遺物は断片的なものにすぎないが、主に8～9世紀代に帰属する遺構が多いと考えられ、この他に7溝や包含層中からは7世紀後半を中心とした時期の遺物もややまとまって出土しており、中には完形に近いものが含まれる。古墳群の2基が7世紀前半～中頃を中心とした時期に位置づけられ、3区出土の遺物は古墳群と併行もしくはやや後出する時期のものであることから、7世紀代の土地利用のあり方や古墳群との関係が問題となる。

2. 成合遺跡

狭い面積の調査であったが、弥生時代中期末の竪穴建物2棟と、墓と考えられる古代の土坑が1基検出された。竪穴建物については、東側の前回の調査の際にまとまった数が確認されており、今回の調査で新たに北西側の尾根上まで竪穴建物がひろがることが確認できた点はひとつの成果となる。今回検出された竪穴建物1と2は、建物の中心間の距離は15mであり、前回調査時の竪穴建物10は今回の竪穴建物1の西38mに位置する。一定の間隔をもって竪穴建物が配置されていることが改めて確認でき、前回の調査所見を追認する成果が得られたと考える(図79)。

また検出された竪穴建物は、いずれも焼土や炭化材が検出されており、焼失した竪穴建物と考えられる。このような焼失建物については、前回の調査の際には竪穴建物3・9・10の3棟が確認されており¹⁾、いずれも谷より北側で検出されたものであることから、焼失建物が北側尾根に偏る点が明確になったといえる。これらの焼失建物はいずれも遺物が少ないことから、機能していた段階で失火したのではなく、集落の廃絶時に建物を放火した可能性を想定している。集落の存続期間や個々の建物がどれくらい同時併存するか、といった問題があるものの、このような点を重視するならば、集落の廃絶時に建物の放棄のあり方が丘陵の北と南で異なっていると推測され、成合遺跡の集落内の集団間の関係や弥生時代の集落構造を考える上で参考となる。

古代の遺構については3土坑1基の検出に留まるが、この土坑は墓である蓋然性が高い。前回調査時の472土坑が、土師器甕を横に据えている点で共通するが、3土坑の周辺からは炭が検出されているため火葬墓の可能性が高く、一方で472土坑からは周辺から炭はみられなかったため土器棺の可能性があり、検出状況がやや異なる。成合遺跡の場合、成合地獄谷遺跡と比較すると、焼土坑も含めて墓と考えられる遺構は散在的に分布する点が異なっており、成合地区周辺の墓域の構成を考える上では重要な所見となる。

3. 金龍寺旧境内跡

金龍寺旧境内跡の調査は、鉄塔移設に伴う極めて小規模なトレンチ調査で、これまでの調査成果から古墳や古代の遺構、近世の金龍寺に関わる周辺諸施設などの検出が期待された。このうち丘陵上の1区・2区では、遺構・遺物は全く検出されなかったが、参詣道沿いの3区では2枚の平坦面がみられ、そこから17世紀末～19世紀にかけての陶磁器類が出土している。『摂津名所図会』や『金龍寺内略小図』等の近世絵図からみる金龍寺の当時の様子については、桜や松茸狩りの名所であることがわかり、周辺山々も村人の日常生活に関わる資源を確保する里山であったことが窺え³⁾、今回の出土遺物は当時の様子的一端を垣間見ることができる資料となった。

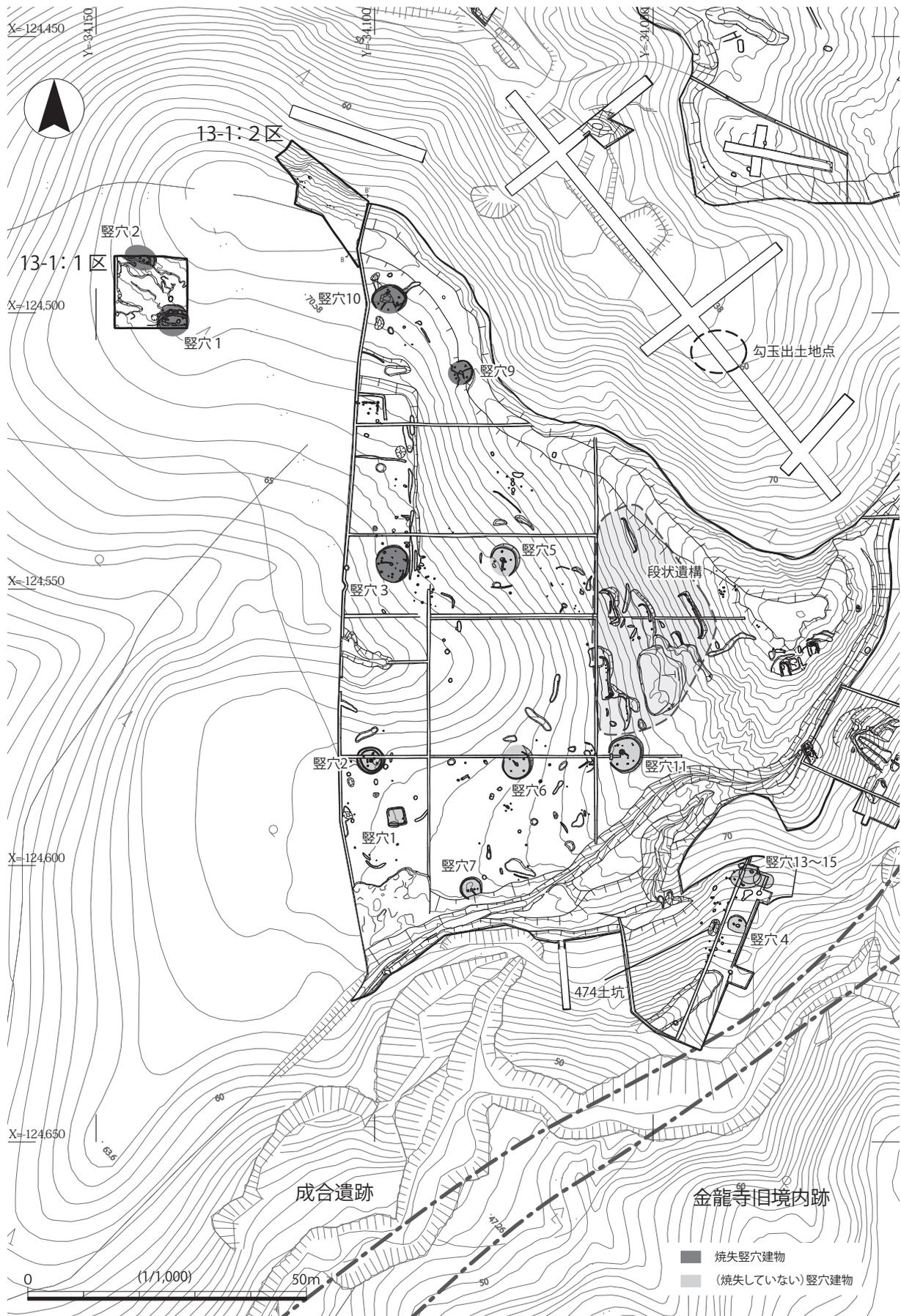


図 79 成合遺跡における竪穴建物の配置

第2節 成合地獄谷古墳群の特色と位置づけ

今回の調査で新たに発見された成合地獄谷古墳群では、横穴式石室を埋葬施設とする2基の古墳と、明確な墳丘をもたない竪穴式小石室1基が確認された。ここでは古墳の特徴をまとめて年代観を整理し、周辺の古墳との比較から成合地獄谷古墳群の性格を検討する。

1. 規模と構造

まず、それぞれの墳丘および埋葬施設の規模と構造については、表3にまとめた。

墳丘 横穴式石室を埋葬施設とする2基は、いずれも墳丘長が5～6m前後の規模で、周溝を伴うのに対し、竪穴式小石室は、斜面途中を平坦化して墓坑を掘り込み石室を構築するが明確な墳丘をもたない。墳丘をもつ2基は、いずれも墳丘の中心が斜面途中に位置しており、斜面をカットして周溝と石室基底面を整形し、墳丘の大半が盛土によって構築する点が共通する。墓坑の掘り込みは、奥壁側を中心とした深い部分でも基底石1段分程度であり、地山を深く掘り込むものではないため、石室基底面付近から墳丘を盛り上げていることがわかる。墳丘の構築方法については、必ずしも一定ではないが、概ね墳丘外側を土手状に先に盛り、石室の後背部を埋める傾向がみられる。また、墳丘の形状を概ね復元できる2号墳では、平面的には奥壁から0.3m手前が墳丘の中心となるが、これは石室後背部分の盛土量が多いことを示しており、断面からは1号墳についても同様に墳丘の背後に厚い盛土が施されていることが確認できる。

埋葬施設 横穴式石室については、開口部まで残存する2号墳が全長3.4m、幅1.0mの無袖式で、1号墳については開口部が削平を受けているため平面形は不明だが、奥壁側の天井がわずかに残っており、高さが1.0mとなる。2基の古墳はいずれも完存しないが、1号墳と2号墳の奥壁幅がほぼ等しいことから、2基の横穴式石室は同じような規模・構造であった可能性が高く、いずれも全長3m強、幅1m前後、高さ1m程度の規模に復元できるだろう。また両古墳とも加工した石材や極端に大ぶりな石材を使用しない点でも共通するが、ふたつの石室の違いを挙げるとすれば、1号墳がやや開き気味の平面形で、1号墳の側壁の石材の方がやや大ぶりである点が異なる。

石室の構造については、1号墳が側壁・奥壁ともにゆるやかな持ち送りがみられるが、2号墳に関しては残存している範囲では垂直に近い立ち上がりをみせる。ただし、使用された石材があまり大きくないことを考えれば、上半部には持ち送りがみられるだろう。奥壁と側壁の基底石材は、いずれも相対的に大ぶりなものをを用い、長手面を内側にむける傾向がみられる。一方で上半部は、後背部分を確認する限り、小口面を内側にむけて石室背後への石材の引きが長いものが多い。これは石室をより安定的にするための構造と考えることができる。また、1号墳は開口部が削平されているためはっきりしたことがわからないが、2号墳の場合は奥壁から1.8m付近を境に石材の用い方や積み方が異なっており、奥壁側の方がより丁寧に石積みをし、面を内側に向ける傾向がみられる。無袖式ではあるものの、玄室と羨道に対して区別する意識があらわれており、その範囲は遺体の大きさともほぼ一致する点が興味深い。

また、床面からは鉄釘等は出土しておらず、木棺を復元できるような棺台の石材や敷石などの痕跡等は確認できなかった。そのため、棺や埋葬方法の復元には至っていない。副葬品についても石室内の堆積土から僅かな出土がみられるのみで、床面については盗掘の際に徹底的に削平されたようである。

表3 成合地獄谷古墳群の一覧

	墳丘			石室								出土遺物
	規模	高	周溝	形態	石室主軸	全長	奥壁幅	最大幅	高さ (深さ)	奥壁 側壁	床面	
1号墳	方 (6m)	1.4m	○	無袖か	N-23° W	(2.0m)	0.9m	1.1m	1.0m	4段 4段	なし (不明)	須恵器杯蓋 (石室内堆積土)
2号墳	円 5.8m	(1.25m)	○	無袖	N18° W	3.4m	0.95	1.0m	(0.95m)	(3段) (4段)	なし (不明)	鉄鏃・須恵器細片 (石室内堆積土) 須恵器短頸壺(周溝)
竪穴式 小石室	—	—	—	小石室	N42° W	0.95m	—	0.5m	0.5m		板石敷	なし

竪穴式小石室は内寸1m未満で、遺体を直接納めた小型の埋葬施設と考えられる。南側の一石分を除けば天井がほぼ残っており、内部の攪乱は免れたと思われるが、副葬品は出土していない。奥壁と側壁はほぼ1段で縦使いし、奥壁が1石、側壁が3石でそれぞれ構成され、床面には板石を3石分敷き詰めている点が特徴的である。このような小石室は、単独の埋葬施設としても横穴式石室の埋葬棺としても終末期古墳群ではごく一般的にみられるもので、規模が小さいことから伸展埋葬は難しく、改装墓の可能性が指摘されることが多い⁴⁾。

2. 時期と変遷

2基の横穴式石室は盗掘を受けているためか、出土遺物は極めて少なく、1号墳の石室内堆積土から7世紀第3四半期頃の杯蓋1点(140)が、2号墳の石室内埋土から平根系鉄鏃(141)と周溝から短頸の壺(142)が出土している程度である。また、周辺の包含層中から出土した須恵器杯蓋(5)や長頸壺(14)、長頸鏃の頸部(16)、ガラス小玉(18)、ピットから出土の須恵器杯蓋(112)などは、基本的には7世紀前半～中頃の遺物とみなすことができ、本来的には古墳に伴っていた可能性がある。いずれにせよこの2基の古墳は、石室の規模や構造などから相前後する近い時期のものであり、大枠としては7世紀代に位置づけることはできるが、正確な時期をおさえる材料が乏しいのが現状で、周辺での調査事例などをもとに、2基の古墳の時期を検討する必要がある。

三島地域の横穴式石室の変遷については、富山直人の論考⁵⁾などを参照すれば、大枠では6世紀中頃の横穴式石室の導入以降、6世紀後半には大型化して両袖式がみられるようになり、7世紀に入ると無袖式の比率が増して、その後は漸移的に小型化することがわかる⁶⁾。石室が最も大型化する6世紀後半から7世紀初頭頃の横穴式石室のうち、海北塚古墳や耳原古墳などの嶋下郡域の単独墳や、梶原・塚脇などの群集墳中の中核墳に10mクラスの石室が伴うが、群集墳中の石室規模は6～8m前後のものが一般的である。7世紀代には横穴式石室の規模が徐々に小型化することは先にも述べたが、嶋上郡域の7世紀第2四半期から第3四半期頃(飛鳥I新～飛鳥III)の横穴式石室は、大半が無袖式であり、規模も3～4m前後の小型のものが多くなる(表4・図80)。その中でも3m前後のものはより新しい7世紀中頃以降のものが多い傾向がみられるが、成合地獄谷古墳群の2基と近在する成合西王寺山1号墳を比べると、後者の方がひとまわり規模が小さい。そのため、成合地獄谷古墳群の2基の方が、飛鳥IIの須恵器が出土した成合西王子山1号墳よりもやや古く位置づけることができるだろう。

さらに墳丘については、成合地獄谷古墳群の2基は大半が盛土で構築され、石室の後背部分の盛土量が多い点を先に述べたが、嶋上郡内の6世紀後半～7世紀前半までの報告事例を概観する限りにおいては、同じ様に盛土量が多い傾向がみられ、墳丘構造の地域性をあらわすものかもしれない⁷⁾。対照的に、成合西王子山1号墳をはじめとした7世紀中頃以降の古墳については、明確な墳丘をもたないもの

表4 嶋上郡域における7世紀中頃前後の横穴式石室一覧

	時期	墳丘	石室				棺	出土遺物	備考
			形態	全長	奥壁幅	高さ			
梶原 A1 号	飛鳥Ⅰ	—	右片袖	3.37	0.87	0.60	(敷石)		
梶原 G1 号	飛鳥Ⅰ	—	無袖か	3.80	1.50	1.30		須恵器・土師器・耳環	
塚脇 C7 号	飛鳥Ⅰ	円・9.5	無袖	4.70	1.10	1.40	釘付式木棺	耳環・須恵器	
古曽部	(7C)		無袖	3.50	1.20	0.75	釘付式木棺 (敷石・棺台)	—	火葬蔵骨器×2
梶原 A2 号	(7C)	—	—	(2.20)	1.24	0.50			
塚原 B21 号	(7C)	—	(右片袖か)	3.76	1.20		(釘付式木棺)		(旧 37 号)
塚原 B24 号	(7C)	—	—	3.00	(0.92)	1.30			(旧 38 号)
成合地獄谷 2 号	(7C 前～中)	円・5.8	無袖	3.40	0.95	0.95		平根鉄鏃	
成合地獄谷 1 号	(7C 前～中)	方・6.0	—	(2.00)	0.90	1.00		須恵器	
塚穴 5 号	飛鳥Ⅰ新	—	無袖	2.30	0.60	0.60	(敷石)	須恵器	
成合西王寺山 1 号	飛鳥Ⅱ	—	無袖	3.10	0.80	0.50	釘付式木棺	須恵器・土師器	
塚脇 D 1 号	飛鳥Ⅱ	方・5.0	無袖	2.70	0.80	0.65	(棺台)	須恵器・土師器	奈良・平安の遺物あり
塚原 B25 号	飛鳥Ⅱ	—	無袖か	2.00	0.65	0.75	釘付式木棺	須恵器・土師器	(旧 85 号)
安満山 B 3 号	(7C 中～後)	(6.00)	無袖	2.90	0.55	1.00	(棺台)	耳環	
奥坂 A 5 号	飛鳥Ⅲ	方・4.5	両袖か	2.30	0.60	0.40	釘付式木棺	須恵器	

や不明のものが多く、阿武山古墳においても墳丘の高まりははっきりとは確認されていない⁸⁾。この中には墳丘が流出したのも当然含まれると思われるが、例えば塚穴 5 号墳の場合、斜面の途中で石室が検出されているが墳丘盛土はほとんどなく、明確な高まりをもつ他の 4 基の古墳とは様相が大きく異なる。7 世紀前半までの墳丘のあり方とは大きく異なっていると考えられ、7 世紀中頃を境に大きな変化が生じた可能性が高い。

以上をまとめると、成合地獄谷古墳群の 2 基は、墳丘の形状や盛土の状況から 7 世紀中頃以前のものです。石室規模からは 7 世紀前半の中でもより新しい時期に置くことが可能であり、飛鳥Ⅰの中でも新しい 7 世紀第 2 四半期を中心とした時期に位置づけるのが穏当であろう。

2 基の横穴式石室の築造順序については、断定はできないが、1 号墳で比較的新しい時期の須恵器が出土していることから、こちらが後出する可能性が高い。また、ふたつの古墳の石室側壁の積み方を比べると、2 号墳の方が奥壁基底石がやや大ぶりであるが、1 号墳の方が側壁基底石はより大ぶりで、右側壁がやや縦方向気味に据えられている点が後出する要素とみなせ、2 号墳から 1 号墳への築造順序が想定される。ただし 2 基の古墳の時期的な隔たりはほとんどないだろう。

竪穴式小石室については、明確な墳丘はみられず出土遺物がないため正確な時期は不明である。古代の包含層除去面相当で検出されていることから、ほぼ前後する時期の遺構であり、先にも述べたように終末期の古墳群で比較的好くみられる退化した小石室とみてよく、墳丘がないことから 2 基の古墳よりは後出するとみられる。現状ではこの小石室を含んだ 3 基がみつまっているに過ぎないが、地形的にみても未調査地に埋没した古墳の存在も想定されるところであり、古墳群の存続期間は 7 世紀前半から後半までの幅の中で継続すると考えられる。

3. 檜尾川流域の後・終末期古墳の動向と成合地獄谷古墳群の占める位置

一連の調査成果をふまえて、成合地獄谷古墳群の位置づけを改めて確認すると、本古墳群は檜尾川流域でも最も北に位置し、高槻市域の中でも山間部に位置するものである。檜尾川流域の一帯では昼神車塚古墳⁹⁾の築造の後、6 世紀後半以降は安満山山塊にややまとまった数の群が、やや東の山裾には十数基からなる梶原古墳群がそれぞれ営まれる。安満山と梶原の古墳群は、群構成や立地、埋葬方法の違いな

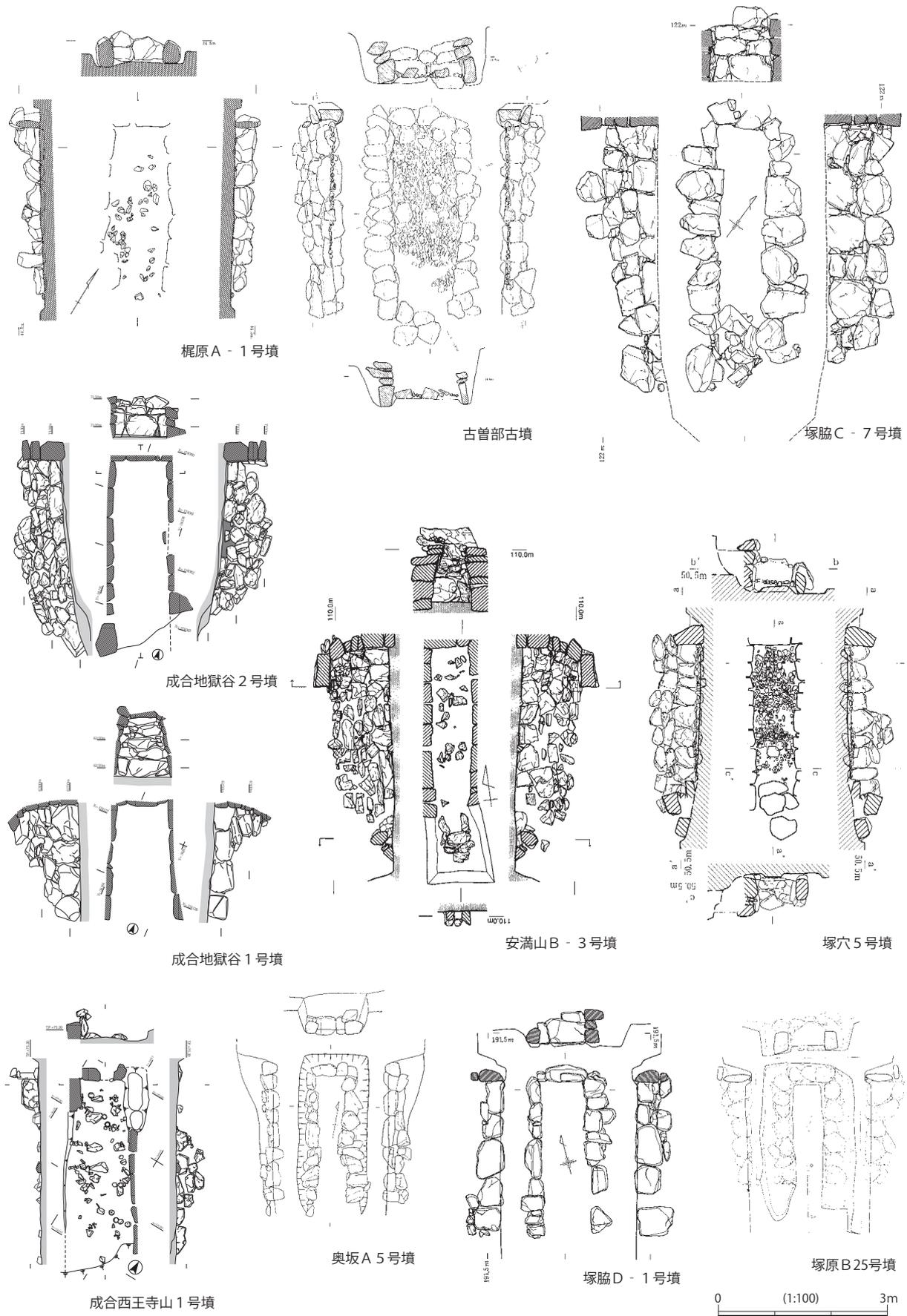


図80 嶋上郡域における7世紀中頃前後の横穴式石室

第2節 成合地獄谷古墳群の位置づけ

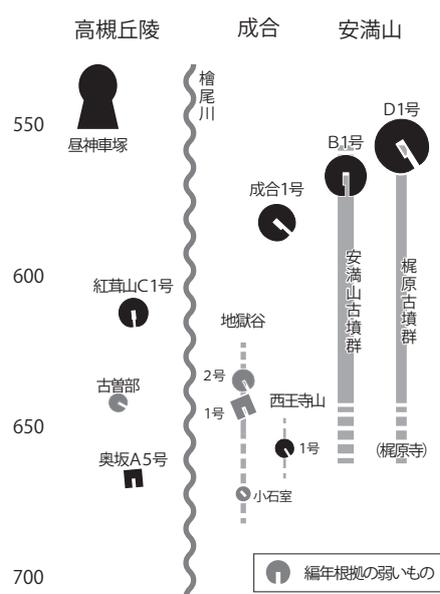


図 81 榎尾川流域における
後・終末期古墳の変遷

どから、造営した集団や群形成の原理が全く異なるとみられ、特に安満山古墳群に関しては沖積地を基盤とする集団の共同墓地的な位置づけが可能であり、安満山をランドマークとして群が形成されたと考えることもできるだろう。

その一方で、この安満山の背後に位置し、榎尾川の上流域にあたる成合地区においては、これまで確認されている限りでは大規模な群の形成はみられないのが特徴で、6世紀後半の成合1号墳が最も古く、7世紀初頭には紅茸山C1号墳が続く。両古墳とも墳丘が10m以上で6mクラスの横穴式石室を伴っており、右片袖式と両袖式の基本的な平面形の違いはあるものの、玄室と羨道の主軸がズれる点や、玄門部に段差のある大ぶりの廻石が伴う点、敷石を伴う点で高い共通性がみられる。これよりも新しい成合西王寺山1号墳については、単葬化した横穴式石室墳であり、7世紀中頃に位置づけられるが、今回発見した成合地獄谷古墳群はその間を埋めるような時期の古墳群とみな

すことができる(図81)。ただし、成合地獄谷古墳群の場合、小石室の存在から7世紀後半まで継続した可能性があり、その場合、成合西王寺山古墳群とは造営期間が重複することになる。また、成合1号墳や成合西王寺山古墳群は丘陵上に立地するのに対し、本古墳群は地獄谷川沿いの南面する緩斜面地に古墳が位置しており、立地条件も大きく異なる。このような違いは、被葬者の性格や集団の違いを反映しているとみられ、榎尾川流域や嶋上郡域の後・終末期の古墳の動向を考える上で新たな知見をもたらすものである。

第3節 成合地獄谷遺跡における古代の墓

今回の調査で最も特筆される調査成果として、古代の墓を挙げるができる。ここでは個々の墓の構造や出土遺物をまとめて、墓域の構成や特徴を検討するとともに、周辺遺跡の調査成果をふまえてその評価をおこなうこととする。

1. 墓の構成と特徴

成合地獄谷遺跡の調査では、併せて500近い数の遺構が検出されており、そのうち2区の遺構数が400ほどにのぼる。さらにその大半が第4面の平坦地に集中しており、南北にのびる谷筋の西側で遺構密度が高い。ここには掘立柱建物を構成すると推測されるピットが最も多く、これよりややサイズが大きい土坑も多数存在する。これらの土坑については、上面が耕作によって削平されたためか浅いものも多く、性格が不明なものが多数を占めるが、遺構の形状や特徴、出土遺物から古代の墓が含まれており、この中で墓に関連する可能性が高い遺構を(表5)にてまとめた。

今回の調査で検出された墓の種類については、埋土をはじめとした遺構の特徴や出土遺物から火葬墓(納骨遺構)と判断できるものと、火葬に関連する焼土坑、遺構の形状や配置から土坑墓と推測できるものが存在し、木棺墓については断定できるものはない。

火葬墓および関連遺構 まず火葬墓については、確実に古代の墓として認識できる遺構であり、土師器甕の蔵骨器を伴う33土坑と、八花鏡が出土した69土坑のふたつがある。このうち33土坑は、径1m内外の円形の土坑に炭をいったん敷き詰め、丸底甕(26)を正位に据えてそれを覆うよう中胴甕(27)を倒立して蔵骨器としている。また断面からは、外側の倒立甕を据えた後に甕周辺下部を炭層で覆い、そののちに土坑外側をいったん周辺の黄褐色土で埋め、さらに甕の上部を改めて炭・焼土で埋めるといった入念な埋納のプロセスが確認できる。内側の丸底甕内部からは、こぶし大前後の礫とともに土師器皿(25)の破片と被熱した神功開宝を含む銅銭2点が出土し、焼骨片もみられた。

69土坑は1.2m程度の方形の土坑で、南端に10～40cm大の石材や炭・焼土層が集中する範囲がみられる。その石材間の炭・焼土層中からは鉄釘(37～41)が出土し、礫および炭・焼土層を除去した底面付近からは八花鏡(36)が1点出土している。石材と炭・焼土層の検出状況を検討すると、その内側にはやや石材の少ない範囲がみられ、鉄釘は主にこの石材の少ない範囲から出土していることがわかるが、鉄釘自体は木質が残ることから被熱はしておらず、また石材の少ない範囲には骨片もみられたことから、この範囲に木櫃が存在した可能性が想定される。また石材については、東西の長軸端にやや大ぶりの板状のものがあり、周囲の石材も板状のものが多く、さらに内側に面を向けるような検出状況であったことから、木櫃を礫で覆うような構造であった可能性が高い。この平面的にみて石材が少ない範囲は0.5×0.4m程度であり、鉄釘の出土位置の関係から考えても、木櫃の大きさは0.3～0.4m前後であったことが推測される。また出土した鉄釘については15cmをこえる大ぶりなものであり、厚手の板を留める重厚な木櫃であったことが窺われる。古代の木棺墓に伴うような鉄釘は、10cm未満の小型なものが一般的であり¹²⁾、このようなサイズの釘は主に建築部材として出土する 경우가多く、墓に関連する出土資料としては京都市安朱古墓などで木槨の緊結に用いられる例などがある¹³⁾。

また、出土した鏡については、対鳥b双獣鏡ないしは俊猊双鸞鏡とよばれる一群の八花鏡で、国内では宮崎県神門神社所蔵鏡や日光男体山山頂遺跡出土鏡をはじめとした10例ほどが知られている。鏡は礫群を除去した炭・焼土層下部から鏡面を土坑の内側に向けるように出土しており、木櫃を納める前に鏡が埋められたことがわかる。

このふたつの火葬墓に近い位置で検出された116土坑と313土坑については、いずれも径1m弱の円形の土坑であるが、炭・焼土を含む黒褐色層の埋土から、墓に伴う副葬品と考えられる遺物がまとまって出土している点で注目される。116土坑からは土師器杯(46)・皿(47)とともに、銚具の可能性のある溶解した不明銅製品(64)や碁石状石製品15点(49～63)、多数の鉄釘(68～99)などが出土し、313土坑からは須恵器杯蓋(100・101)とともに被熱した石製丸軋2点(103・104)や鉄釘(105～107)などが出土している。さらに特筆すべき点として、環状つまみをもつ杯蓋(100)はこの116・313土坑からそれぞれ破片が出土しており、ふたつの土坑の関係性が問題となる。出土した遺物の内容と組成、碁石状石製品や石製丸軋、鉄釘の一部に被熱痕跡がみられることなどから、火葬墓に伴う副葬品と判断できるだろう。ただし蔵骨器等は伴っておらず、土坑の規模も小さいことから積極的に火葬墓とするには根拠がやや乏しい。火葬墓周辺などからみつかる炭・焼土を埋納した、いわゆる火葬灰埋納遺構¹⁵⁾の可能性も考えられるが、これらについては30土坑のように遺物はほとんど出土しないものが通常であり、116土坑や313土坑のように副葬品が多数出土した例は管見の限りはない。また、成合遺跡の調査においては、火葬灰埋納遺構と想定される焼土坑(B類)を多数検出したが、出土遺物はせいぜい土器類の細片や鉄釘がわずかに混じる程度であり、様相は大きく異なる。このため116土

表5 成合地獄谷遺跡における古代墓一覧

	形状	規模 (m)			埋土	被熱	遺物	特記事項	時期	成合分類	性格	
		長	幅	深さ								
2区	30 土坑	円	0.6	0.2	炭・焼土層	なし	土師器細片	底部に炭層 ※3区26土坑と近い		B	火葬灰埋納遺構か	
	33 土坑	円	1	0.8	炭・焼土層	なし	蔵骨器 (26・27 土師器蓋×2)、 25 土師器皿、 28・29 銅銭 (神功開宝ほか)	竈内部に焼骨あり、礫含む 土師器皿が9世紀半ば～後半 の年代観で新しい	(8世紀後半～9世紀)	特殊	火葬墓 (納骨遺構)	
	35 土坑	方	0.8	0.6	炭化物	なし	30 須恵器杯 B、土師器細片					
	36 土坑	長方	1.8	0.8	炭化物 (まぼら)	なし	32 土師器蓋 (埋土上面)、 須恵器細片	上面よりほぼ完形の土師器 丸底甕	(8世紀後半～9世紀)			土坑墓か
	37 土坑	楕円	2.3	1	炭化物 (ブロック)	なし	33 須恵器杯 B		8世紀末～9世紀			土坑墓か
	69 土坑	方	1.24	1.12	炭・焼土層 礫多数	なし	36 八花鏡、37～41 鉄釘×5、 土師器・須恵器細片 (周辺遺構から42～45 須恵器、 土師器細片、窠片など)	焼骨あり 一片0.4m程度の木櫃が存在 する可能性あり		特殊	火葬墓 (納骨遺構)	
	116 土坑	円	0.7	0.15	炭・焼土層	なし	46・47 土師器杯・皿、48 須恵器壺 A、 49～63 基石状石製品、 64 不明銅製品 (鈿具、留金具ほか)、 68～99 鉄釘	313 土坑と須恵器杯蓋接合 不明銅製品や基石状石製品 に被熱痕跡あり	平城IV	(B)	火葬墓 or 火葬灰埋納遺構	
	313 土坑	円	0.5	0.4	炭・焼土層	なし	102 土師器壺 B、 100・101 須恵器蓋×2、 103・104 石製丸甕×2、 105～107 鉄釘	116 土坑と須恵器杯蓋接合 石製丸甕に被熱痕跡あり	(平城IV～平城VI)	(B)	火葬墓 or 火葬灰埋納遺構	
	45 土坑	長方	1.9	0.9	0.2		なし	土師器細片				(土坑墓か)
	83 土坑	楕円	1.4	1	0.08		なし					(土坑墓か)
	129 土坑	長方	1.1	0.65	0.25		なし					(土坑墓か)
	130 土坑	楕円	1.09	0.7	0.3		なし					(土坑墓か)
	135 土坑	長方	1.8	0.78	0.18		なし	土師器細片、須恵器細片				(土坑墓か)
	142 土坑	長方	1.9	1	0.4	炭・焼土層	なし	土師器細片				土坑墓か
68 土坑	方か	1	0.8	0.18	炭・焼土層	なし	土師器細片	(一部削平あり)			土坑墓か	
3区	1 土坑	不正	2	0.9	0.2	炭・焼土層	なし		薄い炭層のひろがり		(B)	火葬灰の掻き出し痕跡か
	2 土坑	方	1.5	1.1	0.4	炭・焼土層	◎ (125 須恵器椀 E、126 壺 A 蓋)	底部に炭層 25・126 は2・4土坑それ ぞれに破片があり	8世紀後半	Ab	火化遺構	
	3 土坑	円	1.1	0.8	0.3	炭・焼土層	なし	127 六角水晶柱		(9世紀以降か)	B	火葬灰埋納遺構か
	4 土坑	楕円	1.7	1.2	0.2	炭・焼土層	なし	(125 須恵器椀 E、126 壺 A 蓋)	薄い炭層のひろがり 125・126 は2・4土坑それ ぞれに破片があり	8世紀後半	(B)	火葬灰の掻き出し痕跡か
	10 土坑	不正	1.1	0.25		炭・焼土層	なし	132 基石状石製品	(一部削平あり)	(8世紀後半～)	B	火葬灰埋納遺構か
	15 土坑	不正	0.8	0.1		炭・焼土層	なし	133 土師器杯 A、134 須恵器杯 G 蓋	(一部削平あり)	7世紀後半	B	火葬灰埋納遺構か
	26 土坑	円	0.5	0.2		炭・焼土層	なし	135～137 鉄釘、 土師器・須恵器細片	底部に炭層 ※2区30土坑と近い (一部削平あり)		B	火葬灰埋納遺構か
	30 土坑	楕円	0.9	0.5	0.2	炭化物	◎				A	火化遺構

坑・313 土坑の性格としては、火葬に関連する遺構であること自体は確実に、遺構の上面が耕作等によって削平された可能性もあることから、上部が削平された火葬墓、もしくは副葬品をもつが蔵骨器を伴わない火葬墓、副葬品を収めた火葬灰埋納遺構、の3つの可能性が想定されるだろう。

また、このふたつの土坑から出土した遺物が接合する点に関しては、その意味するところは定かではないが、その解釈としてはひとつの遺骨に伴う副葬品をふたつの遺構に分けて埋納したか、もしくはふたつの遺骸を同時に茶毘に付してそれぞれに伴う副葬品をそれぞれ別の遺構に埋納した、という可能性が推測されるだろう。これについては、ふたつの土坑の出土遺物に明らかな偏りがみられることから、同時に火葬されたふたりの人物に伴う副葬品を別々に埋納したと考える方がやや整合的であり、そのように解釈する場合は、出土遺物の差はふたりの人物の性格の違いをよく表している。

116 土坑の出土遺物のうち、白色と黒色からなる基石状石製品はやや珍しい出土遺物であるが、近隣で時期的にも近い出土事例としては、枚方市禁野本町遺跡の8世紀後半の溝 (第103 - 3次: SD04) で、高杯脚部の中からまとまって出土した例などが報告されている¹⁶⁾。この他に9世紀初頭ごろとされる奈良県御所市巨勢山室古墳¹⁷⁾や、10世紀後半～11世紀初頭ごろの島根県雲南市馬場遺跡¹⁸⁾などが墓からの出土事例として知られている。また、まとまって数が出土している鉄釘については、5cm未満の極めて小型のもので、7世紀末～8世紀初頭の終末期古墳の棺釘に伴うことが判明している¹⁹⁾。奈良～平安時代の出土例については十分に把握はできていないが、先にも挙げた9世紀後半の安朱古墳の場合、出土した大小の鉄釘は出土状況から木槨と木棺で釘の使いわけがなされていたことが明らかとなっており、

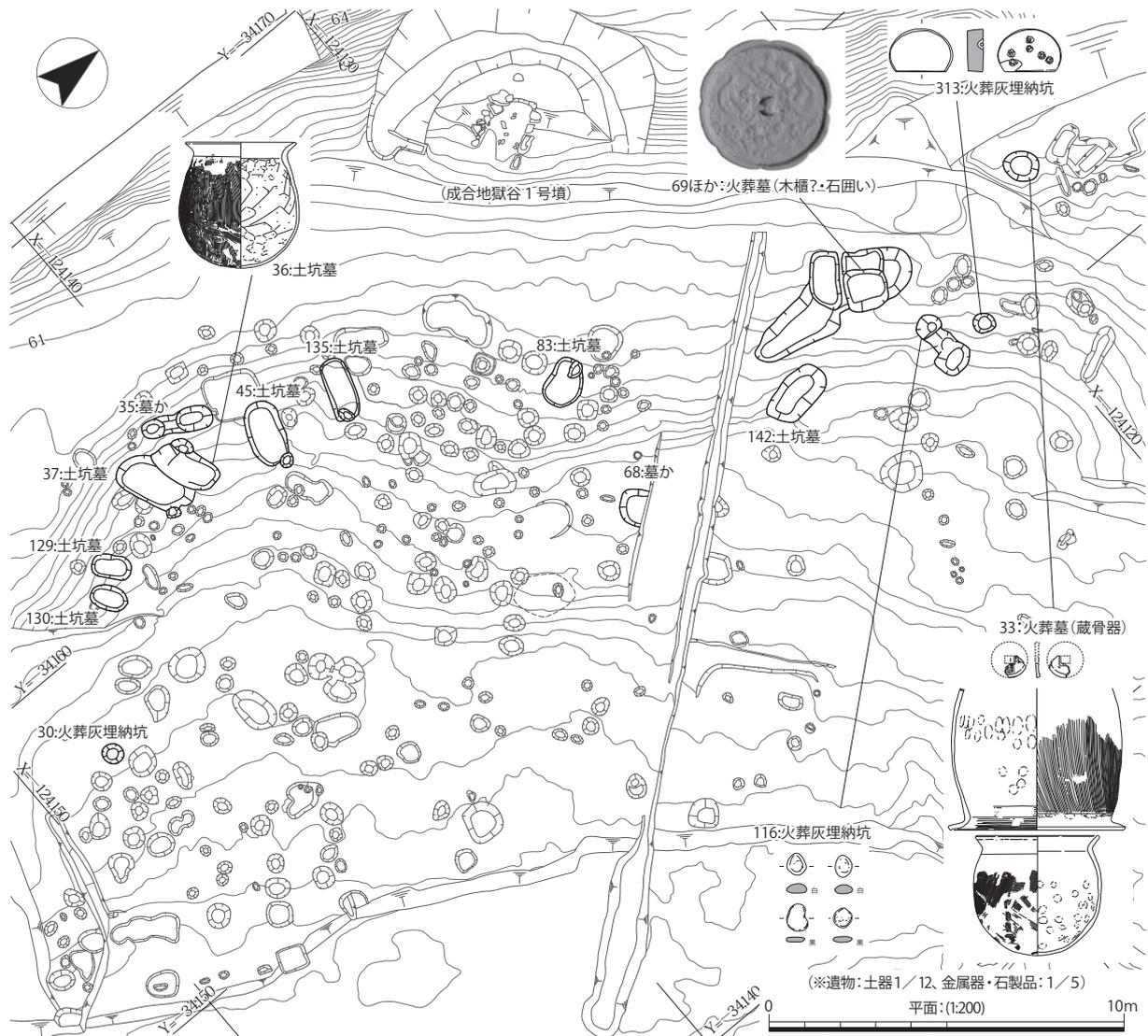


図 82 成合地獄谷遺跡 2区における古代墓の平面分布

4 cm 以下の小型の鉄釘は棺蓋と棺身を結合するのに用いられたと考えられている²⁰⁾。このため本例も木棺に伴っていたものと推測でき、火葬は木棺ごとにおこなわれた可能性が高い。一方で 313 土坑については、雑石類の石製丸軀が出土しており、被葬者が六位以下の下級官人であったことが窺える。また、313 土坑からも 116 土坑と同様の小型の鉄釘が出土しているが、3 点のみの出土であり、明らかな偏りがみられることから、これについては本来的には 116 土坑に伴うものが混入した可能性が想定される。

土坑墓について 2区の南西平坦面では、概ね長さ 1.5～2.0 m、幅 0.7～1.0 m 程度の隅丸も含む長方形の土坑が 9 基ほど検出されており、これらは等高線に沿って放射状にならんでおり、いずれも斜面の直交方向を長軸とする。この中にはきわめて浅いものも含まれているが、調査地が耕作によって削平を受けていることなどを考慮すると、遺構の平面形態や規則的な配列状況などから土坑墓の可能性が想定される。

ただし、埋土の状況はそれぞれ異なっており、炭や焼土等が含まれないもの（45・83・129・130・135 土坑）と、炭・焼土を埋土とするもの（142・68 土坑）、炭化物をまばらに含むもの（36・37 土坑）とに大別でき、このうち炭等を含むものについては火葬墓もしくは火葬灰埋納遺構の可能性も考慮して

おく必要はある。特に埋土に炭化材ブロックがまばらに含まれる36・37土坑については、この炭化材ブロックが土坑の中央付近にまとまるといった特徴があり、このうち36土坑の上面からは完形に復元できる土師器丸底甕(32)が1点出土しており、これが蔵骨器となる可能性もある。

3区の火葬関連遺構 最後に3区の状況についても確認しておくが、ここからも火葬に関連する焼土坑が8基確認されており、壁面が被熱する火化遺構とした焼土坑(A類)と、埋土に炭・焼土を含む火葬灰埋納遺構と考えられる焼土坑(B類)のふたつが確認されている。特に前者の被熱し壁面が赤変・硬化するタイプの2・30土坑については、成合遺跡の調査ではまとまった数が確認されているものの、2区・4区では全く検出されていない点は注意を要する。また、後者の炭・焼土坑を含む焼土坑の中でも1・4土坑については不正形で浅く、埋土が淡い色調で炭・焼土が含まれる割合が少ないといった特徴がある。なおかつこのふたつの土坑は被熱した2土坑の周囲に位置し、2土坑と4土坑それぞれから出土した須恵器の破片が同一の個体であることから、4土坑は火化遺構と考えられる2土坑からの炭・焼土の掻き出し痕跡と考えることができる。同じような状況としては、成合遺跡1区の35土坑と36土坑、104土坑と105土坑の関係にみることができ、火葬行為を復元するための手掛かりとなるだろう。

2. 古代墓の帰属時期

次に遺物が出土した墓を中心に、それぞれの帰属時期と墓域の存続期間を確認したい。まず2区33土坑については、蔵骨器として使用された土師器甕(26・27)から詳細の年代を押さえるのは難しいが、甕の内部から出土した神功開宝(28)と土師器皿(25)が年代の指標となる。ただし、神功開宝が765年初鑄であるのに対し、土師器皿は形態や調整から9世紀中頃～後半まで下る可能性があるため、遺物の年代にやや開きがある²¹⁾。また、土師器の日常容器が蔵骨器として用いられる点や蔵骨器が倒立する点は、河内の場合は平安時代以降に多くみられることが指摘されており、いずれにせよ33土坑は9世紀代に位置づけられる²²⁾。2区69土坑は、八花鏡(36)が中川あやの唐鏡編年Ⅲ期の唐式鏡で、唐での製作・使用の年代は8世紀第3四半期を中心とすることが判明している²³⁾。この鏡の日本国内での埋納時期についてははっきりしないが、極端に下ることは考え難く、関連する周辺土坑からの出土した土器の年代観は8世紀後半～9世紀初頭頃を示すことから、鏡の年代観との整合性はとれる。2区116土坑と313土坑は、前述したように相互に関連する遺構であり、同時期のものとみなすことができる。このうち116土坑から出土した土師器の杯(46)と皿(47)は、暗文が消失した平城Ⅳ前後の8世紀後半に位置づけられ、313土坑から出土した須恵器蓋(100・101)についても8世紀後半～末の幅の中で捉えることができる。ただ313土坑出土の丸軋については、石製であることから長岡京期以降に下ると考えられ²⁴⁾、このふたつの土坑については8世紀末頃に位置づけておくのが穏当である。

この他の遺構で土器類が出土し時期が概ね判明するものとしては、2区36・37土坑が8世紀後半から9世紀前半に、3区2土坑・4土坑が8世紀後半を中心とした時期にそれぞれ位置づけられる。3区15土坑については、7世紀後半ごろの土器が出土しているが、その時期まで遡る焼土坑はこれまで確認されていないことから、混入の可能性もある。また、碁石状石製品が1点出土した3区10土坑は2区116土坑と近い時期に、127水晶が出土した3区3土坑は経塚等からの出土例が知られることから²⁵⁾、少なくとも9世紀以降にそれぞれ位置づけておくことができ、26土坑から出土した鉄釘も古代のものとして大過はない。

以上のように古代の墓の存続期間は、基本的には8世紀後半から9世紀代の間におさまると考えら

れ、遺物が出土していないその他の墓についてもこの間に位置づけることができるだろう。

3. 古代墓と他の遺構との相互関係

これまでの検討から、古代の墓は8世紀後半～9世紀代の所産であることが判明したが、2区・4区および3区の古代の包含層と墓以外の最終面の遺構からの出土遺物については、2区121土坑のよう一部の例外を除けば7世紀から9世紀までの幅がある。ただし、出土遺物は7世紀中頃～後半と8世紀半～9世紀代の2時期に大別でき、このうち2区・4区の7世紀代の遺物については、本来的には古墳群に伴う可能性が高く、ピットや土坑をはじめとする遺構の大半は基本的には8世紀後半から9世紀代のもと考えられる。そして8世紀前半～中ごろの遺物はほぼみられないことから、この時期が遺跡の空白期であった可能性が高い。このため古墳群と火葬墓の関係性が問題となるが、古墳群は当然7世紀代にはおさまるものであり、成合地獄谷遺跡の場合は100年前後のはっきりとした断絶が認められる。ただし、火葬墓をはじめとする8世紀後半以降の墓域が形成される際には、墳丘の高まりが存在していたと推測され、古代の墓域の形成に何らかの影響を与えた可能性はある。

2区平坦面に存在するピット群をはじめとした墓以外の遺構については、5世紀および7世紀にさかのぼるものも存在すると思われるが、個々の遺構の詳細な年代を確定することは極めて困難である。ただし主に土坑墓が展開する2区南西の平坦面には無数のピットが検出されており、土坑墓が営まれた時期と前後して掘立柱建物が存在した可能性が高い。

4. 墓域の空間構成

成合地獄谷遺跡における古代墓をめぐる分布のあり方や構成について気になる点を述べると、2区の南側平坦面ではまとまった数の古代墓が検出され、この中に火葬墓が含まれるにも関わらず、ここからは火葬をおこなった痕跡が全く見いだせない。成合遺跡も含めたこれまで調査・整理の過程から、被熱した焼土坑(A類)が火化遺構の可能性が高いと考えているが、1区・2区・4区からは被熱した焼土坑は全く検出されていないため、この2区の平坦面は埋葬地であり、火葬と埋葬が別の地点でおこなわれていたことを示している。このようなあり方は河内の事例をふまえる限り、奈良時代では一般的であったと考えられており、成合地獄谷遺跡の事例は整合的に理解ができる。また、33土坑や69土坑の火葬場を特定することは極めて難しいが、3区では2基の被熱した焼土坑(2・30土坑)が確認され、成合遺跡でも同様の遺構は多数みついていることから、それらは候補のひとつになるだろう。特に3区では炭・焼土を埋土とする10焼土坑中から、116土坑出土のものと同様の白色の基石状石製品が出土しており、3区付近が火葬地であった可能性も十分にありうる。

ただし、このような被熱した焼土坑が何らかの焼き場であったことは認められるとしても、火葬遺構となるかということ自体に対して批判的な見解もあり、1m内外の大きさの土坑において十分に人体を焼切ることができるかどうかについては、判断することは難しい²⁸⁾。その一方で、33土坑から出土した焼骨には焼けムラはほとんどなく、また、116土坑出土の不明銅製品が熱を受けて溶解している点をふまえれば、かなりの高温で火葬されたか、もしくは火葬が長時間に渡って入念におこなわれたかのどちらかが想定される。古代の火葬がどのような遺構でどのようにおこなわれたかについては、はっきりしたことは現状ではわからないが、火葬墓と火化遺構の出土遺物の状態や遺構の検出状況をふまえて整合的に理解する必要がある。

5. 成合地獄谷遺跡の古代墓の歴史的評価

最後に、成合遺跡や金龍寺旧境内跡などの調査成果をふまえて、成合地獄谷遺跡の古代の墓の歴史的な評価をおこないたい。成合地獄谷遺跡の古代墓が営まれた8世紀後半から9世紀の間には、成合遺跡と金龍寺旧境内でともに遺構・遺物が確認されている(図83)。成合遺跡では、斜面地を造成した古代の平坦面に掘立柱建物2棟と石列が検出され、この他に須恵器窯1基(成合西王寺山窯跡)と焼土坑が多数確認されている。金龍寺旧境内跡では、境内参道入り口付近の山裾の調査で、ピットや溝、土坑が確認されており、本来的には掘立柱建物等がたつ集落域であったことが判明している。また出土遺物には、成合遺跡で唾壺を含む緑釉陶器や灰釉陶器、軒丸瓦などが、金龍寺旧境内跡では石製巡方や円面硯、土馬などが含まれており、須恵器窯(成合西王寺山窯跡)では供膳具を生産の主体とするが壺鉢類の種類や量も豊富で、硯や九輪などの存在などから、都城や官衙、寺院などへの供給を目的とした平安時代初頭ごろの窯であったことが判明している。

以上のような発掘調査の成果から、山陽道からやや奥まった成合地区を舞台に活動する有力層が存在することが窺え、この背景としてはやはり金龍寺や悉檀寺といった山林寺院の存在がひとつの大きな要因であったこと推測される。金龍寺と悉檀寺は、前者が延暦年間の開創伝承をもち、後者は『日本三大実録』貞観年間の条に記載がみられ、特に悉檀寺については成合遺跡のすぐ西に位置する春日神社に所在したとされ、官寺にならうような規模であったとの記載もあるが、ふたつの寺院の詳しい実態はこれまでよくわかっていなかった。これまでの一連の調査成果は、このふたつの寺院の存在とも整合的に理解できるものであり、特に成合遺跡の造成段については、出土遺物の内容等から悉檀寺に関わる施設が存在した可能性が高いと推測される。一方でこの頃には、安満を中心とした檜尾川流域では勅使田の成立にともなって大規模な開発が進んだと考えられており、檜尾川の水源地となる成合地区の重要性が高まるきっかけともなった²⁹⁾だろう。山陽道に面する地域でもあり、このような動向の背景には長岡京・平安京への遷都も無関係とは考え難く、成合西王寺山堂窯跡での須恵器の生産内容はこれを裏付けるような資料となる。

このような成合地区をめぐる歴史的背景をふまえて、今回の成合地獄谷遺跡の調査で検出された古代の墓を評価するならば、結論的には成合周辺で活動する有力層の奥津城とみなすことができ、唐式鏡をはじめとした豊富な副葬品をもつ火葬墓の存在は、この地域の特異性を際立たせるものである。成合遺跡においても、火葬に関連する焼土坑が多数みつまっているものの、散在的な分布傾向を示し、木炭槨木棺墓(372土坑)をはじめとした有力層の墓の一部でみつまっているが、単独で立地しており、ここでは山全体が火葬地および埋葬地として漠然と位置づけられていたことが窺える。その一方で、成合地獄谷遺跡は最も奥まった山中の狭隘な空間が埋葬地となっており、有力者の墓域として意図的にここが選地された可能性が高い。

一連の調査で明らかとなった成合地区における古代の様相は、山林寺院的な要素や公的な関与を窺わせるものであり、墓や窯業などさまざまな角度からこの地域の歴史像が大きく塗り替える新たな知見が得られたといえる。さらにそれぞれの事象は相互に密接に関わっていると考えられ、地域社会の動向と歴史的な脈絡をふまえつつ、様々な角度からトータルでこの地域を捉え、発掘調査で得られた成果を歴史的脈絡の中に位置づけることが重要である。(笹栗)

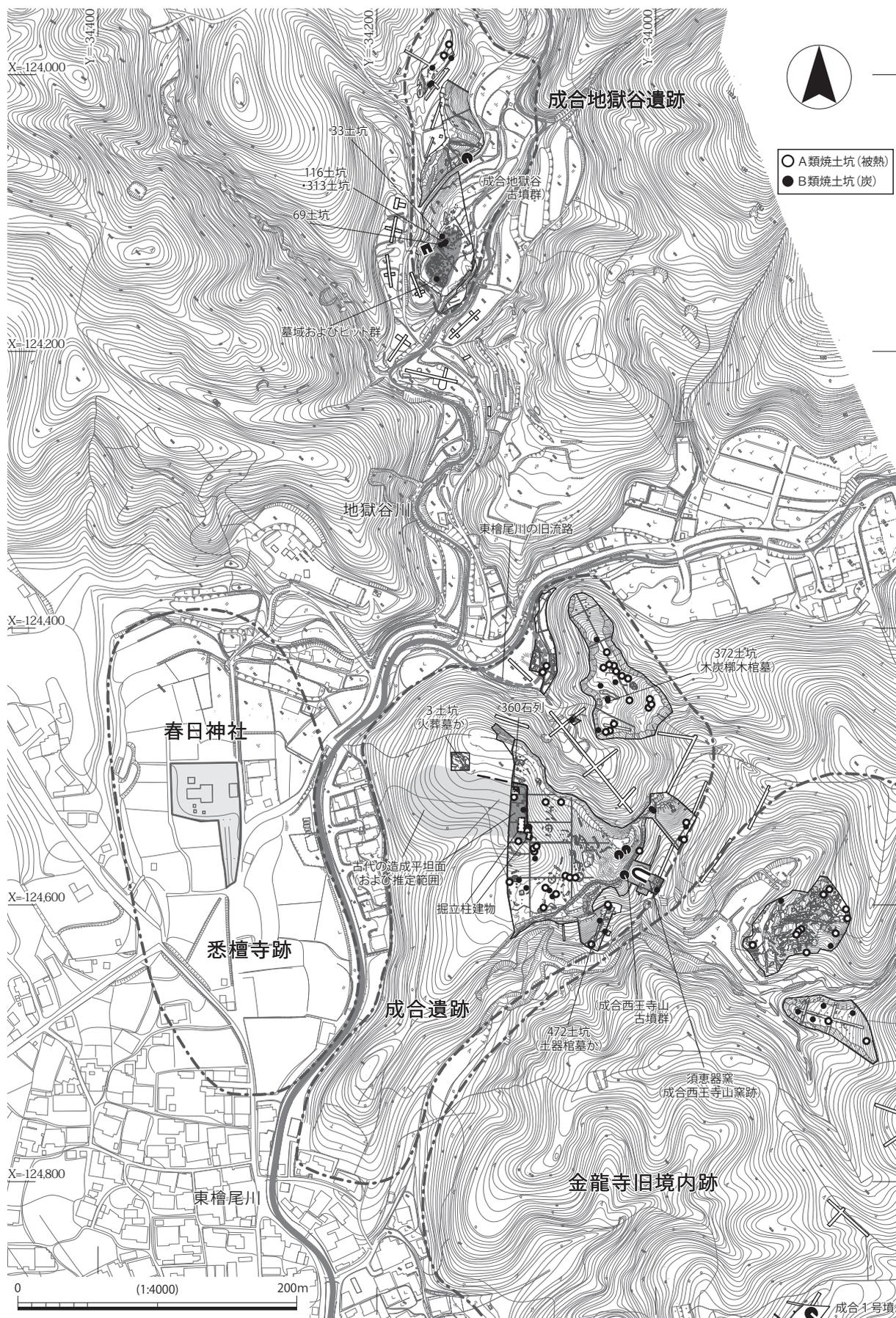


図 83 成合地獄谷遺跡をめぐる古代の景観

第3節 成合地獄谷遺跡における古代の墓

註

- 1) 段状遺構を建物とみなすなら、段状遺構2についても、焼土や炭化材が確認されている。
- 2) 472土坑については、炭は検出されていないが、上面が削平され、周辺から鉄釘が出土していることから、火葬墓の可能性も残される。
- 3) 西本幸嗣 2010『成合 春日神社と金龍寺』シリーズ高槻の村と町Ⅱ 高槻市立しろあと歴史館
- 4) 河上邦彦 1995『後・終末期古墳の研究』雄山閣、服部伊久男 1988「終末期群集墳の諸相」『論集』9 檀原考古学研究所、森本徹 2003「古墳時代末期の改装墓」『続文化財論集』同刊行会、西口圭介 2013「姫路市西脇古墳群について」『終末期古墳からみた播磨』第14回播磨考古学研究集会実行委員会
- 5) 富山直人 2007「大阪北部の横穴式石室」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』
- 6) 柱穴式石室の変遷の指標として壁面構成は重要であるが、この地域では奥壁最下段を中心に大型化する傾向があるものの、全体として壁面構成の違いから石室の変遷を追うのは難しいと考える。なお、近畿の横穴式石室に関しては集成データがあり（横穴研 2007）、個別の報告書については新しい報告があるもの以外は煩雑になるため割愛した。詳しくは集成を参照されたい。
横穴式石室研究会 2007『近畿の横穴式石室』
- 7) 例えば同じ北摂でも栗栖山南古墳群の場合は、横穴式石室に伴う墓壙は深い、墳丘や周溝の大部分は地山を掘削して整形するもので、特に背後の周溝は浅く、成合地獄谷古墳群に比べれば盛土量は少ない（森屋・瀬戸 2000）。このようなタイプの古墳の方がむしろ一般的と考えられ、墳丘構造の地域性をあらかず可能性がある。
森屋美佐子・瀬戸哲也 2000『栗栖山南墳墓群』（財）大阪府文化財センター調査報告書第57集
- 8) 今西康弘編 2012『阿武山古墳と牽牛子塚—飛鳥を生きた貴人たち—』高槻市立今城塚古代歴史館
- 9) 今西康弘編 2015「昼神車塚古墳—形象埴輪群と墳丘盛土の調査—」今城塚古代歴史館資料集1『たかつきの発掘史をたどる』高槻市立今城塚古代歴史館
- 10) 笹栗拓 2014「北摂・三島における後・終末期古墳」『大阪文化財研究』第45号（公財）大阪府文化財センター
- 11) 菱田哲郎 2013「7世紀における地域社会の変容と—古墳研究と集落研究の接続をめざして—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集 国立歴史民俗博物館
- 12) 5世紀末の出現遺構、木棺にもちいられた鉄釘は6・7世紀代を通して小型化し、10cm未満のものが一般化することが知られている（田中 1978）。その後の鉄釘の変遷について、これまでに詳しく述べた見解はないが、成合遺跡等の出土資料や古代の墓出土資料を見る限りにおいては、古墳時代終末期と同様の小型の鉄釘が一般的であるといえる。
田中彩太 1978「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』第25巻第2号 考古学研究会
- 13) 高正龍・平方幸雄 1996「30安祥寺下寺1」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
また、安朱古墓の場合は、木槨と木棺などの用途によって鉄釘を使い分けていることが判明しており、69土坑のような大型釘は棺釘としては一般的でないことから、外容器を伴うような二重構造の木櫃であった可能性も考えておく必要があるだろう。
- 14) 中川あや 2004「唐鏡の変遷 - 盛唐期以降を中心に - 」『考古学雑誌』第88巻第1号 日本考古学会、中川あや 2006「金属器の受容 - 唐代金属器の入手と模倣生産」『列島の古代史5 専門技能と技術』岩波書店、杉山洋 1999『古代の鏡』日本の美術 第393号 至文堂
- 15) 小林義孝 1992「灰を納めた土壙」『究班』埋蔵文化財研究会 15周年記念論文集、小林義孝 1999「古代墳墓研究の分析視覚」『古代文化』第51巻第12号
また報告書 251集では、このような炭・焼土を納めた焼土坑をB類とし、壁面および底面の一部が被熱・赤変し

た焼土坑をA類としており、以下本稿の記述においても随時このA類とB類の分類は併記している。

- 16) 西村健司・下村節子・山本崇 2006 『禁野本町遺跡Ⅲ』枚方市文化財調査報告第49集(財) 枚方市文化財調査研究会
- 17) 御所市教育委員会 2002 『巨勢山古墳群 確認調査』現地説明会資料、橿原考古学研究所附属博物館編 2002 『大和を掘る 20 2001年度発掘調査速報展』
- 18) 中川寧編 2001 『馬場遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 19) 銅製のものとしては高松塚古墳例が、鉄製のものとしては東明神古墳例などがある。
松田真一・西藤清秀・坂靖・岡林孝作・水野敏典・鈴木一議・大藪由美子 2011 『高松塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第12冊 奈良県立橿原考古学研究所
河上邦彦 1999 『東明神古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第2冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 20) 前掲13) 高・平方 1996
- 21) この皿(25)をはじめとした土師器の位置づけについては、基本的に平安京の編年を参考にしており、当該地域の資料の蓄積と編年研究の深化がみられれば年代観が修正される可能性を想定しておく必要がある。
- 22) 安村俊史 1997 「河内における奈良・平安時代の火葬墓」『堅田直先生古希記念論文集』
- 23) 前掲14) 中川 2004
- 24) 木村泰彦 2002 「銅鈔から石鈔へ」『鈔帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 25) 秋山浩三「経塚と珠玉」(財)大阪府埋蔵文化財協会『研究紀要』3(秋山浩三 2007 『日本古代社会と物質文化』青木書店に所収)
- 26) 古墳と近接して営まれた火葬墓については、基本的に継続するという見解(森本 1999)と、継続するものと断続するものの2者があるとする見解(安村 1999)がある。
森本徹 1999 「群種墳の変質からみた古代墳墓の成立過程」、安村俊史 1999 「火葬墓を内包する終末期群集墳 - 畿内の事例の基礎的考察 -」、ともに『古代文化』第51巻第11号(財)古代学協会
- 27) 前掲22) 安村 1997
- 28) 焼土坑が火葬遺構とする意見としては(森本 1991)が、否定的な意見として(安村 1997)が挙げられる。否定的な見解の根拠としては、遺物が少なく時期比定が難しい上、木棺に関わる鉄釘等もあまり出土しないことや、壁面の被熱が弱く、火葬骨もみられない、といった点などが挙げられている。成合地獄谷遺跡や成合遺跡の場合、遺物が含まれるものは少ないが含まれるものは全て古代であり、また鉄釘を伴うため古代の火化遺構であることはほぼ間違いなく、これまでの一連の調査成果を総合すると火葬遺構とすることが最も整合的に理解ができる。ただし、壁面が十分に硬化しないものも多く、また火葬骨がまったく出土していない点から、火葬遺構とするにはやや根拠が弱い。遺構の状況を十分にふまえた上で、これらの遺構でどのように火化行為をおこなっていたか検討することが必要である。
森本徹 1991 「火葬墓と火葬遺構 - 群集墳周辺にて確認される「焼土坑」の検討 - 」『大阪文化財研究』第2号(財)大阪文化財センター、前掲22) 安村 1997
- 29) 中西裕樹 2013 「金龍寺の成立と安満山周辺の地域社会」『しろあとだより』第6号 高槻市しろあと歴史館

成合地獄谷遺跡 出土土器 観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名(層位・面)	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率	焼成	胎土	色調	調整・備考
1	10	26	2	2L-7j	(棚田3) (1層)		鉢か		(15.4)	11.6	(4.6)	底部1/7	良好	密 微小な石粒含む	外: 灰白 5Y7/ 内: 灰白 5Y7/ 断: 灰白 5Y7/	内外面回転ナデ 底部未調整
2	10	26	4	2K-5i ・6i	(棚田1) (1層)		すり鉢		(22.9)	12.8	(5.4)	底部1/4	良	密 1~4mmの石粒入る	外: オリーブ灰 2.5GY6/1 内: 灰 N6/ 断: 灰 N6/	外面ナデ、ユビオサエ 内面ユビナデのち振り目 底部未調整
3	10	26	2	2L-5d	(2層)	青磁	碗					-	良好	緻密	外: 灰 7.5Y6/1 内: 灰 7.5Y6/1 断: 灰白 N8/1	外面連弁か
4	10	26	2	2L-6d	(側溝) (2層) ※3層直上	須恵器	花瓶	24.0			(9.7)	胴径1/8	良好	密 微小な石粒(長石等) 含む	外: 灰 N7/ 内: 灰 N6/ 断: 灰黄 2.5Y6/2	内外面 回転ナデ、肩部降灰あり 肩部~体部上2条の突帯を貼り付け 9世紀代
5	10	26	2	2L-6d ・7d	(棚田4) (3層)	須恵器	蓋	9.4	11.7		(2.0)	全体1/2	良好	密 微小な石粒(長石等) 含む	外: 灰 N6/ 内: 灰白 5Y7/1 断: 灰 5Y6/1	内外面回転ナデ 天井部回転ヘラケズリのち回転ナデ 7世紀中頃(飛鳥Ⅱ~Ⅲ)
6	10	26	4	2K-6j	(3層)	土師器	杯A	14.6		10.2	3.8	全体1/10 口縁1/14	やや不良	密 微小~1mm(最大4mm) 程度の石粒(長石・黒色粒等)含む	外: 橙 5YR6/6 内: 橙 5YR6/6 断: 橙 5YR6/6	内外面摩滅 8世紀代
7	10	26	4	2K-6j	(3層)	土師器	皿	19.8			(2.4)	口縁1/12	やや不良	微小な白・黒色粒含む	外: 橙 7.5YR7/6 内: 橙 7.5YR7/6 断: 橙 7.5YR7/6	内外面摩滅 9世紀中頃~後半(平安京Ⅱ期古~中)
8	10	26	2	2L-6c	(3層)	須恵器	杯B蓋	12.4	14.4		2.6	全体1/3 口縁1/4 底み3/4	良好	蜜 石英・長石 (~5mm)含む	外: 灰 7.5Y6/1 内: 灰 7.5Y6/1 断: にぶい橙 7.5YR7/3	内外面回転ナデ 天井部回転ヘラケズリのち回転ナデ 7世紀末~8世紀初頭(飛鳥Ⅴ~平城Ⅰ)
9	10	26	2	2L-6d	(3層) (巨礫集中地点)	須恵器	杯A	11.9		8.0	3.8	全体1/2 口縁1/4 底部1/2	良好	密 微小な石粒(最大2mm) 程度(長石等)含む	外: 灰 N6/ 内: 灰 N6/ 断: 灰 N6/	内外面回転ナデ 底部ヘラ切のち不定方向のナデ 9世紀初頭~前半(平安京Ⅰ期前~新)
10	10	26	2	2L-6d	(3層) (巨礫集中地点)	須恵器	杯A		(11.1)	8.0	(3.5)	全体2/3 底部3/4	不良	密 微小な白・黒色粒含む	外: 灰白 5Y7/1 内: 灰白 5Y7/1 断: 灰黄 2.5Y7/2	内外面回転ナデ 底部ヘラ切未調整 7世紀代か
11	10	26	2	2L-7d	(3層) (巨礫集中地点)	須恵器	杯B		(13.8)	9.4	(5.0)	全体1/8 底部1/5	良好	密 微小な石粒(長石等) 含む	外: 灰 5Y6/1 内: 灰 N6/ 断: 灰 5Y6/1	内外面回転ナデ 底部外面重ね焼きの痕跡 9世紀前半~中頃(平安Ⅰ期新前後)
12	10	26	2	2L-5b ・6b	(3層)	須恵器	椀B	13.4		8.6	6.7	全体3/8 口縁1/9 高台1/3	良好	密 微小(最大3mm) の白色粒含む	外: 灰白 5Y7/1 内: 灰白 N7/ と灰 N6/の間 断: 灰 N6/	内外面回転ナデ
13	10	26	4	2K-4j ・5j	(3層) ※地山直上	土師器	甕	16.2	(17.5)		(4.5) + (4.3) + (6.7)	全体1/4 口縁1/4	良好	石英・長石 (~4mm)、 微細な雲母含む	外: にぶい黄橙 10YR7/4 内: にぶい黄橙 10YR7/4 断: にぶい黄橙 10YR7/4	口縁ヨコナデ 体部外面ハケ 内面ユビオサエ・ナデ
14	10	26	4	2K-5j ・5j	(3層) ※地山直上	須恵器	長頸壺		13.0		(4.5) + (5.1)	胴部1/3	やや不良	密 微小な白・黒色粒含む	外: 灰黄 2.5Y7/2 内: 灰黄 2.5Y7/2 断: 灰黄 2.5Y7/2	内外面回転ナデ、自然釉 外面下部回転ヘラケズリ 7世紀代
19	12	-	2	2L-6c	2落込み		播鉢					破片	良好	蜜 微小~2mm程度の 石粒(長石・石英等) 含む	外: 灰黄褐 10YR6/2 内: にぶい黄褐 10YR5/3 断: にぶい橙 7.5YR7/3	外面: 回転ナデ、ナデ 内面: 振り目
20	12	26	2	2L-4c	15溝	土師器	皿	7.9		6.9	1.1	全体9/10 口縁1/2 底部環状彫形	やや不良	緻密 微小な石粒(雲母等) 含む	外: にぶい橙 7.5YR7/4 内: 浅黄橙 10YR8/3 断: にぶい橙 7.5YR7/4	外面ヨコナデ(1段ナデ) 底部ナデ、内面摩滅 13世紀代(橋本編年Ⅱb-3前後)
21	16	-	2	2L-5a ・6a	29溝	須恵器	甕					破片	やや不良 (軟)	密 微小な白・黒色粒含む	外: 灰白 5Y7/1 内: 浅黄 2.5Y7/3 断: 灰白 5Y7/1	内面当て具痕 外面格子タタキ
23	16	27	2	2K-5j	31落込み	須恵器	杯A	11.4		8.5	3.4	全体10/10	良好	密 微小~1mm程度の 白・黒色粒含む	外: 灰 N6/ 内: 灰 N7/	内外面回転ナデ 底部ヘラ切のち回転ナデか、降灰あり 窯変あり、8~9世紀代
24	16	27	2	2K-5j	31落込み	須恵器	杯A	11.3		8.5	3.3	完形 口縁部僅かに欠損	良好	密 微小~2mm(最大3mm) 程度の石粒(長石・黒色粒等)含む	外: 灰 N6/ 内: 灰 N6/	内外面回転ナデ 底部外面剥離痕あり、外面降灰あり 成合産か(西王寺山窯ではない)
25	19	27	2	2L-6b	33土坑	土師器	皿 or 杯A	22.0			(2.9)	全体2/5 口縁1/2	良好	緻密 微小~3mm程度の 石粒(石英・長石・雲母) 含む	外: 橙 7.5YR6/6 内: 橙 7.5YR6/6 断: 橙 7.5YR6/6	内外面ヨコナデ 底部ナデ(e手) 9世紀後半か(平安京Ⅱ期中)
26	19	27	2	2L-6b	33土坑	土師器	甕	20.4	21.6		20.4	全体1/2 口縁1/2	良好	微小~5mm程度の 石粒(石英・長石・雲母・チャート)含む	外: にぶい黄橙 10YR7/4 内: 明黄橙 10YR6/6 断: 明黄橙 10YR6/6	蔵骨器・内側、丸底甕 口縁ヨコナデ、体部外面ハケメ 体部内面ユビオサエ・ナデ
27	19	27	2	2L-6b	33土坑	土師器	甕	29.3	28.8		(24.3)	全体1/2 口縁完形	良好	微小~3mm程度の 石粒(石英・長石・雲母・チャート)含む	外: 浅黄 2.5Y7/4 内: にぶい黄 2.5Y6/4 断: にぶい黄 2.5Y6/4	蔵骨器・外側、中胴甕 口縁ヨコナデか、外面縦方向ハケ 内面ユビナデ・ユビオサエ
30	20	27	2	2L-7e ・7d	35土坑	須恵器	杯B		(19.7)	15.8	(2.3)	底部1/6	良好	密 微小な白色粒含む	外: 灰 N5/ 内: 灰 N5/ 断: 灰 N6/	内外面回転ナデ 焼けひずみあり、成合産か(西王寺山窯でない)9世紀前半
31	20	27	2	2L-7e	36土坑	弥生土器(底部)			(10.2)	(6.4)	(3.6)	底部1/6	やや不良	微小~3mm程度の 石粒(長石等)含む	外: 浅黄橙 10YR8/4 内: 浅黄橙 10YR8/4 断: 浅黄橙 10YR8/4	外面摩滅 内面ナデ 混入か
32	20	27	2	2L-7e	36土坑	土師器	甕	18.4	20.3		21.4	全体11/12 口縁3/4	良好	微小~2mm程度の 石粒(長石・石英・黒色粒等)含む	外: にぶい橙 7.5YR7/4 内: にぶい橙 7.5YR7/4 断: にぶい黄橙 10YR7/4	口縁内外面ヨコナデ、外面ハケメ 内面ヘラケズリ・ナデ・ユビオサエ 外面焼付着
33	20	27	2	2L-7e	37土坑	須恵器	杯B		(10.0)	8.5	(1.3)	底部2/7	良	密 1mm以下の白粒わずかに含む	外: 灰白 N7/ 内: 灰白 N7/ 断: 灰 N6/	内外面回転ナデ 底部ヘラ切未調整 9世紀前~
34	21	29	2	2L-6d	(65土坑)	土師器	杯A	16.4		12.6	(2.8)	全体1/2 口縁1/4 底部1/3	やや不良	微小~2mm程度の 石粒(長石・石英・黒色粒等)含む	外: 橙 5YR6/6 内: 橙 7.5YR6/6 断: 橙 7.5YR7/6	内外面磨滅 内面ヨコナデ・ユビオサエ 8世紀代
35	21	-	2	2L-6d	(65土坑)	土師器	皿	17.8		15.6	(2.3)	全体1/8 口縁1/6 底部1/6	良	微小~3mm程度の 石粒含む(長石・黒色粒等)含む	外: 橙 2.5YR6/6 内: 橙 7.5YR7/6 断: 橙 7.5YR7/6	内外面ヨコナデ 底部外面ナデ・ユビオサエ 8世紀後半(平城Ⅳ)

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名(層位・面)	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率	焼成	胎土	色調	調整・備考
42	25	29	2	2L-6c	(73 土坑)	須恵器	杯 B 蓋					全体 1/6	良	密 微小な石粒(長石等)含む	外: 灰白 N6/ 内: 灰白 N6/ 断: 灰 N7/	内外面回転ナデ 熔着によって杯蓋が 2 枚重なる
43	25	29	2	2L-6c	(73 土坑)	須恵器	杯 B		(10.8)	8.9	(1.9)	底部 1/3	良好	密 微小な石粒(長石等)含む	外: 灰 N5/ 内: 灰 N6/ 断: 灰 5Y5/1	内外面回転ナデ 底部未調整
44	25	29	2	2L-6c	361 土坑	須恵器	杯 B		(14.1)	9.6	(3.1)	全体 1/5 底部 3/10	良好	密 微小な白色粒含む	外: 灰 N5/ 内: 灰 N5/ 断: 灰 N5/	内外面回転ナデ、底部未調整 外面降灰あり、窯変 9 世紀前半
45	25	29	2	2L-6c	373 土坑	須恵器	長頸壺		14.0		(4.4)	胴部 1/8	良	密 微小な白・黒色粒含む	外: 灰白 N7/ 内: 灰白 N8/ 断: 灰白 N8/	肩部外面沈線、カキメ、降灰あり 内面回転ナデ 7 世紀代
46	26	29	2	2L-6c	116 土坑	土師器	杯	16.0		12.2	(3.4)	全体 1/4 口縁 1/4 底部 3/10	良好	微小～1mm 程度の 石粒(長石・石英・ 雲母等)含む	外: にぶい黄橙 10YR7/4 内: にぶい黄橙 10YR7/4 断: にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ヨコナデ 底部付近外面ナデ・ユビオサエ 底部外面摩滅 8 世紀後半(平城IV)
47	26	-	2	2L-6c	116 土坑	土師器	皿	20.2		17.4	(2.3)	全体 1/16 口縁 1/20 底部 1/6	良好	微小～1mm 程度の 石粒(長石・石英・ 雲母等)含む	外: 橙 7.5YR7/6 内: 橙 7.5YR7/6 断: にぶい橙 7.5YR6/4	内外面ヨコナデ 底部外面ケズリ 8 世紀後半(平城IV)
48	26	-	2	2L-6c	116 土坑	須恵器	壺 A									(一部はサンプリング土から)
100	27	31	2	2L-5c	313 土坑 ・116 土坑	須恵器	杯蓋	17.6			1.9	全体 3/4 口縁 4/5	良	密 1～2mm 程の黒粒 少し入る	外: 灰白 N7/ 内: 灰白 N7/ 断: 灰白 N7/	環状つまみ 内外面回転ナデ 天井部回転ヘラケズリのちナデ 8 世紀後半以降
101	27	31	2	2L-5c	313 土坑	須恵器	杯蓋	15.6			3.0	全体 19/20 口縁 9/10	良好	石英・長石 (～2.5mm) 含む	外: 灰 N5/ 内: 灰 N5/ 断: にぶい橙 5YR6/4	内外面回転ナデ 窪みあり 8 世紀後半(平城IV～V)
102	27	-	2	2L-5c	313 土坑	土師器	壺 B									口縁部細片
108	28	31	2	2L-6d	121 土坑	土師器	甕	14.1	(16.8)		(6.8)	口縁 1/8	やや 不良	微小～4mm 程度の 石粒(長石・黒色粒等) 含む	外: 橙 5YR7/6 内: 橙 7.5YR7/6 断: 浅黄橙 7.5YR8/4	口縁外面ヨコナデ 体部内外面摩滅 5 世紀代
109	28	31	2	2L-6d	121 土坑	土師器	高杯	16.2		12.1	11.6	全体 9/10 口縁 9/11 底部 1/6	良	微小～2mm 程度の 石粒(長石・黒色粒等) 含む	外: にぶい橙 7.5YR7/4 内: にぶい橙 7.5YR7/4 断: 橙 7.5YR7/6	杯部ハケ・ヨコナデ・ユビオサエ 脚部ヘラナデ・ヨコナデ・ハケ 5 世紀代
110	31	31	2	2L-5b ・6b	299 溝	須恵器	皿 E	8.4		7.3	(2.5)	全体 1/2 口縁 2/3	やや 不良	密 微小な白・黒色粒含む	外: 灰白 5Y7/1 内: 灰白 5Y7/1 断: 灰白 5Y7/1	一部周辺3層(2L-5b・6b) から出土 内外面回転ナデ
112	35	31	2	2L-7d	柱列 1 (278 ビット)	須恵器	杯 G 蓋	-	(8.0)		(2.2)	-	不良	密 1mm 大の黒粒少し 入る	外: 灰 N6/ 内: 灰白 5Y7/2 断: 灰 N6/	外面ケズリのち回転ナデ 7 世紀中頃(飛鳥II)
113	35	31	2	2L-6d	柱穴列 5 (244 ビット)	土師器	椀	11.4		4.6	3.2	ほぼ完形	良好	密 微小～1mm 程度の石 粒(長石・石英・黒色 粒・雲母等)含む	外: 橙 7.5YR6/6 内: 橙 7.5YR6/6 断: 橙 7.5YR6/6	外面ヘラケズリ、内面摩滅 ナデ(c 手法)か 8 世紀末～9 世紀前半 (平安京 I 期中～新)
114	38	-	3	-	(整地土中)	青磁	碗		(8.8)	3.8	(3.6)	底部 1/3	良好	緻密	釉: 明オリープ 外: 灰 2.5GY7/1 露胎: にぶい橙 7.5YR6/4 内: 釉) 明オリープ 灰 5GY7/1 断: 灰白 7.5Y8/1	
115	38	-	3	2J-6j	(2 層)	須恵器	杯 B			12.6	(2.1)	底部 1/20	良好	密 微小な白色粒含む	外: 灰 N4/ 内: 暗灰 N3/ 断: 灰 5Y6/1	内外面回転ナデ (確認 3-6 t r 出土)
116	38	-	3	2J-7j 2K-7a	(4 層)	須恵器	杯	13.6			(3.0)	全体 1/16 口縁 1/8	良好	密 微小な白・黒色粒含む	外: 灰 5Y4/1 内: 灰 5Y5/1 断: 灰 5Y6/1	内外面回転ナデ (確認 3-1 t r 出土)
117	38	31	3	2K-7a	(4 層)	須恵器	杯 A or 皿 A	13.2		8.0	3.4	全体 1/6 口縁 1/3 底部 11/12	良好	密 微小な白色粒含む	外: 青灰 5B5/1 内: 青灰 5B5/1 断: 灰赤 7.5R5/2	内外面回転ナデ、底部ヘラ切未調整 降灰あり、7 世紀中頃(飛鳥 II～III) (確認 3-1 t r 出土)
118	38	31	3	2J-7j 2K-7a	(5 層)	須恵器	杯蓋	15.5			(2.3)	全体 1/12 口縁 1/6	やや 不良	密 微小な白色粒(石英・ 長石類)含む	外: 灰 5Y6/1 内: 灰褐 7.5YR5/2 断: にぶい橙 7.5YR6/3	内外面回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 7 世紀後半(飛鳥IV) (確認 3-1 t r 出土)
119	38	31	3	-	(5 層)	須恵器	杯蓋	13.0			(1.4)	全体 1/8 口縁 1/8	良好	密 微小な石粒(長石等) 含む	外: 灰 N4/ 内: 灰 N4/ 断: 暗赤灰 10YR4/1	内外面回転ナデ 天井部回転ヘラケズリか、降灰あり 7 世紀後半(飛鳥IV～V)
120	38	31	3	2J-7j 2K-7a	(5 層)	須恵器	杯 B	14.3		9.0	4.1	全体 2/3 口縁 3/8 底部 1/4	良好	密 微小な白・黒色粒含む	外: 灰 N6/ 内: 灰 N6/ 断: 灰 N6/	内外面回転ナデ 7 世紀後半(飛鳥IV) (確認 3-1 t r 出土)
121	38	31	3	2J-7j 2K-7a	(5 層)	須恵器	杯 B	13.9		7.8	3.9	全体 19/20 口縁 15/16 底部ほぼ完 形	良好	密 微小～1mm 程度の 石粒(長石等)含む	外: 灰 N4/ 内: 灰 N4/に近い	内外面回転ナデ、底部ケズリのちナ デ消し 窯変、7 世紀後半(飛鳥IV) (確認 3-1 t r 出土)
122	38	31	3	-	(5 層)	弥生土器 (底部)	(底部)		(6.6)	3.5	(1.8)	底部 ほぼ残存	やや 不良	微小～2mm 程度の 石粒(長石・石英・ 雲母等)含む	外: にぶい黄橙 10YR7/4 内: にぶい黄橙 10YR7/3 断: 褐灰 10YR4/1	
123	38	31	3	2K-7a	(遺構面直上)	須恵器	杯蓋		(12.2)		(2.1)	全体 3/4	良好	密 石英・長石 (～2.5mm) 含む	外: 灰 N5/ 内: 灰 N5/ 断: 灰 N5/	内外面回転ナデ 天井部回転ヘラケズリのち回転ナデ 6 世紀後半か(出土地点あり)
124	38	31	3	2J-6j	(遺構面直上)	須恵器	杯 A	11.6			3.3	全体 1/3 口縁 2/5	良	密 微小な白・黒色粒含む	外: 灰白 7N 内: 灰 N6/ 断: 灰白 N7/	内外面回転ナデ 底部ヘラ切未調整(出土地点あり)
125	39	32	3	2J-5i ・6i	2 土坑 ・4 土坑	須恵器	椀 E	17.6			(5.8)	全体 1/8 口縁 1/20	良好	密 微小な石粒(黒色粒・ 長石等)含む	外: 灰白 N7/ 内: 灰白 N6/ 断: 灰白 5Y7/1	内外面回転ナデ、底部ナデ 高台剥離
126	39	32	3	2J-5i ・6i	4 土坑 ・2 土坑	須恵器	壺 A 蓋	18.8			(2.4)	全体 1/4 口縁 1/4	良好	密 微小～2mm 程度の 石粒(長石・黒色粒等) 含む	外: 灰白～灰 5Y7/1～Y6/1 内: 灰白～灰 5Y7/1～Y6/1 断: 灰 N4/	内外面回転ナデ 外面降灰あり

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名(層位・面)	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率	焼成	胎土	色調	調整・備考
128	40	32	3	2J-7j 2K-7a	7溝	須恵器	杯蓋	15.1			(2.0)	全体 1/8 口縁 1/3	良好	密 微小な石粒(最大2mm程度)含む	外: 灰 N6/ 内: 灰 N5/ 断: 灰 N 5/	内外面回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ欠損 7世紀後半(飛鳥IV) (7溝と包含層中出土破片が接合)
129	40	32	3	2J-7j 2K-7a	7溝	須恵器	鉢A	13.6			(6.2)	全体 1/3 口縁 5/12	良好	密 微小~1mm程度の石粒(長石等)含む	外: 灰 5Y6/1 内: 灰 5Y6/1 断: 灰白 5Y7/1	内面・体部外面上半回転ナデ 体部外面下半回転ヘラケズリ、7世紀(7溝と包含層中出土破片が接合)
130	40	32	3	2J-7j 2K-7a	7溝	須恵器	長頸壺	9.3			(5.6)	口縁 3/8	良好	密 微小~1mm程度の石粒(長石等)含む	外: 灰 5Y6/1 内: 灰 5Y6/1 断: にぶい黄橙 10YR7/3	内外面回転ナデ 7世紀代、(7溝と包含層中出土破片が接合)
131	40	32	3	2J-7j 2K-7a	7溝	須恵器	壺		(16.1)	6.5	(6.2)	底部 1/3	良好	密 微小な白・黒色粒含む	外: 灰白 5Y7/1 内: 灰白 5Y7/1 断: 灰白 5Y7/1	内面・体部外面上半回転ナデ 体部外面下半~底部回転ヘラケズリ (7溝と包含層中出土破片が接合)
133	41	32	3	2K-7a	15土坑	土師器	杯A	14.4		12.2	(2.3)	全体 1/6 口縁 1/6 底部 1/6	やや不良	密 微小~1mm程度の石粒(長石・黒色粒等)含む	外: 橙 7.5YR6/6 内: にぶい黄橙 10YR6/4 断: にぶい橙 7.5YR6/4	内外面摩滅・剥離 7世紀後半~8世紀か
134	41	-	3	2K-7a	15土坑	須恵器	杯蓋				(1.6)	-	良	密 微小な白色粒含む	外: 黄灰 2.5YR5/1 内: 灰 N5/ 断: 褐灰 10YR5/1	内外回転ナデ 7世紀後半(飛鳥III~IV)
136	43	32	3	2J-6j ・7j	26土坑	鉄製品	不明	(3.0)	0.6	0.6	2.3					鉄釘か、頭部・先端部欠損 他の細い鉄製品が錆び付いている可能性があり サンプリング土から
137	43	32	3	2J-6j ・7j	26土坑	鉄製品	不明	(4.1)	0.5	0.5	2.5					鉄釘か頭部・先端部欠損 板状の小片がクロスしているか サンプリング土から
138	47	32	5	2K-6b	(1・2層)	須恵器	壺Lか		13.7	8.8	(7.5)	底部 1/6	良好	密 微小な白・黒色粒含む	外: 黄灰 2.5Y5/1 内: 灰黄 2.5Y7/2 断: 浅黄 2.5Y7/4	内外面回転ナデ、降灰あり 8世紀後半(半IV~Vか)
139	47	32	5	2K-6g ・6h	17土坑	土師器	皿		9.9	7.6	(1.3)	全体 1/4 底部 1/3	良好	緻密 微小な白・黒色粒含む	外: 灰白 2.5Y8/2 内: 淡黄 2.5Y8/3 断: 淡黄 2.5Y8/3	内外面摩滅
140	57	32	4	2L-7c	1号墳 (石室内埋土)	須恵器	杯蓋	11.6			3.8	口縁 3/8	良好	密 石英・長石 (~2mm)含む	外: 灰白 5Y7/2 内: 灰白 5Y7/2 断: 灰白 5Y7/2	内外面回転ナデ、摩滅 7世紀後半(飛鳥III~IV)
142	62	32	5	2K-4g (4f・5g)	2号墳 (周溝埋土 下層)	須恵器	壺B	10.0	17.8		13.5	口縁 1/2	良好	石英・長石 (~1.5mm)含む	外: 灰 5Y6/1 黒褐 2.5Y3/1 内: 灰 N6/ 断: 灰 7.5Y6/1	内外面回転ナデ、口縁部ヨコナデ 外面口縁と胴部に強いヨコナデ 7世紀代

成合地獄谷遺跡 出土石製品ほか 観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名(層位・面)	遺物名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	色調	調整・備考
18	10	32	2	2L-6d	(3層)	ガラス小玉	0.7	0.6	0.4	0.4		スカイブルー	孔径0.15cm
49	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.6	1.4	0.7	1.9	石英	白色	サンプリング土から
50	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.6	1.2	0.6	1.4	石英	白色	やや風化 サンプリング土から
51	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.2	0.6	0.5	0.9	石英	白色	サンプリング土から
52	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.5	1.3	0.7	1.8	石英	白色	サンプリング土から
53	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.4	1.2	0.5	1.1	石英	白色	
54	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.2	1.1	0.5	0.9	石英	白色	サンプリング土から
55	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.3	1.1	0.5	1.1	石英	白色	サンプリング土から
56	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.3	1.1	0.6	1.2	石英	白色	サンプリング土から
57	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.3	0.9	0.5	0.8	石英	白色	サンプリング土から
58	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.4	1.0	0.6	1.1	石英	白色	サンプリング土から
59	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.6	1.1	0.5	1.3	滑石類	黒色	サンプリング土から
60	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.9	1.4	0.4	1.8	滑石類	黒色	サンプリング土から
61	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.5	1.2	0.4	1.0	滑石類	褐色	
62	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.4	1.3	0.4	0.9	泥岩か	褐色	サンプリング土から 被熱か
63	26	29	2	2L-6c	116土坑	基石状石製品	1.2	1.0	0.4	0.4	泥岩か	褐色	剥離・欠損あり、被熱か サンプリング土から
103	27	31	2	2L-5 c	313土坑	丸靱	3.0	4.5	1.1	30.1	安山岩系 (残存: 完形)	灰 N5/	垂孔の径0.25cm 表面光沢のある付着物あり やや赤色化・被熱か
104	27	31	2	2L-5 c	313土坑	丸靱	2.7	(1.5)	1.4	4.8	安山岩系 (残存: 全体 1/5)	灰白 5Y7/1	垂孔の径0.25cm 割れ、剥離、被熱か
127	-	32	3	2J-6i	3土坑	水晶柱	2.9	1.3		6.1	石英	白色	※写真のみ、実測図なし サンプリング土から
132	41	32	3	2K-7a	10土坑	基石状石製品	1.7	1.4	0.9	3.2	石英	白色	自然面あり サンプリング土から

成合地獄谷遺跡 出土金属製品 観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名・(層位)	種類	遺物名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調整・備考
15	10	32	2	2L-6c	(2層)	鉄	釘	(4.4)	0.5	0.5	3.1	頭巻式 頭部残存
16	10	32	2	2L-4c ・4d	(2層)	鉄	鉄鍬	(9.7 +1.0)	0.7	0.4	11.4	長頭鍬(頭部~基部) 両端部欠損
17	10	32	2	2L-6c	(3層)	鉄	釘	(3.3) (2.25)	0.4・ 0.35	0.5・ 0.55	3.5	2本サビでくっつく 2本とも頭部・先端部欠損
22	16	32	2	2L-5a ・6a	29溝	鉄	釘	(5.0)	0.4	0.5	3.2	頭巻式 頭部残存
28	19	27	2	2L-6 b	33土坑	銅	銭	(2.5)	0.2		0.4	神功開寶(765年) 被熱か
29	19	-	2	2L-6 b	33土坑	銅	銭	(3.0)	0.4		0.6	2枚重なる、種類不明 被熱か
36	24	28	2	2L-6c	69土坑	銅	八花鏡	9.5			71.0	唐式鏡、双鳥b双獣鏡 銅・鉛合金 鈕1.3×1.2cm、厚み0.1~0.2cm 縁の厚み0.4~0.5cm
37	24	29	2	2L-6c	69土坑	鉄	釘	(16.0)	0.7	0.6	40.8	大型 頭部残存(鍛接)、木質残存(横方向)
38	24	29	2	2L-6c	69土坑	鉄	釘	(12.4)	0.8	0.7	39.1	大型 頭部残存(鍛接)、木質残存(横方向)
39	24	29	2	2L-6c	69土坑	鉄	釘	(9.5)	0.8	0.5	37.4	大型 頭部残存(折曲げ)、木質残存(横方向)
40	24	29	2	2L-6c	69土坑	鉄	釘	(6.0)	0.6	0.7	4.4	大型 頭部・先端欠損、木質残存(横方向)
41	24	29	2	2L-6c	69土坑	鉄	釘	(13.2)	0.4	0.6	21.3	大型 先端残存、木質残存(横方向)
64	27	30	2	2L-6c	116土坑	銅+鉄	不明					屈曲する棒状製品、長い棒状製品、 複数(4枚程度)の薄い板状製品(以上が銅) 薄い円盤状製品×2(以上が鉄)
65	27	29	2	2L-6c	116土坑	鉄	不明	5.8	0.5	0.4	6.6	両端部残存 板状のものをはめ込む構造、留め金具か
66	27	29	2	2L-6c	116土坑	鉄	不明	(2.9)	0.5	0.4	4.6	両端部欠損 板状のパーツが2枚あり、貫通しているか状態 悪い
67	27	29	2	2L-6c	116土坑	鉄	不明	(3.2)	0.3	0.4	2.0	環状部一部欠損・先端部欠損 鉄釘か
68	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	4.4	0.5	0.7	2.0	完存 頭部やや膨らむ、丸い
69	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	3.9	0.3	0.4	1.6	完存
70	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	3.6	0.3	0.3	0.7	完存
71	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	3.5	0.4	0.4	2.6	完存
72	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(3.6)	0.4	0.5	2.3	頭部残存、先端部わずかに欠損 錆れあり
73	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(3.7)	0.3	0.4	0.8	頭部残存 頭部やや丸い
74	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(3.6)	0.4	0.4	1.4	頭部残存
75	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(3.1)	0.4	0.4	1.5	頭部残存
76	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(3.1)	0.3	0.4	1.0	頭部残存
77	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(2.1)	0.3	0.3	0.9	頭部残存 状態が悪い
78	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.7)	0.4	0.3	0.6	頭部残存
79	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(2.3)	0.4	0.4	0.7	頭部残存
80	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.4)	0.4	0.3	0.5	頭部残存 サンプリング土から
81	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.3)	0.3	0.4	0.6	頭部残存、不明付着物あり サンプリング土から
82	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.0)	0.4	0.4	0.3	頭部残存 サンプリング土から
83	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(2.5)	0.3	0.3	0.5	先端部残存
84	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(2.5)	0.2	0.3	0.4	先端部残存
85	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(2.0)	0.4	0.4	0.9	先端部残存
86	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(2.1)	0.3	0.3	0.5	先端部残存 サンプリング土から
87	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.8)	0.3	0.3	0.4	先端部残存 サンプリング土から
88	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.9)	0.3	0.3	0.3	先端部残存 サンプリング土から
89	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.6)	0.2	0.2	0.1	先端部残存
90	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.1)	0.2	0.2	0.1	先端部残存 サンプリング土から
91	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(2.4)	0.3	0.4	1.4	頭部・先端部欠損 サビ膨れが著しい
92	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.7)	0.4	0.3	1.8	頭部・先端部欠損
93	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.9)	0.2	0.3	0.3	頭部・先端部欠損
94	27	30	2	2L-6c	116土坑	鉄	釘	(1.4)	0.3	0.2	0.2	頭部・先端部欠損 サンプリング土から

出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名・(層位)	種類	遺物名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調整・備考
95	27	30	2	2L-6c	116 土坑	鉄	釘	(1.3)	0.4	0.3	0.2	頭部・先端部欠損 サンプリング土から
96	27	30	2	2L-6c	116 土坑	鉄	釘	(1.1)	0.4	0.3	0.1	頭部・先端部欠損 サンプリング土から
97	27	30	2	2L-6c	116 土坑	鉄	釘	(0.9)	0.3	0.2	0.1	頭部・先端部欠損 サンプリング土から
98	27	30	2	2L-6c	116 土坑	鉄	釘	(1.4)	0.4	0.3	0.4	頭部・先端部欠損 直角気味に交わる鉄あり サンプリング土から
99	27	30	2	2L-6c	116 土坑	鉄	不明 (釘か)	(1.9)	0.2	0.4	0.4	両端部欠損(釘か) サンプリング土から
105	27	31	2	2L-5c	313 土坑	鉄製品	釘	3.5	0.3	0.3	0.9	完存 サンプリング土から
106	27	31	2	2L-5c	313 土坑	鉄製品	釘	(3.0)	0.3	0.3	0.6	頭部残存
107	27	31	2	2L-5c	313 土坑	鉄製品	釘	(1.9)	0.4	0.3	1.8	頭部残存
111	32	32	2	2L-5d	347 竪穴	鉄製品	釘か	(3.2)	0.5	0.4	1.3	釘か、頭部・先端部欠損
135	43	32	3	2J-6j・7j	26 土坑	鉄製品	釘	(3.7)	0.4	0.5	7.8	折り曲げタイプ、頭部残存、古代以前か サンプリング土から
141	62	32	5	2K-4g	2号墳 (石室内埋土上層)	鉄製品	鉄鏃	(2.9)	2.4	0.3	6.0	平根系長三角形式 鏃身残存、鏃身部平造 基部欠損、基部幅0.6cm、厚み0.2cm

成合遺跡 出土土器 観察表

挿図番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名 (層位・面)	種別	器形	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調	調整・備考
143	69	36	1	2A-4a 20-4j	竪穴建物1 (直上)	弥生土器	蓋		(8.8)		(4.3)	つまみ 1/2	良好	石英・長石 (~2mm) 含む	外：にぶい黄橙 10YR6/3 内：にぶい黄橙 10YR6/4 断：にぶい黄橙 10YR6/3	外面ユビオサエ・ナデ 内面ナデ
144	69	36	1	2A-4a 20-4j	竪穴建物1 (直上)	弥生土器	甕	15.0	(19.5)		(4.5)	口縁 1/7	良	石英・長石 (~4mm) 含む	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面摩滅 口端凹線 被熱か
145	69	36	1	2A-4a 20-4j	竪穴建物1	弥生土器	壺		(18.2)		(7.4)	頸部 1/5	良好	石英・長石 (~1mm) チャート (~4mm) 含む	外：橙 5YR6/6 内：橙 7.5YR7/6 断：橙 7.5YR7/6	有段口縁大型壺 外面ハケメ 内面ハケメ・ナデ 頸部貼付突帯に刻み目 IV様式後半
146	69	36	1	20-4i ・4j ・5i ・5j	竪穴建物1	弥生土器	鉢	8.0	9.0		(5.0)	全体 1/6 口縁 1/5	良好	石英・長石・チャート (~1mm) 含む	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：橙 7.5YR7/6 断：にぶい黄橙 10YR7/4	外面ハケメ 口縁ヨコナデ 内面ハケメ
147	69	36	1	20-4i ・4j ・5i ・5j	竪穴建物2	弥生土器	(底部)		(15.6)	6.8	(5.2)	底部 1/2	良	石英・長石 (~3mm) 雲母 (~1mm) 含む	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：褐灰 10YR5/1 断：にぶい黄橙 10YR7/4	壺底部か 内外面摩滅
148	70	36	1	20-4j	3 土坑	土師器	甕	17.4	(18.3)		(1.5) +(5.65)	口縁 1/2	良好	石英・長石 (~1mm) 含む	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断：にぶい橙 7.5YR6/4	口縁ヨコナデ 外面ハケメ 内面ユビナデ、ハケメ

金龍寺旧境内跡 出土陶磁器類 観察表

挿図 番号	挿図 番号	写真 図版 番号	調査 区	地区 割	遺構名 (層位・面)	種別	器形	口径 (cm)	最大 径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率	焼成	胎土	色調	調整・備考
149	74	36	3		(表土)	陶器 (呉器手)	碗		(8.2)	4.7	(2.7)	底部 ほぼ完形	良好	緻密	外：にぶい黄 2.5Y6/3 内：にぶい黄 2.5Y6/3 断：にぶい黄 2.5Y6/3	内外面 施釉
150	74	36	3		(1層)	陶器 (関西系肥前)	碗	9.0		5.4	5.9	全体 1/4 口縁 1/7 底部 2/5	良好	緻密	外：にぶい黄 2.5Y6/3 内：にぶい黄 2.5Y6/3 断：浅黄 2.5Y7/3	内外面 施釉、外面 文様あり 外面底部 露胎 「新」の刻印あり 肥前系陶器、京焼風碗 銘款「新」
151	74	36	3		(表土)	陶器 (京信楽)	碗		(7.0)	4.0	(1.4)	底部 1/2	良好	緻密	外：オリブ黄 5Y6/3 露胎：浅黄 2.5Y7/3 内：オリブ黄 5Y6/3 断：灰白 2.5Y8/2	内外面 施釉 外面底部 露胎 内面 文様あり
152	74	36	3		(表土)	陶器 (京信楽)	碗		(8.5)	3.4	(2.6)	底部 4/5	良好	緻密 微少な白・黒色 粒含む	外：灰白 5Y7/2 露胎：にぶい黄橙 10YR7/3 内：灰白 7.5Y7/2 断：浅黄 2.5Y7/3	内外面 施釉 外面 文様あり、 底部中心部少し盛り上がる 露胎
153	74	36	3		(表土)	陶器 (京信楽)	碗		(10.8)	4.6	(3.5)	底部 1/4	良好	緻密	外：灰オリブ 7.5Y6/2 露胎：浅黄 2.5Y7/3 内：灰オリブ 7.5Y6/2 断：にぶい黄 2.5Y6/3	内外面 施釉 外面底部 露胎
154	74	36	3		(表土)	磁器 (肥前)	碗	10.2		4.2	4.9	全体 1/3 口縁 1/3 底部 1/2	良好	緻密	外：明緑灰 7.5GY8/1 内：明緑灰 7.5GY8/1 断：灰白 2.5GY8/1	内外面 施釉 外面 ゴスで文様あり 内面 釉剥ぎ
155	74	36	3		(表土)	磁器 (肥前)	碗		(10.5)	6.4	(4.5)	底部完形	良好	緻密	外：明緑灰 10GY8/1 内：明緑灰 10GY8/1 文様：青灰 10BG6/1 断：灰白 7.5Y8/1	内外面 施釉 ゴスで文様あり
156	74	36	3		(表土)	磁器 (肥前)	碗		(9.8)	4.4	(2.9)	底部完形	良好	緻密	外：明オリブ灰 5GY7/1 文様：青灰 10BG6/1 内：明オリブ灰 5GY7/1 断：灰白 N8/	内外面 施釉 外面 ゴスで文様あり 内面 釉剥ぎ
157	74	36	3		(表土)	磁器 (肥前)	碗		(12.2)		(4.8)	全体 1/10	良好	緻密 微少な白・黒色 粒含む	外：灰黄 2.5Y7/2 文様：青灰 10BG6/1 内：灰黄 2.5Y7/2 断：にぶい橙 7.5YR6/4	内外面 施釉 外面 ゴスで文様あり
158	74	36	3		(表土)	磁器 (肥前)	碗		(8.9)	3.9	(3.3)	底部 3/4	良好	緻密	外：灰白 5GY8/1 文様：青灰 10BG4/1 内：灰白 5GY8/1 断：灰白 2.5Y8/2	内外面 施釉 外面 ゴスで文様あり
159	74	36	3		(表土)	磁器 (肥前)	碗		(6.5)	4.0	(2.0)	底部完形	良好	緻密	外：明緑灰 10GY8/1 文様：青灰 5B6/1 内：明緑灰 10GY8/1 断：灰黄 2.5Y7/2	内外面 施釉 外面 ゴスで文様あり
160	74	36	3		(表土)	磁器 (肥前)	碗		(5.8)	4.0	(1.4)	底部完形	良好	緻密	外：灰白 8/1 文様：青 内：灰白 7.5Y8/1 断：灰白 7.5Y8/1	内外面 施釉 外面 ゴスで文様あり
161	74	36	3		(表土)	磁器 (肥前)	碗	12.6		4.7	(4.4)	全体 1/4 口縁 1/4	良好	緻密	外：明緑灰 7.5GY8/1 内：明緑灰 7.5GY8/1 文様：青灰 10BG5/1 断：灰白 7.5Y8/1	内外面 施釉 内面 ゴスで文様、釉剥ぎ
162	74	36	3		(表土)	磁器 (肥前)	碗		(12.7)	7.0	2.3	底部 2/5	良好	緻密	外：明オリブ灰 5GY7/1 内：明オリブ灰 5GY7/1 文様：青灰 5B6/1 断：灰白 5Y7/1	内外面 施釉 ゴスで文様あり
163	74	36	3		(1層)	磁器 (肥前)	仏飯器		(5.8)	4.0	(3.7)	底部完形	良好	緻密	外：明緑灰 7.5GY8/1 露胎：にぶい橙 7.5YR7/4 文様：オリブ灰 2.5GY6/1 内：明緑灰 7.5GY8/1 断：灰白 2.5GY8/1	内外面 施釉 外面 ゴスで文様あり 底部露胎
164	74	-	3		(表土)	陶器 (銅緑釉)	碗	11.8			(3.5)	口縁 1/20	良好	緻密	外：緑灰 5G5/1 内：灰黄 2.5Y7/2 断：浅黄 2.5Y7/3	内外面 施釉

写真図版



1. 事業地遠景（南西から）[平成25年12月撮影]



2. 成合地獄谷遺跡遠景（北西から）[平成26年11月撮影]

成合地獄谷遺跡

写真図版 2
1区全景・断面／2区断面



1. 着手前調査地全景（北東から）



2. 1区西半全景（北東から）



3. 1区西半全景（南西から）



4. 1区堆積状況（南西から）



5. 2・4区断面（A-A'北：南西から）



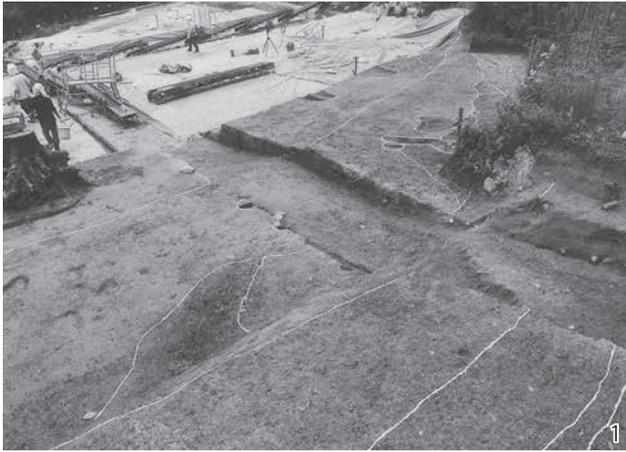
6. 2・4区断面（A-A'中：西から）



7. 2区北東部（試掘トレンチ）堆積状況（南西から）



8. 2区（試掘トレンチ）堆積状況（南西から）



1. 第2面北東 全景 (北から)
3. 第2面南西 全景 (西から)

2. 第2面北東 全景 (北東から)
4. 第2面中央北半 全景 (南西から)



5. 1土坑断面 (南東から)
7. 3土坑検出状況 (南から)

6. 2落込み・3土坑・4落込み検出状況 (南から)
8. 3土坑断面 (南西から)

成合地獄谷遺跡

写真図版4
2区第3面全景



1. 第3面東半全景(南から)



2. 第3面南半全景(南西から)



1. 第3面南西全景(南から)

3. 18 浸食痕断面(a-a' 西:南から)

2. 18 浸食痕断面(d-d':南から)

4. 18 浸食痕東断面(a-a' 東:南から)



5. 28 ピット断面(東から)

7. 31 落とし込み断面(c-c':南東から)

6. 29 溝底面土坑断面(e-e':南から)

8. 31 落とし込み遺物出土状況(南から)

成合地獄谷遺跡

写真図版 6
2区 第4面 全景



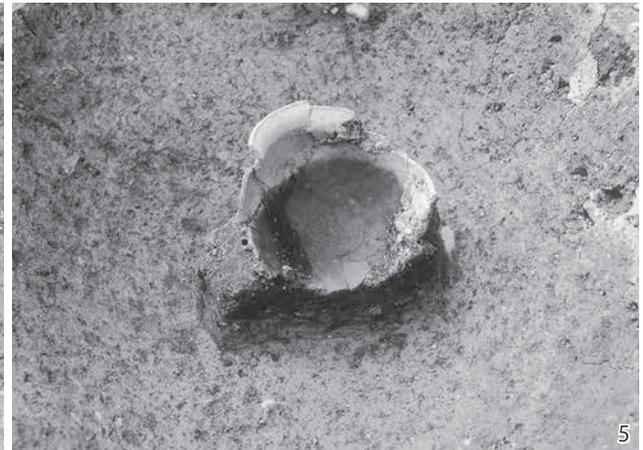
1. 第4面 全景 (北東から)



2. 第4面南半全景 (北西から)



1. 蔵骨器検出状況・断面(a-a':南西から)



2. 検出状況(北から)
4. 甕内部の状況(北から)

3. 断面(b-b':南東から)
5. 完掘・内甕検出状況(北から)

成合地獄谷遺跡

写真図版 8
2区 69土坑



1. 上面石組検出状況（西から）

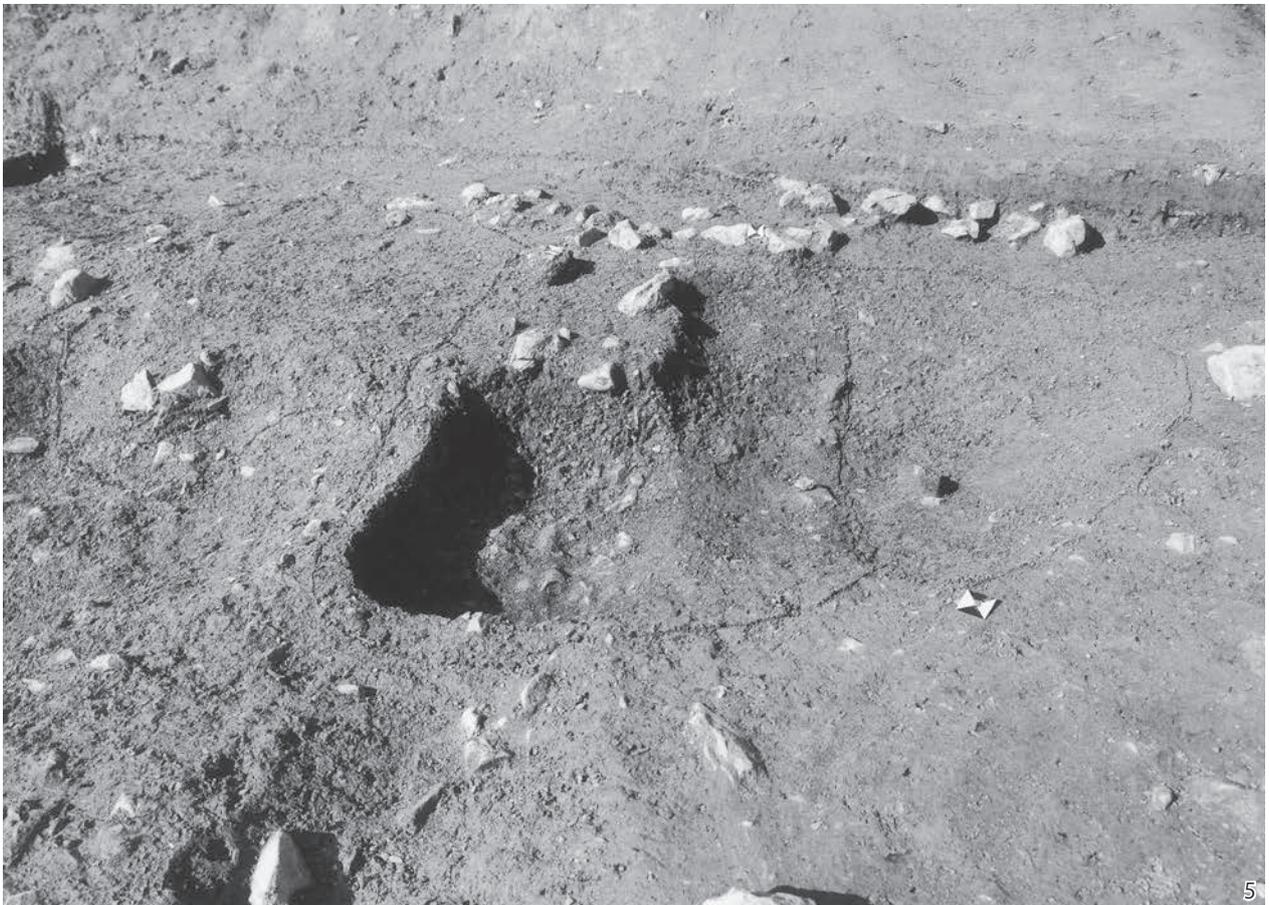


2. 八花鏡出土状況（北東から）



1. 検出状況（北西から）
3. 鉄釘出土状況（南から）

2. 372土坑断面（b-b'：南から）
4. 八花鏡出土状況（北東から）



5. 完掘状況（南東から）

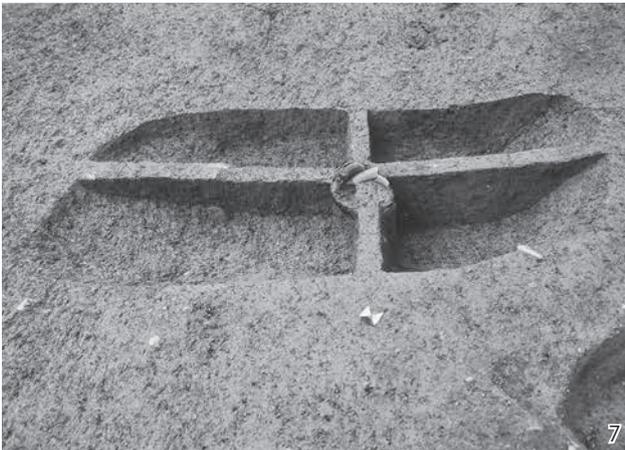
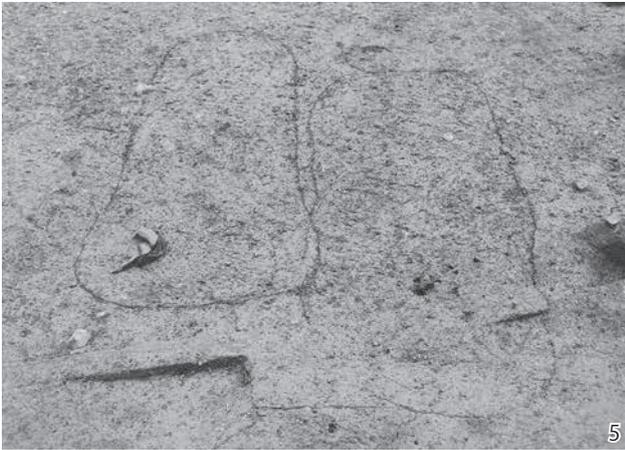
成合地獄谷遺跡

写真図版10
2区第4面遺構



1. 30 土坑検出状況 (南から)
3. 35 土坑検出状況 (西から)

2. 30 土坑断面 (北から)
4. 35 土坑断面 (北から)



5. 36・37 土坑検出状況 (西から)
7. 36 土坑断面 (北から)

6. 36・37 土坑完掘 (東から)
8. 37 土坑断面 (南から)



1. 121 土坑遺物出土状況・断面（南東から）
3. 313 土坑断面（南東から）

2. 121 土坑完掘・遺物出土状況（南東から）
4. 313 土坑遺物出土状況（南東から）

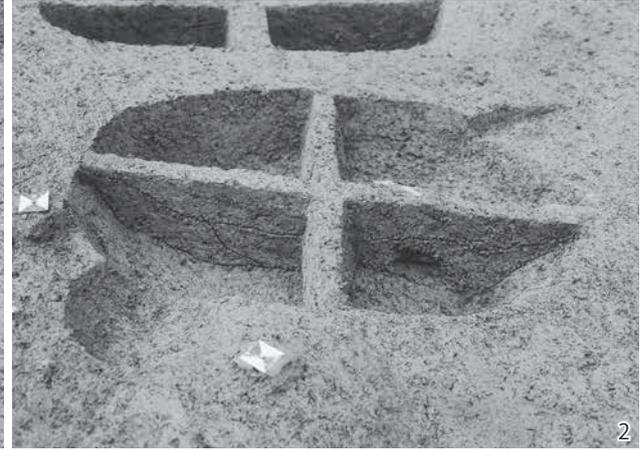


5. 116 土坑断面（北から）
7. 237 ピット断面（東から）

6. 107 ピット断面（南東から）
8. 299 ピット断面（東から）

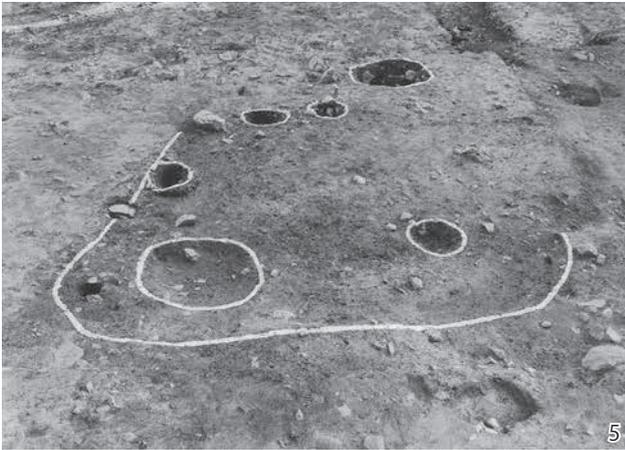
成合地獄谷遺跡

写真図版 12
2区第4面遺構



1. 129 土坑断面 (南東から)
3. 130 土坑完掘 (北東から)

2. 130 土坑断面 (南東から)
4. 142 土坑断面 (東から)



5. 347 竪穴完掘 (北から)
7. 柱列2完掘 (北西から)

6. 244 ピット (柱列5) 断面 (東から)
8. 柱列4完掘 (西から)



1. 3区北半全景（南から）



2



3



4



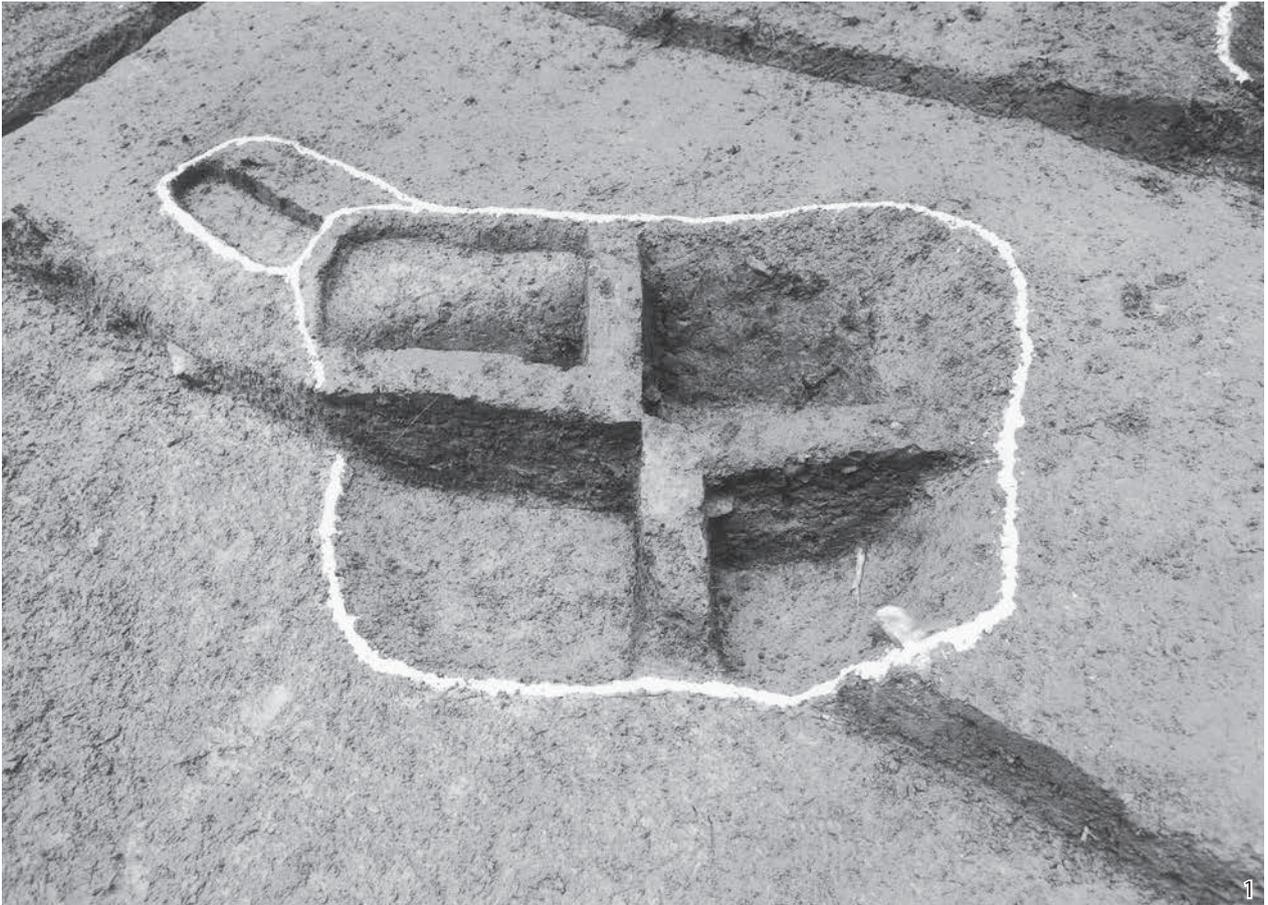
5

2. 3区南半全景（南から）
4. 3区縦断面（A-A'：東から）

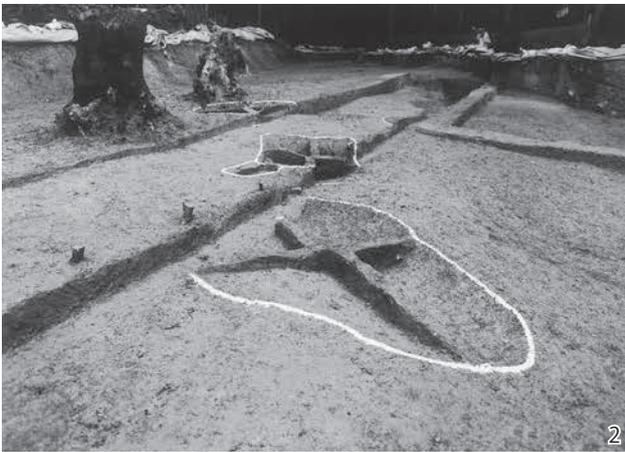
3. 3区横断面（B-B'：南東から）
5. 3区縦断面下層（A-A'：東から）

成合地獄谷遺跡

写真図版
14
3区遺構



1. 2土坑全景（東から）



2. 1・2・4土坑・24ピット全景（南から）



3. 2土坑検出状況（東から）



4. 4土坑断面（南西から）

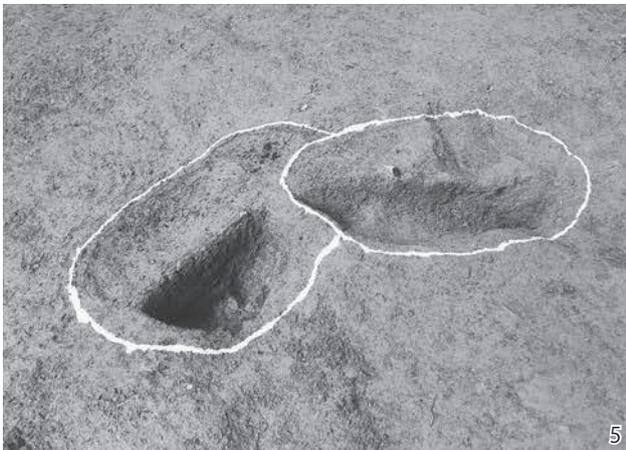


5. 3土坑全景（南から）



1. 10 土坑検出状況 (南から)
3. 26 土坑断面 (北東から)

2. 15 土坑断面 (北から)
4. 遺構面遺物 (123) 出土状況 (南東から)



5. 29・30 土坑断面 (南東から)
7. 7 溝完掘 (南から)

6. 30 土坑断面 (東から)
8. 25 落込み全景 (南西から)

成合地獄谷遺跡

写真図版
16
5区
北半



1. 5区北半全景（北から）



2. 5区北半断面（A-A'：東から）



3. 18溝断面（東から）



4. 22土坑検出状況（北東から）



5. 22土坑断面（南から）



1. 5区南半全景（南から）



2



3



4



5

2. 14・15 溝完掘（北西から）
4. 14 溝断面（b-b'：北から）

3. 16 溝完掘（西から）
5. 16 溝断面（c-c'：西から）

成合地獄谷遺跡

写真図版18
5区南半断面・遺構



1. 5区南半断面 (B-B'15 溝部分：南西から)



2. 5区南半断面 (B-B'：南東端、西から)



3. 15 溝断面 (a-a'：南東から)



4. 17 土坑断面 (南から)



5. 25 溝断面 (南から)



1. 検出状況（南から）



2. 横穴式石室完掘（南から）

成合地獄谷古墳群

写真図版
20
1号墳墳丘・周溝



1. 墳丘全景（北西から）



2. 墳丘全景（南から）



3. 墳丘主軸後背部分周溝断面（南西から）



4. 墳丘全景・周溝断面（南西から）



5. 墳丘主軸盛土・周溝断面（東から）



1. 右側壁（南東から）



2. 左側壁（南西から）



3. 石室内遺物出土状況（南から）



4. 盛土除去後横穴式石室石積み状況（北東から）



5. 盛土除去後横穴式石室石積み状況（北から）

成合地獄谷古墳群

写真図版
22
2号墳



1. 墳丘・周溝全景・断面（北から）



2. 横穴式石室全景（南から）



1. 墳丘・周溝全景 (南西から)
3. 周溝(東側)断面 (北西から)

2. 墳丘・周溝全景 (北東から)
4. 周溝(西側)断面 (北から)



5. 墳丘主軸後背部周溝断面 (西から)
7. 墳丘盛土断面 (北東から)

6. 墳丘盛土断面 (北西から)
8. 墳丘主軸後背部盛土断面 (西から)

成合地獄谷古墳群

写真図版
24
2号墳 横穴式石室



1. 奥壁（南から）



2. 右側壁（北東から）



3. 左側壁（南西から）



4. 石室内埋土堆積状況（北から）



5. 床面部分断ち割り断面（南から）



1. 竪穴式小石室全景（北西から）



2



3



4



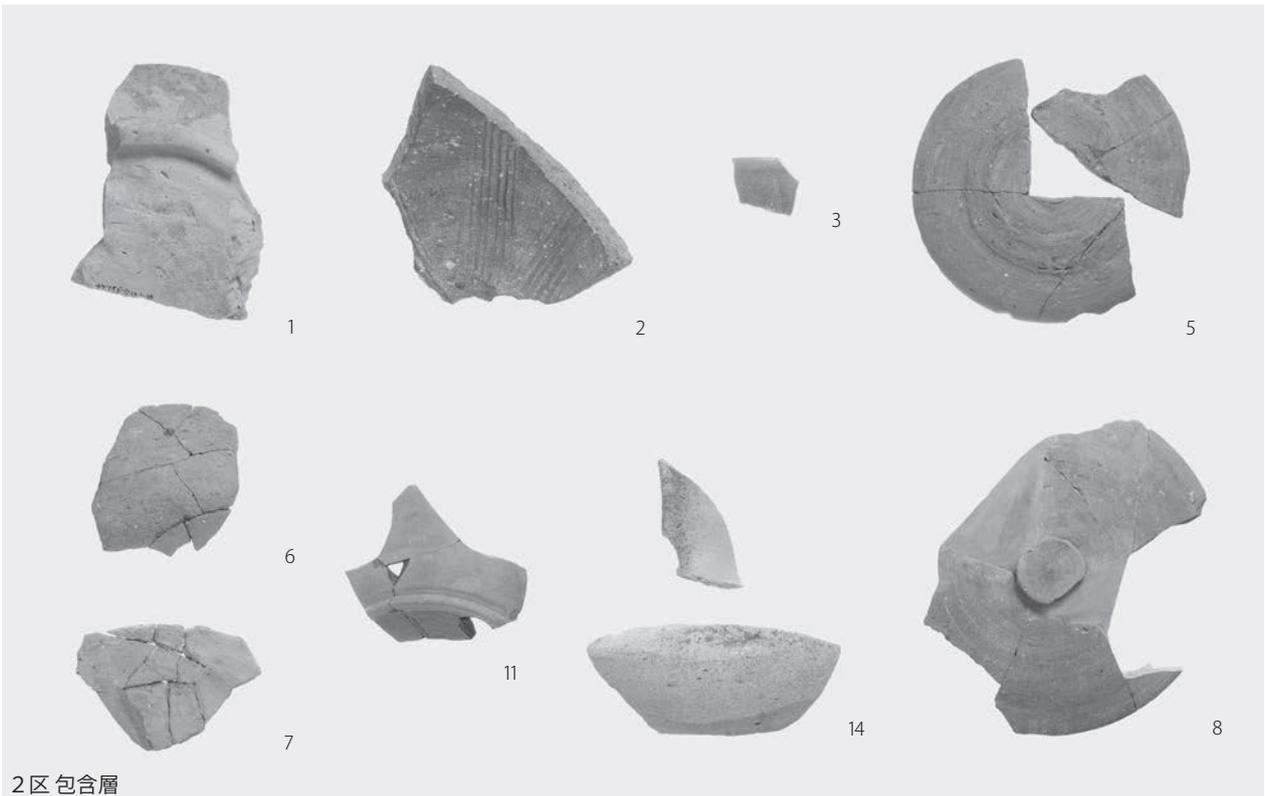
5

2. 天井石検出状況（北西から）
4. 西側壁（北東から）

3. 北小口（南東から）
5. 東側壁・断ち割り断面（南西から）

成合地獄谷遺跡

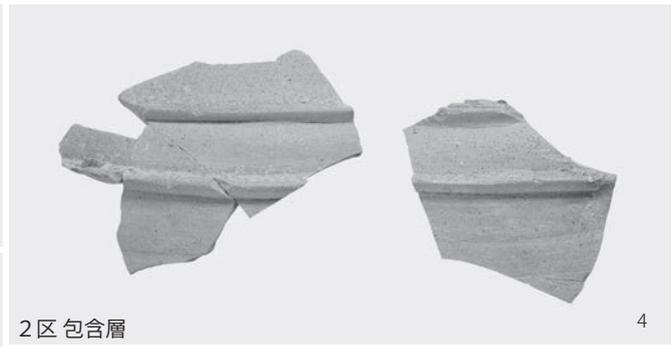
写真図版26
2区包含層ほか出土遺物



2区包含層



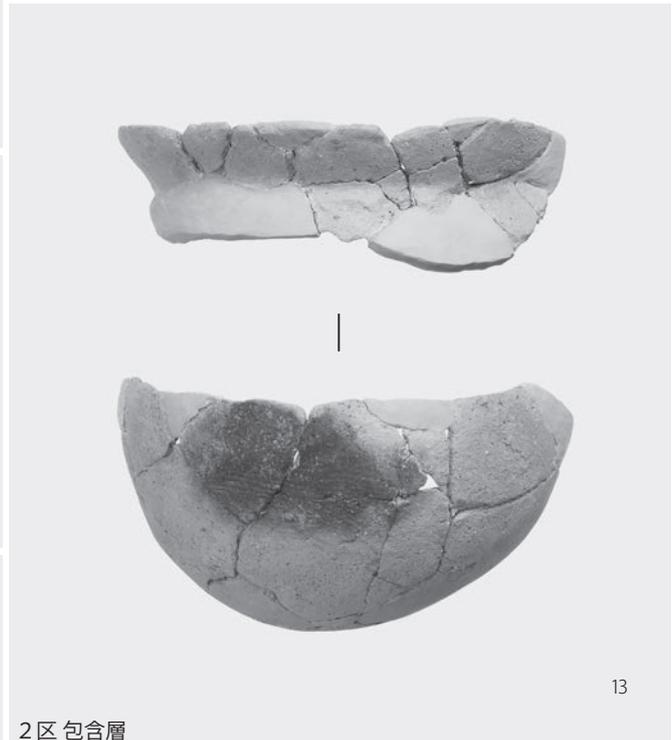
2区包含層



2区包含層



2区包含層



2区包含層



2区包含層



2区29溝



26



27



28

2区 33土坑



25

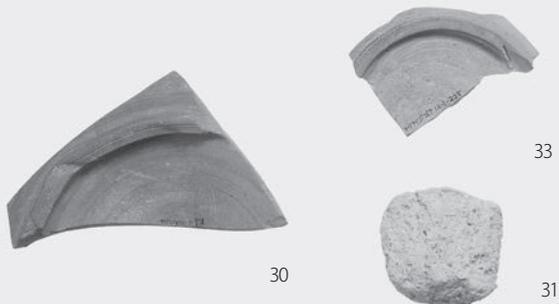
2区 33土坑



23

24

2区 31 落込み



30

33

31

2区 35・36・37土坑



32

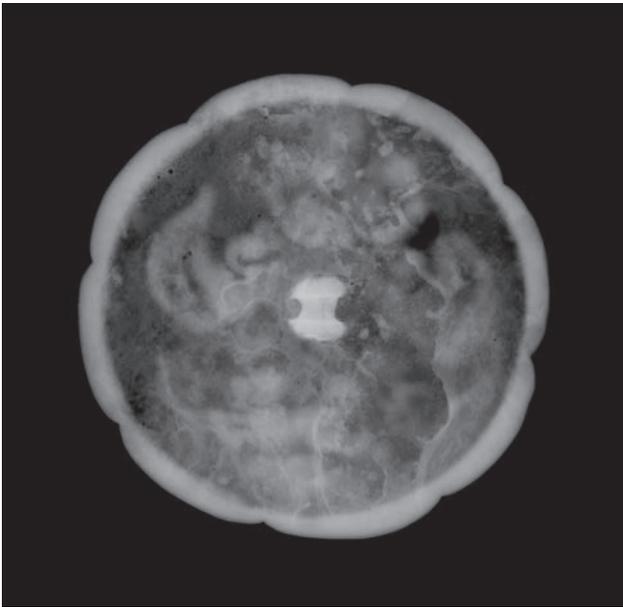
2区 36土坑

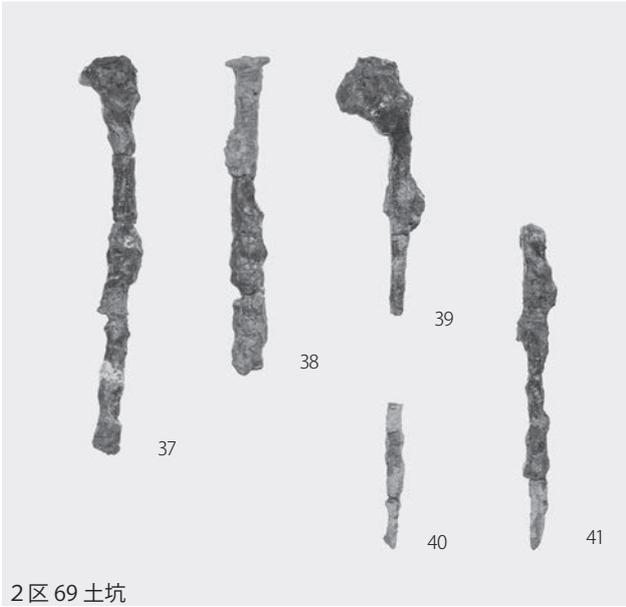
成合地獄谷遺跡

写真図版
28
2区
69土坑出土
八花鏡

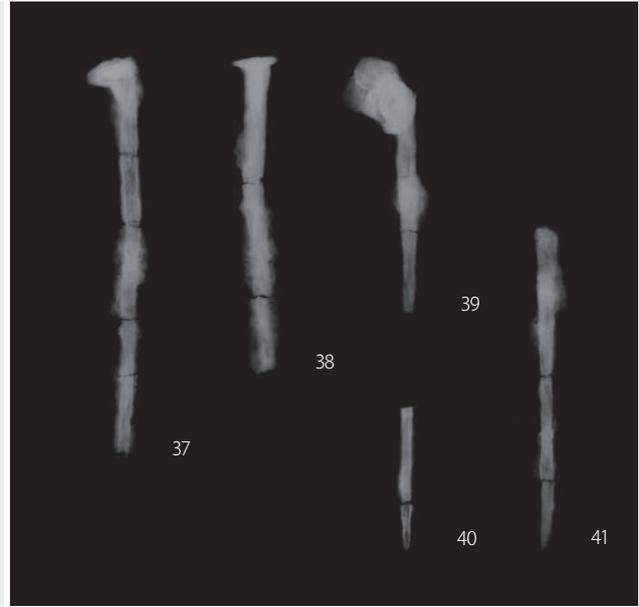


36

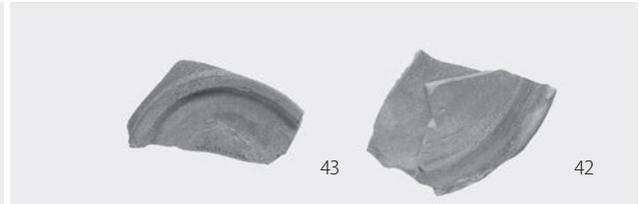




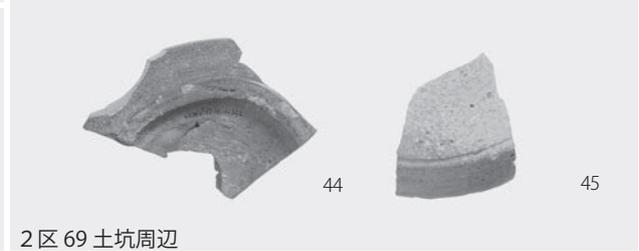
2区 69土坑



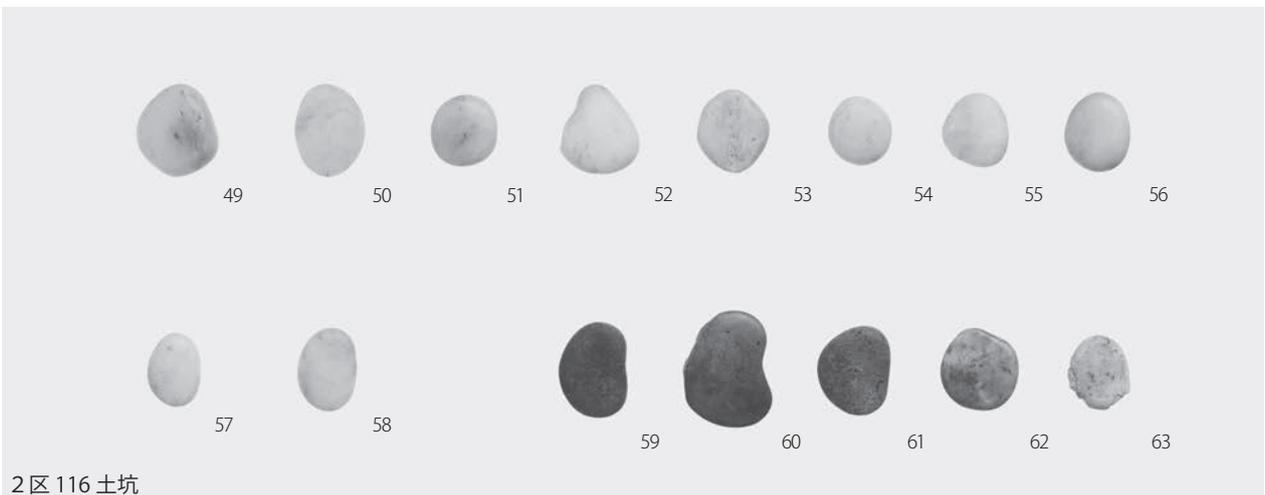
2区 65土坑



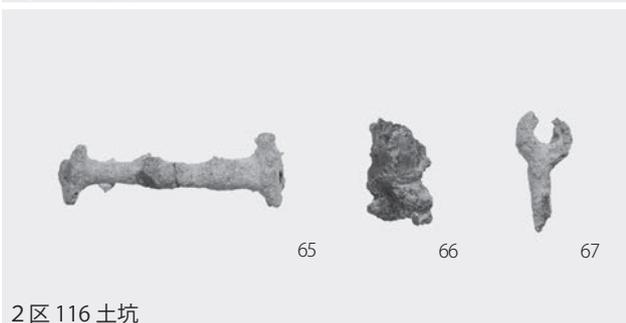
2区 116土坑



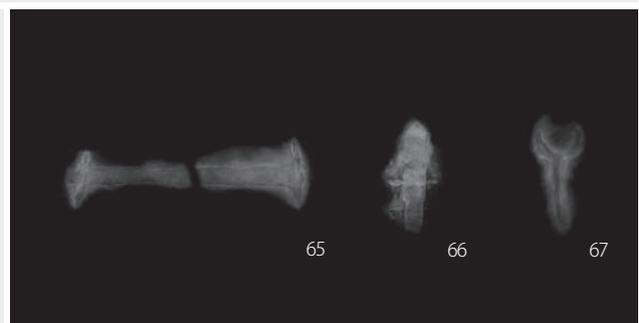
2区 69土坑周辺



2区 116土坑

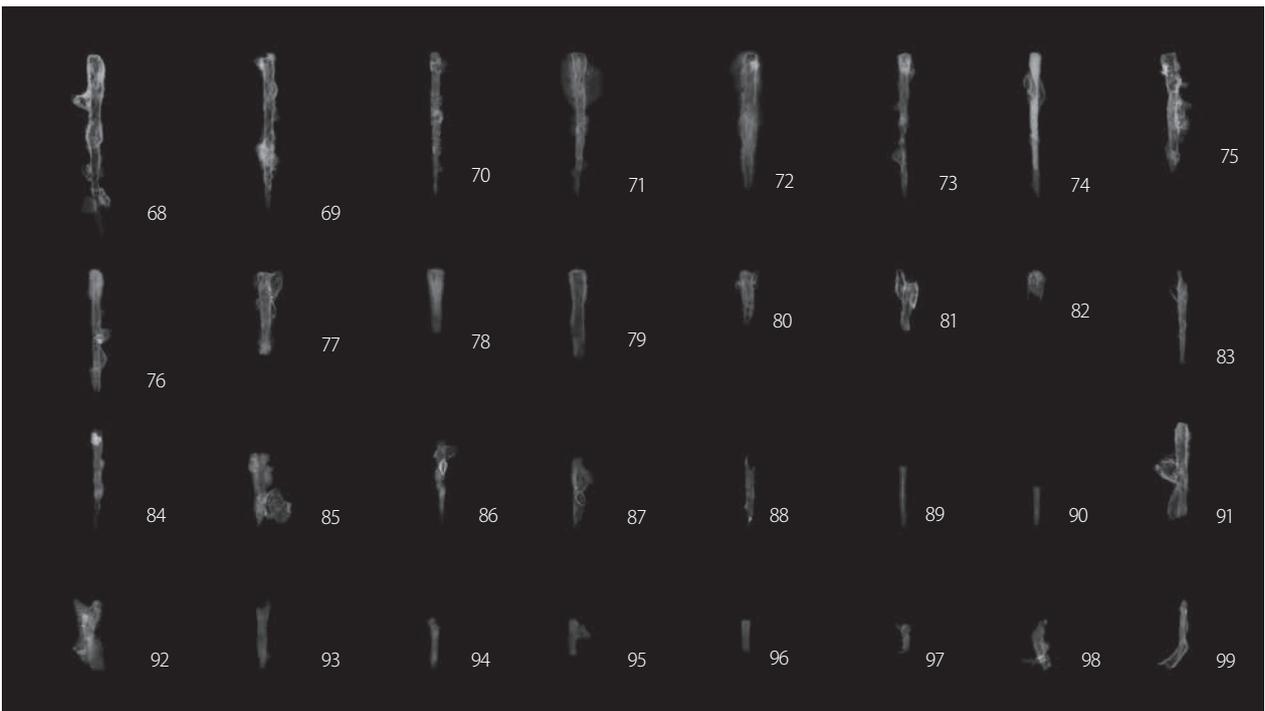
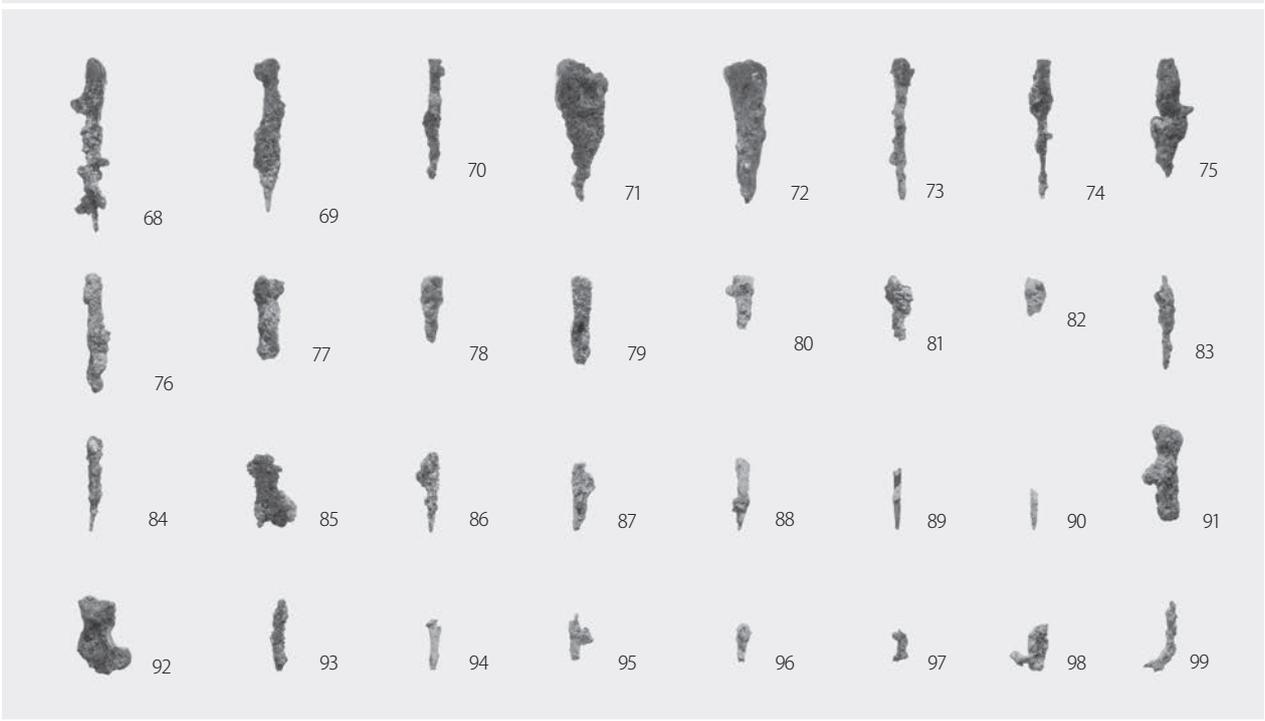
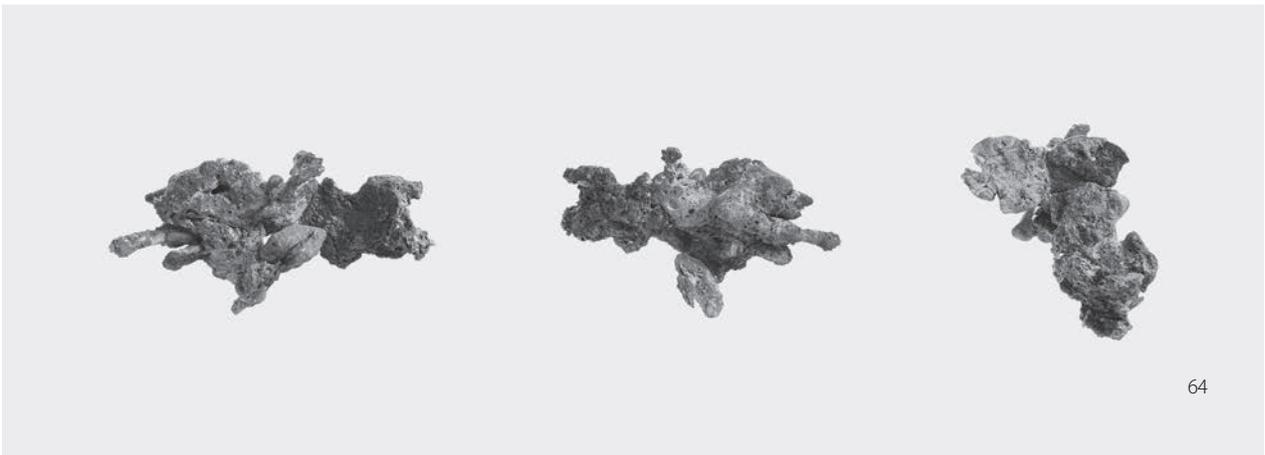


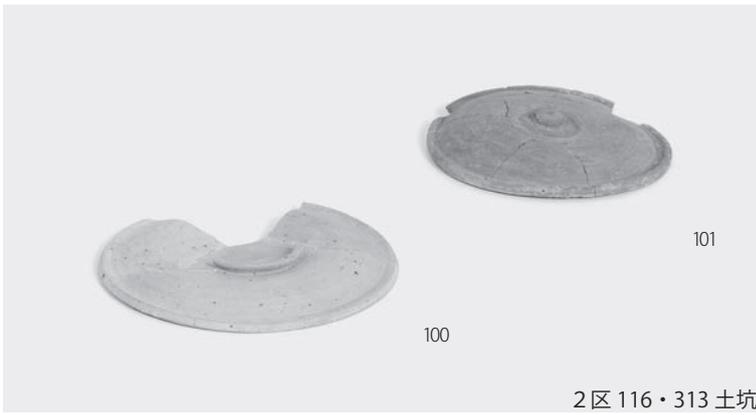
2区 116土坑



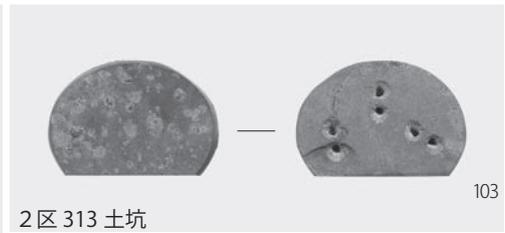
成合地獄谷遺跡

写真図版 30
2区 116土坑出土遺物

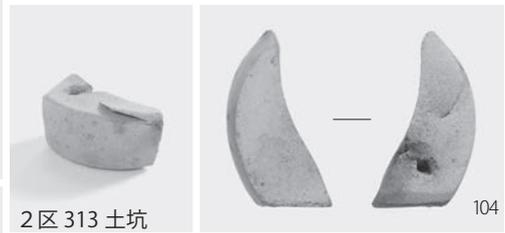




2区 116・313土坑



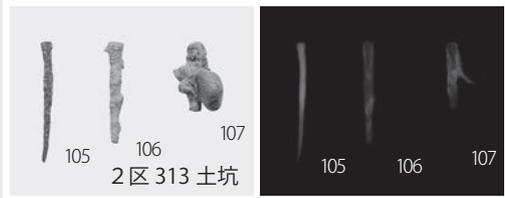
2区 313土坑



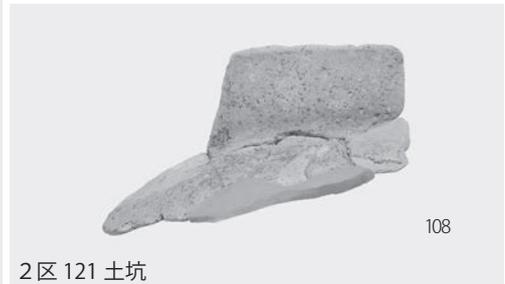
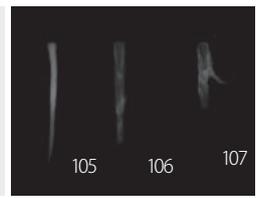
2区 313土坑



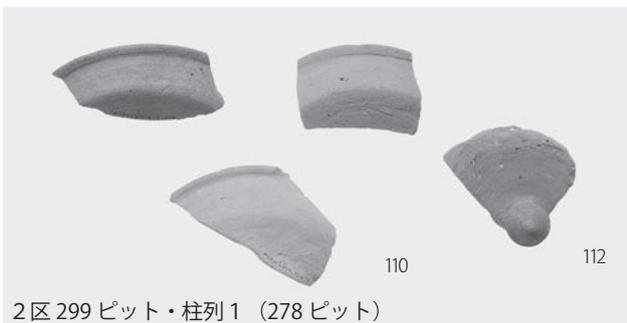
2区 121土坑



2区 313土坑



2区 121土坑



2区 299ピット・柱列1 (278ピット)



3区 包含層



2区 柱列5 (244ピット)



3区 包含層



3区 包含層



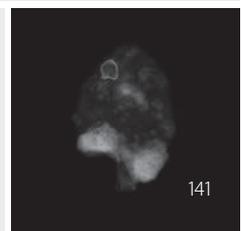
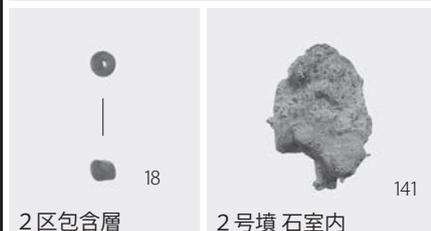
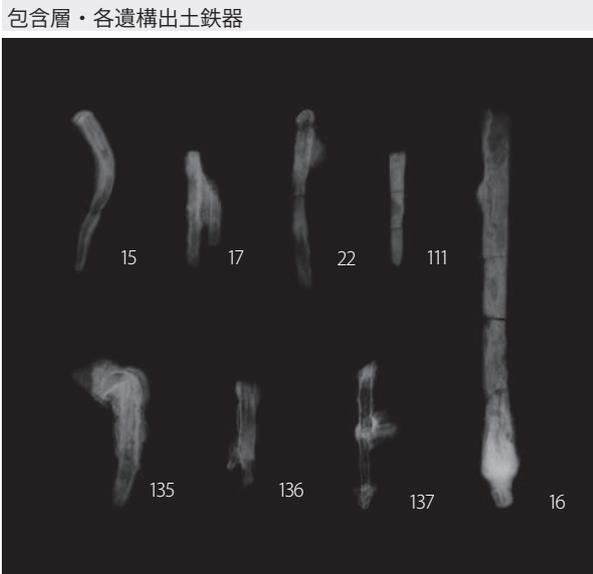
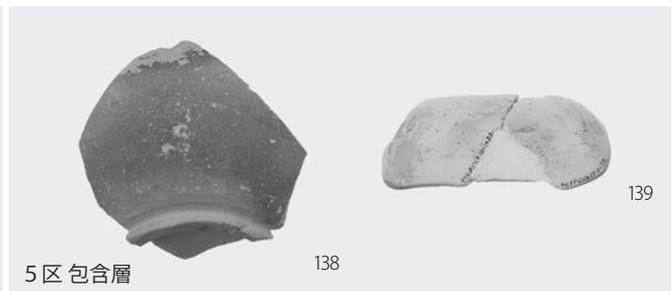
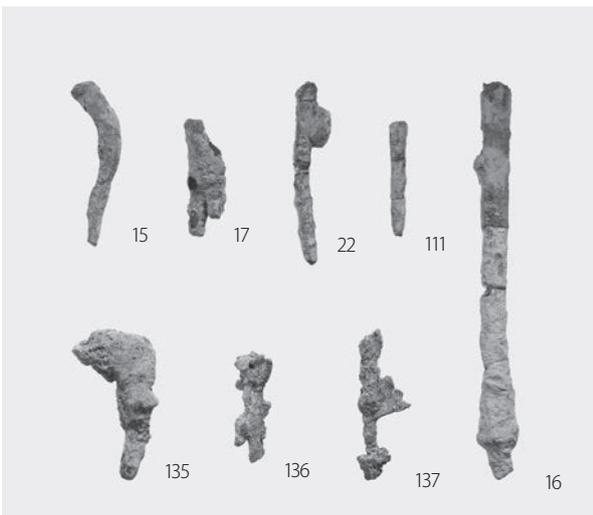
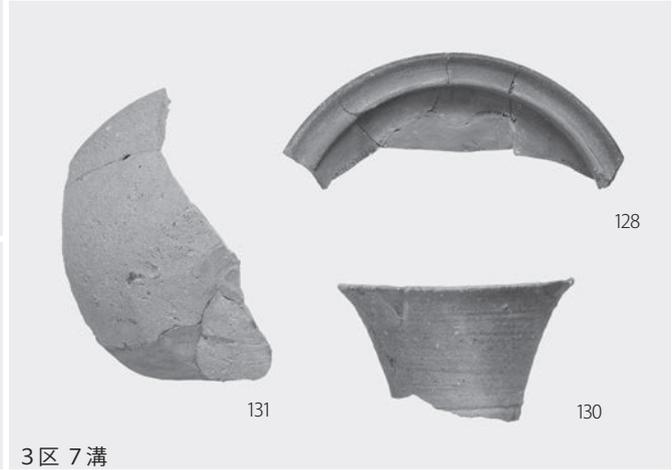
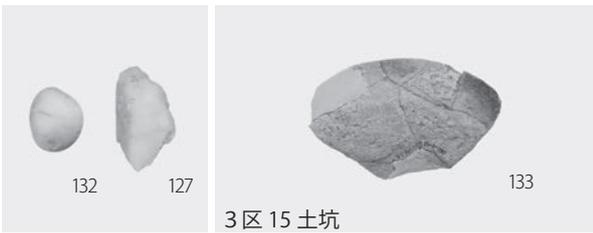
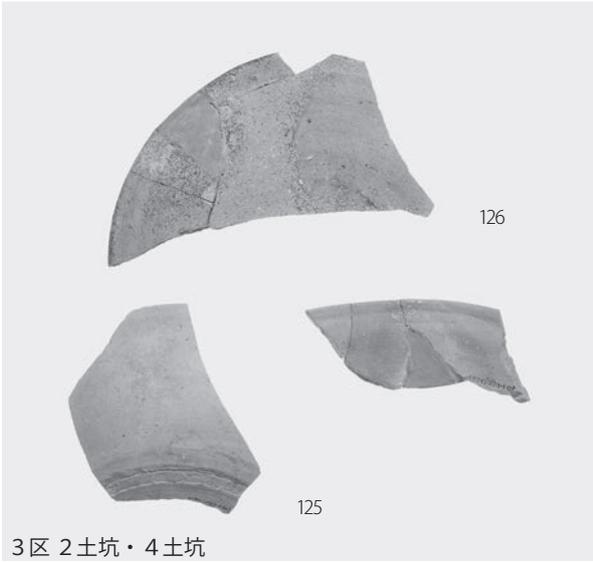
3区 包含層



3区 包含層

成合地獄谷遺跡・成合地獄谷古墳群

写真図版 32
成合地獄谷遺跡出土遺物
／成合地獄谷古墳群出土遺物





1. 成合遺跡調査地遠景（西から） [平成 25 年 11 月撮影]



2. 1区全景（北から）



3. 1区断面（A-A'：南西から）



4. 3土坑検出状況（西から）



5. 3土坑断面（西から）

成合遺跡

写真図版
34
1区 竪穴建物1
／
2区 全景



1. 竪穴建物1 検出状況・断面 (a-a' : 西から)



2. 竪穴建物1 上面検出状況 (南から)



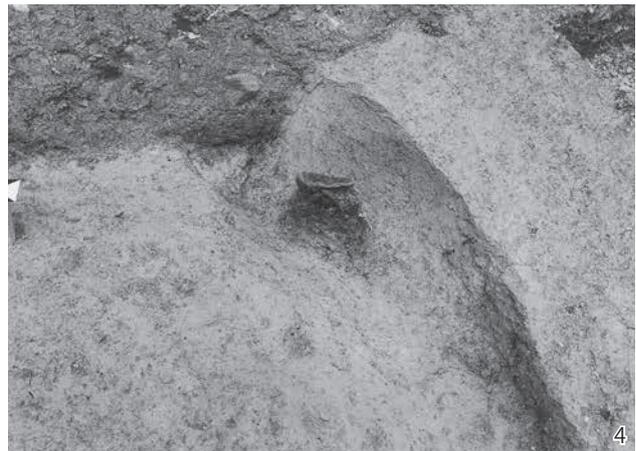
3. 竪穴建物1 完掘 (南東から)



4. 竪穴建物1 壁溝部分断面 (南西から)



5. 2区 全景 (南東から)



1. 成合遺跡：竪穴建物2検出状況（南東から）
3. 成合遺跡：竪穴建物2・2柱穴断面（南東から）

2. 成合遺跡：竪穴建物2完掘（南から）
4. 成合遺跡：竪穴建物2遺物出土状況（南西から）



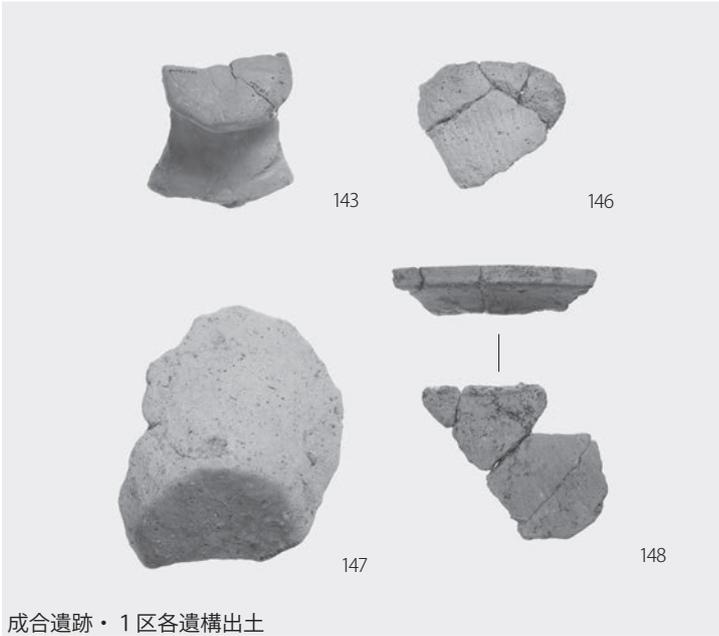
5. 金龍寺旧境内跡：1区第2面全景（南西から）
7. 金龍寺旧境内跡：3区第2面全景（南東から）

6. 金龍寺旧境内跡：2区第1面全景（南西から）
8. 金龍寺旧境内跡：3区第2面全景（南から）

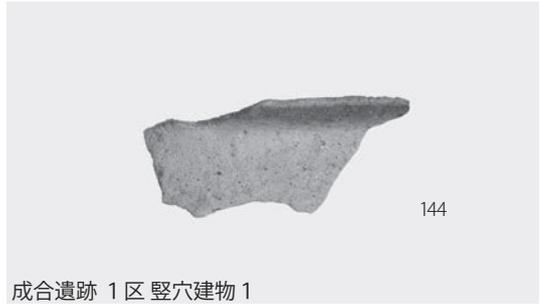
成合遺跡・金龍寺旧境内跡

写真図版 36

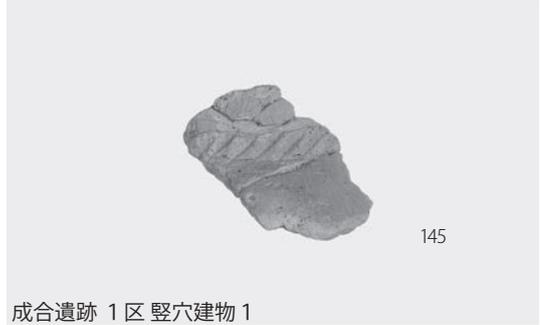
成合遺跡 1区出土遺物 / 金龍寺旧境内跡 3区出土遺物



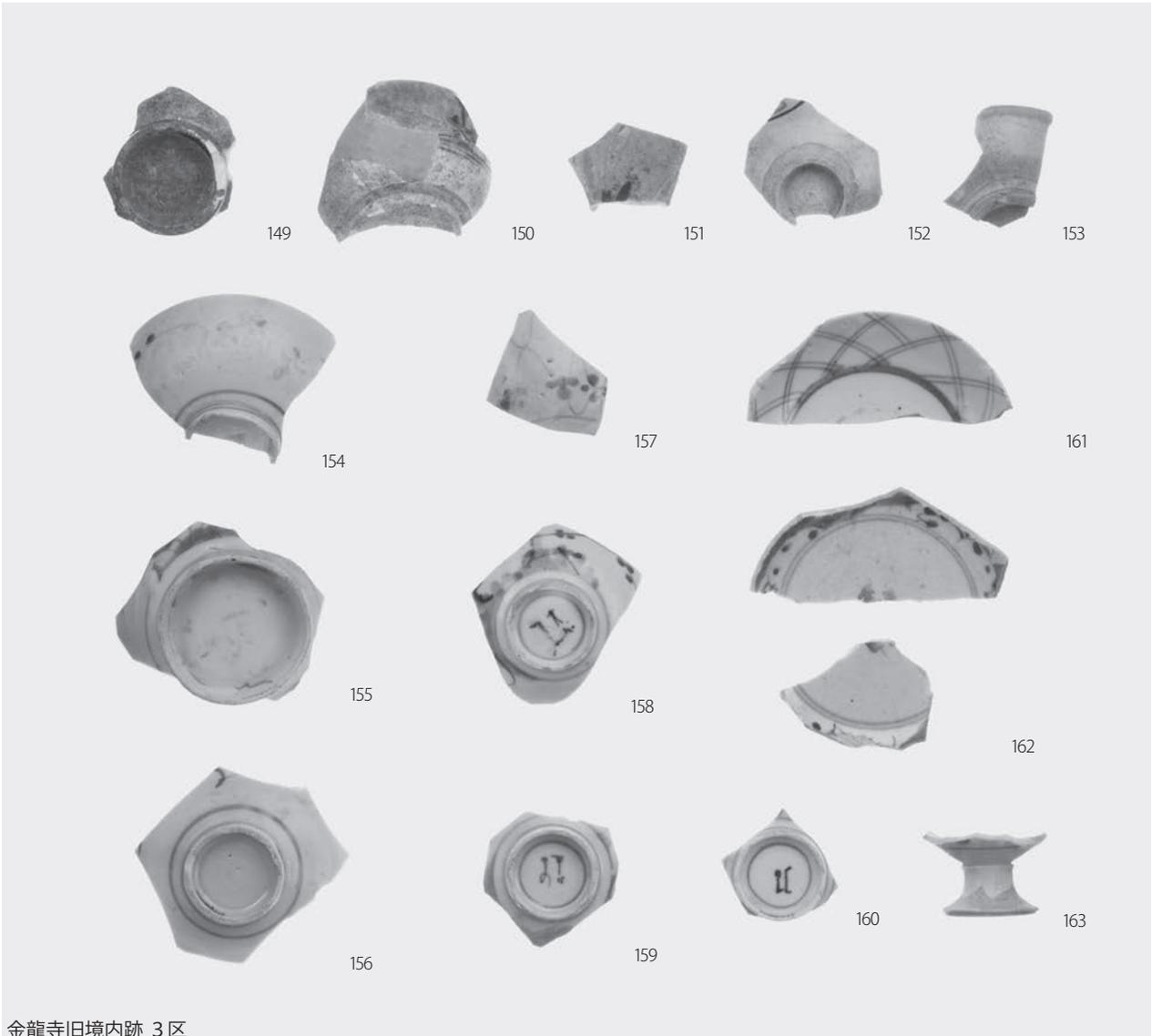
成合遺跡・1区各遺構出土



成合遺跡 1区 竪穴建物 1



成合遺跡 1区 竪穴建物 1



金龍寺旧境内跡 3区

報告書抄録

ふりがな	なりあいじごくだにいせき なりあいいせき2 こんりゅうじきゅうけいだいあと3						
書名	成合地獄谷遺跡 成合遺跡2 金龍寺旧境内跡3						
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第260集						
編著者名	笹栗拓(編)、金光正裕、降幡順子						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel 072 - 299 - 8791						
発行年月日	2015年7月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
なりあいじごくだにいせき 成合地獄谷遺跡	おおさかふたかつきし 大阪府高槻市 なりあい ちない 成合 地内	27027	143	北緯 31度52分50秒 東経 135度37分35秒	20130603 ～ 20140131	5,050㎡	高速自動車国道 近畿自動車道 名古屋神戸線 建設事業
なりあいいせき 成合遺跡			23	北緯 31度52分37秒 東経 135度37分35秒	20140701 ～ 20141130	307㎡	
こんりゅうじきゅうけいだいあと 金龍寺旧境内跡			141	北緯 31度52分20秒 東経 135度37分50秒		12㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
なりあいじごくだにいせき 成合地獄谷遺跡	墓	古墳時代 後～終末期	古墳2基(横穴式石室) 竪穴式小石室1		須恵器・鉄鏃	新規発見の成合地獄谷古墳群 横穴式石室の古墳2基と 竪穴式小石室1基を確認	
	集落	飛鳥時代 奈良時代 平安時代 前期	土坑・溝・柱穴 墓(火葬墓ほか) 柱穴列		土師器、須恵器 瓦器、陶磁器 鉄製品、銅製品(鏡ほか) 石製品、ガラス小玉	火葬墓と考えられる土坑群のほか 柱穴群、土坑、溝など 墓は蔵骨器を伴うもの1基のほか 唐式鏡や腰帯具、基石状石製品 鉄釘など多彩な副葬品が出土	
なりあいいせき 成合遺跡	集落 墓 生産	弥生時代中期 古代	竪穴建物2棟 土坑(墓)		弥生土器、石器 土師器、須恵器	新たに竪穴建物2棟検出 北西側への集落のひろがりを確認	
こんりゅうじきゅうけいだいあと 金龍寺旧境内跡	集落 社寺跡	江戸時代			陶磁器	金龍寺に向かう参道周辺の平坦面 主に17～18世紀代の陶磁器出土	
要約	<p>成合地獄谷遺跡は、成合地区北東の山中、檜尾川支流の地獄谷川に面する新規発見の遺跡で、主に奈良～平安時代初頭頃の墓と考えられる土坑群や、柱穴、溝と、7世紀前半ごろの横穴式石室を伴う古墳2基、竪穴式小石室(成合地獄谷古墳群)などが検出された。この中でも墓と考えられる土坑には、蔵骨器を伴うものや、唐式鏡や石製腰帯具(丸鞆)、基石状石製品などの副葬品を伴うものがある。当遺跡がまとまった墓域を形成しており、周辺に所在する成合遺跡や金龍寺旧境内跡などの古代の調査成果との関連も窺える。成合地獄谷古墳群の墳丘をもつ2基は、盗掘により副葬品は出土しなかったが、2号墳は径5m、全長3m程度の無袖式横穴式石室を埋葬施設とし、墳丘の構築状況がわかる好例である。</p> <p>成合遺跡では弥生時代中期末の竪穴建物2棟が新たに検出された。いずれも埋土に炭や焼土がひろがることから焼失建物と考えられる。北西尾根側に集落域がひろがるのが新たに確認できた。金龍寺旧境内跡の調査では、金龍寺に向かう参道脇の平坦面の調査3区で17～18世紀代の陶磁器類が出土していることから、参道沿いの茶屋や堂宇などの施設の存在が推測される。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第260集

成合地獄谷遺跡
成合遺跡 2
金龍寺旧境内跡 3

—高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日／2015年7月31日発行

編集・発行／公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本／株式会社 明 新 社
奈良市南京終町3丁目464番地